

岸波白野の転生物語 【Fate/編】

雷鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

岸波白野の戦いは終わり、電子の海で分解を待つばかりだった。

そして消滅間際に祈るような願いを口にする。

その願いを、機能停止寸前の願望器が湾曲して拾い上げてしまったからさあ大変！

今、岸波白野の転生という名の異世界漫遊の旅が始まる！

『Fate／EXTRA』の主人公が他作品へ転生する物語です。

基本転生先の作品毎に分けて投稿していきます。こちらではFate編を投稿します。

それとどんな能力を初期に引継いでいるかは各作品のあらすじに記載する予定です。

引継ぎ可能な能力は全てF a t e編の【プロローグ（表）】のあらすじに記載する予定です。

【※なおF a t e編は引継げる能力は全て引継いでいるチート設定です】

【※基本的にf a t e編も各章でお話は全て並行世界として独立させる予定です】

目次

岸波白野の共通プロローグ

【プロローグ（表）】 | 1

【プロローグ（裏）】 | 8

Fate 編おまけ

【ふあんたずむ予告！】（つまり嘘予告

！） | 20

【Zero 編（完結済み）】

【始まりのZero】 | 24

【サーヴァント召喚】 | 33

【二人の王】 | 52

【白野陣営、始動】 | 59

【二人の王の邂逅】 | 69

【聖杯戦争初戦】 | 83

【ランサーVSバーサーカー】 | 94

【騎士の頼み】 | 103

【白野の策略】 | 113

【雁夜の願い】 | 126

【戦争1日目の終わり】 | 140

【二日目開始】 | 149

【アサシンの答え】 | 159

【アサシンの願い】 | 168

【聖杯戦争二夜目】 | 180

【聖杯戦争二戦目の裏で】 | 187

【聖杯戦争二日目、終戦】 | 200

【新・百の貌のアサシン】 | 215

	【聖杯戦争二日目それぞれの夜】	228		【白野VS英雄王】	343
	【それぞれ聖杯問答へ】	246		【約束されていた横槍】	355
	【聖杯問答マスター編 前編】	258		【理想VS信念】	363
	【聖杯問答マスター編 後編】	268		【意外なメッセンジャー】	375
280	【聖杯問答サーヴァント編 前編】			【聖杯の底での出会い】	382
				【岸波白野の決断】	389
291	【聖杯問答サーヴァント編 後編】			【岸波白野という名のパンドラボックス】	401
				ス	
	【希望と言う名の壁】	304		【聖杯戦争終結】	407
	【二人の白野】	317		【御三家崩壊】	415
327	【人形は救われ人は英雄に挑む】			【エピソード】	423

岸波白野の共通プロローグ

【プロローグ（表）】

電子の海に融けながら、その人物は思考する。

倒すべき敵を倒し、望むべき願いも叶え。

苦楽を共にしたパートナーも先程消えた。

後は自身の消滅を待つばかり。

語り合う者がいない以上、やる事といえは消滅までの間自身を振り返る事のみ。

思えば後悔は無いが悔いは残る戦いだつた。

思い出せないが自分は恩人の一人を救えなかつた。

思い出せないが自分は自分を大切に思つてくれていた誰かを助けられなかつた。

そしてそれを覚えていられない事に悲しみを覚えた。

それでもそれはきつと仕方が無い事だ。

分かつていてそれらを受け止めて、ここまで来たのだ。

そんな自分だからこそ、きつと、沢山の人が託して、ここまで連れてきてくれたんだ。

身体のあちこちが分解されて行く。

もはやあと数分でこの身体は消去されるだろう。

最後にもう一度これまでの人々に思いを馳せる。

何故が大勢のパートナーが浮んだ。

自分のパートナーは一人だけのはずなのに、何故か、浮ぶ彼らの影全てが、自分のパー

トナーだと自分の心が告げている。

故に彼ら全てにお礼を。

可愛らしい皇帝にありがとう。

皮肉屋な正義の味方にありがとう。

お茶目な太陽神にありがとう。

傲慢な裁定者にありがとう。

我侷なお嬢様にありがとう。

次に思い浮かぶのは三人の恩人。

意地っ張でお人好しな恩人にありがとう。

冷静で頑固な恩人にありがとう。

一途で思い切りの良い恩人にありがとう。

最後に、ここまで自分を支え、託し、激励してくれた人達にありがとう。

『いつかまた俺／私として、どこかの世界のどこかの誰かと出会い、共に在れます様に』
既に人の残滓すら消え掛けたその者は最後にその言葉を口にして消えた。

——はずだった。

願望器は最後にその残滓を拾い上げる。

機能停止寸前に拾い上げたその残滓こそ願望機、ムーンセルが叶える最後の願い。

『いかなる世界へも、岸波白野きしなみはくのを岸波白野として誕生させ続ける』

彼の者の祈りを曖昧に捉えた結果の願い。

『第三法を用いた魂の精製を開始します』

ムーンセルはまず岸波白野が異世界を渡る為の耐久性と何より聖杯戦争で白野が得た『異常に高容量な情報を納める』ためにサーヴァントを造る時と同じ手段をとって『強靱な器』を用意する。

『——魂の生成が完了。続いて精神の保持と再構築を開始します』

続いてムーンセルは消えかけた白野の精神を『彼／彼女』が辿った全ての経験を集める事で再構築を図る。

『——エラー。情報が不足してデータの形成に失敗しました』

しかし足りない。

当然である。彼の精神の経験と技術は表だけでは足りない。

観測不能な『裏』を知り得た物があつて初めて成り立つものなのだ。

ムーンセルがトライ&エラーを繰り返す。

それを見かねた者がいた。

『まったく本当に融通の利かない。足りないなら足せば良いんですよ』

少女の様な声は岸波白野に接続しているムーンセルを利用し、慣れた『裏に接続』し、そこに存在する全ての岸波白野に関するデータを抽出し、白野にインストールして行く。

本来であればムーンセルはそれを邪魔するが、少女の行いが自らの仕事を完遂するのに必要だと判断して繋がりを絶つのを一時的に止める。

少女は月の裏だけではなく彼と共に戦ったサーヴァント達ともリンクを繋げてそこから情報を得る。

——そしてそんな少女の行動に、便乗しない彼等ではない。

『奏者が行くなら余が行かぬわけには行くまい！』

『この良妻サーヴァントがいつまでも支えて見せますよご主人様！』

『やれやれまた無茶なオーダーを承ったようだな。仕方ない。先輩として手を貸してや

ろう』

『ほう。異世界の巡る漫遊とは、なかなか趣のある旅だ。キャラバンの一員として我を楽しませろよ白野』

『ちよつとおお!?! みなさん心配なのは分かりますけどそんな膨大なデータを送ってこないでください! 先輩はみなさんの情報、それこそ神話礼装まで持っているんですから今更人格データ以外の情報なんていらなんですよ!』

白野の情報収集の為に繋がっていた四体のサーヴァント達がしぶしぶ各々が魂を分割し、そこに精神を宿して白野の魂へと入り込む。

『——紅の皇帝の魂の欠片がインストールされました』

『——大妖怪の魂の欠片がインストールされました』

『——正義の味方の魂の欠片がインストールされました』

『——英雄王の魂の欠片がダウンロードされました』

『……金ぴか以外先輩の魂に永住する気ですか!?!』

『我は白野がつまらなくなったら去るつもりだからな』

少女と英霊達とのやり取りを見守っているムーンセルは、『こいつら大丈夫か?』と、観測機らしくない感想を抱きながらも作業を続ける。心なしかすでに意識が無いはずの白野の精神も不安げに揺れているようにムーンセルは感じた。

『——精神の構築に十分なデータを取得しました。これより保持を開始——』

『待つて待て！ あたし！ あたしを忘れてる！ あたしも豚豚と関わってる！』

『——仕方ないですね。まあ、ランサーのデータは私が持つていきますからついでに……えい☆』

『——竜の姫の魂の欠片がインストールされました』

『——BBが保有している人格データ及び全ての情報データがインストールされました』

『『何してんだこのラスボスヒロイン!?!』』

『このくらいいいじゃないですか。『私』は行けないんですから』

英霊の人格を含めた魂とBBが保有していた自己情報等々がいきり白野の魂に押し寄せる。

『——第三法を用いた魂の強度を上修正。精神の安定化——完了。精神を魂にインストールします』

魂と精神が一つとなり岸波白野という『命』が生まれる。

『転生術式の組み込みみ開始——肉体構成は転生世界に順ずる——精神保持の為に記憶機能の制限及び記録機能の追加——転生術式組み込みみ完了』

全ての準備が整い、岸波白野の命の灯火の前に別の空間に繋がった穴が開く。

『転生を開始します』

『それじゃあ私も最後の役目を果たしましょうか』

白野の魂が穴に吸い込まれると同時に、桜色の球体もまた白野の魂に吸い込まれる。

ムーンセルはその言葉を最後に願望器としての機能を全停止させる。

そして——岸波白野の命は新しい世界へと向かった。

【プロローグ（裏）】

意識が目覚める。

ここは？

辺りを見回す。一面に広がる水面から視線を上げると、水面よりも更にほの暗い電子の夜空が広がっていた。しかし夜空には月も無ければ星も無い。夜空と表現したのも真つ暗だからそう表現しただけだ。

『先輩……』

……不意に、懐かしい声が背後から聞こえた気がした。

振り返るとそこには巨大な桜の大樹が生えていた。

桜の香りに誘われるように足が自然とそちらに向かう。

そして桜の前まで辿り着き……声を掛けた。何故かは分からない。でも、そうするべきだと思った。

「……桜？」

「……は……はい。お久しぶりです。せくんばい」

桜の木の反対側から、ひよっこり顔を出して悪戯つ子のような顔で笑う後輩。そんな

後輩の顔を見た瞬間、愛おしさが溢れ、気付けば駆け出して彼女を、桜を抱きしめていた。

「ちよつ、せせ、先輩!! いきなりハグなんて大胆過ぎです。こ、心の準備というか、シャワーの準備というか!？」

相変わらずテンパルと悪役なんて忘れて素になってしまうダメな後輩。そんな不器用で間の抜けた奴は一人しか知らない。

「……『桜』、なんだな」

「……はい。本当に……また会えて嬉しいです。先輩」

桜と言う名を強調した事の意図に気付いてくれたのか、彼女はゆっくりと肯定するように囁き、自分の背中に腕を回して抱きしめ返してくれた。

紫の長い髪に左の前髪を赤いリボンで結って後ろに流し、茶色い制服の月海原学園女子制服の上に白い白衣を纏った彼女の名前は桜。さくら

自分と同じムーンスルによって生み出された霊子AIにして、聖杯戦争に参加するマスター達の健康を管理する上級AIの中でも特別な管理AI。

そして、自らBBと名乗り、岸波白野を護る為、自身の全てを捧げて戦ってくれた悪になりきれない小悪魔系ラスボス後輩。

そう。今日の前にいる彼女はBBとして自分を守り続けてくれたあの桜だった。

ここが何処だとか、どうやってあの初期化の波から生き延びたのかとか、何故今迄教えてくれなかったのかとか、色々な疑問が浮かび上がるが、それらは声に出る事は無く気付けばあの日、あの時、どうしても伝えなかった事を口にしていた。

「……ありがとう桜」

「……はい……さ。先輩座りましょう。色々お話したいです」

感謝の言葉を聞いた桜はその場でくるりと一回転すると、白衣がBBの頃に着ていた黒のコートに変わる。

「うん。こっちの方がしっくりきますね」

楽しそうに笑いながら、桜は木の幹に身体を預けて座る。彼女に続いて自分も隣に座る。

「さて、それじゃあ何から話しましょうか？」

「正直知りたい事だらけなんだけど」

「そうですね。では順を追って説明します」

そして桜が語った。

なんでも自分が消滅する直前に何かを祈ったのだが、ムーンセルが何を勘違いしたのかそれを願いと捕らえ、その結果、自分が別の世界へと転生を繰り返す存在となってしまうらしい。

「それと魂はサーヴァントと同じ創りであり、魔術回路の数や質、知識や経験は男女両方を融合したものらしいですよ」

なるほど。だから女性の自分や男性の自分と言う二つの記憶があるのか。

因みに今の自分は何故か体が白く輝いていて性別は分からない。まあ性別はこのさ
い気にしなくて良いだろう。

桜の話は続き、『岸波白野』という人格保護を最優先する為、転生した世界での『記憶』
はりセットされるらしい。ただ人格に影響の無い知識は『記録』として継承は許される
らしい。その辺りは桜が分かりやすく説明してくれた。

「先輩が知った有益な情報を、先輩の感情や感傷等を一切排除して辞書のように簡潔且つ
コンパクトに纏めてしまうんです。そして初めから知っている『知識』として継承され
るので転生の際に違和感ほとんど無いでしょう」

なるほどムーンセルらしいと思った。

ムーンセルは自身が観測機であり続ける為に有益だと思ふ情報は蓄積するがそれ以
外、特に観測機から逸脱しそうな情報は徹底的に排除する。もしくは必要な情報だけに
纏め直す。

多分ムーンセルは自身のその在り方に肖って、この魂をその様に作り変えたのだら
う。

とりあえず自分の現状は理解した。次に自分が訊きたいのはこの場所と桜についてだ。

「ここは先輩の心象世界です。精神の更に深い自己の根源と言ってもいい場所ですね」

心象世界。その存在の内面を象徴する世界、だったか？

因みにアーチャーが使った【無限アンリミテッド・インフレイトワックスの剣製】という宝具は、固有結界という自身の

心象世界を展開する魔術で、魔法の域にもっとも近い魔術と呼ばれていたらしい。

これが自分の内面だとすると、なんとも個性が無い世界だ。

電子の海と空はまんまムーンセルだし、桜の木は月の裏側で見た桜迷宮の大樹だ。

まあ元々それほど個性が強くもないので、自分の心象世界については早々に話題を終わらせ、自分にとっては一番重要な桜の話に移る。

「そもそもなんで桜はムーンセルの手伝いをする事が出来たんだ？」

「私が関わる事ができたのは本当に奇跡と言ってもいい出来事でした。覚えていますか先輩？ 表の世界に戻った時に桜の花弁を持っていったのを？」

「ああ覚えてる。今ならなんであれをずっと持ち続けたのか理解できる」

例え記憶から忘れても、魂は決して忘れなかった。桜を失った悲しみを。桜を助けられなかった後悔を。だから自分が消滅するその時まで、大事に自分のデータの中心に保管し続けた。

「ふふ、実はですね。あの桜の花卉には少しだけ、本当に少しだけ、『私』の人格データが含まれていたんです。もっとも、たった一度だけ……先輩が消える時にあの時伝えられなかった事を伝える為だけの、そんな小さな力しかないデータでしたが」

桜がそこで一度言葉を切って空を見上げた。

「でも奇跡が起きました。最初は訳が分かりませんでした、ムーンセルが先輩が関わる記憶領域のデータを蒐集しているのを知り、そこで初めてムーンセルがやろうとしている事を理解しました。もっとも融通の利かないムーンセルだけではできなかつたようですから、私が手を貸してあげました」

そう言つて可愛らしく舌を出して小さく笑う桜。ただその瞳には少しだけ悲しい色を宿していた。

「そうまでした桜が伝えたかつたことつて？」

「決まっているじゃないですか」

桜は真面目な表情で告げて立ち上がった。自分もまた彼女に続いて立ち上がり、お互いに正面を向き合う形になる。

「先輩を……失恋させる為です」

「え？」

桜の予想外の言葉に、そんな眩きが漏れる。

「言いましたよね。『一度だけ』だって……今いる『この私』は『他の方達』と違って外側にしか存在できませんでしたから」

桜はそう言つてこちらを見上げながら微笑んだ。

確かに言つた。今日の前にいる彼女はたった一度だけ現れる力しかない。

ああそうか。失恋という意味がようやく理解できた。

見上げる桜を堪えきれずに抱きしめた。抱きしめずにはいられなかった。だってこれが、彼女を感じられる最後になるのだから。

「先輩。大好きです」

「ああ。自分も大好きだ」

だがその恋は叶わない。

「先輩。愛してます」

「ああ。自分も愛してる」

だがその愛は報われない。

「嬉しいです。先輩」

「ああ嬉しいよ。桜」

だがその喜びは続かない。

「幸せです。先輩」

「ああ幸せだよ。桜」

だがその幸せは紡がれない。

「貴方を好きになつてよかつた」

「ああ、君を、好きになつてよかつた」

抱きしめる手に力が籠もる。顔など無いはずなのに頬を熱い何かがつたう。

あの時は戸惑いが大き過ぎて彼女の為に泣く事すらしてやれなかつた。

「だからもう、私を守れなかつた事に拘らないで、新しい恋に生きてください。そして私の事は忘れて……」

「忘れない!!」

忘れられるわけが無いし忘れていい筈が無い。そんなこと、岸波白野が絶対に許さない!!

「例え何百、何千の世界を渡ろうと、自分の『初恋』と『初めての失恋』の相手は、桜だけだ。それだけは、譲らない」

男だとか女だとかは関係ない。彼女は間違いなく岸波白野に恋の大切さを教えてくれた初めての相手なのだから。

「つ……はは、嬉しいです。私先輩の初めてを二つも頂けたんですね。きつと白桜や他のみんなも羨ましがりますよ」

身体を少し離して桜の顔を覗き込む。

桜は嬉しそうに笑いながら涙をポロポロと流していた。そして彼女の身体から桃色の粒子が漏れ始める。

「時間です……先輩、最後に後輩からのお節介です——ん」

「ん——!?!」

唐突に唇を奪われる。そして唇から温かい何かが身体を駆け巡った。

「ふふ、キスしちゃいました。油断大敵ですよ。それと先輩、あまり無茶して相手を泣かせると化けて出てやりますからね」

と言つてBBの頃のような小悪魔な笑顔を浮かべて消えていった。

両目が僅かに熱くなった。また涙でも溢れたのだろう。しかしもう悲しむ必要は無い。

だって桜が最後に見せてくれた笑顔は、生前最後に見たはかない笑顔ではなく。悔いの無い晴れやかで可愛いらしい笑顔だったから。

力が漲る。今なら……本当の意味で『立ち上げられる』気がした。

「ありがとう桜」

声色は二つ。今ここに本当の意味で岸波白野の精神は完成した。

気付けば世界が一変していた。

薄暗かった空が真昼の様に明るくなり、空には月が現れ、水面に立つ桜の大樹がより
いつそう大きく、美しく花咲いた。

「ん？」

気付けば電子の海から片手で掴めるほどの大きさのぬいぐるみの様な人形があちこ
ちに浮かんでいた。

「これは？」

俺は近くに浮んだ可愛らしくデフォルメされた三頭身位の『セイバーの人形』に触れ、
隣の『私』がアーチャーの人形に触れる。

その瞬間——。

『うむそれでこそ奏者よ！ さあ、顔を上げたのなら次はもう分かるな？』

『ようやくか。相変わらず戦闘外ではのんびりしているな。さあ、立ち上がったなら次
の行動に移ろうか』

人形から確かに熱い魂を感じて、自然と口元に笑みが浮かぶ。

『他の方達』と言った桜の意味がようやく理解できた。

俺と私がお互いに見詰め合って笑う。

そしてこの心象世界がどういったものなのかも何となく理解した。

そもそも桜の話では今の自分は『俺／私』の二人の岸波白野が合わさった存在だ。

だがいくら同一の存在であり互いの記憶を共有しようとも、俺達にやはり違う存在なのだ。

故に精神の深い心象世界では人格が男女で別れてしまう。だからこの世界では岸波白野は二人いる。

だがそれは些細なことだろう。俺は私でもあり、私は俺でもある。否定する必要はない。せいぜい性別で表の人格に若干の差が出るくらいだろう。

私も俺と同時に同じ結論に到ったのか、二人でまるで示し合わせたかのように視線を送り、笑い合う。

そして自分の心象世界についてもはつきりした。

つまるところ岸波白野の心象世界とは……『空の器』なのだ。

ふふ。一人では生きられない自分にはピッタリな世界だ。

曖昧だった天と地の境界が、『月』と『桜』を配置する事で『天地』を造り、人形達が生きる事で『世界』と成した。

見渡せば殺風景なこんな世界でもサーヴァントの人形達は楽しそうに空中を漂っている。そこには桜やアルターエゴ、生徒会のみんなの人形もあった。

しばらくそんな不可思議な光景を眺めていると、彼方から光が迫る。

「行くか！」

「行きましよう！」

二人揃って駆け出す。迫る光に臆することなく二人揃って飛び込む。
さあ行こう！ 新たな出会いの為に！

F a t e 編おまけ

【ふあんたずむ予告！】（つまり嘘予告！）

それはありえない筈の第五次聖杯戦争。

第四次聖杯戦争をアサシンことアサ子と駆け抜け、まだ幼い桜を救った岸波白野。

ついでに衛宮切嗣に説教。

その後色々あってアヴェンジャーと一体となる事で岸波白野は聖杯の器として現世に顕現し、その際に聖杯の魔力でアイリスフィールの蘇生を行った。

ついでにイリヤも救ってやるよ！ とばかりに聖杯の魔力使いたい放題で救出。

衛宮一家はそれなりにハッピーになった。

言峰綺礼をぶっ飛ばして自身の変態体質を突きつけて答えを与える。

答えを得た綺礼は遠坂時臣殺している場合じゃねえ！ とばかりに娘を救いに爆走する。

そして興味を無くした英雄王はまさかの自主的途中退場。

時臣は桜の事を間桐雁夜と白野に突きつけられて親としての自信が完全ブレイクする。

死人はキャスター組、ランサー組、そして聖杯の暴走で起きた小規模災害での少数という奇跡を果たして、第四次聖杯戦争は幕を閉じた。(死んだるやん!)

それから数年間、岸波白野は家族となった桜、アサ子と共に暮らす二人と、イリヤ、凜のアプローチを受けながら、幸せに胃の痛い日々を過ごしていた岸波白野。

しかしそんな彼の幸せは10年後……リア充爆破しろとばかりに見事に打ち砕かれる。

「そうしゃああ! 会いたかったぞ!!」

「ちよっ!? 私の義兄にいさんに抱きつかないで!」

ライダーとして桜のサーヴァントとして顕現した赤王!

「ごしゅじんさまああ! 愛妻サーヴァント、只今降臨です!」

「このダ狐! 他人の男に何してくれてんのよ!」

キャスターとしてイリヤに召喚されたヤンデレ狐。

「やれやれ、何処に行っても苦労しているなマスター」

「いいから確保よ確保! 後先考えないでアーチャー!」

アーチャーとして凜に召喚された無名の正義の味方。

「アンコールに応えてただいま参上! 待つていなさいよ、ダーリン!」

「……どうしてこうなった?」

ランサーとしてバゼット・フラガ・マクレミッツに召喚された金星アイドル。

「渡さないわ。主は私のモノだ！」

「先輩、まさか私の事を忘れていませんか？」

アサ子も黙っていられず自身のスキルと情念で、まさかのエクストラ桜をアサシンとして呼び出す。

「マスター！ 貴方は何をどうしたらこんな状況を作れるんだ!!」

「知らんがな！」

「ははは、流石はワタシ、楽しいねえ」

かつて救えなかった騎士王救済の為にセイバーを呼び、彼女と自身に宿るアヴェンジャーと共に自身の尊厳及び貞操を守る為に戦う岸波白野。（自業自得である）

「さて、どこまで成長したか、見させて貰うぞ雑種」

「やれやれバーサーカーとして呼ばれたのに変わらないとは、流石はニート王。それにしても白野先輩は本当に良い声で鳴きますね」

高みの見物を決め込む英雄王と苦しむ白野を見て悦ぶカレン。

聖杯そつちのけで始まった岸波白野と言う聖杯の器を巡る戦い。

父兄はもはや授業参観のように微笑ましく……。

「あらキリツグ銃の手入れなんかしてどうしたの？」

「いや、ちよつと昔の血がね」

「あらアナタ、それに雁夜君もどうしたの?」

「いやちよつと散歩にね」

「あらお父様、こんな時間にどちらへ?」

「いやなに折角の舞台だ。少々興味が湧いてね」

……眺める事無く娘を奪われた嫉妬に狂った親達もスキあらばと参戦。

混迷を極めた第五次聖杯戦争。

岸波白野を手に入れて(もしくは手に掛けて)エンディングを掴むのは一体だけか!!
そして一人省かれたラニに登場の機会はあるのか!!

セイバーは岸波白野のフラグ建築能力の前に堕ちてしまうのか!!

岸波白野の転生物語【Fate／編 Stay Nightの章】予告。

くシリアス? そんなもんゼロとエクストラで使い果たしたわ!!く

いつか公開!!

※なお、この内容はあくまで予告であり、本編とは内容が著しく違う場合がございます。ご注意ください。

【Z e r o 編（完結済み）】

【始まりのZ e r o】

嘗て自分は岸波白野きしなみ はくのと言う名の魔術師ウィザードとして存在し、願いを叶える願望機である『聖杯』を巡って行われた『聖杯戦争』を戦い抜いた。

舞台の名はムーンセルオートマトンと呼ばれる人智を超越した月の観測機が作り出した電子よりも更に高次元の霊子によって作られた仮想現実空間。正式名は『serial phantasm霊子虚構世界』、通称『S E · R A · P H』。

自分は嘗てその聖杯戦争をサーヴァントと呼称される古の英霊をパートナーとし、共に戦い抜き、自身の消滅と引き換えにたった一人の友人の命を助け、二度と聖杯戦争が起こらないように願望機としての機能を停止させた。

しかしその最中。何が原因かは判らないが、機能停止寸前に自分は何故かムーンセルによって別の世界へと転生し続ける存在になってしまった。

もつとも、転生先での記憶が無いので自分が何度転生しているのかは解からない。これが数回目なのか、それとも既に三桁を超えたのかも解らない。

そんな自分がこの世界に転生した時点で、巻き込まれる事は決まっていたのかもしれない。

ない。

「さて、到着だな」

『左手』に視線を一度だけ向け、バスから降りる。

その場で街を見回してから最後に空を見上げて眩く。

「ここが冬木——今度の聖杯戦争の戦場か」

日本の寒い晩秋。自分にとって二度目の聖杯戦争が始まろうとしていた。



その日、衛宮切嗣えみやきりつぐは時計塔に潜らせていた協力者から送られて来た情報に目を通していた。

（二人目は遠坂時臣とのおさかときおみ。冬木の聖杯を作った御三家の一つである遠坂の現当主。炎属性の魔術はトップクラス。しかし同時に典型的な魔術師である為やりようはいくらでもある。注意すべきは冬木が彼のホームであるということだ。色々仕込んでいるに違いない）

切嗣は時臣の写真が添付されたファイル置いて次のファイルを手取る。

（二人目はケイネス・エルメロイ・アーチボルト。魔術属性は「風」と「水」の二重属性

で降霊術、召喚術、錬金術に通ずる魔術のエキスパート。『ロードエルメロイ』なんて二つ名が付くのも納得だ。だが、実戦経験が少なく私生活の情報を見るに精神面は意外ともろい。僕の戦術とも相性が良い)

切嗣はケイネスのファイルの時臣の上に乗せ更に読み進める。

次のファイルは他と違って数が少なかった。

(三人目は御三家の一つである間桐を一度出奔したにも関わらず家へと舞い戻った次男、間桐雁夜^{まとうかりや}。家を出て魔術とは関わりのない人生を選択したとあるが、そんな男が何故戻ってきたのか……いや、それとも呼び戻されたのか？ あの家当主である翁ならありえるか……)

結局雁夜については人物としてはともかく、魔術方面では詳しい事は明記されておらず、間桐の当主である間桐臓硯^{まとうぞうけん}が蟲使いな為、そちらを警戒するという事で自身を納得させて次の資料に移る。

(四人目、言峰綺礼^{ことみねきれい}。父親の言峰璃正^{ことみねりせい}の仕事を手伝う傍ら、聖堂教会の代行者として活動していた時期もあり、その戦闘能力の高さは脅威だ。八極拳の使い手でもあり、現在は遠坂時臣の弟子として魔術を習っている……)

切嗣が言峰の資料を読む内にその内容に眉を顰めたその時、扉がノックされ一人の女性が入室する。

「お疲れさま切嗣。少し休憩しない？」

「アイリ……」

やって来たのは切嗣の妻であり、アインツベルンが今回の聖杯戦争の『聖杯の器』として用意したホームンクルであるアイリスフィール・フォン・アインツベルンであった。

冬木の聖杯には全てのシステムの根幹となる『大聖杯』とその大聖杯と繋がり『願いを叶える願望機』、つまり聖杯としての役割を行う『小聖杯』の二つが存在する。

つまり小聖杯は使い捨てであり、聖杯戦争が始まった時点でアイリの死が確定しているのである。

しかしそんなアイリ自身に悲壮感は無く。ただ夫を気遣う妻として優しく微笑み、お茶と茶菓子を乗せたトレーをテーブルの端に置いて切嗣の傍に近寄る。

先程まで険しい表情をさせていた切嗣の表情が少しだけ優しい物へと変わり、彼女に頷き返しながらお茶に手を伸ばす。

「ああ、もう少ししたらね。お茶は頂くよ。ありがとうアイリ」

「ふふ、どう致しまして。それよりどうかしたの？ さつきは凄く難しい顔をしていたけれど？」

夫である切嗣の険しい表情から何かあったのではと思いいアイリスフィールが切嗣が持っている綺礼の資料を見ながら尋ねると、切嗣は軽い溜息を吐いてまた眉を顰めた。

「この言峰綺礼という男の事がよく解らなくてね」

「この人が？」

アイリスファイルが切嗣から資料を借り受けて中身を確認する。

「へー色々やっているのねこの人」

資料に書かれた綺礼の経歴からアイリスファイルがそう感想を呟く。

「そう色々やっている。だがこの男は努力をし、長い時間を掛けて手に入れたそれを平然と捨ててまた別のことに手を出し学ぶ……この男の人生には情熱が見られない」

切嗣が資料から得た綺礼という男の印象は無感動な人間というものだった。

事実、綺礼の資料は他の人物に比べてプライベートな情報が少なく、しかしそれに比例するように多くの魔術や技術の履歴だけが並べられていた。

「はつきり言って実力がある上に何を考えているのか分からないこの手の相手は不気味でやり難い」

「……つまり現状ではこの人が一番の強敵ってこと？」

「いや。この男もそうだがもう一人……厄介なのがいる」

切嗣はそう言って最後の資料に手を伸ばす。そしてアイリスファイルに聞こえるように口頭で説明する。

「岸波白野。フリーの賞金稼ぎ。魔術特性、属性、あらゆる事は不明。判っているのは投

影魔術と一小節での魔術行使に特化した魔術使いであるということ。そして……捕縛、または殺害対象が『悪人』であるということ」

「悪人？ 犯罪者じゃなくて？」

アイリスファイルの言葉に切嗣は頷いて答える。

「ああ。彼が狙う対象には特徴がある。その特徴が『一般人を巻き込んで魔術や犯罪を行う』連中なのさ。分かりやすく言えば一般人への被害を省みない連中だね」

「あらいイ人なのね。まるで正義の味方みたい」

そう言つてアイリスファイルは嬉しそうに笑いながら白野の写真を見つめる。

「……そう、だね」

切嗣はアイリスファイルの言葉に曖昧に返事をしながらもう一度お茶を飲んでから続きを説明する。

「まあ、彼の思想はともかく厄介なのは彼の『生き残ること』に特化したその戦術だ。彼は魔術教会の追っ手から約十年近く逃げ続けた程の人物なんだ。その後も——」

「え？ ちょよ、ちょっと待ってキリツグ。この子、どう鼻肩目に見てもせいぜい二十代半ばよね？」

アイリスファイルの言葉に切嗣が頷く。

「正確な年は分からない。だが、彼は子供の頃にある理由で旅行中に魔術師に両親を殺

されている。その後巡り巡って中東で少年兵として過ごし、後に傭兵として独り立ちして今の職業に落ち着いている」

「どうして狙われたの？」

「令呪のせいさ」

切嗣の言葉にアイリスフィールは驚き眼を見開く。

「そんな……そんな早い時期に一般人に令呪が浮かぶなんて。私達御三家ですら色々細工しなければいけないのよ」

令呪には色々な意味があるが、その意味の一つが聖杯戦争への参加資格である。

令呪は聖杯戦争を造った御三家であるアインツベルン、遠坂、間桐の御三家の血族に優先的に割り振られるようになっていて、御三家には早めに令呪を得る為の手段もそれぞれ伝えられている。

そしてその御三家以外の令呪は『聖杯』が選別するが、それでもせいぜい聖杯戦争開始から早くても数週間前から数ヶ月が殆どであり、三年程前に浮かんだ綺礼ですら時臣は異例と驚くものであった。

故に白野の十数年前からの聖杯からの令呪譲渡は異例どころか異常と言つていい事態であり、それ故にアイリスフィールは驚き切嗣は警戒していた。

「僕が彼を警戒する理由の一つがこの令呪の件なんだよ。己の人生を狂わせたと言つて

いい令呪を、いまだ彼は所持し続けている。彼は一体何の目的で聖杯を求めているのか。それが僕には解らないんだ。加えて彼の生き残る為に手段を選ばない戦術も厄介だ」

(そう。まるでナタリアと同じように)

白野の戦歴、そこに書かれた戦術を読む内に切嗣の脳裏には同じく『生き残ること』に特化した自身の師であり親代わりでありそして……自らが殺した一人の女性の顔が浮かぶ。

「うーん。つまりこのハクノって子が厄介なのは切嗣と同じだからって事でいいのかしら？」

「僕と同じ?」

「ええ。令呪や聖杯の願いについては解らないけれど、少なくとも貴方と同じ考えで同じ戦術を取るって事でしょ?」

アイリスファイルの言葉に切嗣はしばし呆けた顔をし、次に苦笑して見せた。

「ああ、うん。なるほど。アイリのお陰で少しだけ気が楽になったよ」

「どういたしまして?」

突然の夫からのお礼にアイリスファイルは意味が分からず困ったような笑顔でそう返す。

(もし彼が僕と同じ、もしくは似た思想と思考なら読み合いは五分に持ち込める。ならばあとは『駒』が多い僕の方が有利なはずだ)

切嗣は自らの切れる手札を考える。

これまでのハンターとして得たコネ。

御三家の一つであるアインツベルンという魔術師の名家のバックアップ。

そして聖杯戦争で自分の手助けとして呼ぶつもりの仕事仲間。

何より願いを叶える為の器であるアイリスフィールの存在。

(そう。負けられない。僕のためにも。僕の為にその身を捧げてくれるアイリの為にもそして何よりあの子の為にも)

現状の戦力から、確かに弱気になるほどではないと判断した切嗣は、改めて己に敗北は許されないのだと、気持ち奮い立たせる。

「さて、とりあえず今はこんな所か」

「それじゃ休憩しましょう。あ、それと大爺様から連絡があつたわ。例のあれが見付かつたって」

「……そうか見付かつたのか。まさか本当に在るなんてね」

アイリスフィールの言葉に頷きながら切嗣は自身の左手を見詰める。

「これで呼び出すサーヴァントも決まった、か」

【サーヴァント召喚】

「……………」

目が覚めた。気付けば辺りはすっかり夜になっていた。

「んああっふう」

寝袋から這い出て身体を伸ばす。いやー野宿にも慣れてしまった自分が悲しんだか
遅しいんだか。

「さて……………ついにその時が来ちゃったはいいが……………触媒、無いんだよねえ」

聖杯戦争の開催地である冬木に着いて今日までの二週間。街を散策してキャンプ道
具等を揃え、霊脈が豊富な山に籠って召喚の準備をせっせと行っていた訳だが、肝心の
サーヴァントを呼び出す触媒が手元には無かった。

「……………まあいいか。触媒なんて無くても呼べる訳だし。確か自分と似たタイプのサー
ヴァントが呼ばれるんだよね」

ツテで手に入れた冬木の聖杯戦争の内容が記された資料の中身を思い出す。

まず冬木の聖杯戦争と月の聖杯戦争の類似点は参加資格である令呪を持つ魔術師を
マスターと呼び、そのマスターを護る為に使い魔としてサーヴァントと呼ばれる古の英

雄を召喚し使役することができる。

次にマスターにはサーヴァントへの命令権でもある令呪が三画与えられる。

令呪の命令権は絶対であり、サーヴァントは令呪による命令には逆らえない。ただし精神的なものやおおざっぱな命令に関しては効果が薄い。

サーヴァントにはセイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカーの七つのクラスが存在する。その名が示すようにセイバーは剣の英霊、ランサーは槍の英霊と言った感じに分けられる。

もつとも生前共に戦ったアーチャーやギルガメッシュのように例外は存在する訳だが。あいつらメイン武装が双剣と四次元ポケットだからなあ。本格派の弓兵さん達が怒らないかが心配だ。

最後にもつとも大事な類似点は、聖杯は最後に生き残った者にだけ与えられるということ。

同じ、または似通った部分以上であとは違っている。

まず月のマスターの数は百以上で戦闘はある程度ルールが敷かれた決闘方式だったが、冬木ではマスターの数は七人で戦闘はなんでも有りのバトルロワイアル。

令呪が無くなってもそれはあくまでサーヴァントへの命令権を失うだけで敗北扱いにはならない。もつとも、令呪が無くなるという事は己のサーヴァントにも殺されてし

まう場合もあるが、その点は信頼関係を築ければ問題ないだろう。

サーヴァントも七つのクラスから一体ずつ呼ばれて同種のクラスは存在しない。そしてサーヴァントにはクラススキルと呼ばれる特異な能力が与えられる。

それとサーヴァント召喚に触媒がある場合は、本人の相性よりも触媒とされた物との由縁が優先される。

触媒を用意せずに呼ぶと召喚者であるマスターに近いサーヴァントが呼ばれる。何を参考にされるかは明記されていなかったが、まあ性格とか使う魔術とかその辺りだろう。

とりあえず今得ている情報はこんな所かな。はつきり言つて冬木の聖杯戦争の方が色々と物騒でしょうがない。

「……さてと、準備しますかねえ」

野生動物を捌く時に手に入れた血で魔方陣を描く。

「走れソリよ〜風のように〜月海原を〜パドルパドル〜♪」

耳に残った時期外れのクリスマスソングを口ずさみながら準備を進め、そして終わる。

召喚時間までまだ余裕があるのでカップメンで腹を満たす。ビバインスタント。ビバレトルト。日本の食品技術は面白い！

「まともに食事できるって幸せ」

少年兵時代も傭兵時代も戦闘中はかなりひもじかったからなあ。

遅めの夕食を終え、周囲の魔力の満ち具合、そして自分の魔力が完全回復したのを感じて立ち上がり、用意しておいた魔方阵の前に立つ。

「……あ、詠唱しないといけないんだっけ？」

資料にはそう書いてあった。月の聖杯戦争ではムーンセルが勝手に選ぶかサーヴァントが自発的に選定するから忘れかけていた。

「えっと……よし思い出した」

改めて魔方阵の前に立ってその手を魔方阵へと翳す。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公——」

果たしてどんなサーヴァントが現れるのか。

「降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ——」

紅の舞踏服を着た皇帝だろうか。

「繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する——」

それとも赤い外套を纏った正義の味方だろうか。

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に——」

まさか化生になった女神だろうか。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者——」

大穴で傍若無人な英雄の王か竜のお嬢様か。

「汝三大の言霊を纏う七天——」

懐かしい顔ぶれを思い出しながら目蓋を一度閉じ、そして……目蓋を開けると同時に最後の一文を唱える。

「抑止の輪より来たれ天秤の守り手よ！」

淡く光っていた魔方阵がいつきに輝き身体から魔力が奪われる。

そして魔方阵から光が溢れ、土煙が舞う。

咄嗟に腕で目元を覆い隠す。

さて、一体何が——

「ヒヒーーン!!」

——呼ばれたんだ？

唐突な馬の嘶きに腕を下げる……あらやだ黒くて遅いおみ足。

目の前には黒くて太い足、そこから視線を上げればそこには黒い胴体に白い鍬を取り付けられ……深紫色の具足？

「どこかを見ている」

冷たくも透き通るような声が頭上から響いて視線を更に上げる。

「あ……」

そこには……やはりどこか冷たい印象を受けながらも、決して消えることの無い星の輝きを宿したような美しい金色の瞳をした女性が無表情のままこちらを見下ろしていた。

「問おう。貴方が私のマスターか？」

その言葉に、自分は頷き答える。

「ああ。自分が貴女のマスターだ」

そう答えると彼女は短く『そうか』と答えて乗っていた馬を伏せさせて下馬する。

「えっと、貴女のクラスはもしかしてライダーか？」

「いいえ。私はランサーのクラスだマスターよ」

「あ、そうなんだ。この子、たぶんランサーの愛馬だよね？ その子も一緒だからってつきりライダーかと思ったよ」

しかしよくよく考えれば馬上の戦闘では槍を使うものだ。となると彼女は馬上での槍捌きで有名になった英霊だろうか？

「ああ。この子は私の愛馬のラムレイ」

……ぬ？ 今聞き捨てなら無い事を言われた気がした。

「え？ ラムレイって確かアーサー王が乗っていた馬の一つじゃ」

「ほう、博識だなマスターよ」

ランサーは改めてといった具合に持っていた槍を地面に突き立てこちらへと向き直る。

「ランサー、アルトリア。召喚に応じ参上した。我が愛馬は雷雲を呑むように、我が槍はあらゆる城壁を打ち破る。貴方の道行きを阻むもの、全てを打ち砕こう」

「ブフォオオオオオン!!」

ランサーの言葉に同意するように傍に控えていたラムレイがひとときは大きな声で天へと嘶く。

その二人から感じるまさに英傑の気迫に圧倒されながら、そんな相手が先に名乗りを上げてくれた事への感謝の念を持ってこちらも答える。

「貴女のマスターの岸波白野だ。貴女に見限られないように全力を尽くすつもりだ。どうか共にこの戦争を走り抜いて欲しい」

そう言って右手を差し出す。ランサーは自分が差し出した右手と一度だけこちらを伺ったあとに、差し出した手を握ってくれた。

「その言葉、期待するのでしょうか？」

「まずはお互いのできる事や役割の話し合いをしよう。あとは拠点をどうするかだね。」

一応街に一番近いこの山を拠点にしようかと思ってる。街に拠点を持つと周りに被害が出るだろうしね」

「心得ました。では今は武装を解除しても?」

「ちよつと待つて。《Code: 遠見》^{Farvision}」

そう言つてランサーに待つて貰つて遠見の魔術を使つて周囲を観察する。

先程まで暗くてよく見えなかつた視界がいつきにクリアになり遠くまで見渡せるようになる。

とりあえず視界内には誰も居ない。浄眼にも魂の感知無し。自分の直感にも反応は無いから大丈夫かな。

「周囲には誰も居ないし、何も感じないから大丈夫だと思う」

「そうですか。先程の魔術、見たことの無い系統ですがそれがマスターの魔術ですか?」

「ん? ああ、そうだよ。後で詳しく話すよ。それでランサー、武装を解除するつてもしかしてラムレイやその鎧のこと?」

「ラムレイは消しません。この鎧は私の魔力で出来ていますので解除した方が魔力消費を抑えられるのです」

「そつか。じゃあ武装を解除してくれていいよ」

「分かりました」

そうやってランサーが武装を解除した瞬間……なんかすんごいのが飛び込んできた。え？　なんでそんなレオタードの腹部を円形に切り取ったようなタイツみたいな服着てるの!?　内股や脇もなんで同じく露出してるの!?　っーか胸でかい下乳見えちゃってるよ!?

先程までのガツチガちなフルプレートから一変して露出過多となったその姿に内心でツツコミを入れる。鎧なんて肩と腕、腰周り、膝下にしか存在しない。果たしてもうこれは鎧と言っているのかすら疑問である。

はっ！　まさかこの人……セイバーと同じ趣味の人か!!
見れば胸もでかいしスタイルもいいと共通点も多い、きつと自分に自信があるのだろう。

アーサー王まさかの露出趣味だったとは……なるほどガウエインの異常な忠誠心の答えはこれだったのか!

「あくえつと、ランサー、それがいわゆる通常モードみたいなものなのか?」
「ええ。必要最低限の部位だけを護る為の形態です」

護れてない!　護れてないよランサー!?

彼女の言葉にどうしても突っ込みを入れたいが、さすがにまだ知り合って初日で『露出狂か!』なんて言う訳には行かないので、なんとか口に出すのを我慢する。

「そっか……その、生きてた時もその格好だったの？」

「まさかありえませんが。私は男と偽って過ごしていたのですよマスター」

何を馬鹿な事をと、ちよつと呆れたような表情で答えるランサーは、当時の事を思い出したのか眉を顰め始めた。

「しかも剣を手放し常に槍に持ち替えたせいで、身体、特に何故か胸の成長が著しく、お陰で私は常に胸に、こちらで言う晒のような布を巻き、大きいフルプレートを着用し続ける破目になったのです。このフルプレートがさらに厄介であり、サイズの違いを埋める為に鉄の厚さが増していて重いわ暑いわで動くのも大変でした。そのせいで戦場では常に馬に乗っていましたね。遅いと言った奴は厳罰に処してやったのも今となつては良き思い出です」

……そんなに大変だったんだ。

饒舌に過去の苦勞を語り続けるランサーを眺めながら、とりあえず想像してた理由ではなかったの中で安堵の溜息をついた。

良かった。どうやら別に露出好きという訳じゃないのか。まあセイバーの紅い稲妻にくらべればまだ耐えられるから、うん。自分が気にしなければいいだけだな。

流石に会って早々にツツコミを入れるのもアレなのでこの件は胸に仕舞いこんでさっさと話題を逸らすことにする。

「とりあえずご飯にしようか。と言つても、王様だったランサーからするとちよつとアレな食事かもしれないけど」

「食事ですか。頂きましよう」

……なんか目に怪しい光が宿った気がするが、きつと気のせいだろう。

そう思いキャンプ用のガスコンロに火を点して大き目の鍋に水を入れて沸騰するのを待つ。

お湯が湧くまでの間にカップ麺とお茶のパックも用意する。お湯が勿体無いから一緒に使うのだ。まあ食器なんてないから割り箸とプラスチックのコップだけだ。

「それは？」

「こっちはカップ麺。乾燥した具と味の付いた粉末が一緒に入ってる。こっちはティーバッグっていうこのバッグの中に茶葉が入っているんだ。両方ともお湯を注いで食べたり飲んだりするものだね」

無表情だがどこか興味津々と言った感じの雰囲気を持ちながら聞いてくるランサーに色々説明する。

何味が良いか聞いたら全部でと言われたのにはちよつと驚いたが、まあ二人、いやラムレイも少しは食べられるかもしれないから三人で分ければすぐに無くなるだろうと思ひ、カップ麺を塩、味噌、醤油を出す。

「……まだですかマスター？」

「まだ沸いてないからねえ」

「……ラムレイ」

ランサーが呼ぶとラムレイが立ち上がって彼女の背後で身体を横にして伏せ、ランサーはそんなラムレイに背中を預けて膝を立てた所謂体育座りでそわそらとお湯が沸くのを待つ……なんか物凄く可愛い。

しばらくそのまま二人で鍋を眺めていると、お湯が沸騰する。

「マスター……」

「はいはい」

カップ麺の蓋を途中まで開け、そこにお湯を注いぎ、三つ全ての蓋を塞ぐように近くに週刊誌を上において熱が逃げないようにする。

「こうして、蓋を押さえたら後は三分待つだけだね」

「三分ですか……お湯をもっと入れたり火に掛ければもっと早くできるのでは？」

「いやお湯を適量以上入れると味が凄く薄くなるし、火になんて掛けたらカップが燃えちゃって食べられなくなるよ。とりあえず……お茶でも飲んで待とう」

残ったお湯をコップに注いでパックで緑茶と紅茶を作る。今回は大盤振る舞いだ。

「とりあえず緑茶と紅茶を入れたから、好きな方を飲んでいいよ」

パックは取り出してまた使う為に空いているカップに移す。

「……まず。ふむ、これが緑茶ですか。そしてこちらが紅茶……っ！ たったこれだけでこれほどの味が!？」

なんか軽いシヨックを受けているランサー。そのまま紅茶の方を飲み続けたので緑茶の方は自分が一応ことわりを入れてから頂く。

「おかわりですマスター」

「あ、うん」

鍋のお湯はポットタイプの魔法瓶に移しておいたので取っ手を持ってパックを入れてお湯を注ぐ。味が丁度いい具合に出た所でランサーに手渡す。

「そうそう。パックも普通のお茶と同じで使うほど味が薄くなるから、それはちよつと了承して欲しい」

「そうですか。覚えておきましょう」

なんか言っておかないと延々とおかわりを要求されそうだったので忠告すると、ランサーはお茶を飲みながら頷く。

さて、そろそろいいか。

時計を見ると三分と少し経っていたので雑誌を退かす。

「はいランサー、先に食べていいよ。好きな味があつたら教えて。あ、お箸って使える

「？」

「問題ありません。聖杯からこの世界の一般常識と行動は問題なく行えるようにされていますので」

なら大丈夫か。

とりあえずスーパーで買った百本入りの割り箸の袋から一つを取り出してランサーに渡す。

そしてランサーは三つのカップ麺を一口ずつ食べる。

「……ふむどれも捨てがたいですが、この味噌はこつてりしていて美味しいです」

「そっか。じゃあラムレイと自分は残りの——」

「何を言っているのですマスター、全て私が頂きます」

え？

「ラムレイはそもそも私の魔力で成り立っています。私が食べて魔力を得る。ラムレイの為なのです。そして先程マスターは私に『先に食べて良いと』言った。ならばこれらは全て私の食事です」

「なん……だと……?!」

冗談。いやランサーの眼はマジだ。現に真顔で既に味噌をスープも含めて完食して既に醤油に取り掛かっている。しかも気付けば塩のカップ麺を自身の脇に移動させて

いた。

ラムレイに視線を向ける。するとラムレイはまるでどこか達観したような表情と共に目蓋を閉じて首を伏せた。愛馬としてランサーの傍にいた彼女のその仕草から悟る。

あつ。これなに言つても駄目なやつだ、と。

仕方ない。自分の分はお湯が再度沸いたらだな。

お鍋のお湯が無くなりそうだったので、残りでもう一度お茶を淹れてペットボトルの水を鍋に移す。

「ずるるるるるるるるるる……もつきゆもつきゆ」

やだ、何その咀嚼の効果音、可愛い。

ランサーはカッププラーメンに夢中で気付いていないのか真顔である。

「ずるるるるる……もつきゆもつきゆ」

……これは気付かない振りをしよう。自分の為に！

ランサーの愛らしい仕草を横目に堪能しながらお湯が沸くのを待つ。

「……ふう。さて、おかわりの前にマスターに訊かなければいけないことがありました」

「……なに？」

そうか、おかわりする気なのか……水と食料が持つだろうか。

そんな懐事情の心配をしながらとりあえずランサーの横に腰を下ろして尋ね返す。

「マスターが聖杯で叶えたい願いとは何ですか？」

ああ、まあそうだよな。サーヴァントとしては気になるよな。

「特に無いよ。強いて言えば自分は聖杯の破壊が目的だしね」

「聖杯の破壊が目的？ それはまた何故？」

「だって死人が出てるじゃん」

「……まあ、確かに四回目ともなれば少なくとも数の人間が死んでいるでしょうね」

そう。かつて聖杯戦争を体験した者として、そして令呪のせいで両親を死なせてしまった者として、それが許せない。

「戦う決意をした者が死ぬのはいい。だが、関係無い人達がとぼちちりで死ぬのは許せない。だから破壊する。こんな馬鹿げた戦争が二度と起きないように」

それこそが令呪が浮かび、そのせいで不幸になりながらも、今日まで所持し続けた動機だ。

むろん両親を生き返らせて人生をやり直したいと思つたこともある。

しかしそう思う度に一つの疑念が浮かぶ。

『自分がいたのでは両親がまた何かに巻き込まれるのではないか？』

結局両親が死んだのは転生者と言う特異な存在である自分のせいだ。

ならば両親を蘇らせ、自分と言う存在を消した世界を作ればいいのでは？

そう考えたこともあった。だが……それはどうしても嫌だった。

自分は、愛されていたから。

身を挺して自分を魔術師から護ってくれた両親を知っているから。

だからそれを否定し、無かったことにするのが嫌だった。

だから結局行き着いたのは二度と自分のような者が生まれぬ様にすることを聖杯を破壊すると言う望みだった。

まあ問題はその聖杯が何所にあるか、もしくは誰であるか、だ。

聖杯とはただの呼称でしかなく、実際に杯であるとは限らない。

願望器は土地その物かもしれないし、一人の人物である可能性だってある。自分の場合なんて月である。その為今回の聖杯を早期に発見する事が自分の目的達成にしなければならぬ事の一つだ。

「なるほど。しかしそんな事がもし成功したとしても、少なくともこの聖杯戦争を創り上げた魔術師達から命を狙われ続けるのでは？ 知らない者の為にあなたがそこまでする必要があるか？」

「あく確かに今の言い方だとそう捉えるか。でもねランサー、自分は今までも、そして今回の聖杯戦争も、別に誰かの為に戦う訳じゃない。ただ自分がそう言った事が許せないから戦うんだ。言っちゃえば自己満足なんだよ。その自己満足の結果が偶々他人の為

「なっているだけなんだ」

結局のところ岸波白野は我慢の出来ない人間なのだ。

考える前に行動する。損得よりも感情を優先する。そんな単純感情馬鹿な人間。それが自分なのだ。

「……そうですか。マスター、あなたは随分と不器用なですね」

ランサーの言葉に『否定できないな』と苦笑まじりに答える。するとランサーはすぐに『ですが』と続けた。

「私は嫌いではない。今の答えのお陰で、私は貴方の事が少しでも好きになれた」

そう言つてランサーは無表情だった表情を少しでも和らげて小さく微笑む。その仕草が外見とは裏腹に愛らしくて、少しだけドキッとしたり。

「あ、そ、そう？　なら話した甲斐があったよ、ははは！」

照れ隠しに少し大きな声で笑つて答えるが、少しでも顔が赤くなっているかもしれないと顔を鍋に移したその時、ある事に気付いてランサーに尋ねた。

「そうだ。ランサーは何か聖杯で叶えたい願いとかあるのか？　別に願いを叶えた後に壊すのもいいし、自分が叶えられる物なら令呪の魔力を使って叶えてもいいよ？」

令呪には膨大な魔力が蓄えられている。その魔力を行使すればある程度の事は叶えられるはずだ。

「いえ、私は聖杯で叶えたい願ひなどありません。私はあの結末を受け入れているし、ここに到るまでの道程に悔いも無い。故に私は貴方のその願ひの為に障害となる壁を破壊するだけです。そうでしょうラムレイ」

「ヒヒン」

ランサーの言葉にラムレイが肯定するように短く啼いて答える。

「そつか。まあ何かあつたら言ってくれ。自分が出来る範囲でランサーの要望には答えるよ」

「そうですか。では鍋のお湯が沸騰したようですし、別の味のカップ麺を所望します」
「……とりあえず自分の分を作つたらね。流石にお腹空いたから」

結局この後更にうどんや蕎麦、カップ焼きそばも要求されてとりあえず一種類ずつ全部食い尽くされた挙句、『では要望として明日からは十人前でお願ひします』と言って、ランサーとラムレイは霊体化して消えた。

……余計な事を言った気がする!?

【二人の王】

夢を見た。

学園と呼ばれる施設を舞台に行われた月の聖杯戦争——その戦争に巻き込まれた一人の少年が戦う夢を。

少年には過去と呼べる記憶が無かった。あるのは月で送った仮初の学園生活の記憶のみ。

故に少年は『何も知らないまま死にたくない』と強く願った。

そして少年は仮初の学園生活で得た友人を、自身に人の道を説いてくれた老兵を、似た境遇の幼い少女を、その手に掛けて生き残った。

三人の犠牲の果てに、少年は涙ながらに苦悩し、『彼らが死ぬに足りえる目的』を模索していたその時、少年は一つの決断を迫られた。

目の前で戦う少年を気に掛けてくれた『二人』の少女。

偶然か、それとも必然か、少年は『どちらかを救う』術を持っていた。

そして——少年はその時初めて自ら『切り捨てる』という決断をし——『救った責任』を背負った。

（今のは……回路が繋がった事でマスターの過去を夢として覗いたのか？）

霊体化の状態でラムレイに背を預けて眠っていたランサーは傍で寝ている白野へと視線を向ける。

（そう言えば自身を転生者だと言っていましたね）

ランサーが白野のサーヴァントとして召喚されて二日が経った。

その間に、白野とランサーはお互いに来ることや、戦闘時の立ち回りなどの話し合いを行いながら、軽く稽古をしたりして過ごしていた。その際に白野は自分がかつて月の聖杯を巡る戦いに参加した転生者である事をランサーに告白していた。

ランサーとしては半信半疑であったが、先程の過去を見せられては信じざるを得なかった。

（……ふむ。私が彼の過去を見たというのなら、いずれは彼も私の過去を見る事になるかもしれないね）

はたして自身の過去を見た時に白野がどんな顔をするか。そんな事を考えながらランサーはもう一眠りすべく目蓋を閉じた。



「今日は街に行こう。と言うわけで霊体化して欲しい」

「ん？ 街に何の用です？」

「いや食料の確保だよ！ もうご飯がないんだよ！」

ランサーを呼び出して二日が経った。そう、二日だ。まだ二日だと言うのに……聖杯戦争を見越して直前に買っておいた一週間分の食料が無くなった。

「そうですか、食事は大事ですからね。行きましょう」

そう言ってランサーは颯爽とラムレイに騎乗する。が、その顔は獲物を狙う目であった……いくら使う事になるだろうか。

まあそれはそれとして。

「……思ったんだけどランサーが実体化したらラムレイも実体化して、ランサーが霊体化したらラムレイもするってことは、ラムレイって単独では姿を消せないの？」

「当然です。ラムレイと私は人馬一体。そもそも私の槍の真価は馬上でもつとも発揮される」

そうなのか。ん？ ということは……。

「一応訊くけどラムレイがやられてもランサーは消えないよね？」

「ええ。私が倒されればラムレイも共に消えますが、ラムレイが倒されても私は消えませんが、何その一方的な契約。」

ヤダ、何その一方的な契約。

しかし当のラムレイは特に気にしていないようなのでこちらも深くは訊かないことにする。

「そつか。でもそうなるとラムレイにも色々礼装かコードを付加させておく必要があるか……」

新しい課題をどう達成するか考えながら、とりあえず霊体化した二人を連れて久しぶりに街へと繰り出す。

さて、とりあえずはこんなもんかな。

レンタカー屋でワゴン車を借りてスーパーのカップ麺をほぼ全種類を箱買いし、水も数点箱買いし、他には菓子パンも大量に買ってトランクや後部座席に乗せる。因みにランサーは助手席に座り、ラムレイは車の後ろから追走している。

もちろん彼らは霊体化して貫っている。その証拠に彼らの身体は薄く半透明になっている。自分が彼らを視認できるのは、浄眼を持っているお陰だ。

浄眼は異質を見抜く特殊な魔眼で、自分はその中でも魂を見分けるのに特化している。人間かそうでないかは魂の波長を見ればすぐい判別できる。

そして浄眼は常に発動状態で強弱はできてもON・OFFは出来ない。

そのため魂を『視る』事ができる自分は、霊体化しているサーヴァントを見つける事が出来るのだ。

まあ、そのせいでバックミラーに常にラムレイが映っていて、こう、後ろから巨体な黒い馬に追い立てられているようで凄く怖いんだけどね。

「ランサー、お昼はパンでもいいかい？」

「ええ。構いませんよ……今食べてはいけないのですか？」

「ごめん。流石に鎧着た人が助手席に居るとか好奇的になるんで止めてください」

許可すればすぐにでもパンに食らいつきそうなランサーに真顔でそうお願いする。ただでさえこんな大量買いして目立ってしまったのだからこれ以上目立つのは控えない。

「——む？」

「どうしたの？」

不意にランサーが険しい表情をさせる。

「今近くに何か……」

「……サーヴァントか？」

自分は感じなかったがランサーは同じサーヴァントだ。自分よりも敏感な可能性はある。

「多分……だがこう、何とも言えないこの奇妙な感覚はいつたい……」

「距離とか分かる？」

「いえ、もう感じません。お互いに一瞬で離れた感じがしました」

もう感じない……となると相手も移動中だったのかもしれないな。

「……そろそろ本格的に動くか。夜になったら街に降りて色々と見て回るとしよう」

「ええ。では急いで帰り、昼食と夕食を頂く必要がありますね」

「……はは、そうだね」

真剣な表情でなんとも締まらない発言をするランサーに、緊張しているのがアホらしくなって笑いと共に返事を返した。



「——今のは？」

黒いシャツに黒いスーツ、そして黒いネクタイと全身黒服を着た金髪の後ろ髪を項辺

りで一本に纏めた女性が、奇妙な感覚を感じて一度だけ視線を窓の外へと向けた。

「どうしたのセイバー？」

「いえ、なんでもありませんアイリスフィール」

そんなセイバーをアイリスフィールは不思議そうな顔で見詰め、セイバーは既に感じなくなつた感覚に疑問を感じながらも、彼女を安心させる為に笑顔で答えた。

「それにしても未だに信じられないわね。あのアーサー王がこんな少女だったなんて」「確かに男として通していましたが驚かれるのも当然ではありますが、私は既に女性である事を捨てています。今の私は貴方達のサーヴァントであると同時に、同じく聖杯に願いを求める同士でしかありません」

神妙な表情でアイリスフィールへと返答するセイバー。その瞳には聖杯を必ず手に入れるという強い意志が宿っていた。

彼女の名はアルトリア・ペンドラゴン。セイバーのクラスであることから解るとおり『聖剣を持ち続けた』アーサー王その人である。

——そう。今回の聖杯戦争には二人の同一の王が奇しくも参戦していた。

理想の為に己を曲げた果てに結果を受け入れたアルトリア王。

理想の為に己を曲げなかったが故に結果を受け入れられなかったアーサー王。

二人の邂逅の時は刻一刻と迫っていた。

【白野陣営、始動】

夢の続きを見た。

助けた少女と和解し必死に戦う少年。

その道程で、少年はずっと探していた己の真実を知る。

『あなたは存在しない』

少年はサーヴァントと同じオリジナルのデータを基に創られたコピーであった。

少年は……現実には存在していなかったのだ。

真実を知った少年。少年の戦う理由は既に無く。パートナーの英霊が、戦友の少女が言う。

『もう止めてもいいんだよ』

少年を気遣う気持ち溢れたその言葉。

その言葉に——少年は気付く。

そこには自らが培い勝ち得た者があつた。

だから少年は自らの死を認められない。少女の死を認められない。英雄を前に挫けられない。

何故ならいつしかそれらこそが、少年の戦う理由の一つとなっていたのだから。

少年は立ち上がる。そして進んだ果てに——少年はもう一人の最愛の戦友の少女を討ち、最強の少年王を討ち、全てを仕組んだ黒幕を打倒し、その身が消えるのを知りながら——聖杯戦争を終わらせ願望機を停止させた。

そして次に少年が目覚めた時——そこには知らない男女の姿があった。

「……………なんだろうか。こう……………いい所で話が終わる物語を見せられている気分だ」

生きていた頃なら問答無用で『早く続きを書け』と物書きを呼び付けて命令しているところだ。

まあそれはいい。それにしても、マスターとは中々に縁がある。まさか彼、ガウエインとも戦っていたとは。

私のかつての部下のガウエイン卿。エクスカリバーの姉妹剣である太陽の聖剣ガラティーンの使い手。

しかし私の知る彼とは随分と違っていましたね。

私の知る彼はどちらかと言えば自己の主張を強く押し出す性格でしたが、相方である少年王には肅々と仕える騎士らしい騎士でした。それこそ少年王が間違っているにも

関わらず指摘しないほどに。

……彼もまた死したことで何かを悟り得た。と言うことでしよう。

今度暇な時にでもマスターに詳しく訊くとしましょう。それにしても、我がマスターの意外な正体が分かりました。

空に浮かぶ月を眺め、先程の夢の光景を思い出す。

岸波白野。私がマスターと呼ぶ青年は生前は元となった人物の人格データによって形成された仮初の存在でしかなかった。

それは奇しくも今の我々サーヴァントとまったく同じ状態であった。何故ならサーヴァントも結局は『座』と呼ばれる場所に存在するオリジナルの情報を元に現世に現界されたクローンやコピーでしかないのだから。

この事実については教えて貰っていなかった。いや、例え話されても信じはしなかっただろう。だから彼も話さなかったのかもしれない。

だがそれはもはや些細な事だ。驚嘆し、感嘆し、賞賛すべきは彼の結果。彼は最後まで己のまま進み、望む中でも最良の結果を叶えたのだ。

そして最後の光景から察するにマスターは今度こそ人間として生まれたと言うことだろう。

……だが結局第二の人生も戦いとは、我がマスターはそういう運命にあるのだろうか

?

「ランサーそろそろって、起きてたか」

マスターが黒いコートに黒いシャツ、そして黒いパンツと闇に紛れる為か、全身を黒服に身を包む。

「どうしたランサー?」

私の異変に気付いたのか、マスターがこちらを氣遣わし気な表情で見詰める。

「いえ、何でもありません。では行きましようマスター。まずは何処へ?」

私は立ち上がってラムレイに跨りながらマスターに指示を仰ぐ。マスターは懐から地図を広げた。

「まずは靈脈の収束点を見つけようと思う。聖杯ほどの物なら靈脈を利用しているのは間違いないからね」

マスターが『空間の歪み』に手を突っ込み、そこから首から下げられるようなヒモがついた眼鏡を取り出してネックレスのように首にかける。

「やはり便利ですね。マスターのその、四次元ボックス、でしたっけ?」

「……いや、まあ、言いたい事は分かるけど普通に自己の概念空間に収納しているだけだからね」

「ああサーヴァントが己の宝具や概念礼装を己の身の内に収納するのと同じ、でしたか。」

それにしても色々溜め込んでますよね」

「自分程度じゃそんなに沢山仕舞えないよ。必要な物だけであとは普通にサックに入れて運んでるし。さて、話が逸れたけど、この眼鏡は魔力を視覚化できる道具なんだ。まあ、正直ずっと見てると気持ち悪いから要所要所で付けるだけだね。さて、とりあえずまずは下山だね。行こうか」

「ええ」

マスターの横をラムレイに乗って歩く。夢でマスターの過去を見たせいか……どうしても気になる。

果たしてマスターは、生まれ変わった挙句に戦うことになったこの第二の人生をどう思っているのか。

「……マスター、一つ尋ねたい事があります」

「ん、何？」

「マスターは……『今の』自分の人生をどう思っていますか？」

こちらの言葉を聞いたマスターは意図に気付いたのか、しばらく考えてから答えた。

「まあ、どちらかと言えば苦労や嫌な事の方が多かったけど……今、悪くはないって思えるから、きつと悪くないんじゃないかな」

マスターはそこで一度言葉を区切ると真剣な表情で空を仰ぎながら答えた。

「なにより最終的にはこの道を進むと決めたのは自分だからね。どんな目にあつても自業自得なんだよ」

「後悔は無いと?」

「ああ無い」

マスターは見上げていた視線を今度はこちらに向け、そして……優しく微笑んだ。

「そう言うランサーはどうなのさ——理想を捨てた事を後悔してる?」

気遣わし気な表情をさせるマスターの表情と視線で理解する。マスターもまた、私の過去を見たのだと。

私はしばらく考え、そして答えた。

「ありません。私もマスターと同じく自分の決断に、選んだ道に後悔はありません」
ただ民に生きていて欲しかった。笑っていて欲しかった。

その為に暴力、権力、果てには聖剣を手放し聖槍の威光に縋り。あらゆる力を使い、压制を行い、自由を規制して国に秩序と平穩を築いた。

自分で言うのもあれだが、私は間違いなく暴君だった。

だが、そんな不器用な自分に付いて来てくれた部下がいたのだ。支持してくれた民が居たのだ。

それを否定する事は、例え自分自身だとしても決して許さない。

だから私もマスターと同じく胸を張って答えるのだ。

己を通し続けたあの結末に、後悔は無いと。

月が照らす中で、私とマスターはどちらからともなく笑みを浮かべる。

またほんの少しだけ、私はマスターの事が好きになれた気がした。



まさかランサーからあんな話題が出るなんて思わなかった。やはりムーンセルでの過去を見たのかも知れない。

魔術回路というのはかなり深い部分で魂や精神と繋がっている。そんな回路とサーヴァントは繋がっている為、サーヴァントはマスターの、マスターはサーヴァントの『過去の主観』を夢として見る事があるらしい。

もつとも、その過去は主観になっているので実際の出来事とは差異がある。だがそれは同時に本人がどんな想いでいたのかがはつきりと映し出されるという事でもある。

目蓋を閉じれば先日見た光景が目に見えかぶ。

今よりもまだ幼い身体と表情の『聖剣を持ったアーサー王』のランサー。

相手の血でその身体を染めながらそれでも戦い続けた彼女。

しかし彼女の顔に達成感はない。

戦いが終わる度に、彼女は己の背後を振り返る。

そこに映るのは自分の理想を信じて付いてきた兵士達の屍の山。

『私は弱い』

それが最初に見た彼女の過去の夢だった。

そして今日、映し出されたのは彼女の治めるログレスの都の道中、王の帰還と勝利の凱旋を喜ぶ民の列。

彼女はそれに『笑顔を貼り付け』やり過ぎし、キャメロット城に付いたあと、彼女は一人城を抜け出し街へと舞い戻る。

物陰から、先ほど自らが通った道を見詰めるランサー、そこに広がるのは……喜びの声など一切無い絶望だった。

遺品を渡して回る兵に縋り付く者達。

帰還途中は生きていたが治療が間に合わず死んでしまった兵に縋り泣く者達。その光景に、彼女は目を伏せるしかなかった。

『私は弱い。こんな弱いままの私が王でいいのか？』

己への不甲斐なさとは不信感に耐えられなくなった彼女は——ひとり城の宝物へと向かう。

民が望む理想の王で在る。

高潔であり、誠実であり、献身であり、民を第一に考える。それが民が求める王の姿だ。

だがどうだ？ そのせいで結果的に私は戦場で多くの兵を死なせ、民を泣かせている。私が裁くのが遅いせいで狡猾な商人や貴族が民を苦しめている。

彼女には願いがあつた。

『民に生きていて欲しい。笑つていて欲しい。その為に自分はこの日、聖剣を抜いたのだから』

彼女は険しい表情のまま宝物庫を開け放つ。

そこには彼女が聖剣とは違う力を宿すもう一つの力が嚴重に納められていた。

『私はこれ以上、民の涙を見たくない』

『例えその結果、私に向けられる感情が恐怖と畏怖だけだったとしても』

そして彼女は『アーサー王』の象徴である剣を納め、ただの『アルトリア王』としての道を進む覚悟と共に槍を手にした。

二度目の夢を見て確信する。彼女はやはり物語の様な騎士王のアーサー王ではなかつた。

だがこのアルトリア王の選択を責められる者など居るはずがない。

だって彼女は……ただ誰よりも優しかっただけなのだから。

だからもしも彼女がその選択を後悔しているのだとしたら、自分が今抱いている思いを伝えようと思っていたのだが、どうやら杞憂だったらしい。

むしろ……先程のやりとりのお陰でより彼女を好きになれた。その事を考えれば自分の過去を見られるのも悪くは無い。

「マスター、そろそろ麓です」

「ああ。ランサーは霊体化してくれ。それじゃあさつそく聖杯を探すとしますか」

ランサーに霊体化して貰い。眼鏡をかける。視界に大地から湯気のように湧き上がる霊脈の魔力、そして空気中に不規則に揺れるマナの魔力が、映し出される。

さてと、とりあえず目の前の霊脈を辿りながら、高いビルでも探すかね。

【二人の王の邂逅】

街を歩き、高いビルを探す内に運良く一つ目の収束点を見つけた。

新都にある建造中の建物で看板に『冬木市民会館建設予定地』と書かれていた。

せっかくなので転移術式を施してホームポイントの一つとして設定する。これでもここに逃げ込む事も可能だ。

そこから改めて当初の予定通りに高い場所を探していると程よい高さの左右に並んだビルを見つける。

路地裏へと入って人が居ない事を確認してから身体強化して左右の壁を交互に蹴って一気に駆け上り、低い方のビルの屋上へと上がる。

着地してランサーを確認しようと振り返ったその時……ラムレイと一緒に宙に浮くランサーと目が合った。

「……ラムレイって飛べたの？」

「正確には駆けるですね。しかし一瞬なんの遊びかと思いましたがよマスター」

「ヒヒン」

「いや、言つてよー！」

そんなやり取りをしながら屋上から見える範囲で更に高いビルへと向かう。もちろん今度は自分もラムレイに乗せて貰って空を駆ける。

女の子の後ろに乗って更に抱きつく形になっているのがなんとも情けない光景だが、ラムレイは緊急時以外はランサーの言うことしか聞かないらしいから仕方ない。胸の感触？ フルプレートだから硬いとしか分からんよ。

なんとも残念な思いを感じながらまわりからの攻撃を警戒しつつ目標のビルに着地する。

「さて、ここから確認できればいいが——《Code : 遠見》Far vision」

ランサーに霊体化するように頼んでから、眼鏡をかけて遠見の魔術で視覚を強化して遠くまで一気に見渡せるようにする。

……むっ。

霊脈を探そうとした瞬間、海辺で強い魔力の塊を視認する。

あれはサーヴァントだろうな。にしても霊体化してないとは珍しい。

サーヴァントは実際の肉体を持っていてもそれ全て魔力によって作られたものだ。それ故魔術師からすれば一般人とサーヴァントは見分けやすい。

もつとも霊体化されると魔力がほとんど感じられなくなるから普通は霊体化するものなのだが。

眼鏡を外して視界を良好にしてから海辺の一点を集中して視る。

視界がどんどん近く明確になって浜辺で会話する二人の女性を見つめる。

一人は髪の長い白髪で色白の白い服を着た女性、そしてもう一人は——っ!?

もう一人の相手を確認した自分はその相手の外見を見て言葉を失い、無言のままランサーへと振り返る。

「どうかしましたかマスター？」

伝えるべきか……伝えるべきだろうな。

「……ランサー、落ち着いて聞いて欲しい。まず最初に自分はランサーの過去を夢で見た」

そんな前置きを口にする自分に、ランサーはどのようにして今その話を、と言った表情をさせる。

「その夢で、自分は聖剣を持ったランサーを見た」

一度そこで言葉を切り——意を決して先程見た光景を告げる。

「その夢で見た容姿とまったく同じ君が……あそこにいる」

自分の言葉に——ランサーはその冷めた無表情を珍しく驚愕に歪ませた。



「……アイリスフィール」

「ええ。近くに居るわね」

城の周辺しか知らないアイリスフィールを慮ったセイバーの提案で二人で冬木市の新都を見回り、最後に海を見るために夜の砂浜へとやって来た二人は、突然感じた気配に先程まで浮かべていた楽し気な笑みを消し、緊迫した表情へと変える。

「人気の無い場所に移動しましょう」

「そうね。あのコンテナが積まれている場所にしましょう。切嗣も私達のことは使い魔を通して視ているはずだから、きつと来てくれるわ」

二人は気配に注意を向けながら港の倉庫街へと向かう。その間も、何故かセイバーは気配とは別の感覚を感じていた。

倉庫街へと到着したアイリスフィールは人払いの結果を施し、それが終わると同時にセイバーは黒いスーツの上に魔力によって作り上げた戦闘用の青い衣服と白金の甲冑を纏って声を上げる。

「先程からこちらを見ている者よ！ 貴殿に英雄としての誇りがあるのならば姿を見せよ！」

そのセイバー挑発に、一騎のサーヴァントが姿を現す。

霊体化から実体化するその様を見詰めながら——セイバーは驚き目を見開く。

「流石にこの距離では間違いようがありませんね」

「ヒヒーン!!」

『見知った馬』と『見知った槍』、そして顔を兜で隠しながら告げられたその言葉とずっと感じていた自身を襲う『共鳴』に……セイバーは目の前の相手が何者であるのかを悟った。

「なるほど。どうやら貴女は『理想を貫き通した』ようだ」

「馬鹿な……こんな事が起こるのか……」

「セイバー?」

狼狽えるセイバーに心配したアイリスフィールが駆け寄ると同時に……黒い騎士は兜の部分の魔力を解除してその顔を晒す。

「初めましてアーサー王……もう一人の私」

「そんな……セイバーがもう一人? でもその姿は……」

「ああこれですか。私は聖剣ではなく聖槍を選んだ結果、不老不死では無くなったので身体が成長したのですよ」

ランサーの言葉にアイリスフィールは驚きはしたものの、同時に彼女の存在に納得と焦りを覚える。

（つまり今、目の前にいるのはセイバーのもう一つの可能性の結果と言うことね。それに槍と言うことはランサーのクラスで間違いない。それにしても複数のクラスを持つサーヴァントの場合、同時に呼ばれる可能性は確かにはいえ、それが私達にぶつかるなんて）

「さて、相対する前に訊いておきましょう。その貴女、あなた達は何故聖杯を求めますか？」

アイリスフィールの焦りなど無視して、ランサーが槍の穂先をアイリスフィールへと向ける。

槍を向けられたアイリスフィールはどう答えたものか一瞬迷うも、相手が自分のサーヴァントのセイバーと同じ起源ならば、こちらの想いを汲んでくれるのではないかと考え、正直に答えた。

「私は、私の願いはこの世界から争いを無くすこと。つまり恒久平和よ。聖杯ならばそれが叶えられる。そしてセイバーの願いも」

「……なんですって？」

アイリスフィールの言葉に、ランサーは眉を吊り上げて今度はセイバーに穂先を向ける。

「セイバー、貴女にも望みがあると云うのですか？」

セイバーは向けられた視線を受け止め、剣を構えて臨戦態勢を取ったまま答えた。

「ええ。私には叶えたい望みがある。その為に死の間際に聖杯を求めて世界と契約し、サーヴァントになったのです」

死の間際という言葉に一瞬だけランサーの眉がピクリと動いた事にアイリスフィールは気付いたが、ランサーはすぐに表情を元の無表情の物に戻して続きを問う。

「いったいその望みとは何ですか？」

「貴女が私なら分かるでしょう？」

「いいえ分かりません。私に叶えたい願いなど無い。だから私も貴女には問わなかった。しかし望みがあると言うのなら……些か興味がある。答えて貰いましょう」

ランサーの『望みが無い』という発言に驚くセイバーであったが、目の前の自身の異様な姿から辿った結末が違うのだろうと判断し、自身の望みを答えた。

「私の望み、それは祖国を救う事です」

「祖国を、救う？」

ランサーの呟きに、セイバーは力強く頷く。まるで、その選択こそが正しいと言うように。

「そうです。私は間違え、国を滅ぼした。故にやり直すのです。今度こそ、祖国を救うために」

セイバーは劍の柄から手を離し、そしてその手をランサーへと向ける。

「ランサー、いいえもう一人の私。貴女は私とは違う道を歩んだと見える。しかしその口振りを聞くに、貴女も国を救えなかったのでしょうか？　だからどうか私に力を貸して欲しい。私の生き方は間違いない。そして貴女も間違えた。ならば『我々以外の生き方』をすれば、行動を起こせば、きっと国を救えるはずですよ」

セイバーはランサーが自らの要求に答えてくれると信じて疑わぬ笑みを浮かべる。

セイバーからすれば、確かにそう思っても仕方がない。何故なら始まりは同じ存在であり、そして自分を信じて疑わなかったからこそ、セイバーは『騎士王』として在れたのだから。

故にセイバーは目の前の自分のことも信じる。きつと自分に賛同してくれると。

「私が歩んだ歴史、そして貴女が歩んだ歴史を互いに知り、過ちを認識し、そしてどちらかが聖杯で過去へと戻るのです」

その言葉を締めとしてセイバーがさあ、と言って手を更に伸ばす。

——ランサーは……片手で顔を覆い、笑った。

「く……く……く……はははははははははは!!」

ランサーは手で顔を覆ったまま大声で笑い出す。笑われたセイバーは眉を吊り上げ怒りを露にして叫ぶ。

「何が可笑しいのです！ 他ならぬ私なら、この私の望みが、思いが理解できるはずですよ！」

「——ふざけるな」

訴えるセイバーに対してランサーは先程までの笑みを完全に消し、どこまでも冷たく冷酷な表情をし、静かにしかしはつきりと殺気を込めて言い放った。

彼女のその表情に、その言葉に、その圧に、セイバーは身を竦ませ、アイリスフィールもまた怯えて数歩下がる。

「よくもまあ腑抜けたものだ……死の間際に望んだ事がそんな事……しかも私の半生を過ちと貶すか。こんな腑抜けた王が理想を貫いた私の末路……我が事ながら、なんと愚かで幼稚か……」

ランサーはセイバーへ失望にも似た視線を向けると、まるでこれ以上語る事はないと言いうように再度兜を纏う。

「——剣を構えよアーサー王。貴様の愚かなその願い……この『アルトリア王』が引導を渡してくれる」

「っ！ アイリスフィール下がって！ どうやら本気のようにです！」

セイバーはアイリスフィールに下がるように命じ、引いていた身体を戻して剣を構え直す。

「相手は腑抜けても『私』だ。最初から拘束を二つ外す。行くぞラムレイ——風よりも疾く駆けよ！」

「ブホオオオン！」

ランサーが槍を前に構えると、槍、ランサー、ラムレイが紫色の放電を放ちそして——ラムレイが地を蹴る。

「——っ!？」

セイバーは直感スキルによる感覚に従って、自らの足と聖剣の刀身からの魔力放出で横にスライドするように移動する。

瞬間、セイバーを突風が襲って吹き飛ばす。

「つぐ!？」 回避してこれとは我が愛馬、そして聖剣に匹敵する聖槍は伊達ではありませぬね」

なんとか体勢を整えて着地したセイバーであったが、すぐに直感が働き、その場を大きく跳び退き、コンテナの上に着地する。

セイバーが飛び退くと同時にその場を紫の雷光が駆け抜ける。

「流石にやりますね」

立ち止まるも紫電を纏ったままセイバーを見上げるランサーに対し、セイバーは険しい表情で睨み返す。

（あの突進は脅威です。速く重い。とてもではありませんが正面からぶつかっては勝ち目が無い）

セイバーは宝具の開放を考えるが、ここで実行するにはあまりにも被害が出すぎると判断し、開放するか迷う。

そんなセイバーの焦りを先に来て潜伏し、状況を見守っていた切嗣が忌々し気な表情で狙撃銃のスコープ越しに眺めていた。

（まさか、もう一人のアーサー王が現れるなんて。いったいどんな奇跡が起きたというんだ。しかも敵対するなんて）

聖杯が起こした嬉しくも無い奇跡を愚痴りながら、耳に付けた通信機越しに今回の協力者に話しかける。

「舞弥まいや、そつちからランサーのマスターらしき人物は見えるか？」

『いいえ。ただ、貴方の予想通りの場所にアサシンを捉えました。やはり昨夜のはブラフでしたね』

舞弥と呼んだ女性の言葉に切嗣がスコープをコンテナ置き場が一望出来る場所へと向ける。

そこには髑髏の仮面をつけた全身黒いタイツと黒い毛皮の腰巻を身に着けた男性のサーヴァントが眼下で繰り広げられているセイバーとランサーの戦いを監視していた。

(これで三つの事が判った。一つは言峰綺礼のサーヴァントがアサシンであること。そしてアサシンには分身のような能力があること。そして教会の監督役である言峰璃正と遠坂時臣が繋がっているということ)

何故切嗣がこれらの事を断定できたのかと言えば、それは昨晚起きた事件が切っ掛けである。

昨晚、遠坂時臣の工房であり拠点である遠坂邸にアサシンが侵入し、その際に時臣のサーヴァントと思しき黄金の鎧のサーヴァントに倒されるという事件が起きた。

その様子を白野とランサーを除く各陣営は使い魔を通して見ており、特に舞弥は使い魔に機材を取り付け映像として記録し、それを日本に来てすぐの切嗣に見せていた。

そして映像を見た切嗣はその内容に違和感を覚えた。何故ならアサシンがあっけなく殺されているからである。

アサシンには気配遮断と言う攻撃の意思を持つまでその気配を消せるスキルがクラススキルとして与えられる。

もちろんランクの高さによって効果の強弱があるにしても、それを差し引いてもアサシンの発見から撃退までの時間があまりにも短かった。

更にその後の情報で言峰綺礼が教会に保護されたことも知っていた切嗣は遠坂と言峰は繋がっているのではと予想していた。

そこに来て先ほどの死んだはずのアサシンを発見したことで、切嗣の予想の確定とアサシンの能力が判明したと言うわけだ。

因みに、白野が使い魔を送らないのは彼の魔術が使い魔の使役に適さない為、情報入手よりも居場所を隠す事を優先したためである。補足すると、もしこの世界がネット社会なら逆に白野の情報収集能力は他の陣営を圧倒していただろう。良くも悪くもこの時代にそぐわないのが彼の魔術の特徴である。

(厄介な事だ。それにしても最終的に一組しか願いが叶えられないというのに、アサシンがよく了承したものだ。いや、その名の通り最後にはマスターを出し抜く気ではないかもしれないな)

アサシンから視界を外した切嗣はランサーのマスターを探す為に場所を移動する。

「いたか?」

『いいえ何処にも。もしかしたらこのあたりには居ないのかもしれない』

「かもしれないな。だとしたらランサーのマスターは慎重で臆病な人間と言うこととなるな」

切嗣は移動しながら舞弥と無線で連絡を取りつつ、新しいポジションで改めて眼下の戦闘へと視線を向ける。

眼下では先程から同じような展開が繰り返されていた。

ランサーのチャージをセイバーが避け、セイバーはスキル『風王結界』によつて風を操りその剣に纏わせた風を放出する技『風王鉄槌』ストライク・エアを放つが、ラムレイはそれを回避し、またチャージする。その攻防を眺めながら、このままでは無駄に魔力を消費するだけだと判断した切嗣が撤退の指示をアイリスフィールに送ろうとしたその時——巨大な影がセイバーとランサーの間に落下して行つた。

【聖杯戦争初戦】

上空から迫る強い魔力に気付いたランサーはラムレイの攻撃の軌道をセイバーから大きく逸らし、同じく気付いたセイバーもランサーとは反対側に向けて大きく飛び退くことでその魔力の落下地点から距離を取る。

二人の距離が離れると同時に黒い影の塊が落下し、大きな破壊音が上がる。

「ハーハハハ！ その勝負、この征服王が一時預かる。双方、武器を納めよ！」

落下の衝撃で舞う土煙を勢い良く払い除けながら現れたのは巨大な体躯の二頭の雄牛が引く中世時代の戦車。

そしてその戦車に乗るのは毛皮の紅のマントを羽織った筋肉質な褐色肌の巨漢の男だった。

「征服王ですって？」

戦況を見守っていたアイリスフィールの呟きに、自らを征服王と名乗った男は大きく頷いた。

「いかにも。我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した！」

本来、聖杯戦争ではサーヴアントは自らの真名を隠してクラスで呼ぶのが当たり前である。何故なら正体を知られる事は己が有しているスキルや宝具がどういったものなのかを予測され、対策を取られてしまうからだ。

特に宝具の看破は切り札がバレると言っても過言ではない。

しかし目の前のイスカンドル、ライダーはそれを隠さずに曝け出した。その行動にその場にいた誰もが沈黙する中、馬車から金髪をオールバックにした男、彼のマスターであるケイネスが現れる。

「いったいどういうつもりだライダー!! いきなり戦場のど真ん中に着地し、更には己の真名すら宣言するなど! 貴様はこの戦いがどういうものなのか解っていつぎやあはん!」

ケイネスが青筋を浮かべながらライダーに掴みかかろうとした瞬間、ライダーにデコピンを食らって戦車の端に吹き飛ぶ。

「ええい相変わらず人間の小さき男よ。貴様も男児ならば戦場では堂々とせんか。で、ああなんであつたか……そうそう、余が現れた理由であつたな」

己のマスターにデコピンかましながら蓄え整えられた立派な顎鬚を軽く撫でたあと、不適な笑顔を浮かべたライダーが両手を挙げる。

「余がお主達の戦いを止めたのは他でもない。余から一つ提案があるからである」

「提案？　いったいどういった内容です」

ランサーを警戒したままセイバーが尋ねると、ライダーは『その前に。』と前置きする。「いい加減他の者達も姿を見せたらどうだ！　今宵、ここはまさに英雄集う場所である！　この場に現れぬというのならそれは英雄に在らず！」

（これはまた随分と派手な、しかし上手い挑発ですね）

セイバーを警戒しながら今も続けて行われているライダーの挑発的な演説を聞くランサーは、目の前の征服王が見た目通りのただの脳筋ではないと悟り、警戒レベルを上げる。

しばらくしてライダーの演説が終わると同時に、一体のサーヴァントが彼等の傍の街灯の上にその姿を現す。

「この我を差し置いて王を名乗るとは。不敬が過ぎるぞ」

現れた黄金の鎧を纏った遠坂時臣のサーヴァント、アーチャーとして現界したギルガメッシュが、不愉快そうな表情をさせながら眼下の全ての者達を見下ろす。

「うむ。中々どおして面白いのが現れたな。どうやら他に英雄は居ないようだのう。では改めて余が現れた理由を説明しよう！」

ライダーのその言葉に表れた全員が集中する。

そしてライダーは不適な笑みを浮かべながら高らかに叫んだ。

「お主等全員、余に聖杯を譲らんか？　もしも提案を受け入れるのなら、お主等には余と共に肉体を受肉した後、世界を征服する偉業の共をする名誉を与えようではないか！」

「断る」

「断ります」

「最後の言葉はそれでよいな」

即断即決で拒絶されたライダーは笑顔を曇らせ、むむむと唸る。

「むううダメか？　報酬は弾むぞ？」

親指と人差し指で輪を作つて見せるライダーに三人のサーヴァントだけではなく彼等を近くで監視していた殆どの者が呆れるか冷めた表情でライダーを見詰める。

「あんな男に世界は一度征服されかけたのか……」

（だがまあ……これはチャンスでもあるか）

「舞弥、そつちからライダーのマスターは狙えるか？」

『問題ありません』

切嗣は彼のマスターであるケイネスが現れたその時から彼を狙撃する為に自分よりも狙撃ポイントに近かった舞弥にポイントまで移動させていた。

舞弥は切嗣に返答しながら、ライフルを構え、ライダーのデコピンをくらつて無言で不機嫌そうに様子を伺うケイネスに照準を合わせる。

『いつでもどうぞ』

(あそこからならアサシンに視認されない。殺るなら今しかない)

切嗣がそう判断して舞弥に合図を送ろうとして——言葉を飲み込む。

(なんだと……)

切嗣が言葉を飲んだ理由、それは戦場に新たなサーヴァントが現れたからに他ならぬ。

突如としてアーチャーの傍に現れたのは、全身黒尽くめのフルプレートフルプレートの甲冑に、更に黒い靄霧のような物を放ち続ける異様なサーヴァントだった。

突然の新たなサーヴァントの襲来に、ランサーとセイバーは更に緊張を高めて警戒し、ライダーは面白そうな笑顔を浮かべる。傍のケイネスは焦りライダーに詰め寄るがやはりデコピンで黙らされた。

現れた黒騎士のサーヴァントはそのままアーチャーへと視線を向ける。

「この俺に不快な視線を向けるな狂犬」

一言発すると同時にアーチャーの背後の空間に円状の歪みが幾つか発生し、そこから形状の違う剣がまるで弾丸のように二本発射された。

高速で放たれた剣が黒騎士に当たり爆発した。その光景を切嗣は一度見ていた。そう、アサシンがやられた時とまったく同じ展開だったのだ。

しかし、同じ展開だからと言って——結果まで同じとは限らない。

(馬鹿な……)

土煙の向こうから現れたのはいつの間にか剣を手に持った無傷の黒騎士だった。

人間である切嗣達には何が起きたのかは解らなかったが、サーヴァント達には見えていた。

黒騎士が剣が放たれるとその場で屈み、飛んできた最初の一本の剣の柄を掴み、あとから飛んできた剣を叩き落すという卓越した技術を。

その卓越した戦闘センスに、ライダーは感心しする。

「ほう。見た所あやつはバーサーカー。にも拘らずあの動きとは、どうやらかなりの腕前の武人と見た」

ライダーの読み通り、黒騎士のクラスはバーサーカー。しかしバーサーカーのクラスはクラススキルとして『狂化』を得ることになっている。

『狂化』はサーヴァントのステータスを大きく上昇させる代わりに『理性が失われる』『一部の能力が劣化、または使用不能になる』『魔力消費量が膨大になる』『ランクが高いとマスターの命令を聞かない』などのデメリットが多数存在するリスクなスキルである。

その為、本来バーサーカーはテクニカルな戦い方よりもパワーに物を言わせた戦い方

が基本である。

だからこそライダーはバーサーカーが只者ではないと判断し、その性格から自らの軍勢に欲しいという欲求が生まれる。

「うゝむしかし対話が成り立つかどうか。おいマスター、あやつのステータスの詳細を教えよ」

「くつ、都合の良い時だけマスター呼ばわりしおつて……むう」

「おうどうした？ 余はお前の魔術の腕だけは認めておるのだから早う答えんか」

「わ、分かつている！ だ、だが見えんのだ。あのサーヴァントのステータスが。き、きつと奴のスキルに違いない。そうでなければこの私が看破できないはずがない！」

ライダーの言葉にケイネスが焦った表情で早口に答える。

本来マスターにはサーヴァントのステータスを大雑把なランクとして看破する能力が与えられる。しかしそれが目の前のバーサーカーには通用しなかった。

そしてそんなライダーとケイネスのやり取りの間も、バーサーカーとアーチャーの戦いは続いていた。

アーチャーはバーサーカーが自らの宝物に触れ、更に己の物のように振るうその行動に怒りを覚え、更に多数の武器を先程と同じように発射して行く。

剣、槍、斧、短剣、戦槍、大剣等々いったいどれだけ貯めていたのかと言うほどの多

種多様な武器が放たれるが、それをバーサーカーは悉く弾き、かわして行く。

セイバーがあることに気付き驚愕する。

（あのサーヴァント、初めて触れた筈の相手の武器をまるで己の獲物の様に使いこなしている！）

バーサーカーは剣だけではなく斧も槍すらもまるで己の慣れ親しんだ武器のように巧みに操り、飛来する武器群を迎撃して行った。

（なんて奴だ。奴は間違いなくバーサーカーのクラスのサーヴァント。つまり狂化され、理性が殆ど無い状態のはず。それなのにあそこまで戦えるなんて。くそ、ライダーのマスターを殺すチャンスが潰された）

既に戦場は迂闊に動けるような状態ではなく。そのことでケイネスを殺す機会を逸した切嗣が顔を顰める。そしてついにアーチャーとバーサーカーの攻防に変化が訪れる。

バーサーカーが手に持った剣を放ち、街灯を断つことでアーチャーを地面へと落とす。

地面に着地したアーチャーは肩を震わせ、その赤い瞳に殺気を宿してバーサーカーへと向ける。

「……天に仰ぎ見るこの我を地に立たせるなど、無礼が過ぎるぞ狂犬！」

アーチャーが怒りの声を上げると同時に今迄背後にだけ展開していた空間の歪みがバーサーカーをドーム状に包むように展開される。

(あれは360度の展開が可能なのか。見れて良かった)

切嗣がスコープ越しに息を呑む。それ程に、アーチャーの技、『王の財宝』ゲイトオブバビロンは脅威だった。

『王の財宝』。アーチャーであるギルガメッシュは、かつてこの世の全ての財を集めたという逸話が存在し、それが昇華された能力。

その能力は破格であり、人類が過去未来において作り上げた物の原点が自動的に彼の宝物、つまり白野と同じ己の概念空間に収集される。その空間の規模はまさに地球規模であり、彼自身も宝物庫の数を完全には把握できないほどであった。

むろんその財の中には宝具レベルの武具がごろごろと存在し、それを自らの意思で自由自在に出し入れでき、今回のように発射することも可能となれば、例えばサーヴァントであろうと簡単には打ち破る事は出来ない。

(あのサーヴァントは要注意だ。できれば更に手を晒してくれると助かるんだが)

切嗣が期待を込めてアーチャーを注視する。しかし残念ながらそう上手くは行かず、アーチャーはその場から唐突に姿を消してしまう。

「どう思う舞弥」

『恐らく令呪によって強制的に呼び戻されたのかと』

「ああ、僕も同意見だ」

これだけ大規模に戦っていれば他のマスターによる監視もあつただろう。そして遠坂時臣がこれ以上の情報漏洩を恐れて己のサーヴァントを呼び戻した。というのが切嗣達の予想だった。

突然のアーチャーの撤退に、残された者達がお互いを警戒したまま、緊迫した空気が流れる。

そんな中、セイバーは視線を感じてそちらに振り返る。

セイバーが振り返った瞬間——その視線の主であるバーサーカーが雄叫びを上げてセイバーに向かって突撃を開始する。

「A——urrrrrrrッ!!」

「なっ!?!」

突然の出来事にセイバーはランサーに向けていた剣を向けて迎撃体勢を取る。

しかしそんな二人が交わるよりも先に——それは駆けた。

「枷を更に一つ。雷鳴の如く駆けよ——ラムレイ」

一陣の紫電がバーサーカーを飲み込みコンテナ群を突き破り海岸へと突き抜けて行った。

「……ランサー、貴女は……」

雷光を放ちながら目の前を通り過ぎていったもう一人の自分。

自分と戦っていた時よりも速く鋭いその一撃が己の傍を駆け抜けて行く一瞬、セイ

バーは辛うじて捕らえていた。

兜越しに見えた瞳が——『王』としての決意の眼差しをしていたのを。

【ランサーVSバーサーカー】

「……危なくなるまで好きにやらせて欲しいって言うからいつでも援護できるように準備していたけど、流石に予想外すぎるよランサー。それにまさかギルガメッシュまでいるなんて」

もう一人のアーサー王を見つけた自分達はまず接触する前にどうするかを考えた。

その時、ランサーがいつもの調子で『悪いが私の好きにやらせて欲しい』と言うので了承する代わりに幾つかして欲しい事を頼んだ。

まず最初に相手が聖杯にどんな願いを望んでいるのかを尋ねて欲しいこと。これは相手の目的を知るためだ。

次は遠見の魔術での監視と、小型の無線を持たせて会話を盗聴する許可。魔術だと感知されるかもしれないので一応念のためだ。

最後にこつちがヤバイと判断したら勝手に動くこと。またこちらに動いて欲しい時は何かしらの合図を送って欲しいこと。

「だったんだけど。まさか『マスター準備を』だけで終わらせるとは思わなかった。たぶん、戦闘の準備でいいんだろうけど」

ランサーの言葉と黒騎士、たぶんバーサーカーへの突撃する姿を見てそう判断した自分は、慌てて彼女達がやってくる終点と思しき砂浜のポイントに魔術で転移し、急ごしらえの人払いの結界を展開させる。

「——っ!？」

結界を張り終えた瞬間、嫌な予感がしてその場から思いつきりダイブするように飛び退く。

「うおおおおおおお?!」

後ろを駆け抜けたランサーの衝撃の余波を受けて軽く吹き飛ばされながら、なんとか空中で体勢を立て直して着地する。

視線を上げてランサーが駆け抜けた方を見ると、ランサーがラムレイを急停止させ、先端に居たバーサーカーがそのまま軽く吹き飛ばされるが、倒れることは無く剣を盾にするように構えた体勢で立っていた。見れば黒い霧の様なものも完全に消えていた。

どうやらあの剣でランサーの槍を防いだみたいだな。あの一瞬でそんな事ができるなんて。そしてあれがあのサーヴァントの宝具で間違いないだろう。そうじゃないとあの武器の強度に説明が付かない。

「良い働きですマスター」

「ん。ありがとう」

隣にやって来たランサーからの労いに苦笑を浮かべながら答え、とりあえずランサーが突撃して決れた道へと振り返る。

運良く、いや、これはランサーが狙ったのかな。被害は人が居ない建物だけみたいだし……あととは教会とか魔術協会の人がなんとかしてくれるだろう。

『お前等自重しろ!!』

と、事後処理する裏方さん達の悲痛な叫びが聞こえた気がしたが無視して視線を前に戻す。

「で、あれって？ 見た感じバーサーカーだけど……わざわざ連れて来た理由は？」

「確証は無かった。しかし私の感が、あれは円卓の誰かだと言っている気がしたのです。だが、あの『剣』を見て何者かを確信しました。悪いがマスターよ。今しばらく私の戦いに付き合ってください」

「うん、了解」

特に拒否する理由も無いのでそう返すと、ランサーは少しだけ口元に笑みを浮かべたあと、その表情を引き締める。

そして槍を横に突き刺し、全身から相手を威圧するようにオーラを放つ。その姿と気迫は紛れも無く、一国の王が持つ威厳に満ちていた。

「——湖の騎士よ。面を晒す許可を与える」

湖の騎士、と言うことは目の前のサーヴァントは……。

一言。ランサーのただその一言を聴いた瞬間、目の前のバーサーカーが動きを止める。

そして兜の部分の魔力を開放してその顔を露見させる。

「……Ar……thur……Ar……rrrrrrthurrrrrrrrrr!!」

晒された顔は狂気化のせいかな憎悪に歪み、目は血走っていた。とてもではないが逸話の『最高の騎士』とは思えない風貌である。

だが確かに聞こえた。彼の口から放たれた『Ar^{アー}th^{サー}ur』と言う名を。

「愚かしいな。お前のその苦悩に気付かず、見過ごしたのはいったいどんな『私』だったのか。だがよい。その嘆きは私が聞き届けよう。マスター援護を。私には彼の騎士の言葉を聴く義務と責務がある。故に宝具でぶっぱはできない。ラムレイから降りますので、私が彼を確実に刺せるようにしてください」

……ん？

「え？ ランサーは一緒に戦わないの!？」

チャージ

「私の槍術は突刺一本。故にラムレイの『突撃』無しでは湖の騎士には敵いません。ロンゴミニアドの威力自体は問題ないので貫通は可能でしょう。サーヴァントを援護するのがマスターの役目、期待しています」

戦闘方針『真つ直ぐ行ってぶっ刺す』だけ決めてそれ以外を丸投げされたぞ!!
 とりあえずなんだ、ステータスで負けているからランサーに《Code:全能力上昇^{gain ability}》(b)をかけてステータスを底上げ。これで速度も上がるからいいとして、次はつてきたああああ!!

ランサーに魔術を掛けた瞬間、湖の騎士ことランスロットが雄叫びと共にこちらに突貫してくる。

「ラムレイ突撃!」

「ラムレイ。マスターの指示に従いなさい」

ラムレイに《Code:攻撃無効化^{add invalid}》をかけ、それを見届けたランサーがラムレイに命令する。

命令を受けたラムレイは一切の躊躇も無くランスロット目掛けて駆け出した。

ラムレイの忠誠心に感心しながらすぐに次の一手の準備を行う。サーヴァントの戦闘は高速戦、常に思考を動かし行動を止めてはならない。

「ランサー、いつでも行ける用意を!」

自分の指示を受けたランサーは腰を落とし、駆け出す姿勢をとって槍を腰の辺りに構える。

こちらが準備している間にもラムレイとランスロットの距離が縮まりそして、ラムレ

イの額当てとランスロットの黒い剣、宝具であろう彼の愛剣であるアロンダイトが激突する。

次の瞬間、まるでガラスが砕けるような衝撃音が響くと共にアロンダイトを持つていたランスロットの腕が弾かれて彼の体勢がわずかに崩れる。

ラムレイに施した付加した能力は『一度だけあらゆる攻撃を防ぐ』というもの。それによってラムレイへの攻撃は弾かれて無事だったわけだ。

「そのまま噛みつけ！」

「ブルルル!!」

こちらの指示を受けたラムレイが口を開き勢い良くアロンダイトを持つランスロットの腕に噛み付く。

「A r r r r r r r r r r !」

ランスロットが空いている方の手を手刀の形にする。

させない!

魔力消費と外視で最短で物質化制御を行う。

《物質化制御：礼装具現——地の鎖!》

二小節の詠唱完了と同時に右手に一本の鎖が巻き付き、短剣が付いた二つの先端がランスロット目掛けて勢い良く走り、片方はラムレイに突き刺さる前に手刀に巻き付いて

締め付け、もう片方はラムレイが噛み付いている方に巻き付つき、そのままラムレイの胴体に巻き付ける。

地の鎖。

かつて自らのサーヴァントだったギルガメッシュが使っていた『天の鎖』を改良して作った拘束具、それが『地の鎖』だ。

天の鎖には二つの特性がある。

一つは所有者の意のままに動くという特性。

もう一つは神性の高い者にはその力を封じ更に更に拘束力を高めるといふ特性。

地の鎖は天の鎖の二つの特性の内、二つ目を無くしただけの物だ。

だが素早く意のままに動く鎖と言うのはそれだけでも十分拘束具としては脅威であり破格の性能である事に間違いはない。

さらに《Code:重力上昇(b)》！

アーチャーが用いていた共通詠唱にならって自分も戦闘用に作っておいた詠唱を唱えると同時に、ズンと自分の身体が『重く』なって腰が落ち、砂浜に足がめり込む。これで少しでも安定させる！

「引けラムレイ！」

「ブルル！」

「——っ!？」

ラムレイがランスロットを開放し、自分とは反対の方へと体を向けて走る体勢を取る。こちらも力一杯鎖を引き戻す。

ラムレイと自分に引つ張られる形となったランスロットは両手が大きく開かれ、その胴体が露になる。

「——っラン——!」

「良い働きでした二人とも」

自分が呼びかけるよりも早く、先程までのフルプレートから魔力節約モードの半裸の姿になったランサーが、高密度の魔力を帯びて紫色の雷光を発するロンゴミアドを突き出してランスロット目掛けて翔る。

その速度と姿から、魔力のほとんどをロンゴミアドと魔力放出に回したに違いない。

ランサーも分かっていたってことか。

今もまだランスロットがここにいるのはただの偶然に過ぎない。

次の瞬間にはマスターの令呪によって呼び戻されてしまうかもしれない。故にランサーは最短距離を最速でつめる為に捨て身の一撃を放ったのだ。

目の前の騎士を確実に倒す為に。

そしてついにランサーとランスロットはぶつかり——二人の周りで激しい光と砂が舞い上がった。

【騎士の頼み】

攻撃の余波によって起こった衝撃と砂を、腕で顔を庇ってなんとか耐える。

どっちだ……。

ランサーの一撃が届いたのか、それとも届かなかったのか。

ゆっくりと目蓋を開け、腕を退かした先で見えたものは……ランサーの槍に胸の右半分を貫かれたランスロットの姿だった。

見れば鎖は千切れ、ランスロットのアロンダイトを持つ手が胸の左側を護っている……あの状況から剣でなんとか槍を弾こうとした、いや実際弾いたのだろう。だからこそ軌道が中央からずれた。

流石は最高の騎士。だがあの傷ではもう……。

「……申し訳ありません我が王」

「謝罪はいらない。騎士の不忠を裁くのが王の務めです」

「ああ……貴女の騎士であった私が羨ましい……」

……ああそうか。

聖槍に貫かれながら、先程までの憎悪の表情から満ち足りた表情へと変わったランス

ロツトを見て、彼の願いをなんとなくだが理解してしまった。

たぶん彼は裁かれたかつたのだ。他でもない自らの王に。

何故そんな望みを抱いたのかは分からない。だがそのあたりに彼が狂戦士となった理由があり、そしてランサーにはその理由が分かっていたからこそ、自ら裁くことに拘つたのかもしれない。

「それはどうでしょう。私は貴方達を厳しく罰しましたからね。貴方達のあらゆる立場と権利を剥奪し、財の殆どを没収して二人を国外に追放したのですから。きっと恨んでいることでしょう」

えつ、それって普通に二人を逃がしたんじゃないか？

今のランサーの発言は確かに不貞を働いた二人を単身で国外に放り出したように聞こえるが、それは同時に二人の立場と言う枷を外させ、ただの男と女として『送り出した』とも取れる。

……ああそうか。つまりランサーは騎士と王妃である二人をきつちり罰する代わりに、自分の出来る限りの権力を使って二人を助けたのだ。

その後己に降りかかるであろう批難と失望を知りながら。

「……姿形、そして考え方は変わっても……やはり貴女の根底の不器用な優しさは……変わっていないのですね」

もはや体の半分が消えているランスロットが寂しそうな嬉しそうな笑みを浮かべる。

「……他に何か言い残すことは？」

あと一分もせずに消えてしまうであろうランスロットへその声をかけるランサーに、ランスロットは少しだけ申し訳なきような表情をさせて願った。

「できれば私のマスターの願いを……あの男もまた、たつた一人の少女を救う為に戦っていた不器用な男です」

「マスター」

こちらに視線を向けたランサーの意図を理解し、彼女に頷いて答えランスロットに近付いて尋ねる。

「そいつの名前は？」

「名はカリヤ……マトウカリヤです。今はコンテナー置き場付近の裏路地で気絶していると思います」

よりにもよって御三家の一つか。てか気絶してるのかよ。

「分かった。本人から話を聞いて協力できることなら手を貸すよ」

「感謝します。我が王の新たな魔術師よ」

あ、やっぱりこの人の認識だところちが仕える立場なのね。まあ否定はしないけどね。サーヴァントあつてのマスターだ。彼等の期待に答えられるのなら、そういう立場

でも悪くない。

「では逝けランスロットよ。いつまでも我が親友のギネヴィアを待たせるな」

ランスラーが身体を離し、既にランスロットの体から抜けていた槍を地面に突き刺してそう命じる。

「——はっ。我が王」

もはや頭部すら薄れていたランスロットは、それでも誇らし気な表情をさせ、恭しくお辞儀をして……消えていった。

「……まさか二度、同じ騎士を裁く事になるとは。因果なものです」

「無理にランスラーが裁かなくても、もう一人、セイバーの方でも良かったんじゃない？」

自分がそう尋ねるとランスラーはゆっくりと頭を横に振った。

「あれは……ダメしようね。同じ真面目人間ですから。きつと彼が狂戦士になるだなんて欠片も思っていないでしょう。最悪見当違いな理由で討ちかねない」

「……ランスラーはよく気付いたね」

「道を外れたからこそ、彼とギネヴィアのその真面目な性格の危うさに気付いたのです……故に、私が率先して裁く必要があつた」

当時のことを思い出したのか、少しだけ寂しそうに瞳を揺らしたランスラーだったが、すぐにいつもの無表情に戻り、ラムレイに跨る。

「さて、我が騎士最後の頼みです。彼のマスターを探すとしましょう」

「……そうだね。どうやら向こうの戦闘も終わったみたいだし。今なら楽に探せるかね」

遠見の魔術で再度コンテナ置き場を確認すると、他のサーヴァントやマスターは撤退したようだ。

何匹か使い魔が近くに向かっているが、まあいいだろう。対策はしてあるし。

腰のポーチから魔石を取り出して自分の魔力を補充しつつランサーに頼んで自分もラムレイに乗せて貰い、コンテナ置き場に向かつて貰う。

「頼んだ私が言うのもアレですが、マスターはよいのですか？ 彼のマスターを助けることは貴方には関係の無いことのはずです」

「そうだね。でもさ、誰かの為に戦う人に悪い人は居ないと思うんだ。何よりランサーに頼まれたんだ、嫌とは言えないよ。もちろん話を聞いてからじゃないとなんても言えないけどね」

自分の答えにランサーは珍しく困ったような表情をさせた。

「お人好しですね。貴方は」

「ランサーほどじゃないよ」

生涯その不器用な優しさを通じた人に言われてそう返すと、珍しくちよつとだけムツ

とさせた彼女は正面に向き直る。

「今日は魔力消費が多かったので更に三倍の食事を要求します」

「オウ……」

反撃した代償は意外とでかかった。なぜ自分はこれだけの知識と技術を持ちながら黄金率のスキルだけは持っていないのか！



（俺は死ぬのか……こんなあつげなく……桜ちゃんを救うことも、時臣への復讐も果たせぬまま）

冷たく汚い裏路地の地面に血反吐を吐いたまま横たわる男、ランスロットのマスターであった間桐雁夜は自身の有様に無念を抱きながら、先程まであったはずの令呪が消えた己の手の甲へと力無く視線を向ける。

雁夜が聖杯戦争に参加した理由は、間桐に貫われた養子の少女、間桐桜のため。そしてもう一つが彼女の本当の父であり、魔術師の子供だからという理由で桜を養子に出した遠坂時臣への私怨だった。

元々雁夜と時臣、そして彼の妻であり桜の母親でも遠坂葵は同級生であった。

そして雁夜は葵に恋心を抱いていたが結局その思いを告げられず、彼女は時臣の妻となった。

その後雁夜は間桐の家督を継がずに出奔し、魔術とは無縁の生活を送る。そんな彼の楽しみは時々街に戻って葵やその娘である桜と桜の姉である遠坂凜と会話を交わすことであつた。

一年前も同じように土産を持って街に戻つた雁夜だったが、そこで初めて桜を間桐の養子に出した事を葵から聞かされ愕然とした。

もちろん養子に関しては遠坂側にも事情があつた。

時臣の娘二人には『運が悪い』事に二人ともが特異な才能を有していた。特に桜はあまりにも珍しい『虚数』の属性を有していた。

もしも桜が魔術師の加護を得られない場合、彼女のその特異性がバレれば封印指定にされて魔術師協会に保護と言う名の監禁、最悪その特異性を残す為にホルマリン漬けにされかねない。

しかし桜の特性は封印するにはあまりにも惜しい。そんな風に悩んでいた時臣のところに間桐から御家存続のために養子が欲しいという申し出を受けた。

時臣はどうせ預けるのならばと盟友の間桐を信頼して預けたというわけだ。

しかし事情を知らない雁夜からしたら間桐の要請を受け入れて娘を捨てたと思

えず、故に激高した。

雁夜は葵にも詰め寄り問い質したが、魔術の世界から逃げた貴方には関係ない。という痛い所を突かれ口を紡ぐしかなかった。

そして雁夜は出て行った間桐の屋敷へと戻り、間桐の魔術を牛耳る己の父であり数百年を生きる間桐の化生と呼ばれる翁、間桐臓硯と取引をした。

『あんたの目的は聖杯だろ？ 俺が聖杯を手に入れたら桜ちゃんを開放しろ』

臓硯は雁夜の提案を受け入れ、己の蟲魔術によつて魔術師として未熟過ぎる雁夜の身体を魔術が扱えるように無理矢理弄くりまわして改造を施した。

因みに桜も既と同じように蟲に身体を蹂躪されてその魔術回路と属性を間桐の魔術に適応できるように改造されていたが、雁夜とは違い精神はともかく肉体が壊れないように時間をかけて施され続けていた。

結果、一年の拷問にも等しい肉体改造の果てに雁夜はなんとかマスターとしての資格を得てサーヴァントを呼び出すだけの魔術師に成ることに成功した。

代償として一月と生きられない身体になってしまった事と引き換えに。

しかし、現実は残酷である。

それだけの代償を払ったにも関わらず、雁夜の聖杯戦争の結果は開始一日目で脱落という結果であった。

（時臣のサーヴァントを襲ったまでは良かった。奴のサーヴァントが逃げてバーサーカーを撤退させる筈だったのに、あの馬に跨った紫の鎧の一撃を受けた後から突然膨大に魔力を奪って暴走しやがった。お陰で俺はその代償の苦痛で悶絶して令呪が使えず、いつの間にか意識が飛んで目が覚めてみれば令呪が無くなっていた。つまりバーサーカーがやられたってことだ）

雁夜は時臣への復讐のために彼のサーヴァントを狙っていた。

雁夜にとつては他のサーヴァントやマスターは眼中になかった。桜の出来事とこの一年の苦痛によつて雁夜の心は時臣への憎悪で一杯であったからだ。

しかしいくら心が滾ろうとも、彼の身体は既に限界であった。

彼の中の蟲は魔力の生成の為に体内でカリヤの血肉を食い漁ったが、これ以上は魔力を生成出来ぬと判断して活動を止めた。あとは魔力が切れて死ぬのをただ待つだけの状態であった。

（目蓋が重い……くそお。最後に……せめて最後に……桜ちゃんの……凜ちゃんの……葵さんの笑顔が見たかった）

目蓋が完全に落ちて視界が閉ざされ意識も薄れ始めた彼の耳に——かすかな音が聞こえた。

「……が……スターで……」

「まず……治療を……」

(人の……声?)

人の声らしき音を聞きながら……雁夜は意識を失った。

【白野の策略】

アジトである山のキャンプ地に戻り、キャンプ用のコンロに火をつけて湯を沸かして夕食の準備をする。

「本当にこの男が彼のマスターなのですか？」

ラムレイに寄りかかりながら昼の残りの菓子パンを頬張るランサーが対面で横たわる今にも死にそうな白髪の男に無表情なまま視線を向ける。

「間違いないと思うよ。姿が異様だし魔力が底を付きかけていた。もうあと数分治癒が遅かったら死んでただろうね」

ホント、何をしたらこんな風になるのか。

彼は見つけたときには既に瀕死の状態だった。どうやら正規の手順で魔術を行使していないのか、身体は痩せ細り、髪や肌は栄養が行っていないかのように白髪で土色をしている。

たぶん彼の体内に居る存在のせいだろうな。

最初は自分と同じように万一の場合は生命力を削って魔術を行使するタイプなのかとも思ったが、どうやらそもそも魔力の生成自体、彼が行っている訳ではないらしい。

彼の体内に何かが生きて、そいつが生成する魔力でギリギリ生きてるって感じだ。魔力が尽きたら、たぶん死ぬな。

色々聞きたい事はあるが今は目が覚めるのを待つしかない。

それに他にやることもある。

お湯が沸き、コンロの火を止める。

「……ランサー、ちよつと花を摘みに行つてくるね。この人のことよろしく」

「マスターそれは女性が使う例えだと与えられた知識にあるのですが？」

そうツツコミをいれるランサーにそれもそうかと相槌を打つて拠点から離れる。

「……………この辺りでいいかな。」

《Code: 緊縛結界》

地面に手を付いて結界を発動させる。効果は文字通り『対象』を縛つて動けなくする

結界だ。

「ガッ!？」

キャンプ地の周辺一帯を覆う結界が発動した瞬間、目の前の木から骸骨の仮面を付けた男、アサシンがまるで何かに上から押し潰されているかのように無様に地面に伏す。

コートの内側に手を入れて概念倉庫から『遠見の水晶玉』を取り出して水晶に魔力を流すと、自分を中心としたこの辺一帯の簡易的な地図が現れそこに魔力体の反応が七

つ。一つは自分、もう一つはランサー、反応が大きい目の前のアサシンと、同じ反応が一体、残りは反応の小ささから見て使い魔だろう。

『ランサー、トラップに獲物が掛かった。魔力の波長から使い魔が三体、それとやけに魔力が少ないがアサシンが二体だ。たぶん大丈夫だとは思うが気をつけて処理してくれ。場所は——』

ランサーに念話で使い魔ともう一体のアサシンが居る場所を伝える。

『……三分で終わらせませすよラムレイ』

ああ、夕飯前でしたものね。たぶん時間的にお湯を淹れたばかりなんだろうけど、御愁傷様。

速攻で潰されるであろうアサシンや使い魔に心の中で合掌しつつ、眼の前のアサシンを見下ろす。

「さて……始めましてアサシンのサーヴァント」

「ぐつ。まさか貴様、最初から我々の尾行に……」

うん。気付いてたよ。霊体化して気配遮断もしていたみたいだけど、自分の眼の前では無意味だ。

薄つすら半透明でバレてないと思って付いて来ている彼等の姿は、なんと言うか滑稽と言うほか無かった。

むしろ使い魔の方が厄介だったんだが、一応これで一網打尽に出来たろう。

今回山の広範囲に張り、発動した結界は生前の凜やラニがやっていた所謂地形トラップの一つだ。地形トラップには多大な魔力が必要なのだが、その魔力は龍脈を利用することで補っている。

だから長時間やるとこの場所の龍脈が弱まるからあまり多用はできないんだよね。事前準備も色々しなきゃいけないから大変だし。

たぶん一回しか使えないトラップなので、かなり強めに効果を発揮するようにしてあったのだが、まさかサーヴァントをここまで緊縛できるとは思わなかった。流石は凜とラニ製のトラップだ。自分ではこうはいかない。

それと同じ気配を発するアサシンを複数捉えたことから、今回のアサシンには分身系の能力があるのは間違いない。たぶんこいつは分身だろうな。だから魔力量が低いのだろう。

「さて、アサシンのサーヴァント。あなたに一つ尋ねたいことと、一つの提案があるんだけど、聞いて貰えるかな?」

「……なんだ」

アサシンはしばらく沈黙した後になんか答えた。どうやら今は大人しく会話に付き合おうらしい。

「まず尋ねたいことだけど、アサシンは聖杯に叶えたい願いはあるの？」

「それを聞いてどうする？」

「いや。あるなら聞いておこうかと思つてね。もしそれが自分やランサーが許容できるものなら、仲間になつて欲しい。それがさっき言った提案だよ」

「仲間、だと？ それは我々の陣営と同盟を組むということか？」

「いや、組むのはアサシンとだけだ。そちらのマスターと組むつもりはない。できれば離反してくれると嬉しいな」

アサシンのマスターがどんな相手か分からないがサーヴァントを失えば戦いに参加することはできないだろう。

それにアサシンというサーヴァントの脅威は嫌と言うほど生前に味わつた。できることなら敵として対処するより味方に引き込んでしまつた方が楽だ。

「馬鹿を言うな。一人のマスターに契約できるサーヴァントは一体まで。それが聖杯戦争のルールだ」

「正式な手続きで契約できるのはつてだけで、維持する魔力さえあれば問題は無いよ。そつちについても一応考えはある。それとこれはあくまでも提案だ。乗るかどうかはそちらで決めればいい。ただ一つ、もしアサシンのマスターが聖杯で願いを叶えたいと思つているのなら、結局アサシンはマスターを説得する必要があるぞ」

「どういう意味だ？」

なんだ気付いていないのか？ 自分は聖杯戦争の説明を読んだ時に『ああ、魔術師らしいな』と、ピンと来たんだが……。

「予想だが、たぶん願いの所有権はマスターである魔術師にしかないと思うぞ」

「——!？」

自分の言葉にアサシンは僅かに驚いたような反応をする。どうやら本当に気付いていなかったらしい。

そもそも自分がそんな予想を立てたのは魔術協会の時計塔にある聖杯戦争に関する資料の写しを伝手で見せて貰った時だ。

なんとというかその資料に魔術師らしい胡散臭さを感じた。『嘘は付いていないけど本当の事は言っていない』と言えば解り易いか。

だいたいこの時代の生粋の魔術師達が英霊とは言え、使い魔同然のサーヴァントの願いまで叶えようなんて思う訳が無い。

アサシンの反応からすると、どうやら本格的にサーヴァントはただの使い捨ての可能性が高いな。

いや、もしかしたらサーヴァントを呼び出さなければならぬ理由があるのか……ダメだな。まだピースが足りない。

「まあアサシンのマスターが良い人なら自分の願いとアサシンの願いの両方を叶えてくれる可能性だってある。それにあくまでも自分が聖杯戦争の情報を得た結果からの予想でしかないからサーヴァントも普通に願いを叶えられる可能性もあるにはある」

「たぶん低いだろうけどね。と最後に言っただ話を終えて念話でランサーに状況を確認する。」

『ランサー、そろそろ緊縛の効果が切れる。そつちは？』

『問題無く』

ランサーからの返答を聞いて、水晶玉でもう一度周囲を確認する。

「どうやら眼の前のアサシン以外はランサーの報告通りに処理したみたいだな。反応が無くなってる。」

水晶玉を仕舞って立ち上がる。

「もうすぐ結界の効果が消える。そしたら帰って本体のアサシンとよく話し合うといいよ。あ、もちろん望みの内容次第では自分達は受け入れられない訳だけど、どうかな？」
「せめてアサシンの望みが誰かに害を及ぼす物かそうじゃないかだけでも教えて貰えない？」

「我々の願いは……個人的な物だ。誰かに不利益を齎す物ではない」

アサシンの答えが本当かどうかは分からない。だが、自らの願いを答えるアサシンの

声色にはとても真剣で切実な物を感じた。

「なら自分達は手を組めるよ。自分とランサーに叶えたい願いはない。ただ二度と聖杯戦争が起きないようにしたいだけだ。まあ次に会った時にでも返事を聞かせてくれ」

最後にそれだけ伝えてその場を去る。敢えて背後を見せたが、結界の効果が切れてもアサシンが襲ってくることはなかった。

何事もなく元の場所まで戻ると先に戻っていたランサーがラムレイを背凭れにしてカップ麺を啜っていた。しかも二つ目。

「もつきゅもつきゅ……ん。アサシンとの交渉は上手く行きそうですか?」

「どうかな。向こうのマスターとアサシンの性格次第かな」

一応ランサーには事前にアサシンと手を組む事を伝えておいた。怒られるかと思っただけ意外とランサーは普通に『手駒、それも索敵に適した者が増えるのは望ましい』と言って好意的に受け入れてくれた。

「で、ランサーの方は?」

「使い魔は全てラムレイの足で踏み潰し、アサシンは私の槍で消滅させました。この場所の情報までは知られていないでしょうが、いずれ山に直接侵攻してくる陣営も現れるでしょうね」

ま、そうだよな。拠点を移すかどうかは……まあおいおい考えよう。

「く……………うう……………ごほっ」

「どうやらこちらも目が覚めたようですね」

ランサーがフルプレート姿になって正体を隠す。あ、違う。口元だけ解除して麵を啜ってる。

横たわっていた男が呻き咳き込む。そして少しして力無く閉じていた目蓋を上げる。

「こんばんは」

そんな男に一応挨拶をすると、男は右側の眉だけを顰めてこちらを訝しげに見詰める。どうやら左の顔の神経に異常があるみたいだな。

「誰だ、お前は……………それに、その横の……………」

「その問いに答える前にこっちの質問に答えて貰う。あんたがバーサーカーのマスターである間桐雁夜で間違いないか？」

「バーサーカー……………そうだ、あのクソ役立たずが考え無しに魔力を奪ったせいで、俺は……………」

ランサーから静かな殺気が放たれる。多分兜の中では目を細めて怒っているに違いない。

まあ自分の元騎士を馬鹿にされたらそりや怒るよな。

「その反応はイエス、てこどでいいかな？」

「……そうだ。俺が間桐雁夜だ。それで、マスターであるお前が、何故俺を助けた……」
「助けたくて助けた訳じゃない。ただ、あんたがクソ役立たずと言ったサーヴァントの最後の言葉があんたの願いを叶えてくれ。と言うものだったから、彼の騎士の名誉の為に助けただけだ」

自分の言葉が余程意外だったのだろう。雁夜はその目を大きく見開いて驚いていた。

「馬鹿な。あの狂戦士にそんな知性は……」

「今際の際なら狂化は解けるからまともに話せるさ。さて、ここからは慎重に質問に答えろよ。もしもあんたが助けるに値しない人間なら、自分はすぐにでもあんたを殺す」
殺気を込めてカリヤを睨むと、彼は一度だけ唾を飲み込み、分かった。と言つてゆっくりとこちらの質問に答えて行く。

まず雁夜に聖杯戦争に参加した動機を尋ねる。

彼の目的は御三家の一つである遠坂から養子に出された娘を救う為であり、その為に身体を無理矢理改造して聖杯戦争に参加したらしい。

「というか、別に救うだけならすぐにでもその桜ちゃんつて子連れて逃げれば良かったんじゃないのか？」

「お前は臓硯の恐ろしさを知らないからそう言えるんだ」

そう言つて、今度は間桐家の実質の当主である間桐臓硯について聞かされた。

臓硯は何度も他者の肉体を喰らっては乗っ取つてを繰り返して生き長らえている化生そのもの。蟲使いである臓硯は本体である魂を一匹の蟲に宿していて、本体を殺さない限り何度でも蘇るんだとか。

ただ魂が既に腐っているらしく新しい肉体を手に入れてもその姿は必ず年老いた老人の物になってしまいうらしい。

次に臓硯の性格について訊くと、他人の不幸や悲鳴を聞くと喜ぶ異常者であり、自らが死なない為に聖杯を求めていると雁夜はその表情を怒りに染めながら語った。

「ふむ。とりあえずその臓硯をどうにかすればいい訳だな」

「……本当に手を貸してくれるのか？」

話を聞く限り臓硯を倒すことは可能だ。だがそれを確実にする為には奴と接触しなければならぬ。

今までの会話は雁夜の体内に居るであろう刻印虫とかいう蟲に『聞かれている』から筒抜けだろう。それでも彼を殺さないのは余裕の表れと言うやつか？

まあ、それが付け入る隙になるなら、こちらとしてはありがたい。

「ああ、手を貸そう。ただ条件がある。まず目的の達成如何に関わらず、あんたはもう助からない。持つて数時間だ。そんなあんたへの条件は一つ、桜ちゃんの為に……命を捨てられるか？」

「構わない」

「即答か……分かった。間桐と遠坂の屋敷付近には転移用のマーキングを事前に施しておいた。多少歩くがそこは我慢してくれ」

戦争開始前に施した物だが、流石に拠点に近過ぎてはバレてしまうので歩いて大体30分くらいの地点に施しておいた。まさかこんな形で使うことになるとは思わなかった。やっぱり準備はしておくものだ。

「それと詳しい作戦内容は説明しない。理由は解るだろう？」

そう言つて、自身の胸を叩くサインを見せると、雁夜は自らの腹部を見て納得したのか首を縦に振った。

「分かった。だが、約束しろ。必ず、必ず桜ちゃんを助けると」

「ああ約束する」

真剣で、しかし助けを請うような切羽詰った表情と視線を向ける彼に、自分は表情を引き締め、力強く頷いて答える。

そしてランサーが十個目のカップ麺を食べ終える頃に雁夜はなんとか身体を動かせるまでに回復した。

『……ランサーは霊体化して上空で待機してくれ。他のマスターからのちよつかいがあるかもしれないし、臓硯が外から攻撃してくるかもしれないからね』

『了解。しかしマスター、件の蟲の翁、どのように屠るつもりで？』
『そうだね……お祈りでもするか』

念話でランサーに答え、自分自身に《気配遮断》を付加して雁夜と共に転移で深山町へと向かう準備をする。

【雁夜の願い】

（アイツは本当に桜ちゃんを救ってくれるのか？）

白野と別れ間桐家に向かう道中、雁夜は何度も同じ疑問を考え、そして同じ答えを出す。

（もう俺には他に方法が無いんだ。だったら……やるしかないだろ）

思えばずっと逃げ続ける人生でしかなかったと、雁夜は死を前にして己の人生を振り返り、自虐的な笑みを浮かべた。

（もうどうせ俺は死ぬ。なら最後くらい……いや、一度だけあつたか。怒りに任せたとはいえ、勇気を出したことが）

見慣れた家の門の前に雁夜が笑みを止めて表情を引き締める。

それは一年前、桜が養子に出されたと知り二度と開ける事はないと思っていた扉を開いた時と同じ表情だった。

そして雁夜は一年前と同じように扉を開ける。

「随分と早い帰宅だなあ雁夜よお」

「——っ!？」

間桐邸の玄関ホール。その中央に、一年前とは違って自らを出迎える者が居た。愉快気に笑う化生——間桐臓硯が。

（いや、焦るな。話を聞かれていたのは想定内のはずだ。むしろ逃げずに居てくれた事を喜ぶべきだ）

雁夜はまるでこちらの行動を読んだかのように待ち構えていた臓硯に戸惑った表情を見せかけて慌てて表情を引き締める。

「どうせ全部、蟲を通して知っているんだろ」

「カカカ。おおおお、よく知っていると。お前が聖杯戦争に無様に敗北し、外来の魔術師と結託してワシを葬り去ろうとしている事もよく知っておるともさ」

笑いながら告げる臓硯に怒りで顔を歪める雁夜だったが、内心は焦っていた。

（あの魔術師、いったいどうやってこの化け物を殺すつもりだ）

既に自身が裏切り、殺そうとしていることもバレている。

この状況でどうやって臓硯を葬るのか想像もできない雁夜は、焦りながらも少しでも時間を稼ぐ。

「……桜ちゃんはどこだ？」

「むろん蟲蔵よ。お前が失敗したのだ。桜の調教を再開するのは当然と思わんか？」

「臓硯きさつがふつあぐうあつ!？」

臓硯の言葉に今度こそ怒りを抑えられなくなった雁夜が飛び掛ろうとするが、突然の体内からの激痛に血反吐を吐きその場に蹲つてのたうつ。

「カカカ、貴様の体内にはまだワシの蟲が居る事を忘れたのか？ ああそれとう雁夜、ここに居るワシの中に本体は居らんどお。残念だったなあ雁夜よお」

臓硯の言葉と彼が操る刻印虫の捕食に雁夜は肉体と精神の両方を削られる。

「あつがあああ!？」

「ハハハハ良いぞ雁夜！ その絶望と憎悪に顔を歪ませながら悲鳴を上げるお主の顔を見ただけで、わざわざ出迎えた甲斐があつたと言うものよ!」
 愉悦に顔を歪ませて笑う臓硯。そんな彼の耳元で——誰かが囁いた。

「——《code: 祝 ble ssing 福》——」

それは聴いてはいけない言葉。

それは触れてはいけない光。

その事実臓硯が気付いた時には遅く——彼を暖かな世界が包む。

「あ……あああああああああああああ!？」

歪みきつた魂が、腐りきつた精神が、浄化されて行く。

普通の人間ならば精神や魂はその暖かな光に癒され清められるのだろうが臓硯は別である。

穢れこそが彼の血肉。

狂気こそが彼の支柱。

それらが全て剥がれ崩されて行く。

『《再発動》』

「ああ……ああ」

祝福の重ねがけによつて更に強まった光によつて体が灰燼と歸して行く中で——臓硯の前に二人の人物が現れる。

『ゾオルケン』

臓硯にとつては唯一無二の『戦友』が、こちらを見ている。

『ゾオルケン』

臓硯にとつて唯一無二の『特別だった人』が、こちらを見ている。

「あああ……ながと永人……ユステイーツア……ワシは、俺は、なんで……ああ」

失つたはずの名が、姿が、脳裏に浮かぶと同時にもつとも見られたくない二人に今の己の姿を見られた臓硯の心が——折れた。

(……そうか……俺もやつと……)

心の折れた臓硯に死の誘いに抗う術は無く——その目蓋を閉じると共に彼の全ては灰塵と化して消滅した。

突然の臓硯の消滅に床に伏した雁夜はそれを成したであろう人物、突如として臓硯の背後に現れた『緑の外套』を羽織った白野へと尋ねる。

「お前……どうやって……」

「自分はただ呪いや穢れ等の不浄を祓って癒す祝福の魔術を唱えただけさ。もつとも、あそこまで精神が腐っていると効き過ぎで昇天するだろうけどね」

白野が使う祝福の魔術はこの世界では教会が使う洗礼詠唱や浄化と同じ、靈魂に直接働きかける効果がある。

生きた者に使えば肉体に施された呪いを解き、精神に及ぼされた異常を正し、魂を犯す穢れを払拭する。

これだけを聞くと『治癒魔術』と勘違いされがちだが実際は『正常に戻れ』という強制を用いる『攻撃魔術』である。

特に魂を世界に繋ぎ留める肉体の有無は強く影響し、臓硯の様に『本来の肉体』が死んでいる者には正常な状態、つまり『昇天』させようとする。

「もつとも、奴の精神が『あの分体』に入っていないければ効果は無かつただろうけどね——自分の手で殺そうなんて欲をかくからこうなる」

精神と魂は繋がっている。故に例え魂がその場に無くとも精神自体がその場にいるのなら影響は魂にまで及ぼされる。だからこそ白野は高い可能性で臓硯を倒せる祝福の魔術による奇襲作戦を立てた。

そして白野の説明でようやく雁夜は自分が囹として使われたのだと理解する。

(だからコイツは命を捨てられるかと訊いて来たのか)

白野の真意に気付いて立ち上がろうとした雁夜だったが、そこで初めて足に力が入らないことに気付く。

(っ!?) そうか、臓硯が死んだから刻印蟲も……ああ、あの問いはこっちの意味もあつたのか)

雁夜は最後の力を振り絞って腕を動かして扉を指差してなんとか声を出して蟲蔵の場所を伝える。

「あの……通路奥……部屋の地下……頼む」

「——悪いが断る」

そう言つて傍にしゃがんだ白野を、雁夜はこの土壇場で裏切るのかと怒りに顔を歪め様として、止める。

「ここまででしたんだ。もうちよつとだけ頑張れ」

白野は懐から片手で持てる程の大き目の魔石を取り出してそれを雁夜の身体に触れ

させ魔力供給と唱える。すると雁夜の身体に魔力が戻り僅かにだが力が漲る。

「……お前」

「ここで待つてる。だからあんたが桜ちゃんを連れて来い……それくらいの時間は生きていられるはずだ」

白野は困ったような表情で苦笑を浮かべながら手を伸ばす。

雁夜は少し戸惑いながら、それでもその手を取って力の戻った身体をなんとか起こす。

「……いいのか、こんな死にぞこないに。魔石って言うのは貴重なんだろう？」

「まああれだ、性分だから気にしないでくれ。報酬はあんたと桜ちゃんのお礼でいい」

そう言って白野は苦笑しながら肩を竦めて見せた。

「ほら、早く行きな。本当に少ししか生きられないんだ。せめて少しでも悔いの無いように」

「……分かった……ありがとう」

雁夜は素直に感謝の言葉を白野に伝え、痛む身体を精一杯動かしてこの世でもっとも嫌悪する場所へと向う。

行き慣れた道を進み。地下への階段を下りる途中で——雁夜は階段の中腹の踊り場で立ち竦む少女、桜を見つける。

「桜ちゃん……」

「雁夜おじさん……あのね、おじい様にここで待っているように言われたの。それですつと蟲を見てたの。そしたら……全部消えちゃった」

桜が見ている場所へと雁夜が視線を向ける。

そこはこの地下の最下層の大広場、通称『蟲風呂』には本来なら無数の蟲が蠢いている筈であった。

しかし今は一匹の蟲もない。あるのはただ凄惨な殺人現場のように残る黒く変色した無数の血痕のみ。

（ああ、本当にもう臓硯はいないのか）

臓硯は改めて己の父親が死んだ事を悟るが、苛立ちも喜びも浮かばなかった。その事実が自身と一族との関係を表しているようで、雁夜は内心で苦笑しながら桜の傍に屈む。

「桜ちゃん、君はもうこの家に縛られなくていいんだ。臓硯はもういないから。お——優しい魔法使いがなんとかしてくれただからね」

俺が助けた。そう言いそうになって雁夜はすんでのところで思い止まった。

（俺がこの子を救った訳じゃない。俺が間桐を継いでいれば桜ちゃんはそもそもこんな目に合わなかった。いや、もしも養子の件が起こったとしても時臣に忠告することもで

きた)

自らの死が確定し、臓硯が居なくなり、桜は救われた。

それらの事実を受け入れた瞬間、雁夜の心はひどく穏やかなものに変わっていた。

そして浮かぶのは時臣への恨みや劣等感ではなく過去の己への後悔と反省のみであつた。

(だからこそ、最後までくらはいは……)

雁夜は表情筋の殆どが死んでしまった顔をなんとか動かして笑みを浮かべる。

「さあ、外でその魔法使いが待ってる。上まで一緒に行こう……その、桜ちゃん……手を繋いでもいいかな？」

雁夜の申し出に桜は頷き手を差し出す。

雁夜は喜びその手を握り、二人にとって忌まわしい思い出しかない地下を揃って出て行った。

そして入口ホールへ続く扉が見えた所で雁夜は握っていた桜の手を名残惜しそうに一瞥……ゆつくりとその手を解いた。

「雁夜おじさん？」

手を離された桜が雁夜を見上げる。

「ごめんね桜ちゃん。おじさん、まだやらなきゃいけない事があるんだ。だからここか

らは一人で行くんだ。大丈夫、あの扉の向こうに優しい魔法使いさんがいるから、その人と一緒にこの家を出るんだ」

雁夜はそう言つて桜の背中を軽く押して扉に向かうように促す。

「……分かつた」

桜は扉と雁夜を見比べたあと、頷いて見せて扉へと向かつた。

そして扉を開ける前に雁夜の方へと振り返る。

「ありがとう。雁夜おじさん」

桜は久しく忘れていた感情に素直に従い、最後に雁夜へとお礼を述べてから扉の向こうへと消えて行つた。

「ああ」

桜の表情は無表情であつたが、それでも雁夜には彼女が笑つたように見えた。

そして桜の姿が見えなくなると——そのまま崩れるように床に倒れ付した。

(良かった……でもやつぱり……もつと一緒に……)

雁夜の目蓋が落ち……心臓の鼓動が止まる。

彼の最後の表情はとても穏やかで、けれどどこか寂し気なものだつた。



ガチャリと背後の扉が空く音が聞こえて振り返る。

「……あなたが優しい魔法使いさん、ですか？」

現れた目が濁った少女の姿に、一瞬心臓が強く高鳴った。

……名前を聞いた時からまさかとは思ったが。そうか、この子が彼女の『オリジナル』か。にしても優しい魔法使って、雁夜が言ったのか？

自分の眼の前に現れた少女、桜ちゃんに初恋の彼女の面影を感じ、相変わらずの自身の奇妙な縁の強さに内心で呆れると同時に、違うと解つていても彼女と似通った存在の桜ちゃんに行われたであろう非道に怒りが込み上げるが、その対象は既に自分が殺していることに気付いてすぐに沈静化する。

それらの感情を落ち着かせてから、桜ちゃんの傍までゆっくりと近付いて片膝を付く。

「えっと、その優しい魔法使って誰から教えられたのかな？」

「雁夜おじさんがそう呼んでいました」

「やっぱりか。それにしても雁夜が来ないのは……途中で力尽きたか？」

「その雁夜おじさんは？」

「おじさんはやる事があるから、私だけで行きなさいって……」

……そうか。やはり消耗の方が激しかったか。たぶん、この子に負い目を感じさせたくなかったんだろうな。

桜ちゃんから伝えられた雁夜の言葉に自らの死を彼女に隠そうとしたのだと悟り、これ以上追求するのは彼の矜持を踏みにじることになると考えて質問を止めて話題を変えろ。

「そうか。それじゃあ桜ちゃん、自分は雁夜おじさんに君をこの家から連れ出すよう頼まれた。だからもしも君がこの家から出たいと言うのなら連れて行ってもいい。そのあとで改めてお互いに色々と話し合おう。ただ、今はその、この家のように立派な場所です泊りしていなくてね。正直子供が寝るのは厳しい環境だと思うんだが……それでも来るかい？」

そう言つて、困つた顔で笑いながら手を差し伸べて彼女の返答を待つ。

桜ちゃんは無表情でこちらの手と顔を何回か往復して見比べたあと、恐る恐る手を伸ばし……こちらの手を掴んだ。

「……分かった。それじゃあ移動しようか」

『ランサー、リターンクリスタルを使って帰還するが、屋敷に入れるか？』

『屋敷を覆っていた結界は解かれていますから問題ありません。すぐに合流します』

ランサーに念話で呼びかけると、霊体化で屋根を突き抜けてランサーがやって来て着地すると同時に実体化する。一応敵地なのでフルプレートの状態だ。

「つ——お馬さん？」

ランサーが実体化した瞬間、桜ちゃんは驚いたのか少しだけ目を見開くが、それもすぐに治まりランサーよりも先にラムレイに興味を示す。

「そ、お馬さん。さて、それじゃあ他の魔術師に見付かる前に逃げるとしよう」

幸い室内で事が起こったお陰で使い魔の反応は無い。逃げるなら今の内だろう。

懐に手を入れて内ポケットから取り出す風を装って概念倉庫から掌サイズの球体、リターンクリスタルを取り出して発動させる。

「《本拠地へ転移》！」

唱えると同時にクリスタルが輝き、自分達を包み込む。辺り一面が白一色になるも、それはすぐに収まり次の瞬間には見慣れた森、拠点になっている山のキャンプ地に立っていた。

「………、どこですか？」

「ここが自分達の寝泊りしている場所だよ。あーうん、そういう顔になるよね」

ここが宿泊場所だと伝えた瞬間、無表情な桜ちゃんの濁った目に僅かに困惑の色が浮かんだのを見て、少しでも快適に過ごして貰う為に明日にでも買物に出かけることを

決意した。

【戦争1日目の終わり】

「さて桜ちゃん。辛いかもしれないけど、あの家であつた事を話してくれるかな？」

自分がそう尋ねると桜ちゃんは素直にこれまで自らに行われた地獄を語ってくれた。

桜ちゃんは今から二年以上前に間桐の家に養子に出されたらしい。

桜ちゃん曰くお父さんに捨てられたとの事だ。

その後、ゾウケンによつて無数の蟲が蠢く蔵に放り込まれ体中を蟲に蹂躪され続けた
そうだ。

「でもね。もう平気なの。もう、苦しいのも、痛いのも、辛いのも大丈夫」

桜ちゃんは無表情のまま淡々とした口調で答えた。

桜ちゃんのその姿に、心の底から怒りが沸き上がる。

大丈夫？ 平気？ そんな訳ない。ただこの子は感情を自ら『殺した』のだ。そうする事でなんとか自我を保っていたに過ぎない。

幸運だったのはこの子の感情が完全に失われる前に助けてやれたことだろう。反応を見る限り時間をかければきつとなんとかなるはずだ。

今回の様な場合、魔術で無理矢理に精神を正常な状態に治癒してもこれまでの記憶に

精神が耐えられず、最悪の場合元の状態よりも悪化させてしまう恐れがある。

その為大抵の場合は一緒に記憶消去も行うのだが、桜ちゃんの場合、二年分近い記憶の消去を行わないといけなくなる。桜ちゃんの今後の事を考えるとできればいたくない量の記憶消去だ。

それにしても……やっぱりの世界の魔術師はどうかしている。

自分が桜ちゃんに行われた非道に対して憤っていると、不意に背後で木が折れる音が聞こえて振り返る。

いつの間に準備したのか、カップラーメンを片手に持ったランサー。その反対の手には真ん中で折れた割り箸が握られていた。

ランサーも同じ気持ちか。

ランサーも無表情な方だが、そんな彼女の目元が傍から見ても判るほどに不愉快そうに歪んでいた。

「……ありがとう桜ちゃん。辛い事を思い出させたね。さ、今日はもう寝ようか。明日は買い物に行こうね」

そうやって大人用の寝袋を桜ちゃんに貸し与え、睡魔の魔術で強制的に眠って貰った。

寝袋の中で寝息を立てる桜ちゃんの姿に心に沸いた怒りが少しだけ収まる。

「……マスターは桜を今後どうするおつもりで？」

ランサーが紅茶を飲みながらこちらに尋ねてくる。

「……とりあえずは彼女の情報を調べてからだね。回路の永久凍結は今の自分にはできないし専門家にまかせるしかない。その為にも情報は必須だからね」

桜ちゃんに触れながら少々消費の多い魔術である《Code：解析^{analyze}》を唱える。

解析はその名の通り相手の肉体や魂の情報を解析する能力だ。そのデータはサーヴァントのステータスのように数値化する事が出来る。

「——っ。コイツはやっかいだな」

「何か問題が？」

「桜ちゃんの属性は『虚数』属性という極めて珍しい属性だ。こんなの本当に専門家に依頼しないと手に負えないぞ」

さてどうするか。自分の中にも一応は虚数魔術に関する情報があるが……正直色々情報がチグハグで恐くて扱えない代物だ。とくにこの世界の虚数魔術は特殊過ぎて自分にはまず使うどころか教える事すら難しい。

一時的に魔力を抑える道具ならあるが——くそ、どれだけ強くなって多くの事を覚えても出来ない事があるんだから人生はホントままならない。

「マスターではどうにもならないので？」

「……魔術回路については一時的に封印したり、相手の肉体の影響を無視して破壊するだけなら可能だ。とりあえず信頼の置ける魔術師に相談するしかない。一応ツテはあるが受けてくれるか……いや、その前に聖杯戦争の間の桜ちゃんの身の安全が最優先だな」

妥当な方針としては彼女を冬木の土地から遠ざける事だが超長距離転移のクリスタルは一つしかない。その上使えば聖杯戦争の間にこの地に戻ってくることは不可能だろう。何より連絡手段が無い。電話するにも一度街に下りないといけない。

と言うかあの人に依頼するとしてもまだ同じ拠点にいるかどうか。

そして幾らふんだくられるか、いやでも桜ちゃんの貴重性を考えればタダでボディを造ってくれる可能性も……。

「……とりあえず今日はもう寝よう。明日街に行って桜ちゃんの服とか日用品を買って、そのついでに専門家に連絡してみるよ。あと桜ちゃんを預かってくれそうな信頼できる魔術師にも連絡しておこう」

日本人嫌いだが貸しがあるしそこそこ仲良くしてくれているからきつと預かってくれるだろう。

結局考えても仕方ないという結論に至り、寝袋は桜ちゃんに貸してしまったのでコートを羽織って木に寄りかかる。

「了解ですマスター。それと今回の一件、感謝します」

ランサーは最後にそうお礼を述べてから霊体化する。

それを見届けてから仮眠を取る。

やれやれ今日は大変だった。でもまあ桜ちゃんがこれでもう酷い目に遭わずに済むのなら自分の疲れなど安いもんだ。

そういえば桜ちゃんの本当の父親、遠坂時臣は今頃どうしているのだろう。



「それは本当ですか？」

『ああ間違いない。現在の『表向き』の間桐の当主、間桐鶴野氏まとうびやくやから連絡が入った。雁夜氏が屋敷で遺体となって見つかった。それに伴いバーサーカーの反応の消失もこちらで観測されている。バーサーカーのマスターは間桐雁夜氏で間違いないだろう。そして何者かによって間桐臓硯氏も殺害され、元御息女の桜嬢は行方不明となっているようだ。事件が起きた時、鶴野氏は自棄酒を呷り自室で眠っていたそうで誰が行ったのかは見ていないようだ』

教会との連絡用である蓄音機型の魔道具越しに伝えられた言峰璃正の内容に、時臣は

溜息と共に項垂れながらテーブルへと手を突く。

(聖杯戦争が始まってまだ一日だというのに問題が起き過ぎている)

時臣は眉間に皺を寄せながら目を瞑り今までの出来事を思い返す。

そもそも時臣の苦悩の始まりはサーヴァントであるギルガメッシュをアーチャーとして召喚してしまった事から始まった。

金と時間をかけて手に入れた『世界最古の蛇の抜け殻』を触媒としてサーヴァント召喚を行った時臣は、見事に狙い通りギルガメッシュの召喚に成功する。

しかし呼び出された彼の王のクラスはアーチャーであった。

英雄王もまさに傍若無人の暴君という言葉がぴたりくる性格であり、基本的に他者の言うことは興が乗らなければ聞かず動かず。

その上アーチャーのクラススキルである『単独行動』のせいで常に単独であつちこつちに出かけてしまっていた。

そんな制御不能の英雄王に対して、時臣は家臣の礼を尽くす事でなんとか己の言葉で聞き届けて貰う事に成功していた。

そして同盟を結んでいるアサシンのマスターであり自らの弟子である言峰綺礼に命じてアサシンの一体をギルガメッシュに倒させ、その現場を他の魔術師に見せる事でアサシンの脱落を偽装した。

更に綺礼を教会に保護させる事で綺礼の存在もマスター達の認識から外す事で動き易くし、アサシンと共に時臣が聖杯戦争に勝てるように裏方に徹して貰うはずであった。

だが結局はギルガメッシュの性格が災いし、倉庫街の戦闘で彼の能力の一つである『王の財宝』が露見し、その能力から、正体がバレてはまずいと判断し令呪を一つ使つてギルガメッシュをその場から撤退させた。

極めつけは『今日は少々疲れた』と呟きながらワインの入ったグラスにいぎ口をつけようとしたところに舞い込んだ先程の璃正からの連絡である。

時臣は『私は聖杯に何かしたのだろうか?』と、本気で考え込みそうになったが、桜の名を聞いた瞬間に頭が真っ白になって上手く思考できなくなった。

『……時臣君?』

『……いえ。それで間桐鶴野、彼はなんと?』

『自分は聖杯戦争には関係ない。自分が死んだら間桐の魔術関係の権利も遠坂にくれてやる。だからこれ以上我が家に関わるな。そう一方的に言ってきたよ。桜嬢、雁夜氏、臓硯氏の葬儀は戦争が終わった頃を見計らつて海外から戻つたら行くと向こうから申し出があつた。今頃は他県に脱出しているだろう』

「そうですか、ありがとうございます。とりあえず一体、サーヴァントが減つた事を喜ぶ

べきでしょうな」

『うむ……時臣君、聖杯戦争はまだ始まったばかりだ。気をしっかり持ちなさい』
「……そうですね。では、また何かありましたら報告をお願いします」

璃正にそう答えてから時臣は魔道具を停止する。

（雁夜はマスターとして自らの死も覚悟していただろうからいいが、まさかこのような事で桜を失うとは。あの間桐の翁を殺したとなれば相手はかなりの使い手に違いない。であれば桜の希少性にも気付くだろう……どちらにしる桜は無事では済まないだろうな）

桜の死体が無い以上、彼女が攫われた可能性が高いと時臣は予測した。その結果、桜がどういう道を辿るのかを魔道を知る彼だからこそ簡単に想像出来てしまった。

（運が良くてどこかの魔術の家に身売りされていれば聖杯戦争後にも見つけられるが、最悪なのはその桜の希少性を暴く為、または利用する為に……）

時臣は眉間の皺を更に険しくさせながら、一息大きく深呼吸してから顔を上げてテールの脇に置いておいたワインが入ったグラスをいつきに煽る。

「どんな時でも優雅たれ。それが遠坂の家訓。何より私は桜を一度手放し、そして魔道の為なら姉妹同士の殺し合いを認めている魔術師だ。父親の感傷になど浸っている暇はない」

桜への心配を心の奥に封印した時臣は、とにかく今日はもう疲れた。と言わんばかりに大きな溜息を吐いて地下から出る為に階段へと向かう。

そんな時臣に更にライダーのマスターであるケイネスが宿泊していたホテルが衛宮切嗣によつて一棟ごと爆破された事、そしてアサシンによるキャスター発見という二つの情報を綺礼から報告され、今後の行動の纏め直しなどをしなければならず、結局時臣は地下室で徹夜する羽目になった。

【二日目開始】

「倉庫街及び湾岸一帯とホテル一棟の爆破事件。幸いどちらも死者はゼロであり、昨晚から警察の懸命な捜査が行われている…ねえ」

家電コーナーのテレビに流れている昨晚起きた事件のニュースを桜ちゃんと一緒に眺めながら、その内容について思案する。

倉庫街と湾岸は自分達も関わっているから知っているけど、ホテルはあの後またどこかの陣営がやりあったと言うことか。と言うか、ホテル一棟爆破ってどうやって隠蔽工作するんだろう…：地盤沈下とか？

「兄さん？」

「ん、ごめんね桜。それじゃあ買い物に行こうか」

こちらを見上げる桜ちゃんに微笑みながら手を繋いで改めて買い物再開する。因みに兄さん呼びは趣味ではなく兄妹という設定を通すためだ。

それでもちよつと苦しいと思つたから《Code：変^{disguise}化》で髪や瞳の色を桜ちゃんに似せた。

それとランサーは今自分と反対側の桜ちゃんの隣を珍しくラムレイから降りて一

緒に歩いている。そしてラムレイは桜ちゃんの背後を護るかのようについて歩いている。

ランサーって子供好きなのかな？

何かと桜ちゃんを気に掛けているランサーを微笑ましく眺めながら必要な品物を求めて大型デパートを歩き回った。

『ふむ。結論から言えば一度開いてしまった魔術回路を止めるのは無理だ。ああ、勘違いしないで欲しい。無理と言うのは技術的な意味ではなくコストとリスク的な意味だ。私から助言するとしたら弄られた魔術回路を正常化し、改めて魔力の扱い方を教えて回路のオンオフを出来るようにすべきだろう』

「そうですか。やはり一度回路が開いてはどうしようもありませんか……」

買い物を終えた自分達は荷物を車に載せたあと、人払いの結界を張ってデパート一階の公衆電話から目的の人物に連絡をつける。

蒼崎橙子さん。

魔術協会でも屈指の実力者であり人形造りの天才。

しかしその実力が仇となり封印指定を受けて現在は協会を出奔して日本に移り住ん

でいる。もっともまだ永住する場所は決めていないようで転々と拠点を替えている。

ただ自分にはお得意様と言う理由で何故か連絡先を教えてくれる。まあその理由はとても単純なもののだが。

因みに『赤』という言葉が嫌いでそれを含んだ彼女の二つ名を目の前で言うと言談でもなんでもなく殺される。実際に記録として残っているため、彼女の前では決して口にしないように注意している。

それと自分の名前もあまり好きではない様で苗字で呼んだ方が機嫌が良い。

そんな彼女なら回路の停止や凍結も可能かと思つたが、出来るとしてもやはりリスクを伴うみたいだ。

『それに、その子は虚数属性なんだろう？ だったら多分魔術を使えないのは逆に危険だ。自身の身を護ると言う意味でも、やはり『力』は必要になると思うね』

「ではやはり、どこか有名な魔術師の名家に預けるしかありませんか？」

『それが『二番』だろう。一番は君が面倒を見ることだと私は思うがね』

「……出来ればそうしたいんですけどね」

助けた責任を果たすならそれが正しいのだが……自分がこの戦いを生き残れる可能性、そして彼女の父親を殺す可能性を考えると流石に返事を躊躇う。

『まあいいさ。それと、日本で幾つか良い物件を見つけたんでね。そろそろ定住する予

定だ。生きていたらまた会おう』

「ええ。蒼崎さんもお元気で」

そう返事を返して電話を切って新しいカードを取り出して今度は外国へと電話をかける。

……凄いい勢いで料金メーターが減って行く。

数回のコールの後、目的の相手の声が流暢な英語で響く。まあアイツの個室への専用回線だから出るの是一人だけなんだけどね。

『誰だ?』

「白野だ。久しぶりだなエーデルフェルト」

軽い挨拶を送ると向こうからなんとも嫌そうなフン、という鼻を鳴らす音が響いた。

『一体何の用だ。今は聖杯戦争に参加中の筈だろう』

「ああそれでな、頼みがあるんだ』

『……いいだろう。言うだけ言ってみろ』

「やけにすんなり了承したな。いつもは自分へのリターンがうんぬんって言うのに」

エーデルフェルト家の現当主であるこの男は自らの利益にかなりうるさい。

まあ誰だつてタダ働きは嫌だろうから分からないでもないが、この男は徹底している。少なくとも収入より出資が上回るようなら決して助けてはくれないタイプだ。

『現状、貴様には貸しがある。だからさっさと清算したいのだよ』

「そんな借金みたいな……」

『当然だ。貴様のようないつ死ぬか解らぬ『人生破綻者』に借りを作つたまま死なれたらエーデルフェルト家の者としての恥だ。故に貴様からの借りはさっさと返すことに決めている。ほら、さっさと用件を述べろ』

うんこの相変わらぬの上から目線よ。まあ相手は本当の貴族な上に言っている事も正しいのでこちらはぐうの音も出ない。

エーデルフェルトの言葉に肩を落としながら、桜ちゃんについて要点と要望だけを纏めて説明する。

『ほう、あの遠坂の娘か。それならば母上も許すだろう。なにせあの憎き遠坂が出来なかつた事をするのだからな』

「あくえつと、預かつて欲しいとお願する立場で言うのもあれだけど……虐待とかイジメは勘弁してくれよ」

一応忠告しておくとしてエーデルフェルトは心外だと言いた気に不機嫌そうに鼻を鳴らした。

『我がエーデルフェルト家の者がそのような幼稚で陰湿な事をするものか。やるなら正面から、正々堂々と喧嘩させる！』

おおう。相変わらず魔術師らしくらぬ家柄だ。

エーデルフェルト家は魔術師至上主義と言うよりも自分達の一族至上主義であり、一族としての誇りや教えを大切にしている。良く言えば『魔法使いらしい魔術師』だ。

今の世の魔術師は魔術師界のルールや規則を重んじるが、彼等は魔術その物の探求や好奇、そして一族の榮譽と栄華を優先する。

特に現当主のこの男は家の利益を優先するタイプで目の前で人がどれだけ傷付こうが我先にと討伐対象の技術を掻つ攫おうとする。

自分はそう言うのには興味が無くどちらかと言えば人命優先なので彼とは数年間ビジネスパートナーとして良好な関係が続けている。

本人も基本思考が利益優先だけで正直者で悪い奴じゃないしね。

『それでその桜という少女を預かる場合、形式上は貴様の『妹』とし、私の『弟子』として魔術の基礎修得まで預かること。それ以降は彼女の意思を尊重する。と言う事ではないんだな?』

「ああ。できれば桜ちゃんには普通の女の子として幸せになつて欲しいと思つている」
『フン、まあいいだろう。貴様が死んだ場合、預かつてやる。連絡がつくようにはしてあげ。落ち合う場所はその地にある我が一族の双子館の一つを使うといい。場所と境界の解除と展開の詠唱は——』

それから幾つか細かい事をエーデルフェルトと話し合つて電話を切る。

とりあえずこれで自分が居なくなつた場合の桜ちゃんの安全確保は出来た。

電話を終え傍で待つてくれていた桜ちゃんと霊体のランサーに声を掛ける。

「お待たせ。それじゃあ一度キャンプ地に帰つてお昼を食べて……桜ちゃんはそのあとはどうしたい？」

「……お馬さんに乗りたい」

桜ちゃんはいしばらく考えるところを答えた。

ランサーに視線を向けると彼女はしばし考えた後に頷いてくれた。どうやら桜ちゃんを乗せて貰えるみたいだ。

「なら戻つたらみんな散歩でもしようか」

山には人払いの境界を施してあるから山中ならランサーを实体化させても問題ない。

使い魔が居るかどうかの確認も必要だな。

来た時と同じように桜ちゃんの手を繋ぎながら午後の予定を頭の中で纏めていく。

山へと戻り桜ちゃんに『顔の無い王』のレプリカ版を渡して姿を隠して貰い自分とランサーが他陣営の使い魔が居ないか探りをいれる。案の定キャンプ地付近で数匹発見

したのでランサーと共に処理してからお昼にする。

「さて、それじゃあ御飯も食べたし、先に桜ちゃんの身体を治しちゃおう」
「治す?」

「うん。とりあえず肉体と魂の異常なら自分の治癒魔術で治せると思う」

「けっこう魔力を持つていかれる魔術だけど、仕方ない。」

「そう言つて桜ちゃんに背中を向けて貰つて服を脱いで貰う。」

「……ランサー、何故急にラムレイを自分の背後に……」

「いえ、疑つては居ませんが……ラムレイ、マスターが怪しい動きをしたらとりあえず踏みなさい」

「ブルル」

「こ、恐い。いつの間にランサーはこんなに過保護に、でも気持ちは解る。」

「そういう趣味は無いから。さて——《Code: recovery 完全治癒》」

桜ちゃんの背中に触れながらコードキャストを唱える。

桜ちゃんの身体を光が包み、彼女の髪の色濃さが増す。どうやらこちらの色が本来の彼女の物らしい。

「……どうかな桜ちゃん?」

「なんか、少しだけ体が軽くなつた……かも?」

まあ実感は湧かないよなあ。

「見た目で判るのは髪の色程度ですね」

「魔術回路は流石に本人にしか解らないけど、回路は肉体に依存しているし壊れていなければ修復されているはず。まあ肉体の異常が治ったのは間違いないし、今はそれだけ分かれればいいさ」

桜ちゃんに服を着て貰い、その後は桜ちゃんの希望通りに彼女をラムレイに乗せて比較的緩やかな山道を選びつつ散歩を開始する。もちろん周囲の警戒は怠らない。

ある程度散歩していると桜ちゃんが眠そうなのでキャンプ地へと戻る事にし、その道中で空に魔力のある者にしか見えない信号弾が放たれている事に気付く。

あの方角は教会、それにあれは確か召集の合図だったか。と言うことは監督役からの呼び出しか。ふむ、これは聖杯について色々訊けるチャンスかもしれない。

「ランサー、ちよつと教会に行つてくるよ。桜ちゃんの護衛を頼む」

「二人で行くのですか？」

「どうせ召集には使い魔しかこないだろう。それにランサーを連れて行くと桜ちゃんも連れて行くことになる。まだ桜ちゃんを他の陣営に見せるわけには行かない」

手段を選ばない奴等に見つかつたら大変だからな。

桜ちゃんにもう一度『顔の無い王レプリカ』を着せる。能力の発動条件はフードを被

るだから羽織るだけなら問題ない。

「ランサーに着るように言われたらさつきみたいにその外套のフードを被るんだよ。ランサーも桜ちゃんのことをよろしく」

「行つてらっしゃい……」

「何かあれば念話や令呪を」

「分かった。ランサーも何かあつたら念話で知らせてくれ」

説明を終え、手を振る桜ちゃんにこちらも手を振つて答えながら二人の傍を離れて下山する。さてさて、教会では何が聞けるかな。

【アサシンの答え】

下山した自分は冬木市の新都にある冬木教会付近まで車で向かい、近くのコインパーキングに泊め、その近くの人通りの少ない路地裏に保険として転移用の術式を施してから改めて教会へと向かう。

教会の門を潜り敷地を進んでいると、教会入口付近に姿形は違うが見知った相手を発見した。

自分が相手に向かって意図的に視線を向けると、霊体化していた『彼女』は驚いたような仕草をし、次の瞬間には殺気を放つ。

ここで戦う気は無いし、そうだな……こちらの事情を説明しようか。同盟を提案している訳だしすぐに殺される事は無いだろう。

使い魔の反応がいくつもあるがどれも位置的に声までは聞き取れないだろうと判断し、傍を通り抜ける際に出来る限り声を抑えてアサシンに語り掛ける。

「これから聖杯について監督役に訊くつもりだけど一緒に聞かないか……アサシン」

後ろで髪を一纏めにしたポニーテールの女性アサシンは、しばらくこちらの真意を測るかのよう探っていたが、しばらくして結論が出たのか頷いて答えた。

「じゃあ何を聞いても姿は出さないでね」

彼女から殺気が消えるのを確認する。一応背後を注意しつつ教会の扉に近付き開ける。

「……何か御用かね？」

礼拝堂の祭壇の前で年のわりに引き締まった体格の神父が出迎える。あの人が今回の監督役の人物だろう。

礼拝堂の真ん中辺りで立ち止まって令呪を見せる。

「——っ。まさかマスター自らやって来るとは。それも若い……」

「中立である相手には礼を尽くすさ。訊きたい事もあるしね」

一つ、二つ……三つか。ほぼ半分の陣営がここに使い魔を放った事になるな。

教会の外にも数匹感じたが、教会内にも使い魔の魔力の反応があった。やはり他の陣営は馬鹿正直に教会には来なかったようだ。

まあ普通は罠の可能性を考えて来たりはしないよねえ。

それでも情報戦で遅れている自分としては命のリスクがあろうとも、色々と知れるチャンスは物にしたかった。

「掛けないのかね？」

座らずにいるこちらに対して神父がそう促してくるが、自分は首を横に振って断る。

立っていた方がすぐに動けるからね。

「それで、自分が最後ですか？」

「……まあいいだろう。これ以上は集まらんだろうしな」

そう言つて神父は一度咳払いしてから祭壇の前に立つ。

「知っている者もいるかもしれないが、私の名は言峰璃正。今回の冬木の聖杯戦争の監督役を務めさせて貰つている。今回集まつて貰つたのは聖杯戦争を継続する上で解決しなければならぬ火急の問題が発生した為である」

璃正はそれから具体的な理由を語つた。

なんでも街で騒がれている殺人鬼がどういう手を使ったのかサーヴァントを呼び出し、そのサーヴァントと共に魔術を用いて毎晩子供を誘拐しているのだとか。

「サーヴァントのクラスはこちらの情報網にてキャスターと断定された。神秘の秘匿の為にこれ以上のキャスターとそのマスターの凶行を見逃す訳には行かないと判断し、各マスターは一時各陣営への攻撃を止めて協力し合つてキャスターを討伐して欲しい」

サーヴァントにはサーヴァントが基本だが、そう簡単に協力するはずがない。みんな聖杯を求めているのだから最悪共闘中にキャスターごと一緒に協力者に殺される可能性もある。

そんな事を考えていると璃正は突然片方の袖を捲くつてこちらに見せる。

「おいおいなんだよあの令呪の数は!？」

彼の腕にはなんと十画はありそうな令呪が刻まれていた。

「これは今まで聖杯戦争で使用されずに聖杯に返還された令呪、我々は予備令呪と呼んでいる。そしてキャスター討伐に貢献した陣営全てにこの予備令呪から令呪を一画、贈呈する事を監督役として約束しよう」

なるほど。この方法なら確かに協力する者は現れるな。

令呪の数が一つ違うだけで戦局はかなり変わる。

そしてそれを協力し合えば全員に分配されるとなれば争うよりも協力した方が得だろう。

「以上が今回の召集の案件だが、何か質問はあるかね? もっとも喋れる者限定だが」

そうやって璃正は使い魔へ皮肉めいた発言と笑みを浮かべた後にこちらへと振り返る。

「君はどうかね?」

「召集の件に関しては把握した。ただ聖杯戦争について幾つか把握しておきたい事がある。よろしいか?」

璃正は顎に手を当てて少し考えてから首を縦に振った。

「いいだろう。聖杯戦争についての説明をするのも我々の役目だ。それで、何が知りた

いのかね?」

「その前に、監督役であるあなたは『中立』の立場でいいんですよね?」

「ああもちろん」

……うくん自分の直感が怪しいと嘯く。実際アサシンが教会に居たことを考えると少なくともアサシンのマスターと関係を持っているはずだ。

しかし証拠も無いしあまり時間をかけてると他のマスターが教会にくるかもしれないので早々に次の質問へと移る。

「では聖杯戦争に勝利した者が願いを叶えられる権利を得るとあるが……その願いの行使はサーヴァント単体でも可能ですか?」

「質問の意図が理解できないが、それはサーヴァントがマスターを裏切つて単体で聖杯を手に入れた場合、という仮定でいいのかね?」

「ええ、それで構いません」

こちらの質問に璃正は背後に手を回し、何かを考えるようにしばし黙考すると顔を上げた。

「まあいいだろう。まず結論だが、願いの権利はマスターである魔術師にある。つまりサーヴァント単体で願いを叶えるのは不可能だ。これは御三家ならば全員が知っている情報である」

傍で答えを聞いているアサシンがわずかに反応を示すがこちらの願い通りに姿を現さずにいてくれている。

「……なるほど。サーヴァントは所詮使い魔と言うわけか。つまりサーヴァントが願いを叶えようと思つたら勝ち残つたマスターに願いを叶えて貰うしかないわけだ」

随分と酷い仕打ちもあつたもんだ。

イラだちを覚えながらもそれを表情に出さないようにぐつと堪える。

「情報提供感謝します。それともう一つ、第三回までの聖杯戦争で聖杯が現れた場所を教えて欲しいのです。それくらいの情報なら問題ないでしょう？」

璃正はやはりまた思案するように黙つてから口を開いた。

「ふむ。第一次は柳洞寺、二次は現遠坂邸がある場所、三次はこの教会にて聖杯を呼び出す儀式があつたと記録には残っている」

……随分とあちこちで儀式をしているな。と言うことは聖杯は毎回用意されている。と言うことか？

この教会が龍脈の収束地点の一つなのは訪れた際に知る事が出来た。遠坂邸も魔術師は龍脈の収束点に拠点を構える者が多いから分かる。

しかし柳洞寺にはまだ行っていないな。それも第一回となれば意味がある場所に違いない。あとで行くでしょう。

「今の内容で一つ疑問が。随分と聖杯の出現場所が異なるが、聖杯は毎回誰かが用意しているの？」

「聖杯の器は毎回アインツベルンが用意する事になっている」

「それは今、監督役であるあなたが預かっているの？」

「いや私は持っていない。私は第三回にも監督役として参加したが基本聖杯となる器はアインツベルン陣営が所持する事になっている」

となると一度アインツベルンを調べる必要があるのか。まあいい、まずはアサシンの問題だな。

現状で確認したい事はし終えたか。

「それでは自分はこれで。他のマスターに狙われるのも嫌ですしね。あ、もちろん監督役は自分が安全に出て行くまで使い魔を見張ってくれますよね？ 共闘する訳ですし」

一言お礼を伝え頭を下げてからニツコリと笑顔でそう璃正に要求する。

璃正はやれやれと言いた気な表情をさせて軽い溜息は吐いてから『彼が出て行くまで使い魔が出て行くことを禁しする』と言ってくれた。

流石は話分かる！

なんて喜ぶことは出来ない。なんせ外にも使い魔はいるのだから。

「アサシン、死角に入り次第移動する。信じて付いて来てくれるかい？」

教会の外に出てから来た時と同じように小声でアサシンに問いかけると、彼女は同じように頷き自分の後ろを付いて来る。

使い魔が自分の後を追っているのを感じながら、教会を出てすぐに建物の死角へと向かい到着した瞬間に転移でその場をすぐに離れる。もちろんアサシンも連れて行く。

「さて……短距離転移のポイントを作っておいて良かった」

一瞬の光の後に、自分達は来る前に施しておいた車を止めたパーキング近くの人気の無い路地裏に立っていた。

アサシンの反応を見ると、とくに驚いた様子は無い。もしかしたらランスロットの戦で自分の転移を見られていたのかもしれない。

「どうだった？ 良い情報を手に入れられたと思うんだけど」

人払いの結界を張ってから声をかけると、女性のアサシンが実体化する。

「ええ、我々にとつてとても重要な情報でした。しかし解せない。何故我々にあんな話を聞かせたのです？」

「昨晚の男のアサシンから聞いているかもしれないけど、自分はアサシンに仲間になって欲しいと思っている。だから一緒に聞いて貰ったんだよ。それじゃあ今晚、良い返事を期待してるね」

「いえ、それには及びません」

そう答えた女性のアサシンの周りに他の男性や女性の複数のアサシンが突然現れる。

……くるか。

現れたアサシン全員を警戒しながら両手と令呪に魔力を込める。が、そんな自分の行動は杞憂に終わった。

「あの話を聞いていた我々の判断で貴方と組むことにします」

「そ、そうか。なら良かった」

意外と早く決断したな。もしかしてあまりマスターと上手く行っていないかったのかな？

それでも当初の予定通りにアサシンがこちらに付いてくれるなら色々やれる事が増えて助かるのは間違いない。

「それじゃあアサシン、まずは情報が欲しい。移動しつつ君が手に入れた聖杯戦争や君のマスター関係の情報、他のサーヴァントの情報を教えてくれるかな？」

「分かりました。まず私のマスターですが名前は言峰綺礼と言います」

……何故だろう。初回からいきなり頭を抱えそうな情報を叩き込まれたんだが。まさかマジカル☆八極拳のオリジナルじゃないよな？

【アサシンの願い】

さて、困ったな。

アサシンと共に車で移動しながら先程アサシンから伝えられた情報で今の内に整理しておくべき物を纏める。

まずアサシンのマスターの名前は言峰綺礼。

監督役の言峰璃正の息子であり、アサシンから見てもかなり高い戦闘能力を有しているらしい。

というか、話を聞いたらやっぱりマジカル☆八極拳を使うあの人のオリジナルだった。

ただどうも自分が知る言峰綺礼とは性格がちよつと違うみたいなんだよねえ。

こちらの言峰綺礼は激辛料理好きなのと八極拳と魔術が使えるというのは自分が知っている言峰綺礼と同じだが、けつして自己主張せずに命令と職務に忠実な勤勉で真面目な性格らしい。

自分が知っている言峰綺礼という人物は、人が苦勞する姿を見る為ならどんな勞力も惜しまない凝り性な性格。かと思えば着ている神父服の如く、ルールや規則を厳守し、

こちらの問いや悩みの確信を衝くように答えや助言を気まぐれに与えてくる。

正直言つて敵にもしたくないが味方にもしたくない。というのが自分の本音だったりする。

因みに人が悶絶する程の超激辛料理、特に麻婆豆腐が好きで、購買の店員の時は万感の思いを込めて終盤に入荷した激辛麻婆パンをこちらに勧めてきた。

味は普通に美味しかったけど回復量が微妙だったので菓子パン感覚で買ってたなあ。

サーヴァントのみんなには大不評で特にアーチャーとギルガメツシユは自分に使つたら契約を解除するとまで言いそうな勢いだった。というかギルガメツシユには言われた。

……まあ元々は別世界の話だ。言峰綺礼の性格の違いは今置いておこう。問題なのは言峰綺礼と言峰璃正の二人が遠坂時臣と組んでいるという事だ。

この情報を知った時はアサシンを引き抜けて本当に良かったと心の底から思ったものだ。

現地を熟知した魔術師、対人専門の達人クラスの武人、ルールを仕切る監督、宝具の群を持つ英雄、そこにこの諜報に長けた分身するアサシンが居たとあつてはまともに戦うことすら出来なかつたに違いない。

まあそんな磐石を期したからこそ、アサシンが裏切つただけだね。

結局の所アサシンと言峰は遠坂とギルガメッシュを勝たせる為の犠牲でしかない。

アサシン自身もそれは当初から理解しており、最終的には全員裏切り自らが聖杯を手にするつもりでいたが、マスターにしか願いが叶えられないと知ってこちらの誘いに応じたという訳だ。

それとギルガメッシュの判明している能力や行動についても教えてくれた。

能力については自分が知っているものしかなかった。

そして基本的にギルガメッシュは《単独行動》のスキルで好きに現世をうろついているらしい。彼らしくてつい心の中で苦笑してしまう。

次にアサシンが教えてくれた情報はキャスターとキャスターのマスターについてだった。

どうやら既にアサシンはキャスターのマスターの居場所を把握しているらしい。

なのに何故アサシンが暗殺をしないのかと問えば、自分達がキャスターを排除するとアサシンの生存がバレると言うことでマスターからの命令で手を出す事を禁じられているらしい。

ただどうやらキャスターは何故かセイバーに強い執着を持っており、今夜にでも行動を起こす可能性が高いという事だ。

最後にアサシンが自らの能力を説明しようとしたので、自分はそれはちゃんと契約し

た時でいいと断った。こちらもその時にちゃんと自分が扱う魔術について説明すると伝えると、仮面で隠れていたがなんとも不可解そうな雰囲気を出していた。

『それで、ハクノはこれからどうするので？』

『とりあえず今後の方針は現地でランサー達も交えてから決めるよ。アサシンに説明しないといけない事もあるしね』

令呪で繋がっていないので別で念話の魔術を施してアサシンと念話で会話しながら車に乗って根城の山へと向かう。

因みにアサシンが自分を呼び捨てなのは彼女とマスター契約している訳ではないから他の呼び方でと言ったらこうなった。

「……帰還かマスター」

「ただいまランサー」

山について拠点の場所に向かうと、ラムレイを背凭れに座るランサーとラムレイの胴体に寄りかかって眠る桜ちゃんの姿があった。

なんというか……尊いと言うか癒されるというか。

心が暖かくなるのを感じながら、しかし自分が彼女の本当の親である時臣を殺す可能

性を考えて、すぐに気持ち沈む。

「さて、それじゃあまずはランサーに紹介したい仲間がいる」

「ふむ。想像はつきませんが聞きましょう」

そう言つて立ち上がった彼女に合わせてこちらもアサシンに出てきて貰う。

「こうして挨拶を交わすのは初めてですねランサー。私はアサシン、貴女のマスターからの同盟の申し出を今回受けさせて貰う事にしました。貴方達が私達を裏切らない限り、以後の協力を約束しましょう」

「ふむ。このマスターは己の不利な約束であろうと違いぬお人好しだ。その上動くを決めたら大胆に動く。存分に力を振るって尽力し、私の負担を減らしてくれる事を期待している」

……なんか酷い言われようだ。自分はそんなにランサーに負担をかけただろうか？

「なるほど。そのお人好しの件とはその少女のことですか？」

あれ？ 桜ちゃんについては知らなかったのか。まあ彼女の状態を知っていたら時臣に伝えているか。

とりあえずアサシンにも桜ちゃんについての説明をすると、最後の方では仮面越しでも判るほどの呆れた雰囲気を出して軽く溜息をつかれた。

「なるほど、自分の命も危ないと言う戦争中に人助けとは。確かにお人好しですね」

「ああ、頼んだ私が言うのもなんだがな」

なんか短時間で随分と二人は仲良くなっている気がする。そしてその分こっちの心へのダメージが蓄積していく。やめて！ 白野のライフはとづくにゼロよ！

「……あくとりあえず今後の為にもアサシンにはまず訊いておかないといけない事がある」

とりあえず二人の会話が一段落したのでランサーと一緒に聞こうと思っていた質問をアサシンに尋ねる。

「なんでしようかハクノ？」

「アサシンの望みってなに？」

自分の質問にアサシンが思い出したかのような仕草をする。

「……そう言えばここまでその質問をされませんでしたね。いえ、敢えてこのタイミングまで待ったと言うことでしょうか？」

「ああ、聞くならランサーと一緒に決めていたからね。ランサーだってアサシンの口から聞きたいでしょ？」

「ええもちろん。それでアサシン、貴女の願いとは？」

アサシンはしばらく沈黙した後……他のアサシンを呼び出した。

ランサーが警戒の為に槍を出す。自分も一応魔術回路に魔力を巡らせ、とりあえずそ

れ以上の行動をしないようにランサーに視線だけ向け、今度はアサシン達へとその視線を向ける。

それを待つていたかのようにこちらが視線を向けると同時にアサシン全員が一斉に口を開いた。

「我等の願いはただ一つ。統合された完璧な人格を得ること」

……ふむ。なんとなくだが、アサシンの分身の謎が解けた気がした。

「……もしかしてアサシンって生前は多重人格者で、分身が出来るのはその多重人格がスキルか宝具になっているから？」

「おお、流石はあの慎重派の璃正殿から情報を引き出すだけのことはある」

「いかにも。我等は生前人格を切り替える事であらゆる職種の人物に成りすまし暗殺をこなしております」

「そしてついには教主『山ハサン・サツバーハの翁』の称号も得るに到ったのです」

「しかし、長い間人格を替え続けた我々はその内『本当の自分』というものを思い出せなくなってしまうのです」

「故に。我々の聖杯への望みは全ての人格を結合し、本来の己を取り戻すこと」

「それが、我々の悲願です」

それぞれのアサシンが一人一人言葉を紡いで行く。

その姿から、人格や性別は違えても彼等全員が同じ望みを持つ『一人の人間』なのだと悟り、同時に安堵と共感を覚える。

そして何よりもこの暗殺者の、大望を望む者達からしたら取るに足らない『個人的で小さな願い』を、叶えてあげたいと思ってしまった。

だから伝えよう。

「……アサシン」

「なんででしょう……」

代表してポニーテールのアサシンが答える。

「たぶん自分なら——たとえ聖杯が無くても君の願いを叶えて上げられるかもしれない」

「——っ!?!」

アサシン達が驚きその方法を尋ねようと逸る者が居たのでそれを手で制する。

「だがその為にはクリアすべき条件がある。まず一つはアサシンと自分が完全にマスターとサーヴァントとして繋がること。正確には『回路』^{パス}を繋げることだね。そして二つ目はその魔術を行う為の魔力だ」

指を二つ立ててクリアすべき問題を挙げる。

「……一つ目はマスターを殺せ、という事でよろしいので?」

「……できれば穏便に済ませたい。令呪の宿った腕を切り、その後令呪を奪ってその令呪を使ってサーヴァントがマスターの移行を受領すれば、回路も移動できるはずだ」

令呪はサーヴァントへの絶対命令権だ。サーヴァントが了承すれば回路の移動も可能だろう。これでまず一画使用するな。

「そして自分とアサシンが繋がったら、今度は令呪の魔力を使ってアサシンの精神の結合を行う」

これにどのくらい魔力を消費するかな。

「アサシン、言峰綺礼は令呪を使ったか？」

「いいえ」

となると最高で三つ手に入る。キャスターのマスターが令呪を使っていなければ場合によってはそれも奪って六つ。自分の物を含めれば九つ。

監督役から貰える令呪は……立場的に諦める方向で考えよう。

問題はどこであの言峰綺礼から令呪を奪うかだ。

「……アサシン、すまないが言峰綺礼について何か隙を狙えそうな情報を持っていないか？ アサシン自身が見ていて感じた事でもいい」

「そうですね……衛宮切嗣」

「衛宮切嗣、確かアインツベルンの護衛として参加しているってさっき教えてくれたっ

け」

「ええ。何故か言峰綺礼はセイバー陣営に所属する衛宮切嗣に異常な執着を見せています。昨晚も保護されている教会を抜け出してビル爆破を行った彼等に単独で接触し、交戦しています」

「セイバー陣営、それに衛宮切嗣……なるほど、だからあのアイリスフィールと呼ばれた女性とセイバーの繋がりが弱い訳だ」

「とどうと?」

自分の言葉にアサシンが疑問の声を上げる。

「彼の手口から考えてセイバーのマスターは間違いなく衛宮切嗣だ。あの白い髪的女性、アイリスフィールが人間ではなくホームンクルスであることを考えると、たぶん困だろう」

彼女の魂の波長は人間の物ではなかった。たぶんホームンクルスだろう。アインツベルンはホームンクルス技術が優秀だと聞いているし。

ただ……どうにも引つ掛かるんだよなあ。

彼女の魂の波長の一部……自分はそれを『どこか』で見たような気がしてならない……いや、今は言峰綺礼への対処が先だ。そして一つだけだが策が浮かんだ。

「アサシン、キャスターはセイバーに異常な執着を見せていたんだよな?」

「ええ」

「今晚キヤスターが動いた場合、言峰綺礼も動くと思うか？」

アサシンに尋ねると彼女は顎に手を当てて考え、頷いた。

「恐らく。まだ我々の裏切りには気付いていないでしょうから」

「そこを狙うしかないか。まったく、セイバー陣営とは色々あるな」

「ん？ 私はセイバーとの因縁がありますが、マスターも何かあるのですか？」

ランサーに『個人的な事なんです』と前置きしてから告げた。

「衛宮切嗣は……自分が尊敬する人物の一人なんだよ」

だからこそ知りたい。

あの『正義の味方』と同じ理想と信念を抱いているであろう彼がなぜ——恒久平和な
んで未来を聖杯に願うのかを。

「……お話終わった？」

声のした方に振り返ると、いつの間にか起きていたのか桜ちゃんがラムレイに跨り彼女
の鬘を三つ編みにしながら小首を傾げていた。

ラムレイはなんとも言えない表情をさせながらも、されるがままである。良い馬だ。^{ヤッ}

「骸骨……」

あ、やっべ。アサシンの分身解いて貰ってない。

「あ、えっとね、あの人達は……って何してんの？」

見るとアサシン達、特に男性陣が、こう、なんというか、ほっこりしていた。

「癒される」

「癒しでござる」

「ほぼ四六時中むさいおっさんの警護監視ばかりの我々に彼女はまさにオアシス」

「つーか新たなマスター片手にクール巨乳ビュートイー、片手にクール美幼女装備とか」

「爆破しろ」

「爆ぜてハクノ」

「おおおい！ お前等そんな性格だったか!？」

急にアサシン、主に男衆の性格の豹変にツツコミを入れると、一部の女性陣が呆れていたりなんか『え、この新しいマスター候補女誰し?』みたいな警戒の視線を向けてくる。

「おかしい。さっきまで真面目な空気だったのに！ 桜ちゃんがいるだけでこのゆるふわ空間——許せる！」

もしかしたら桜ちゃんは我々の陣営にとって一番重要な存在なのかもしれない。癒しの意味で。

【聖杯戦争二夜目】

冬木市郊外の私有地の森にひっそりと佇むアインツベルンが保有するアインツベルン城。

その城の一室に夕食を終えたセイバー陣営全員が集まって作戦会議を開いていた。

「アイリの報告、そして昨晚の爆破からどうやって生き残ったのかは解らないが、協会に訪れた使い魔の数からケイネスの生存が確定。更に教会での岸波白野の問答によって我々が聖杯の器を所持している事も露見した。これらの情報から今夜から数日中に最低でもキャスターとケイネス、最悪ランサーの三組の襲撃があると見て間違いないだろう」

切嗣が時臣陣営を外したのは彼の性格が理由だ。

まず御三家の一人である時臣は元々アインツベルンが聖杯を用意するのは知っていないはずなので、それを理由に攻めてくる可能性は低く、更にキャスターとケイネスの情報を知らない筈だと切嗣は思っており、攻めて来る可能性は低いと判断した。もちろん言峰綺礼は例外として。

「令呪は魅力的だがキャスターの魔術がどんなものなのか解らない以上、交戦は避ける

べき。そしてケイネスが来るのならば好都合だ。彼の性格なら間違はなく一騎打ちを挑んで来るはずだ。そこを僕が殺る。アイリはもしもの為に舞弥と一緒に城から脱出を。そしてセイバーはライダーの足止めを頼む」

「待つてくださいキリツグ。聞けばキャスターとそのマスターは無関係な人間を殺している殺人鬼、ここは他のマスター達と協力してまずはキャスターを討つべきです！」

切嗣に詰め寄り彼の作戦に異議を申し立てるセイバー。

しかし切嗣はそれを無視する。それどころか心の中では呆れと落胆の気持ちで以前より一層強くなっていた。

（ケイネスは兎も角セイバーのせい僕らは今、ランサーとキャスターの二体のサーヴァントに狙われる状況になってしまった。しかもあの言峰綺礼も昨晩の行動から完全に僕を敵として狙って来ている……こんな四面楚歌の状態だというのにこの騎士様はまだ正々堂々などと言っているのか……アーサー王を呼んだのはやはり間違いだっただのかもしれないな）

心に思っても切嗣はそれを口にしない。と言うよりも彼は端からセイバーが自分の言葉を聞き入れないと判断しているため、そもそも会話すら殆どまともに取り合わない始末だ。

セイバーはセイバーでそんな切嗣の態度にどんどん苛立ちを募らせ続けていた。

そんな二人の仲の悪さに色々と苦労しているアイリスフィールは『また始まった』とばかりに軽く溜息を吐いてセイバーの代わりに質問する。

「でも切嗣、ケイネスへの勝算はあるの？　彼はあのビル爆破を生き残った程の実力者なのよ。それと、もしもキャスターとライダーが同時に現れたらどうするの？」

「そうだね。確かにケイネスの力量を甘く見ていた。だけどねアイリ、僕はライダーを倒すよりもケイネスの方が何倍も倒しやすいと思ってるんだ。そしてその為には彼の目を僕に向け続ける必要がある。だから単独で戦う必要があるんだよ。それにキャスターとライダーが同時に現れるなら好都合だ。キャスターはセイバーにご執心だ。その場合はキャスターにライダーの相手をさせつつセイバーの宝具でいつきに二体のサーヴァントを倒す事も可能かもしれない」

セイバーが『それはあまりにも卑怯です！』と口にしようとするが、それをアイリスフィールに手で制させてしまう。

「それじゃあもう一つ、もしもランサーまでやってきたらどうするの？」

「その時は全力で逃げるさ。四つ巴で戦っても戦果なんて得られない。最悪全員が疲弊した所を更に別の陣営に狙われかねない。そういう最悪の場合を想定してアイリには侵入者とは別方向に逃げて欲しいのさ」

（確かに切嗣の言うとおり、私達の状況は厳しい。このままだとキャスターの前に私達

が包囲されて負けてしまうかもしれない)

それだけは絶対に許されない。アイリスフィールにもまた、なんとしても勝ちたい理由があるのだ。

夫である切嗣の恒久平和と言う願いと、自分と夫との間に生まれ、自分が失敗した場合の聖杯の器にされてしまう愛しい娘、イリヤスフィールの為に。

アイリスフィールはセイバーへと申し訳なさそうな表情をしながら振り返る。

「……だそうよセイバー。悪いけど私も今回は切嗣の作戦で行くべきだと思うわ。正直この作戦は貴女がどれだけライダーやキャスターを足止めできるかにかかっているの。お願いセイバー、私達を守って頂戴」

「……分かりました」

アイリスフィールの真摯な願いに、セイバーは未だ納得行かない表情をさせながらも頷き了承する。

そんな二人のやり取りを切嗣は横目に一瞥し、改めてテーブルに広げた周囲の地図を舞弥と一緒に見ながら、逃走ルートの確認を行っている最中——アイリフィールの張った結界に反応があった。

切嗣達が作戦を立てていたその最中、三組の襲撃者がアインツベルン城へと向かって森を進んでいた。

「いいかライダーよ。衛宮切嗣は私一人で戦う。貴様はその間セイバーの相手をせよ」「やる気があるのは結構だがなあ。そんなに熱くなつては足元をすくわれかねんぞ？」
トラップの一つや二つで大げさな奴よ」

昨晚の事を思い出したのかケイネスの額に青筋が浮かび、その目を強く細めてライダーを睨み付けた。

「たかがだど？ あれは私が施した中でも最高の結界だった！ だどいうのに奴はそれを同じ魔術ではなくあるう事かビルごと爆破するなどと言うおよそ魔術師として最低最悪な方法で破壊したのだ！ 同じ魔術師として私は奴を許す訳にはいかん！」

叫ぶように喋るケイネスに、ライダーはやれやれ。と呆れたように首を横に振る。

昨晚、埠頭の戦闘を終えたケイネスとライダーは寝泊りしているホテルへと戻った。そこで婚約者であり、ライダーに魔力供給を行っているソラウを交えて反省会を行っていた所にホテル全体に火災報知機のサイレンが鳴り響いた。

それを聞いたケイネスは何者かが自分達を倒す為にやって来たといち早く気付いた。

そして心配するソラウに対して自分がいかに凄惨な結界を貸しきったフロアに張り巡らせたのかを自慢気な顔で語って聞かせ優雅にワインを飲もうとした瞬間に——ホテル

ルが爆破されて倒壊した。

ケイネスは咄嗟に魔術を發動して自らの身とソラウを守る事に成功したが、その卑怯な手段と面子を潰された事に腹を立てていた。

因みに切嗣が最初にケイネスを狙ったのはライダーの戦車が空を飛べて厄介なのと、生き残った中では一番倒しやすそうだった為である。

そんなケイネス達からいくらか離れた場所を、まるで半漁人の様な顔をしたローブを纏った男、キャスターが瘴気の香を纏わせ、手に魔道書を抱きながら『子供達』と共に森を進んでいた。

「ああもうすぐです我が聖処女ジャンヌ。貴女様の忠臣であるこのジルメが、必ずや憎くき神の呪縛から貴女を解き放つて見せましようぞ！」

そしてキャスター、ライダーが侵入したルートとは別の反対側から森に進入しようとする一人の男、言峰綺礼が静かにしかし素早く駆けていた。

（アサシンの情報では既にライダーとキャスターは森に進入を開始している。私の予測が正しければ衛宮切嗣は間違いなく城でケイネスを迎え撃つはず。昨晚相手した女程度ならば問題は無い。このまま城を目指す）

「アサシン、衛宮切嗣の位置情報は常に教える」

「はっ。お任せくださいマスター」

綺礼の速度に合わせて走りながら現れたアサシンが恭しく頭を下げ、消える。

今、アインツベルン城を舞台に聖杯戦争の第二幕が開こうとしていた。

そして多くの陣営が注目する第二幕その舞台裏でもまた、一つの陣営が動いていた。

【聖杯戦争二戦目の裏で】

「さて、ハニカ」

日が落ちるのを待ってアサシンの報告にあつた用水路に到着した自分とランサーは、車を通れるほどの巨大な出入り口から進入する。

空間から片手で持てる大きさの『遠見の水晶玉』を取り出して用水路の地図が映し出される。

しばらく地図通りに進んでいると、地図上部に魔力体の反応が映し出される。

「流石に護衛は残すか。倒している間に逃げられても厄介だな……ランサー、確認だけでも自分がラムレイに乗つてもあの突撃はできる？」

「難しいでしょう。あれは我が聖槍の力をラムレイと私に纏わせる事で行う技です。そして聖槍の枷を外す度に威力と速度が増します。枷を一つ外しただけでも人間のマスターには耐えられないでしょう。たぶん肉体が爆発します」

——つまり開放された瞬間にレンジでチンされた卵の様に爆発四散する訳ですね分かります。かりたくないです。

自分が内側から爆発四散する姿を想像してしまつて嫌な気分になりながら、今度はア

サシンに尋ねる。

「アサシン、君の中で魅了スキルを持っているハサンはいる？」

「ええ。分離していませんので、でも呼び出せます」

アサシンはそれぞれの人格が専用でスキルを持っている。

重複もしているらしいが少なくとも分裂できる数の約半分近い数のスキルを有しているらしい。やっぱこのサーヴァント強いよ。

まあスキルを使うには人格の切り替えか、宝具で分裂する必要があるらしいので、もし使いたいスキルを持ったハサンが分裂してどこかに行っていたら使えないんだだけだね。

「となると……最善はランサーとラムレイによる突撃で護衛を蹴散らし、そこを一気に駆け抜けてマスターらしき人物に魅了の魔術を掛けることかな。魅了が効かなくてもアサシンならそのまま物理的に拘束も可能だろうし、二人はこの作戦、どうかな？」

「問題ありません」

「同じく」

「じゃあ準備をしてから行こうか」

まず《Code: 遠見》Far Visionで暗視と視力強化の効果を得て、次に《Code: move speed速度強化》で速度を上げる。最後に空間から『破邪刀』を取り出す。

物質化制御で作った礼装『破邪刀』。破邪の力を持った切れ味の良い太刀。

性能としては破邪の効果のお陰か死徒と呼ばれるこの世界の吸血鬼にも通用するし、切れ味も逸話に違わぬもので弱いゾンビやグール、武装していない人間なら両断できる切れ味がある。

というか礼装の解説読んだ時にまさかと思っただけど……外見はまんま童子切なんだよねえこれ。

『童子切安綱』

酒呑童子の首を刎ねた事で有名な天下五剣と呼ばれる名刀の一つ。

逸話では名人が試し斬りしたときに一振りで六人の罪人の遺体を一刀両断したらしい。

それと意外と狐とのエピソードも多い刀だ。狐つきを祓ったり、天照大神の神託があつたという逸話から狐が守護としてついているというエピソードもある。

……まあ流石に本物ではないだろう。凝り性のムーンセルが用意したレプリカに違いない。

「よし、頼むランサー」

「では。行くぞラムレイ、風の如く駆けよ！」

二人は以前のセイバー戦のように紫電を纏わせながら用水路を駆け抜けて行く。

そのあとをアサシンが追走し、一番遅い自分が腰に破邪刀を携えながら続く。

前方ではランサーの蹂躪が始まったのか、紫色の光にまじって空中を肉片や血飛沫が舞っている。

二人はどんどん先行し、置いていかれる形となるが……敵は全て前方の二人が片付けてくれるので問題は無いだろう。

「つとー！」

咄嗟に嫌な予感を感じてそこに向かって破邪刀を横薙ぎに走らせる。

降ってきたのはなんか歯のついたイソギンチャクみたいな触手の肉片だった。切断された触手は切り口から青白い炎が発火してそのまま焼滅される。

……生きた肉片、いや偶々消滅し切る前にこっちに飛んで来たのか。気を付けよう。

とりあえずその後は飛んで来た肉片を切り伏せながら突き進む。

『ランサー、次の道を右だ』

『了解』

魔力の気配が強い方へとランサーを誘導する。二人から少し遅れる形で水路を進んでいると、不意にランサーから念話が届く。

『……止まれマスター』

『何かあったのか？』

周囲を警戒しながら言われた通りに足を止めてランサーに状況の説明を求める。

『アサシンが先ほどマスターと思しき男を魅了の魔術で操ることに成功した。そちらに向かうから、こちらには来るな』

『……何があつた』

一向に状況の説明をしないランサーに何かがあつたと判断して移動を再開させる。そしてすぐに僅かに明かりが灯っている場所が見えてきた。

「ランサー、アサシンだいじょう——」

水路の大きく開けた場所に到着した。そこで——地獄を見た。

「……なんだよこれ」

そこに居たのは紛れも無く子供達だった。

だが——『人の形』をしていなかった。

ある者は椅子、ある者はテーブル、酷い者では内臓を剥き出しにされまるで楽器や照明器具の様な形で『子供達が呻いていた』。

そう——あんな曲がってはいけない場所が曲がり、出てはいけない物が出ているにも関わらず。

彼等は……『生かされていた』。

「だから来るなど言つたのです」

いつの間にか険しい表情をさせたランサーが傍に立っていた。

「白野、こちらがキャスターのマスターです」

アサシンが連れてきたのは染めた短髪の髪に紫のジャケットにジーンズ、腕や耳に装飾品を見に付けた何処にでもいそうな今時の青年だった。

その眼は魅了にかかっている為か虚ろで、先ほどまで『この光景』を作り出していたのか、衣服や手には血が付着していた。

「……時間が無い。まず、お前はキャスターのマスターか？」

「マスター？ キャスター？」

問い返すような呟きを聞いて相手が聖杯戦争について何も知らない事を理解して質問の内容を変える。

「この子供を攫ってこんな事をしたのはお前の意思か？」

「そうだよ」

目は虚ろだが、嬉しそうな笑みを浮かべる青年になんとも言えない感情を抱く。できればサーヴァントに強要されていて欲しかった。

「そうか……お前はこの光景をどう思う？」

「超COOLだろ？」

……ダメだな。

彼は自信有り気な表情で逆にこちらに問いかける。その行動と表情から、彼にとってこの行いは『当然の物』であり、罪悪感の対象にはならないのだろう。

エリザ、君と解り合えたのは本当に奇跡だったのだと、改めて思うよ。

かつて何度も戦い、そして一度だけ共闘した『吸血鬼』のモデルの一人、殺人姫エリザバート・バートリ。

もしも彼女が残酷な殺人鬼のままだったなら……自分は間違はなく彼女と共闘することは無かつただろう。

一度だけ深呼吸して心を落ち着かせる。

エリザのように話し合って理解し合うのは時間的に無理だ。記憶の操作……ダメだな。これも時間が無い。

彼の左手に令呪を確認する。そして救う命を——決めた。

一番近くに貼り付けにされた子供に触れて《Code：analyze解析》で子供に施されてる術式を解析する。

……なるほど、一定以上の苦痛と恐怖に達すると強制的に肉体や精神を元の状態に治癒する拷問系の術式か。これなら、ここにいる全員を治せるかもしれない。

浄眼を完全に開眼して子供達の魂と精神の状態を把握する。

どの子も壊れかけているが、その最後の一线を呪いが越えさえずに元通りに再構築し

ている。どうやら子供達の苦痛と悲鳴を魔力に変換しているみたいだ。なんとも酷く悪趣味なやり方だ。

「アサシン、分裂して子供達を連れてきてくれ。まだこの子達は救える」

「お言葉ですが、すぐにでもキャスターのマスターを殺すべきでは？」

アサシンの忠告に自分は首を横に振る。

「いま彼を殺してキャスターが死ねばこの子供達を活かしている呪いも解けてしまう。我俣を言っているのは分かってる。でもごめん、面倒をかけてすまないが頼む」

自分は立ち上がってランサーとアサシンに頭を下げる。

しばしの無言のあと、二人から軽い溜息が漏れる。

「分かりましたから頭を上げなさい。アサシン、私が周囲を警戒します」

「了解。では急ぎましょう。魅了の効果もそう長くは続きませんから」

頭を上げるとそこには僅かに苦笑を浮かべる二人が居て、自分が指示する前にそれぞれ動きだす。

「ありがとう二人とも。それじゃあこつちも準備をしないと」

アサシンが数人に分裂して子供達を慎重に運んで一箇所に集め、ランサーが周りを警戒している間にキャスターのマスターに近付き、令呪を持つ手を握る。

「キャスターとの回路はそのままに、令呪三画だけをこちらに譲渡しろ」

「はいはい」

キャスターのマスターの了承を得たお陰が、簡単に令呪の魔力を三画分奪うことに成功した。

そもそも令呪の画数はあくまで命令権を帯びた魔石のようなもので、それだけを奪うならそう大した問題ではない。

逆にサーヴァントとの繋がりである令呪本体や回路そのものを移植するとなると時間が必要だが、キャスターを仲間にするつもりはないから今は必要ない。

「連れてきましたよ白野」

アサシンの声に目の前に並べられた子供達を見てその悲惨な姿に憤りを感じながら近付き、懐から自分の魔力を完全に回復できる最後の魔石を取り出す。

地面に手を付く。

《Code: ^{recovery}完全治癒》

コードの使用範囲を広げ、指定範囲内の子供全てを選択する。

すると切り刻まれた子供達の身体が、ひび割れた魂が、消えかけた精神が、全て元通りになる。

やはり既存の魔力だけじゃ足りなかったか。

魔石の魔力が全て無くなり、身体に残っていた魔力も半分近く持っていかれた。

だがこれだけではダメだ。

この子達が自我を持って目覚めた時、きつと今回の記憶が蘇り精神に異常を来すだろう。

「《Code：忘却》——ここ一週間程の記憶を忘れさせる」

子供達の魂と精神に強制的に干渉して記憶を文字通り削る。

この子達がいっつから捕まっているのか分からない為、少々多めに削ってしまうが仕方ないだろう。

忘却の魔術は相手が一般人なら抵抗が無い為そこまで魔力を使わない。

子供達はそのまま忘却の魔術の効果によって眠りに付く。無理に起こさなければ目覚めるのに丸一日程かかるだろう。その間に警察を呼ぼう。

「これでこの子達は大丈夫だ。あとはそっちだな」

立ち上がってキャスターのマスターへと向かい——一振りでその首を刎ねる。

頭と身体が崩れ落ちる音が響き、少しして彼の魂の波長が消えたのを確認して浄眼を解除する。

破邪刀についた血を振って払ってから鞆に仕舞う。

「……行こう。これでキャスターは脱落だ」

「ええ」

その場で犠牲になった子供達とキャスターのマスターに黙祷し、ランサーとアサシンを連れて来た道を引き返そうとしたその時、目の前にリターンクリスタルを使用した時の光を伴ってアサシンとは別のハサンが現れる。

その腕には令呪の宿った左手が抱えられていた。

「任務達成。言峰綺礼の令呪にございます」

「……まさか立て続けに手に入るなんて。そう言えば監督役が身内だったな。予備令呪を貰ってアサシンに使われたらヤバイな。すぐになでも移植を始めよう」

急いで左手首を手取る。

やることは変わらないが今回は急ぐ必要がある。

なにせアサシンの所有権はいまだ言峰綺礼の物なのだ。更に今回は魔力だけではダメだ。『アサシンの令呪として』奪う必要がる。

「アサシン、反対の掌を握ってくれ。回路を繋ぐからアサシンは出来れば抵抗しないでくれ」

「分かりました」

アサシンに右手を差し出して握ってもらう。

アサシンとの回路を形成——形成完了——令呪摘出開始——読み込み開始——

令呪一画分の定着——完了。

「アサシンへ令呪を持って命じる。言峰との回路を完全に断ち、自分を新たな主と認めよ」

「はい。我が新たなマスターよ」

アサシンが裏切りの宣言をすると同時に言峰との回路が強制的に切れ、左手に残っていた令呪が二つともこちらの右手に移植が完了する。

そしてアサシンとの契約が完了した瞬間に身体から一気に力が抜ける。

ぐっ。聖杯のバックアップがあるとは言え、流石にサーヴアント二体じゃ魔力がかなり奪われる。今のままじゃまともに戦えない。

だがそれでも、令呪はこれで合計で八つ。アサシンの願いを叶えるには十分な数のはずだ。

「アサシンの裏切り、そしてキャスター消滅が自分達の仕業だと他の陣営も気付くだろう。やはり監督役からの令呪は諦めるしかなさそうだ。外に出て一番近い公衆電話から警察に連絡したら一度山に戻ろう。そして急ぎアサシンの望みを叶える。それが終わり次第拠点を移動しよう」

「ではマスター、ラムレイに乗ってください」

「ありがとうランサー」

新しい拠点の問題は既に解決している。今は時間との勝負だ。重くダルい身体を気

遣ってくれたランサーの言葉に甘えてラムレイに跨り、下水路を後にした。

【聖杯戦争二日目、終戦】

白野がキャスターのマスターを倒す数分前にそれは起きていた。

深い森の中で剣撃と蹄の音が響く。

その中心に居るのは青い衣服に銀の鎧を纏ったセイバーと紅のマントを羽織ったライダーが『ゴルディアスホイール神威の車輪』に乗って疾走していた。

「たく埒があかん」

「無駄口を叩く前に一体でも多く轢き——来てはいけません！」

そんな彼女達を包囲するように数本の触手を蠢かす蛸の様な海魔。そこに、場違いな小さな少女が虚ろな目でやって来る。

その少女に向かってセイバーが悲痛な表情で静止を呼びかける。

——が。

「ぐびやっおぼおおっ！」

少女の苦痛な悲鳴と共に、その幼い身体を内から食い破るかのごとく多数の海魔が現れてセイバー達へと襲い掛かる。

「つつ出て来いキャスター——！！」

少女の最後に見せた苦悶の表情、そして幼い子供に施した醜悪な呪いに、セイバーが怒りの声を上げる。

それも仕方が無い。何故なら彼等が戦っている海魔は全て子供を生贄として召喚されている物のだから。

「趣味が悪いにも程があるな。本体を叩ければ良いのだが。ううむ、こんな時にお互い魔術師が居らんとは」

ライダーは神威の車輪の上で剣を振り回し巧みに戦車を操縦しながら忌々しげに増える海魔を睨む。セイバーもまた怒りに顔を歪めながらライダーの戦車に乗った状態で剣を振り続ける。

そんなセイバーとライダーの様子をキャスターはある程度離れた場所で水晶玉を通して覗いていた。

「素晴らしい。我が麗しのジャンヌ。怒りに歪めたその顔もまた美しい。しかしなんですかあの無礼で不遜な男は。我が麗しのジャンヌに対してあのように親し気に、しかも狭い戦車に同乗などと恐れ多い行為を！ お陰で予定が狂ってしまった！」

元々キャスターは自分から姿を見せて目の前で子供達全員を一斉に海魔にしてセイバーを捕らえるつもりだった。

しかしキャスターとの邂逅よりも早くライダーがセイバーに接触して戦闘が始まっ

てしまった。

運良く二人にバレずにそれを察知したキャスターは当初の予定を変更して姿を隠し、海魔を使つてなんとか二人を離そうとしていたが、そこは流石の騎士王と征服王、異変に気付いた瞬間に共闘姿勢をとつてお互いに背中を預けるように海魔達を屠つて行く。

「やはり、これは私自ら赴き制裁を加えなくては——ん!？」

不意に——キャスターの身体に異変が起きた。今まであつた繋がりと魔力の流れが途絶えたのだ。

「まさか龍之介の身に何か!」

「まずい! 急いで魔力を供給しなければ消滅してしまう!」

キャスターはまだ生贄となつていない残りの子供を引き戻し、彼等を魔力の糧にしようと動き始める。

だがそんな彼の焦りという隙を、暗殺者が見逃すはずは無かつた。

キャスターが水晶玉から視線を逸らしたその瞬間——彼に向かって黒いクナイに似た形状の暗器が数本飛来し、本を持つ方の彼の手に突き刺さる。

「ぐあああつ!?! っ、これは!?!」

キャスターは痛みで手から本を落としてしまい、慌ててもう片方の手で落ちた魔導書を拾おうとするが、更に飛来した鎖鎌の刃が魔導書に深く突き刺さると、そのまままる

で釣りのように引き上げられて遠くへと放り投げられてしまう。

「キャスターの無力化、完了」

「油断するな消滅するまで監視は続行だ」

現れたのは二体のアサシン。アサシン達は木の上からキャスターを一度見下ろしたあと、霊体化し、更に気配遮断で姿と気配を消す。

「お、おのれアサシン！ 暗殺者風情がこの私の、私の崇高な使命の邪魔おおおおお！！」

キャスターは怒り、ただでさえ巨大に見開いた目を更に広げて血走らせる。

そしてそれが、キャスターの最後の言葉だった。

魔力供給が断たれた以上、生粋の魔術師ではない上に戦闘継続や単独行動のスキルを有していない彼に現界の為の時間はそう長くは与えられていない。

結果……キャスターは最後までアサシンを罵りながら呆気なく消滅して行った。

キャスター消滅と同時にセイバー達へと群がっていた海魔もまた消滅する。その事態に、セイバーとライダーは同時に同じ結論に到る。

「うむ。どうやら何者かがキャスター、もしくはそのマスターを殺したようだな」

「ええ。私の手で裁けなかったのは残念ですが致し方ありません。さて、これで心置きなく戦えますね征服王」

そう言つてセイバーは戦車から飛び降り、剣をライダーへと向ける。

「おおおお威勢が良い。では余も今度は本気で戯れるとしようか」

セイバーのその姿勢に答えるように、ライダーは不敵な笑みを浮かべて神威の車輪の手綱を強く握る。

二体のサーヴァントがそれぞれの主の命に従い改めて戦闘へと移った。

セイバーとライダーが激突しているその時、別の場所でも戦いは起きていた。

その一つが最後の侵入者とその人物の正体に気付き、切嗣の為に迎撃に向かったアイリスフィールと舞弥だった。

森に潜む二人の前に倒すべき対象、言峰綺礼が現れる。一度彼と戦い彼の戦闘能力に圧倒された舞弥はアイリスフィールに決して近付かないように忠告し、自らも森の闇隠れながらマシンガン、キャリコM950Aを乱射させる戦法で常に姿を隠して行動する。

飛来する弾丸を前に綺礼は瞬時に体機能を強化し、射線から逃れながら懐から教会の代行者が使用する武器、黒鍵の柄を左右合わせて四本取り出して指の間に挟み、魔力を通して刀身を生み出して弾丸を迎撃して行く。

(あれが人間って、嘘でしょ)

アイリスフィールは綺礼の動きに驚嘆しながらも、袖から貴重な鉾石で作られた針金に魔力を通し、鷹のような猛禽類の使い魔を二体作り上げて放つ。

舞弥が銃で綺礼を牽制し、アイリスフィールがその硬く鋭い針金を持って拘束、そのまま断ち切る。と言うのが二人の作戦だった。

銃弾の発射地点に向けて綺礼が持っていた黒鍵を放つ。が、黒鍵は対象に当たらず、別方向からまた銃弾の雨が放たれる。

(幻覚の魔術で身を隠しているか)

放たれ続ける銃弾の雨を迎撃しながら状況を分析する綺礼の元に、アイリスフィールが生み出した針金の使い魔が空から襲い掛かる。

綺礼は先ほどと同じように黒鍵を放つ事で弾丸の弾幕を一時的に止め、その瞬間を狙って強化されたその鋼のごとき左手の拳を使い魔に放ち破壊を試みる。

(今！)

綺礼の拳が鷹を殴った瞬間、一体目の鷹が千切れ飛ぶ。その瞬間、アイリスフィールの意思を受け取り、もう一体の鷹の針金が解け、そのまま綺礼の左腕に巻き付き、更に右手へも伸びて巻き付くと、最後に勢い良く引き絞られて両の手が手枷の様に拘束される。

「っ!？」

アイリスフィールはそのまま綺礼の腕を断ち切ろうとするが、出来なかつた。

(なんて硬い!?! ダメ、せめて拘束しないと!)

アイリスフィールはすぐに目的を変更して針金を動かして無理矢理綺礼を傍の木へと動かし、腕に巻きつけていた針金を伸ばして木の幹へと巻き付ける。結果、腕を上げるような形で綺礼は拘束される。

「舞弥さん!」

自分では彼の腕を断てないと判断したアイリスフィールが潜伏している場所がバレるのを覚悟で舞弥へと叫ぶ。

舞弥もその意味を理解し、銃では分が悪いと判断して腰から分厚い刃渡りのナイフを取り出し、言峰綺礼の頭部目掛けて投擲しようとその姿を現したその時——それは起こつた。

「なっ!?!」

「えっ!?!」

「ぐっ!?!」

突如針金によって拘束された綺礼の左の手首目掛けて円形の暗器、チャクラムが投擲され、彼の手首が切断され、そのまま木の幹に深々と突き刺さる。

そして何処からともなく放たれた鞭が落下した左手首に巻きつき、いつの間にか居たアサシンによって回収される。

「裏切るかアサシン！」

綺礼は珍しくその表情を歪めて叫ぶ。

「もとより我々を使い潰す算段だったのだ、自業自得だ。ではな元マスターよ」

令呪の宿った綺礼の左手首を奪ったアサシンは新たに現れた別のアサシンから白野に事前に手渡されていた転移用の魔石を受け取ると、教えられていた詠唱を唱える。

「《teleport 転 移》」

鞭を持ったアサシンがその場から姿を消すと同時に傍に居た別のアサシンも霊体化して消える。

それを見届けた綺礼はアサシンが居た場所を一度だけ睨むがすぐに左手が切断された分緩んだ針金をその場で引き千切り、撤退する。

「ま、待ちなさい！」

「マダム追つてはダメです！ それよりここは一度城に戻りましょう。ここではアサシンの良い的ですよ」

綺礼を追おうとするアイリスフィールを舞弥が諫める。

アイリスフィールはしばし迷うも、確かにアサシンが言峰綺礼を裏切った以上、どう

動くか分からない為、悔しそうに唇を噛みながら頷き、二人は来た道を戻る。
その途中で城から大きな爆発音が響き渡った。

セイバーとアイリスフィールが戦っていた頃、切嗣もまたアインツベルン城でケイネスと戦っていた。

彼は得意の現代兵器を使ったトラップを用いてケイネスを迎撃する。

しかしケイネスはそのことごとくを水銀を使って作り出したお手製の魔術礼装、『ヴォールメン・ハイドラグラム月 霊 髓 液』を使役して粉碎して見せた。

液体であるが故にあらゆる形状に変化可能で石壁程度なら簡単に砕き、切り裂く攻撃力を持ち、更には指定した人物を瞬時に護る自動防御や熱や音、自動索敵までこなす。

そんな月霊髓液に対して切嗣は自らの体内の時間を加減速させるオリジナル魔術『固有時制御』を駆使し、加速して攻撃を避け、減速によって熱や音での感知を行っている。月霊髓液の索敵をかわし、なんとか凌ぎながらケイネスと月霊髓液を観察し続けた結果、月霊髓液の弱点を見抜く。

(そろそろだな)

切嗣は懐から自分用にカスタムした銃、コンテナダーを取り出してそこに口径の大き

い弾丸を込め、まずは片手に持ったキャリコを発砲する。

「無駄だ」

余裕の笑みを浮かべながらケイネスの周りを月霊髄液が水銀の壁で覆う。この方法ですつとケイネスは切嗣が撃ち続ける弾丸を弾いていた。それこそが、切嗣の罠とも知らずに。

月霊髄液が防御体制に入った瞬間に切嗣はキャリコでの発砲を止めてもう片方に持っていたコンテンドーを構え、自動防御が解けかけた瞬間に発砲する。

「ぐあっ!？」

コンテンドーから放たれた弾丸がケイネスの左肩に命中する。

「ふっ」

左肩を抑えながら自身を睨むケイネスに対して、切嗣はケイネスを挑発する為に判り易く嘲笑を浮かべてから、その場を走り去る。

（やられた。月霊髄液の自動防御は一度解くと再度の防御を命じても最初の時よりも多少の時間差が出てしまう。そこに気付いたのは褒めてやろう。だが、ならば次はより防御、そして同時に攻撃に特化した形にするだけのこと!）

「この痛み、何倍にもして返してくれる!　すぐには殺さん。肉体を端から削り痛みと苦痛を与え、心と肉体が死ぬ前に治癒し、そしてまた削ってくれる!」

ケイネスは切嗣に聞こえるように大声で叫びながら月霊髓液を伴って後を追う。

自動索敵で切嗣の後を追う月霊髓液にケイネスが付いて行くと、明かりが消え、外からの月明かりだけが差し込む廊下へと到達する。

(……居るな……いや、誘い込まれたか。機会を伺っていると見える)

切嗣を追う内に冷静さを取り戻したケイネスは、先ほどの切嗣の行動からまた同じ攻撃を仕掛けてくると判断する。

(もつとも、それこそが私の狙い。あの銃、どうやら一発しか撃てないと見た。奴が姿を現し発砲した弾丸を弾いたあと、そのまま奴目掛けて攻撃する！)

月霊髓液は三百六十度全てを守る事が出来る。ケイネスからすれば全身を覆うように守りさえすれば例え背後から奇襲されても問題は無いと判断した。

ケイネスは最適な動きを頭の中で描き、月霊髓液へと送ってすぐに動けるようになる。そして切嗣の狙いに気付かぬ振りをして進む。

そんなケイネスの背後の通路の一室に潜んでいた切嗣は彼の様子を伺い、頃合だろうと飛び出し、キャリコとコンテNDERを構え、先程と同じようにキャリコから発砲する。

(狙い通り！)

それは奇しくも二人同時に思った言葉だった。

迫る弾丸にケイネスは月霊髄液の防御形態を通常の壁から棘のような無数の杭として防ぐ。

攻撃を防がれた切嗣は構わずにコンテナダーを発砲する。

「馬鹿め！ やはりそう来たか！」

ケイネスの勝利を確信した笑みと叫びに応えるように、月霊髄液が弾に触れた瞬間、杭の壁が一気に収束して弾その物を閉じ込める。

あとは残った杭による串刺しでケイネスが勝つ——はずであった。

「あああがががあああっあぐうううあうあうあうああああああ!？」

突然ケイネスの全身を高熱と激痛が襲う。血管や神経が皮膚に映るほど激しく動き、鼻や口から血が噴出する。

「あああがががあああああっ——」

内からの熱と痛みに喉を掻き巻くような動作を行いながら、狂ったように踊っていたケイネスだったが、ついには糸の切れた人形の様に、ただの水銀の液体へと戻った月霊髄液の水溜りへと倒れ付す。

（令呪が消えていない。ちっ。殺し切れなかったか）

ケイネスの左手の令呪が健在な事から、彼がただ気絶しただけだと判り、切嗣が確實

に止めを刺そうとキヤリコを構えた瞬間——窓からの光が遮られた。

危険を察知した切嗣は咄嗟にその場から大きく後ろに飛び退く。

「ブルオオオオ！」

「これは?！」

現れたのはライダーの愛馬ブケファアラスだった。

ライダーはケイネスと別れた後、己の愛馬を呼び出して常にケイネスを監視させていたのだ。そして危なくなれば救助するように命を出していた。

ブケファアラスは主の命を守る為にケイネスと切嗣の前に立ちはだかると、すぐに倒れたケイネスの襟を噛み付いて持ち上げようとする。

「くっっ！」

切嗣はすぐにキヤリコを構え直して発砲する。迫る弾丸——それを前にブケファアラスが取った行動は——不動。

自らの身体に降り注ぐ弾丸。しかし馬とは言えブケファアラスもまたライダーの武装の一つ。なんら魔術強化もされていない弾丸では傷を負う事は無く。ブケファアラスはケイネスを連れてその場からまた空へと向けて駆け出して行った。

「——っ」

切嗣は好機にも関わらずケイネスを仕留め損なつた事への苛立ちから顔を顰める。

「……………ふう。まあいい。起源弾をくらつた以上、もうケイネスはリタイアだ」

『起源弾』

衛宮切嗣の切り札にして魔術師殺しに特化した必殺の弾丸。

この弾丸は切嗣の起源である『切断』と『結合』を弾丸が触れた相手に及ぼすものである。

一般人にこれを放てばその部分は破壊されるもすぐに結合して傷跡が残つたようになり、その部分の機能が『切断』されるだけに留まる。

しかしこれが魔術師相手だと最悪な凶弾へと進化する。

この切断と結合の効果は魔術回路にも及ぶ。

その為魔力が通っている状態でこの弾丸に触れると魔術回路が切断され、回路が出鱈目に結合されるのだ。

出鱈目に繋がれた回路を魔力が通ることで内側で暴走、その威力は回路を流れていた魔力量に比例して上がり、身の内から魔術回路、神経、血管を破壊して行く。

切嗣の恐ろしい所は使用する弾丸を威力の高い物にすることで、物理的にも高い殺傷能力を持たせ、相手の危機感を煽っている所だろう。故に、魔術師は皆、今回のケイネスのように魔力を大量に使用して防壁を張るしか身を護る術がない。と言う訳だ。

切嗣は思考を切り替え、今後の予定を考えながらその場を離れる。

そして数十分後。セイバー、アイリスフィールと合流し、アイリスフィールから伝えられたアサシンの裏切りとセイバーから伝えられたキャスター消滅の情報に、今後の予定を大幅に修正するべきだと判断した彼は、二人に城で待機を命じてすぐに舞弥と共に新たな拠点を獲得する為に街へと向かう事になった。

【新・百の貌のアサシン】

新しく令呪を奪いアサシンをサーヴァントにした所で拠点に戻ると同時にすぐにアサシンの精神の結合を開始する。

「ランサーは周りを警戒。最悪自分達を連れて逃げるくらいの覚悟をしておいてくれ。誰が襲いに来るか分からないからね」

「了解したマスター」

ランサーがラムレイに跨ったまま警戒してくれている間に、アサシンへと向き直る。

「さてまずアサシンに説明しよう。人格の結合に関しては令呪を命じる自分の『考え』が反映されると思う。その仮定で説明するけど、自分自身を認めるには記憶と経験が必要だと考えている」

「記憶と経験、ですか」

「うん。全ての記憶が一つになれば己の辿った足跡が分かるし、経験を共有できればたとえ自分の記憶ではなくても受け入れられるはずだ」

そもそも自分がそういう存在だ。

男としての岸波白野の記憶と経験。

女としての岸波白野の記憶と経験。

それが合わさっているのが自分だ。肉体の性別で若干性格や思考の方向性が変わるが、俺だろうが私だろうが岸波白野自分は岸波白野自分だ。

「なるほど。そういう考えなら確かに理解できます」

「さて、最後に確認するけど。アサシン、もしかしたら人格の結合をしたら君は君でなくなるかもしれないし消滅するかもしれない。それでも……いいかい？」

「覚悟は疾うに」

「……分かった。じゃあアサシン、令呪を使った後に精神を安定させるコードキャストを使うから右手を握っておいてくれ」

アサシンと手を繋ぎ、緊張を解す為に一度深呼吸してから、令呪を使う。

「ではアサシン、令呪をもつて命じる。全ての人格の記憶と経験を共有し一つに結合せよ」

令呪を一つ失うと同時に目の前のアサシンが蹲る。すると何処からともなく黒い霧の様な塊がやって来てアサシンに吸収されて行く。

あれはもしかして監視に出していたハサン達か？

次々とやって来る黒い霧が全てアサシンに吸い込まれるとアサシン自身も黒い霧に包まれる。だがまだ右手の感触は残っている。

今現在ののアサシンの人格は全てここにある。これならいけるか。

「さて……自分も出来る限り手助けしないとな」

感觸の残る右手とアサシンとの回路を強く意識し、あるコードを唱える。

「EX code: 万色悠滞」
イクスコード ばんしよくゆうたい

——意識が跳ぶする。
ダイブ

次に立っていたのはノイズまみれの世界。そこに僅かに映るのは砂の地面に茜色の空。

「ぐっ!？」

——次に襲い掛かってきたのはアサシン達の情報。

アサシン達の歴史。

アサシン達の感情。

アサシン達の思想。

アサシン達の技術。

アサシン達の三位一体の構成。

彼等のあらゆる情報がこちらの状況なんてお構い無しに自分の中へと殺到し、こちらの精神と魂に容赦無い痛みと苦痛を与えてくる。

これが今アサシンを襲っているものか。

『万色悠滞』

かつて殺生院キアラが作り出した対象の電脳体に入らし、交信と感応から相手の魂と精神を自在に読み取るメンタルケアの為に作られたハッキングコード。

相手の全てを受け入れるこのコードキャストの恐ろしい所は意志の弱い者はその一体感による多幸福感と安心感に飲まれて現実世界に戻らなくなってしまふほどであり、魂と精神を掌握されるということは電脳体を好きな姿形、更には性格まで書き換えられてしまふという事だ。

以前、自分はそれで彼女の姿をした別人が殺され消滅する姿を見て、彼女が死んだと錯覚させられた。

まあ彼女についてはいいだろう。

なぜわざわざこのコードキャストを使ったのかといえば、相手の魂に入った方が、相手の精神状態を把握できるからだ。

体を動かし、両手を地面に付ける。

「Code：五停心観術式」

『五停心観術式』

自分はSGを抜き取る事にしか使っていなかつたが、これも万色悠滞と同じで元々はメンタルケアの為のコードキャストだ。

乱れたアサシンの精神を少しでも安定させる。

『マス……ター……なぜ……私の……?』

よし、少しは安定したか。

ノイズが少しだけ収まり、アサシンがこちらの存在に気付いた。

「君の内側から君の精神を安定させる為さ」

襲い掛かる痛み能耐えながら脳をフル回転させてアサシンの『乱れた精神情報』を逐一特定して安定化させてゆく。

そして今も外で戦っているアサシンを少しでも支える為に彼女へ声を掛け続ける。「大丈夫だアサシン。君の結合が上手く行くまで、ここで支えてみせる」

だから――。

「恐れず受け入れるんだ。自分自身を」



辛そうに汗を流し、少し顔を歪めながらも、白野は笑い、言葉を掛け続ける。

アサシンはそんな彼に感謝の念を抱きながら、自分自身の事に集中する。

多くの記憶が未来から順に流れ込む。

多くの経験が未来から順に紡がれる。

そして——苦痛と苦悩の果てに、最古の記憶がアサシンの脳裏に蘇る。

——その時代に『■■■』は生きていた。

■■■が生まれ育った次代は酷い時代であり、■■■はその世界を生き抜く為に『演じ』るようになる。

いつしかそれは『演技』を超えて『日常』となり、気付けば■■■は呼吸をするように様々な人格を操る様になる。

時は流れ——■■■は暗殺教団へと身を寄せていた。

そこでも■■■の才は発揮される。

あらゆる人格を使いこなし、それに合ったあらゆる職種の技術を使いこなす。

■■■はまさに『あらゆる事を器用にこなす天才』だった。

そして教団の長を決める催しで同僚である女性を降し、■■■が新たな教祖——ハサン・サツバーハの称号を得る。

——ここからが■■■の欠落の始まりであった。

教祖となった■■■は常に『教祖』である自分という人格を維持し続けた。

——いつしか■■■としての人格に戻ることは無く……■■■はただのハサン・サツバーハとなっていた。

それは死の間際においても変わらない。

無様に死を晒すことを許されない立場の■■■は、結局最期までハサンとして死んで行つた。

■■■。

それがアサシン達が捜し求めた最期のピース。精神と魂の奥底で、ずっと眠っていた原初の人格の記憶と経験。

(ヨウヤク——終ワル)

『80体』もの記憶と経験の結合。それによつてもはや目も耳も、声すら出さず言語すらまともに思考出来ず、肉体の輪郭すら黒い霧になつていたアサシン。

そんな彼女が唯一感じるのは己の内側から送られてくる熱をおびた音のみ。

『大丈夫だよアサシン』

『もう少しだ。頑張ろう』

(ナンド——マスターノ——言葉ニ——救ワレタ——ダロウカ)

もはやアサシンと言う存在を繋ぎ止める唯一の楔はこの暖かく響く声のみ。だがそれだけでアサシンは前へと進む事が出来る。

(サア——最後ダ)

先程まで脳裏に流れていたアサシン達の原点——最古の『少女』の記憶が今、融合を果たす。

全ての記憶と経験、感情はここに集まり、それら全てが一本の大樹となつて根付く。『人格』を操っていたあの頃の『彼女』がそこに蘇り、不透明だった輪郭は明確となり次第に音が、光が、感触が戻ってくると同時に、彼女は一つの情景を幻視する。

懐かしい砂と岩の荒野に沈みかけた夕日とまるで境界線のように分かれた茜色の空と星が煌く夜空。その中央に確かに彼等は居た。

八十人の『自分自身』。

仮面を脱ぎ捨てた彼等は微笑みながら彼女に一言告げる。

（——おかえり）

帰還を祝福するその言葉に、始まりの彼女は同じく仮面を外して笑つて答える。

「——ただいま」

その言葉を最後にアサシンの視界を光が包んだ。



「……………ぐっはあ、はあ」

「大丈夫ですかマスター？」

目が覚める。全身汗だくな上に酷い頭痛がする。

「……ランサー、術式を展開してからどれくらい経った？」

「せいぜい数分程かと」

あの痛みが数分か。向こうではもっと過ぎているかと思つたが、やはり精神世界と現実では時間の進みが違うみたいだ。

問題はアサシンだ。ノイズと痛みが止んだから人格の結合は上手く行つたはずと判断して万色悠滞を解除したが。

「……」は……ああ、戻つて来たのですね」

傍で蹲っていたアサシンが顔を上げる。良かった。どうやら無事みたいだ。

「大丈夫かいアサシン？」

「マスター……ええ大丈夫です」

そう言つて彼女は髑髏の仮面を外した……てつ、外していいのそれ!?

「は、外していい物なの？」

「流石に信頼できる相手の前でくらい素顔を晒したいと思つてもよろしいでしょう。それに……今は仮面をつけたくない気分なのです」

切れ長の目を細め、どこか物憂げに微笑んだ彼女はまるで初めて地上に降り立つたか

のように深呼吸をした。

アサシンはそれをしばらく続けると、今度は真剣な表情でこちらへと振り返り、自分の右手を両手で掴む。

「マスター、感謝します。あなたのお陰で私は全てを取り戻せた。これから先、何があるうとも私は貴方を裏切らず、貴方の外敵となる者を排除することを誓いましょう。ただその、報酬と言うわけではないですが、できればたまにこうして手を握って頂けると嬉しい」

何故か恥ずかしそうに褐色の頬を少し赤らめながらそんな誓いと要求を口にするアサシン。

「ん？ まあ手を握るくらい全然いいけ——ハツ殺気!？」

急に背後からのプレッシャーに振り返る。

そこには何故か不機嫌そうにこちらを絶対零度の視線で見下ろしているランサーの姿があった。

更には桜ちゃんに寄りかかれたラムレイが『やれやれ』といった感じに溜息を吐いて首を振って見せる。ど、どういうことだ!?

「アサシン。貴女はあくまでもサブ、私がマスターのメインサーヴァントである事を肝に銘じておきなさい」

「心得ていますよランサー。私はこれでも空気を読む事にかけては一流です。もっとも仕事した分の報酬はちゃんと頂きますので、あしらかず」

そう言つてアサシンが笑みを浮かべると、ランサーもまた口を吊り上げる。

あ、アカン。なんか知らんが止めないと。というか魔力だけではなく万色悠滞のせいでもう自分の精神力もボロボロなんです。このままでは気絶してしまう。

慌てて二人の間に割つて入つて無理矢理話題を移す。

「す、ストップストップ！ とりあえずアサシンに確認なんだけど、人格の結合を行った結果、ステータスやスキルに変化があるなら教えてくれ」

アサシン個人としては今の状態が正常だが、サーヴァントとしては異常な状態だ。だからこそスキルや宝具については念入りに確認しておく必要がある

「……それもそうですね。マスターもお疲れでしょうし、すぐに済ませましょう。今の私のスキルですが、まず宝具の使用が不可能になりました。申し訳ありません。これからは多方面への同時監視は不可能でしょう」

「まあそれは想定していたかな。百貌のアサシンはあくまでさっきの状態が正常な訳だしね」

「ええ。ですがマスター、代わりに各人格が保有していた三十以上の全てのスキルを私個人で行使できますし、姿も変幻自在に変えることが出来ます」

「おお。それって普通に凄いんじゃないか」

単体でスキル三十越えとかこれもう何でも出来るんじゃないか？

と言うわけでアサシンのステータスを確認する。

ステータスの宝具の項目が『―』になっていて運が『A』、それ以外が『B』になっていた。確か最初に確認した時は軒並みステータスは低かった気がしたが。

とりあえずそのままステータスの下のスキルの項目を見た瞬間——物凄い数のスキル項目が並んでいた。

……ああ、まあこれ全部扱えるならそりゃステもBはあるよねと納得した。だって一人でほぼ全てのクラスのスキルを有しているんだもん。まさに万能タイプ。どんな状況でも完璧に仕事をこなして見せるって感じだ。宝具に依存していたスキルが無くなっていったがまあそれはいいだろう。

むしろ『変化』がEXで老若男女あらゆる職業に化けられるになっている。これももうスパイ活動させたら誰にも見つけられないんじゃないか？

「結合による身体の変調は？」

「特に無く良好です」

「そうか。じゃあとりあえず確認すべきは事はこのくらいかな。それじゃあ今日はもう寝よう。監視はどうするか」

「そんなのは私とアサシンでやっておきます。マスターはさっさと眠って回復に努めるべきでしょう。そんな状態では明日からの戦いに影響が出てしまう」

ランサーはそう忠告しながら自分の首根っこを挿んでラムレイにもたれ掛かって眠る桜ちゃんの隣に降ろすと寝袋を投げよこす。

「あ、ありがとう。それじゃあ先に寝るよ」

ランサーにお礼を伝えそのまま寝袋に入る。

ああ……布団じゃなくても布に包まれるだけで……睡魔が……。

三日目の事について考えようとしたが、すぐさま訪れた睡魔の誘惑に身体が屈する。どうやら体力も限界だったらしい。

結局そのまま三日目の朝までぐっすりと眠ってしまった。

【聖杯戦争二日目それぞれの夜】

「そうか。アサシンが……」

『申し訳ありません』

時臣は教会からの連絡を受けて溜息を吐くが、その際に小さく『ウツ』と呻く。ここ最近で荒れてきた胃がキリキリと音を立てて時臣を容赦なく攻撃してきたのだ。

胃への攻撃が収まってから時臣は改めて溜息を吐く。

「いや、まさかこれほど早くアサシンが裏切るとはこちらも想定していなかった。君一人の落ち度という訳ではない。それよりもアサシンの新しいマスターはランサーのマスター、岸波白野で間違いないんだね？」

『ライダー、セイバー陣営へ手助けする素振り無く、キャスター、バーサーカーが脱落。それとこちらの知らぬ魔道具の使用に、聖杯を求めているという点を考慮すると、聖杯を求めているランサーのマスターである岸波白野を新たなマスターとした可能性がもつとも高いと推察しました』

（やれやれ、厄介なことだ）

綺礼からの情報に時臣は眉間に皺を寄せながら頭の中で今後の戦略を練る。

（アサシンが本格的に裏切ったとなれば、かなりまずい事になる。彼等はこの屋敷の警備と監視も行っていた。何処に何が有り、何処にどういった仕掛けが有るのかはほぼ間違いない）

時臣は自らの絶対安全圏だと思っていた堅牢の城が、今では穴だらけの欠陥住宅に成り下ったような不安と喪失感を味わっていた。

「とりあえず綺礼、アサシンの報復があるかもしれないから君は明日の日が出ている内に身支度を整えて県外に脱出するべきだろう。いくら武術の達人である君でも、片手を無くしては問題だ」

『分かりました我が師』

時臣はそこで連絡を切る。

「随分と舞台が動いているな時臣」

「王……」

いつの間に居たのか、ワインの入ったグラスを持ったアーチャーが入口付近の壁に寄りかかったまま時臣を愉快そうな表情で見据えていた。

「ああ責めるつもりは無い。この我もあの暗殺者が裏切るとすればもう少し後だと読んでいた。はてさて、いったい誰に何を言われたのか。見当はついているのか時臣？」

「……私と綺礼の予想ですが、恐らくランサーのマスターである岸波白野に唆されたの

だと思われれます。思えば教会で聖杯について尋ねたのもアサシンへ聖杯の情報を与える為だったのかもしれない」

恭しく頭を垂れながら己の推測を語る時臣に対してアーチャーは『なるほどな』と言つてからワインを呷る。

「ではまずはその岸波白野という男を明日にでも見に行つて見るとしよう。この私の読みを外させたのだ。些か興味が湧いた。貴様はどうする時臣？　いつまでも引き籠もつてばかりではいられない」

アーチャーがまるで時臣を量るかのように問いかけ、時臣はなんと答えるか慎重に、冷静に頭の中で考えてから、答えた。

「夜が明け次第、情報の収集を行い、しかる後に動きます」

時臣の答えは『静観』であった。

むろんそれは悪くは無い。いまだ戦場にはセイバーとライダーの陣営があり、更にはアサシンが敵になった以上は迂闊に外出行動を取れば暗殺されかねない。

時臣の策は、正に十人中八人が考え、実行するであろう『安定』した策である。

その時臣の答えにアーチャーはただ一言『そうか』と言つてワインを一気に飲み下してから姿を消した。

(……………これで良かったのだろうか)

アーチャーへの返答が正しかったのかどうか、時臣は己に自問自答しながら、やはり眠れぬ夜を過ごした。

(やはりつまらぬ男であるな)

時臣との問答を終え、そう評価を下したアーチャーは時臣に落胆の感情を抱きながら教会のある人物の元へと向かっていた。

目的の人物が居る部屋に霊体化したまま侵入する。

部屋に居たのは言峰綺礼。彼は治療を終えた左手に包帯を巻き、片手の状態で荷造りをしていた。

「ほう。エミヤキリツグへ問い掛けるのは止めたのか綺礼？」

「ギルガメッシュ……」

唐突に現れたアーチャーに、しかし何度も同じ事をされて来た綺礼は動じる事無いくつものように冷めた視線を英雄王へと向ける。

「もやは此度の戦争で私がすべき事は無くなった。師だけではなく父からも逃げようと言われてしまった。もはや私にできる事は無い」

「随分と聞き分けの良い。今日まで己が目的の為に単独行動していた者とは思えぬ言葉

よ」

アーチャーがソファーに寝転がりながら挑発するが、綺礼はそれに応ずる事無く淡々と返す。

「……先刻までは私もマスターの一人だった。単独行動も情報収集の一環と言う言い訳が出来たが、これからはそうはいかない。逆に私が邪魔な存在ならばあの師は私を排除するだろう。私はまだ死ぬ訳にはいかない」

「ふむ。つまり貴様がもう一度サーヴァントを従えたマスターとなれば、今一度己の問いの答えを得る為に行動を起こす。と言うことでいいのだな？」

ギルガメッシュの言葉に綺礼は眉を顰め訝し気な表情を向ける。

「何を言うのかと思えば。見ての通り私は既に令呪を失っている」

「ほおう。では綺礼、貴様のその『右手』に浮かんでいるのはいったいなんだと言うのだ？」

アーチャーが切断された左手を見せる綺礼の反対側の右手を見詰めながら綺礼に伝える。綺礼は何を言っているんだと言いた気な視線を向けながら自らの右手へと視線を向ける。

「——馬鹿な」

そこには確かに『令呪』本体があつた。

「良かったな綺礼。どうやら聖杯はお前に答えを探せと言っているようだぞ」

楽しそうに笑みを浮かべるアーチャーに、令呪の存在に困惑する綺礼。そんな綺礼にアーチャーが尋ねる。

「これで出歩く理由は出来たな。さあ綺礼、お前はどうか動く？」

「私は……」

しばしの考えの後に答えた綺礼の言葉に、アーチャーは満足そうに凶悪な笑みを浮かべた。

遠坂陣営に動きがある頃、ライダー陣営にもまた動きがあった。

切嗣によって撃退されたケイネスを救ったライダーは、そのままソラウが見付けておいた魔ビルへと向かい、そこで簡易ではあるが魔術と救命キットでケイネスの治療を行っていた。

「——ガハッ」

ケイネスが気付くとまず飛び込んできたのは歪な魔ビルの天上だった。

「ケイネス!!」

「……ソラウ？ 私……っ!?」

婚約者であるソラウの声のした方に顔を向けようとして出来ないどころか首から上以外何も感じない事に気付いたケイネスが言葉を失う。

「……いったい、私の身に何が起きたのだ？」

「うむ。それは余が聞かせてやろう」

己を覗き込むように現れたライダーは彼にしては珍しく神妙な面持ちをし、そして何があつたのかを語った。

ケイネスの言われたとおりにセイバーを足止めしたこと。

もしもの場合にとケイネスの傍に愛馬を監視に付けていたこと。

そしてケイネスは切嗣に敗北し、間一髪でブケフアラスに助けられ一命は取り留めたが、なんらかの魔術によって魔術回路の破損と全身麻痺になってしまったこと。

「魔術回路の破損に全身麻痺だ?!」

ライダーから語られた己の身体の状態に、ケイネスは信じられないという表情で叫んだ。

「うむ。治療したソラウの見解では、お主は特殊な弾丸を受けた事で魔術回路が暴走し、貴様の神経を内側からズタズタに引き裂いたのではないか、という事だそうだ」

「私も頑張つて治療魔術を施してみたけど、なんとか喋れる程にしか治療できなかったわ」

二人の言葉にケイネスはこの世の終わりといった表情をさせ、人生で初めて絶望と言う感情を味わっていた。

（アーチボルト家始まって以来の天才である私が魔術を使えない？ ロードエルメロイと謳われた私が取るに足らない傭兵風情に敗北した？ ありえない。認めない。こんな、こんなことが起こる筈などないのだ！）

しかしどれだけケイネスが憤ろうとも、その身体はぴくりとも動かず逆にその事がケイネスから怒りを奪い、逆に絶望がより深く押し掛かる。

「……終わりだ。私は……」

ケイネスの人生は正に魔術一筋。

それも仕方ない。彼は魔術の名家の生まれであり、魔術に関して比類無き才を持っていた。

才を生かすのは生きる者にとって間違いではない。

だがそれは同時にそれを失えば何も無くなってしまおうと言うこと。

ケイネスの脳裏には己の一族であるアーチボルト家から、己が勤めている時計塔から、そして婚約者であるソラウから、敗北者の烙印と共に追放され、見放される未来の自身の姿が浮かんでいた。

「いやいや、まだ終わっておらんだろうマスター」

そんなケイネスに、ライダーは何を馬鹿など言いた気な表情で口を開いた。
「ライダー？」

「ようは聖杯を手に入れて身体を治して貰えばよい。そうだろう？」

「そ、そうだ、それだ！ 聖杯さえ手に入ればまだ、まだ私は——」

「おう！ ではソラウを戦場に連れて行くが問題ないな？」

「——え？」

ライダーの言葉に、意味が分からずにソラウとケイネスの二人から呟きが漏れる。

「当然であろう？ 余に単独行動のスキルは無い。つまりある程度近くに居て貰わねば余は万全に戦うことができぬ。そしてケイネスが戦場に出れぬ以上、魔力を供給しているソラウが出るのが道理ではないか」

「い、いや待て。確かにそうだが……」

（ソラウが戦場に？ あの卑怯者がいる場所に向かわせる？）

ケイネスの脳裏に今度はキリツグの銃弾で打ち抜かれて絶命するソラウの姿が過ぎる。

「だ、ダメだ！ あんな奴のいる所にソラウを行かせる訳には行かない！」

「では諦めるか？ 今諦めれば、お主の言う魔術師の誇りも、一族の威厳も、これまで積み上げた栄華も、お主は失う事になるのだぞ？」

ライダーは真剣な表情ではつきりとケイネスへと問いかける。その顔は正に古の王のそれであり、ソラウも口を挟むことは出来なかった。

「がっぐ——あああああ!!」

ケイネスは目を閉じ、まるで己の葛藤を表すかのように叫び声を上げた。

そして全ての息を吐き切り、荒い呼吸を繰り返したケイネスが……ライダーを目をまっすぐに見据えて答えた。

「——諦める」

「ほう？ 何を？」

「だから諦めると言ったのだ！ 私の名誉も！ 栄光も！ 功績も！ そんなモノより

も私は——」

そこまで叫ぶように喋ったケイネスは涙を流しながら答えた。

「——私は……ソラウが大事なのだ」

「……ケイネス」

「うむ。だがケイネス、この女はお前をそこまで好いてはおらんだろう。態度を見れば分かる。不満も無いが心から愛している訳ではない、といった所か。どうだソラウ、んん？」

「そ、それは……」

ライダーの言葉にソラウが戸惑うように視線を彷徨わせる。何故ならライダーの言葉はまさに凶星であり、少なくともソラウはケイネスとの恋愛で自らの心が震えた事は一度も無かった。悲しい事だが二人の関係はケイネスの片思いでしかないのだ。

「——知っている。そんなこと……」

ケイネスは悲しい表情でソラウの気持ちが自分に向いていない事を知っていた事を告げた。

「だが、好きなんだ。初めて見た時から、私はずっと彼女を愛しているんだ。ああそうだライダー、お前には感謝する。先程の質問で、私は、私にとって一番大事な物が何かを理解した」

ケイネスはそこで一度口を閉じ、そして万感の想いを込めて告げた。

「私にとって一番大切なのは、ソラウが幸せに生きている事だ。例えそれが……私が傍にいらなくても」

「誰かがソラウを幸せにして、悔しいと思わぬのか？」

「悔しくないかだと？ 悔しいき！ 私が、私が彼女を幸せにするはずだったのだ！

私が、彼女の笑顔の隣に立つはずだった！ だがもう無理だ。私は……私自身の手でそれを放棄したのだ」

（ああ、なぜもつと早くにこの事に気付けなかったのか。気づけていれば、こんな野蠻で

危ない戦いになんて参加しなかった)

しかし時は戻らない。愛した女性を幸せにするには、自分はあまりにも多くを失い過ぎたと、ケイネスは後悔に泣き続ける。

「——だそうだ。ソラウよ、貴様……果報者だな」

ライダーはケイネスに向けてまるで成長した我が子か教え子に向けるような誇らしき、慈愛に満ちた表情でケイネスを見下ろしながらソラウへと語る。

「人間の本质は今際の際でこそ露見する。つまりこの男は己の全てよりもお前の人生が大切だと言つてのけたのだ。男でもここまで言える者はそうは居らん。さて、後はお前がどう答えるかだ。婚約を破棄にしてケイネスと別れるか、それともケイネスと共に生きるのか。一世一代の男の告白、逃げることは許さん。この征服王の前で返答せよ。ああ安心せい。例えお前がこの男を振っても余は何もせん」

ライダーの真剣な表情、普段のソラウならまず先に畏怖の感情が浮かぶが、今のソラウにそれはない。

何故なら彼女の心は今、目の前の男へ初めて湧いた『震える想い』と、それに準じた答えを述べようとしている自分自身に呆れているからだ。

(でもしようがないわよね——だって)

「……本当に、しようがない人」

（あの涙が、言葉が、『愛おしいと』思ったのだから）

ソラウは優しくケイネスの頬に触れながら、苦笑を浮かべる。

「けれど、さっきの言葉と涙は、私の心を驚くほど震わせたわ。だからもしも、そんな日々がこれからも続くというのなら……私は貴方を支えて行くわ」

ケイネスを見詰めながら、ソラウは初めて恥ずかしそうに微笑みを浮かべながら答えた。

「おお、おおおソラウ、ソラウウウ」

ケイネスの悔し涙はいつの間にか生まれて初めての嬉し涙へと変わっていた。彼は今日、多くの物を失った代わりにもっとも得たい人の想いを勝ち取ったのだ。

その姿にライダーは大声を上げて笑った。

「はーははは！ 良かったなケイネスよ！ お主は今日、戦士として負け、魔術師としても死んだ！ だが人間として、男として勝った！ うむうむ、お主らの成長、余もまた嬉しい！」

ライダーの祝福の言葉にケイネスとソラウが視線を向ける。

「だ、だがライダーよ。結局これからどうするのだ？ ソラウが戦場に出ない以上、私
が」

「そんな事は私が許しません。ケイネスはもう戦えない。私とてソフィア家の魔術師

です。戦場に立つくらいできるわ」

お互いに気力が満ちているのか私が私がと言い争いを始めたのを見て、ライダーが口を挟む。

「まあ待って待て。実は一つ試して欲しい事がある。もうケイネスよ。令呪とはサーヴァントに対して色々な効果を及ぼす物、という認識でよいのだな？」

「あ、ああ。そのはずだ」

「では余に単独行動のスキルを付与できぬか？」

「っ!? た、確かに試して見る価値はある。私が命令で『単独行動を許可する』と言えば……ライダーよ。令呪を持って命じる——『単独での行動を許可する』」

ケイネスの言葉と共に令呪の一画が失われる。

「どうだ？」

「……成功だ。ライダーのスキルに最低ランクだが『単独行動』が追加されている。とりあえずこれで離れても行動は可能だ」

「ははは！ やはり何事も試してみる物だな。ではこれからは余一人で戦う故、お主らは身を潜めておくがいい」

ライダーがマントを靡かせながら翻り戦車を召喚して跨る。

「ま、待ってライダー、令呪を持って命ずる——『魔力を万全にせよ！』」

ケイネスが令呪で命ずると今日まで消費していたライダーの魔力が全快する。

「おお、饑別とは粋な事をするではないかマスター」

「……ライダー、いやイスカandal王」

改まって己の真名を呼ぶケイネスに、ライダーは訝しげな表情を向ける。

「すまなかつた。私が未熟なせいで、貴方を戦場に一人で送ることになってしまった」

それはケイネスが始めて行つた心からの謝罪であつた。

今まで謝る姿を見た事が無いソラウは驚き、ライダーもまた意外だと言いた気に驚いていた。

「だが、私に多くの事を悟る切つ掛けをくれた貴方を、今度こそ支えたい。だから、どうか我々の元に戻ってきてくれ、我が王よ」

ケイネスの尊敬と敬愛の視線を受けたライダーは、その視線に応える様にいつもの見る者を安心させる笑みを浮かべ堂々と宣言した。

「応とも我がマスター、いや、今決めた！ お主等はこの現世においての余の初めての我が民とする！ お主等民を置いて王は滅びぬ！ 必ずやこの戦争を征服し、聖杯を持つて凱旋する事を誓おうではないか！」

腰の剣を抜き、高らかに掲げて宣言する征服王イスカandalの姿に、ケイネスとソラウは知らぬ間に涙を流していた。それはあまりにも偉大過ぎる偉人への、無意識の敬意

の表れだったのかもしれない。

「では参ろうか！」

「ブホオオオオオオン!!」

ライダーの意気込みに応えるように二頭の牡牛が嘶き、廃ビルの穴を抜けて空へを駆け上がる。

「我が王よ……どうか御武運を」

ソラウに身体を起ここして貰って空を上がっていったライダーを、二人はその姿が消えるまで見送り続けた。

ライダーが一人戦車を走らせているその頃、セイバー陣営でも大きな動きがあった。

「拠点を移す」

戦闘を終えたセイバー達はもう一度集合し、今後の話し合いを行っていた。

「言峰綺礼の負傷は朗報だが同時にアサシンの裏切りで今後アサシンがどう動くのかわからなくなつた。このままこの城を拠点にするのは危険と判断して明日にでも別の場所に移動を行う」

「移動するのはいいけど、どこに行くの？」

「こんな時の為に既に別の拠点の手配はしておいた。僕と舞弥はすぐに街に戻って準備を開始する」

「……少しいいでしょうか切嗣」

切嗣の説明が一段落した所でセイバーが口を開く。切嗣は視線だけを向け、セイバーもい加減慣れたのか返答されないのを気にせず自分の考えを喋る。

「その新しい拠点は、私の宝具を使っても問題ない場所なのででしょうか？」

「セイバー、どういうこと？」

セイバーの意図が読めずにアイリスフィールが質問する。

「ライダーのマスターが瀕死と言うことはもし次にライダーが訪れれば間違いなく彼の王は宝具を使うでしょう。それにランサーの宝具は間違いなく私の宝具に匹敵する。そうなるかと私もまた宝具で応戦せざるを得なくなる」

「確かに宝具同士が激突するならいくらか威力を相殺できるかもしれないけど、外した場合は被害がかなり拡大するわね。その辺りはどうなの切嗣？」

「今度移す場所は広めの民家だ。まあ住宅街よりは周りの家の数は少ないが、宝具による被害は出るかもしれない。正直な話をするならアイリ、君を隠す為に用意した拠点だからね。それと僕達が戻る前に敵が来たらセイバーの宝具の使用も許可する。なんとか凌いでくれ。なんならそのまま倒してくれてもいい。戦い方は……セイバーに任せ

る」

切嗣の初めての『任せろ』という言葉にセイバーとアイリスフィールは驚きと戸惑いの表情を浮かべ、その間に切嗣は『今は時間が惜しい』と言って舞弥を連れて出て行く。廊下を歩く二人は、部屋からしばらく離れると切嗣が舞弥にだけ追加の説明を始める。

「舞弥、拠点の準備が出来たらアイリだけを連れて移動してくれ」

「セイバーは？」

「ここに残す。現状の予測から、岸波白野の陣営以外はサーヴァントとマスターは別行動をしていると言っている。ならば両面から攻める。セイバーがやってきたサーヴァントを倒してもいいし、セイバーが相手している内にマスターをこちらが狙撃してもいい」

城を出た切嗣は懐からタバコを取り出しゆっくりと紫煙をくゆらせる。

「もはや戦局も終盤だ。正々堂々と戦って時間をかけてくれた方が助かるし、アイリを連れ出しやすい」

（つまりセイバーは今まで同様に囷、と言う訳ですね）

切嗣の説明に舞弥も納得し、そのまま二人は車に乗って街へを向かった。

そして聖杯戦争二日目の夜は過ぎ、全てが決着する三日目がやって来る。

【それぞれ聖杯問答へ】

「と言うわけでどうだランサーよ。これから余とセイバーの元へと行かぬか？」

早朝。まだ空が白んできたばかりの時間に巨漢のサーヴァント、イスカンドル王であるライダーが戦車に酒樽を乗せて好い笑顔で空から来訪した。

もちろん急接近する魔力体に驚いたこちらは全員が戦闘態勢での出迎えだったのだが、ライダーはすぐに両手を軽く挙げて戦闘の意思は無いと宣言したかと思うと、挨拶もそこそこにランサーにそう提案してきた。

「……牛さん」

「牛さんだねえ……ライダー、桜ちゃんが乗りたそうにしているから乗せてあげてもいい？」

「おう。気をつけて乗るのだぞ」

許しが出たので桜ちゃんを戦車の先で大人しくしている二頭の牛の片方に乗せる。若干『え？ マジですか』みたいな感じで戸惑っているような目をしているが、主であるライダーの命を受けている為か特に威嚇とかはしてこなかった。

高いところに昇って目をキラキラさせている桜ちゃんをアサシンに任せてライダー

とランサーの傍に向かう。

「それでライダー、何故私が貴様と共にセイバーの元に向かわなければならない」

「それはこれから余とセイバーが雌雄を決するからよ。で、あるならば戦いの前に敵軍の王と語らうのも戦の華よ。そこでランサーよ。お主にもぜひその語らいに参加し、そして我等の戦いの証人となって欲しいのだ」

「罨ではないという保証はどこに？」

「まあ当然の心配よな。だが心配は無用。余のマスターは既に戦えぬ身よ。余が自由に動けるのは令呪で単独行動のスキルを得たから故だ。で、どうだ？」

ランサーがこちらに視線を向けてくる。ライダーを見る限り嘘は言っていないと思う。

つまり目の前のサーヴァントは純粹にランサーやセイバーと最後に話をしてみたいと思っただけなのかもしれない。

「まあ確かにこれだけの英雄がいるなら話の一つや二つはしたくなるよね」

「おお。お主は分かっているな。流石はキャスターを下しただけの事はある。それに見た所アサシンすら軍門に降すとは。うむ、お主どうだ？ 余の戦士か魔術師とならんか？」

「あの征服王に求められるのは凄く光栄だけど、今は二人のマスターだから、お断りさせ

て頂きます」

ライダーに向かって丁重に頭を下げ、誘いを断わらせてもらう。

「むう。理由を尋ねてもいいか？」

「物凄い誉れなのは理解できるよ。でも今の自分はランサーとアサシンのマスターだ。二人の同意が無い以上、頷く訳には行かない」

ライダーの目をしっかりと見据えてそう答えると、ライダーが豪快に笑いながらこちらの背中を叩いた。

「ハハハ！ それもそうだな！ だがマスターでなければ問題ないならこの戦争が終わった時に余が生きていれば今一度勧誘させて貰うとしようか！」

流星は世界を征服しようとした人だ。簡単には諦めてはくれなかった。

それどころか断つたのに何故か楽しそうに背中を叩いてくるんだけど、凄く痛い我慢して苦笑を返しつつランサーへと視線を戻す。

「それでランサー、自分は君が行きたいならライダーの誘いに乗っても構わないよ」
「私は……」

ランサーはしばらく黙ると兜を被ってラムレイに跨った。

「マスター、私は彼と共にセイバーの話を聞きに行こうと思います」

「ん、了解。《Code: act independently 単独行動》。これで二十四時間はマスターから離れても

問題なく行動できるはずだ」

ランサーに単独行動のスキルを付加する。とライダーが『お便利な魔術だな』と興味深げにこちらを見詰め、ランサーは強く頷いてみせた。

「感謝を。アサシン、二人を頼みます」

「お任せを」

桜ちゃんが牛から落ちないように見守っていたアサシンがランサーの頼みに力強く頷いて答える。なんとも頼もしい。

「私が居ない間、あまり無茶をしないで下さいよ」

「大丈夫。今日は拠点を移動して寺を見に行くだけだから。何かあれば念話で教えてくれ。すぐに駆けつける」

「ええ。マスターも」

「では行くとするか!」

お互いに別れを済ませ、桜ちゃんを牛から下ろすとランサーとライダーは空へと上がって走り去って行った。

「……まだ日が出てなくて助かったな」

あと一時間もすれば空が明るくなり空飛ぶ馬と牛の姿がくつきりと見えてしまうところだ。

「マスター、我々はこれからどう致しましょう」

「とりあえず桜ちゃんの安全の為に拠点の移動だ。場所はエーデルフェルトから聞いてある」

と言うわけでランサーを見送った自分達はすぐに移動の準備を始め、一時間後には拠点としていた山を後にし、エーデルフェルトが指定した『双子館』の内の一つへと向かった。

ランサーと別れた自分達はその足で双子館のある深山町へとやって来た訳だが。

「……」

桜ちゃんが物凄くそわそわしている。

まあ無理も無いか。双子館がある場所って、遠坂邸の近くだから似たような道を通るだろうし。

何故こつちを指定したエーデルフェルト！

と愚痴を心の中で零しながらどうしたものかと考える。出来れば家族に会いに行かせてあげたいが、戦争中に向こうがどうであるか分からない。

というか、下手したら桜ちゃんの心の傷を広げる結果になりそうで怖いんだよなあ。

事前に得た情報では遠坂時臣は典型的な魔術師の思考をしていると思う。たぶん桜ちゃんを引き渡しても同じ事になるのは明白だ。

間桐のやり方も、同情はしてくれても否定はしないかもしれないなあ。

「……ちよつと商店街にでも寄つて御飯でも食べようか」

「……いいの？」

「ああ。朝ごはんも食べてないしね。桜ちゃんはどこに行きたい？」

「えつとね……」

なんとなく、少しだけ嬉しそうにする桜ちゃんに顔を綻ばせる。霊体化しているアサシンが『尊い』とか言つて癒されていた。

悩む桜ちゃんと癒されているアサシンと一緒に深山町にある商店街『マウント深山』にやつて来た。

ああ、この雰囲気は良いよね。

賑わい活気のある商店街の雰囲気を感じながら桜ちゃんに改めて声を掛ける。

「それで桜ちゃん、何処に行くか決めた？」

「うん。前に……みんなと行ったお店に行きたい」

「……そつか。それじゃ案内してくれる」
「うん。こつち」

桜ちゃんが積極的にこちらの手を引つ張られる形で案内して貰う。その姿がはしゃぐ子供の様でほんの少しだけ安堵し、笑顔で付いて行こうとしたその時——ちようど目の前ファーストフード店から『写真で見た事がある人物を見付けた』

「衛宮、切嗣！」

「っ岸波白野！」

互いに硬直する。当然だ。いくらなんでもこんな遭遇は予期していなかった。

向こうも向こうで一瞬だけ目を見開くがすぐにその目を細めてこちらを警戒した視線を向けてくる。

そんな、唯でさえ戸惑う状況の中で——

「ほう。貴様、面白い魂かたちをしているな」

——決して忘れることなど出来ない『声』が、背後から掛けられた。
全身から冷や汗が溢れる。

振り返らない。という選択肢は無い。そんな事をすれば『彼』は周りの被害など無視して殺しに来るだろう。

「ごめんね桜ちゃん」

『それとアサシンは決して姿を見せるな』

「え?」

『え?』

《Code:睡眠^{sleep}》

楽しみにしていた桜ちゃんを眠らせ、彼女を抱き寄せてから振り返る。

そこには見慣れた金ピカの鎧ではない襟元にファーがついた白いコートを着て髪を下ろした英雄王、ギルガメツシュが、玩具を見つけた子供の様な興味津々といった笑みを浮かべて立っていた。

目と目が合う。それだけで、彼の英霊はその『千里眼』を持ってこちらの全てを『見透かした』だろう。

「——はは、ははは! 面白い。こんな事があるのか!」

ほんの一瞬だけ驚いたギルガメツシュはすぐに声を出して笑う。

「——英雄王、ギルガメツシュ」

「ああそうだな。お前は我を知っていて当然だろ。ふむ、なるほどなるほど。となると

——おい綺礼、時臣!」

——つなんだと!?

「王、いったい急につ——桜」

「貴様は岸波白野と衛宮切嗣」

「……馬鹿な。何故こんな所に!？」

カオス
混沌。

現状で残っており聖杯を手にする可能性が最も高いマスターが、偶然にも一同に会してしまう。

いや待て、本当に偶然か。

「まさか……狙ったのかギルガメッシュ。この一瞬のタイミングを!」

出来る。このサーヴァントにはそれを可能にする知能と能力がある事を自分は良く理解している。

「おいおい雑種、そんな訳が無かろう。我はただ綺礼がこの街を去る前に時臣同伴で共に昼でもと思立っただけなのだ。いやはや、まさかこんな事になるとは偶然とは恐ろしいものよ」

嘘だ。絶対に嘘だ。だってすっごいドヤ顔で笑ってるもん。絶対なんか予感か予見でもして『面白いことが起こりそうだから二人も連れて行ってみよう』的なノリで脅して連れて来たに違いない。

「……王。いったいこの状況、どういたす御つもりです」

背後の深い赤色のスーツを着た顎鬚を蓄えた紳士がそうギルガメッシュに声を掛け

る。

たぶんあつちが遠坂時臣だろう。そしてもう一人の神父が言峰綺礼で間違いない。若いとは言えまんま生前会った顔だし、目が死んでるし左の手首が無いし。

「ふむそうさな。これだけ因縁のある者達が集つたのだ。長い話となろう。どこかの店で腰を落ち着けるとするか」

『アサシン、なにかあれば桜ちゃんを連れて全力で逃げろ』

『それは！』

『自分なら大丈夫。そんな簡単に死なない。だが、桜ちゃんが殺されれば、自分達の『負け』だ』

『……はっ』

アサシンに念話で桜ちゃんの事を頼みギルガメツシュの提案に頷き返す。

「分かった。付き合おう」

「そうかそうか。時臣どこか良い店を案内せい」

「王。流石にそれは……」

「何故貴様等に付き合わなければならぬ」

遠坂時臣と衛宮切嗣がギルガメツシュの強制と言う名の提案を跳ね除けるつて馬鹿野郎！ そういうの一番嫌うんだぞこの人！

「——ほう。この我のせつかくの申し出を雑種ごときが蹴るか。その意味、理解しているのか？」

瞬間——濃厚な死が全身を駆け抜けた。

自分だけではなく遠坂時臣と衛宮切嗣、更には言峰綺礼までもが殺気の中てられ汗を流す。

「くつ。遠坂時臣と衛宮切嗣、分かっているはずだ。自分達に選択肢は無い。ここで死にたいのか」

恐怖を押し殺しながら二人を説得する。二人は殺気の中てられ苦しそうにしながら、首を縦に振ってギルガメツシユの提案を呑んだ。

それを見届けると同時にギルガメツシユは殺気を納めフンと鼻を不機嫌そうに鳴らした。

「初めからそう答えれば良いものを。では案内せよ。それとその雑種は時臣と共に我の前を歩け」

「……はい。我が王よ」

時臣と綺礼が疲れた顔で胃の辺りを抑えながら先頭歩き始め、その後ろをギルガメツシユに命令された衛宮切嗣が、その後を少し離れて自分とギルガメツシユが並んで進む。

「さて岸波白野。道中、貴様の全てを語って貰おう。なにせその魂うつつわに数多の魂の欠片を宿し、その中にこの我の『欠片』すら有しているのだから。我が自ら雑種を『裁定』したいと思つたのは初めてだ。この期待、裏切つてくれるなよ」

ああ、完全にロツクオンされてしまった。もう逃げられない。こうなるだろうと思つたからギルガメツシュから出来るだけ隠れていたんだけどなあ。

どうやら運命は自分が考えていたよりも早く、この戦争を収束させたいらしい。

【聖杯問答マスター編 前編】

「まあ酒、料理、どちらも妥協点といった所か」

「ありがとうございます。王よ」

遠坂時臣が案内したのは商店街から少し外れた凄い高級そうな日本料亭の個室だった。たぶん裕福な家庭や政治家なんかを訪れるような場所だと思う。

とりあえず人払いの為にギルガメッシュが食べたい物、飲みたい物をいっきに注文し、机には多彩な和食がずらりと並び、その時臣がすぐに人払いの結界を張った。

しかし食が進んでいるのはギルガメッシュだけで自分を含め他の参加者はもはや通夜所ではない重苦しい沈黙の中、片手にお酒の入ったコップを握っていた。

因みに道中でしつかりとギルガメッシュには自分の事や月での彼との関係や出来事を余す事無く説明した。もちろん他の三人に聞こえないように念話で。

話が進む度にギルガメッシュは相槌を打ちながら『なるほどなるほど』と愉快気に笑っていた。とりあえず不快な思いをさせずに済んで良かった。

「おいおいどうしたお前達？　せつかくこの我が席を用意したのだ。存分に腹を割って話すが良い」

さっさと喧嘩しろって事ですね。分かりたくないです。

心の中でそう愚痴るが、このままだとギルガメッシュが不機嫌になりそうなのでとりあえず一番話を訊きたい相手に話を振る。

「遠坂時臣……」

「何かね？」

「何故桜ちゃんを養子に出した」

時臣の眉が不機嫌そうに釣り上がる。

「他人の君には関係の無いことだろう」

「悪いがそうはいかない。自分はこの子を託されたし救った責任がある……まあ養子に關してはなんとなく理由は分かっているが、本題はこの子が『間桐でどんな目にあつていたか』を知っているかどうかだ」

桜ちゃんの才能と魔術師界のルールを照らし合わせれば養子に出した大方の予想は出来る。だから問題はコイツがちゃんと明け渡す相手を調査したのかだ。

「どういう意味かね？」

「言葉通りだ。この子は、間桐の家で地獄の様な目にあつた」

そして自分は腕の中で眠る桜ちゃんが養子として引き取られてからどんな目にあつたのかを伝え、そしてそんな一人の女の子を救うために戦った雁夜についても話し、彼

から桜を託された事も伝えた。

桜ちゃんが味わった地獄の話の時に切嗣がかなり不機嫌そうに顔を歪めていたのは意外だった。もう少し感情を殺す方だと思っていたから。

「——そうか」

時臣は目蓋を閉じたまま全ての話を聞き終わると一度お茶を口にしてから目蓋を開けてこちらを見据える。

「愚かな所業だ。せっかくの桜の才能を潰すような訓練を強いるなど。そうだな。その事に関しては桜の才能が潰れる前に君に依頼した雁夜には感謝をすべきだろう。あの落伍者も、最期に桜の役に立ったのだから本望だったろう」

「……それだけか？」

「ああ。それだけだ。間桐の行いは『責める』が『否定』はしない。魔術の訓練課程はその家々で違うのだから。それが正当な物ならば私は桜に同情はしても受け入れる。それが魔術師という物だよ。魔術使い君」

……良かった。

心から、今桜ちゃんが眠っていてくれて良かったと思つた。

ああ分かつてるさ。魔術師はそういう連中だ。そして、たぶんだけど時臣にだって『同情』が湧くくらいには桜を愛していた事になる。ならば葛藤も多少はあつたらうさ。

それでも……これではあまりにも桜ちゃんが可哀想じゃないか。

この子はずっと、お前達家族に助けを求めていたはずだ。

この子はずっと、もう一度お前達に会いたいと頑張ったはずだ。

この子はずっと、お前達を恨みもせず、お前達との思い出を覚えているではないか。桜ちゃんがあまりにも不憫で心が締め付けられる。だが何を言っても無駄なのだろう。魔術師はそういう者だ。価値観が違い過ぎるのだ。

時臣になんと返事を返すべきか悩んでいると意外な人物が声を掛けてきた。

「岸波白野。何故貴様はその娘に拘る。いや、それ以前に何故貴様は間桐雁夜の願いを聞いて間桐の翁を殺した。貴様にはなんのメリットも無い。むしろ足手まといの子供を一人抱え込むというデメリットの方がかい」

時臣の隣に控えていた言峰綺礼が積極的に口を開いたことに時臣と衛宮切嗣が少しだけ意外そうな顔をさせた。

「頼まれたからだ」

「それは知っている。私が求めているのは貴様の『利』だ。あるはずだ。その娘を手元に置く利が」

「『利』か。一緒に居ると癒される、とか？」

「ブツハハハハハ！」

自分の隣でやり取りを肴に酒を飲んでいたギルガメッシュが盛大に吹いて笑い声を上げる。

「ハハハハまったく貴様は笑わせてくれる。ああ綺礼、この男は『損得』抜きにただ『託された』から背負い込んでいる感情馬鹿だ。理屈で考えていること事態が的外れよ」

「馬鹿な。では貴様は本当にただ助けたかつたから間桐雁夜を助力し、頼むと請われたから間桐桜を傍に置いていると言うのか？」

「……だからそう言っている」

おいその宇宙人が何かを見たような視線を止める。そしてギルガメッシュ、数分で自分の事を理解しすぎだ。相変わらずチート過ぎて恐くて泣けて来るよ。

「はあ。いいか言峰綺礼、あんたが自分をどういった人間と思っていたのかは知らない。だが実際の自分は感情を優先して生きる、我侭で感情的な小さな人間なんだよ」

綺礼の目をまつすぐに見返しながら『自分はこういう人間なのだ』断言する。綺礼の瞳が揺らぐ。まるで何かと戦うように。

「……これは本来、衛宮切嗣に問う予定であったが、どうやら違ったらしい。この問いは貴様にこそ尋ねるべき物だったようだ。岸波白野、答えて貰おう。何故、貴様はそこまではつきりと迷う事無く『己』と言う物を主張できる」

「そんなもの開き直ったからに決まっているだろ」

腕を組んで自信満々に答えると、他の三人がぼかんと表情を固めてしまう。笑っているのはギルガメッシュだけだ。

「……それだけ、か？」

「ああ。言つたろ？ 自分は感情的だつて。だから本質を曲げることは出来ない。ならそれを受け入れた上で自分の信念に従つて生きて行くしかない」

「ならば貴様のその信念とはなんだ？」

「この目に映り、この手が届く場所にある『小さくも温かいもの』を守つて行く。それが岸波白野の全てであり、貫き通すと決めた『信念』だ」

世界のため、人類のため、国のため、一族のため、そういった『大きなモノのため』に戦える信念を持った人を、自分は尊敬しているし憧れた事もある。

けれど……自分には無理だつた。

岸波白野にそんな正義の味方のような、アーチャーのような生き方は出来ない。否、ここにいる連中を含めて、自分は同じ方を見て生きることができないだろう。

だつてそんな素晴らしく偉大なモノよりも、平凡で当たり前なモノの方が、自分にとっては何倍も尊くて、大切だと感じてしまうのだから。

綺礼の意図は分からないが真面目に思っていることをそのまま伝える。

時臣と切嗣は既に無表情に戻っていたが綺礼はしばらく何かを考える素振りを見せ

ると、再度こちらに顔を向けた。

「……仮に、もしも貴様の本性が『他人の不幸や苦悩を喜ぶ』といった物だったとしたら、貴様はそれを受け入れた上でそれを満たすために行動するのか?」

……それ、まんまお前のことだろ!

内心でツツコミを入れつつ、これはもしかしてこの外道を更生できるチャンスなのではないかという閃きが走る。

よし。やってみよう!

「きつとそうするだろうな。けどそんな『他者を傷つける』と言った本性なら、自分ならそれを悟った時点でそれを叶えられる環境で過ごすね」

「ほう。と言うと?」

なぜか物凄く興味津々と言った感じで顔を更に寄せてくる。恐い。

「……例えばさつき言峰綺礼が言った本性なら、対象を『他人を貶めて調子に乗っている悪人』に限定する。まあ善行自体が嫌だ、つまらないって言うなら被害者加害者両方にチャンスを残しつつ『場』だけを作って、自身は高みの見物するとか? これなら第三者に被害を出さずにどつちに転んでも楽しめるんじゃないか?」

とりあえず自分の考えを伝えると、綺礼はまるで何かに気付いたかのようにはつとした表情をさせたかと思うと、目蓋を閉じて顔を伏せる。そして次第にその肩を震わせ

た。

「……ククク……ハハハ……ハハハハハ！」

ここでもさかの三段笑いだ?!

物凄い笑顔で大笑いを始めた綺礼に、ギルガメツシュを除いた全員が戸惑った視線を向ける。

「なるほど。それは今まで試したことはなかった。だが確かに私は『こうあるべきだ』と考えて一方を否定して来たが『折り合いを付けて』両方を満たす行動をした事は一度もなかった。で、あるならばそんな私を繋ぎ止める者が必要だ」

綺礼が立ち上がって個室から出て行こうとし、それを時臣が慌てて止めた。

「綺礼、急にどうしたんだね？」

「我が師、その男の言葉で『ある事』を思い出しました。申し訳ありませんが急ぎますので、私の冬木での戦いはここで終わりです。ああそれとギルガメツシュ……」

襖に手を掛けようとした綺礼が右手を上げると、何も無かった手の甲に令呪が浮かぶ。

「これは返させて貰うとしよう」

「ふっ、気付いていたか。そしてこの我との約定を反故にするか……だがよい。今の私の興味は別にある。マスターは時臣でも構わん。いや、むしろ好都合か。ではな綺礼、

これまで見せた貴様の苦悩に免じて反故を許そう」

ギルガメツシュがそう呟くと同時に綺礼の手から令呪が消えてなくなる。

「貴様にも感謝しているギルガメツシュ。そして岸波白野、貴様にはアサシンの件で貸しがあつたが、今回の事で帳消しとさせて貰うとしよう。では、いずれ縁があればどこかで会おうだろう」

最後にそれだけ伝えると綺礼は退室していった。

自分も含め何が起きたのかは分からない。ただ一人、ギルガメツシュだけは全てを悟りきつた、どこか祝福するような表情で酒を煽っていた。

「さて、意外な話題で綺礼の問題が片付いたな。それでは次はこの聖杯戦争の根底、聖杯に何を願うのかについて問答してみるとしようか。おい先程から無言を貫いている雑種よ。まずは貴様からだ」

ギルガメツシュが切嗣に杯を向ける。だが切嗣はそれを無視する。もつともそれを許す英雄王ではない。

「どうした雑種、さっさと答えよ」

物凄く悪い笑顔でギルガメツシュの傍に一箇所だけ『王の財宝』で空間が歪み、そこから黄金の短剣の切っ先が現れる。どうやら答えなかつたらぶつ放すつもりのようなのだ。ただ射線がずれているから一撃で殺すつもりはないらしい。

「……ふう。僕の願い、それはこの世界の恒久的な平和だ」
「——」

眩かれたその言葉に、全員が言葉を飲んだ。

【聖杯問答マスター編 後編】

「恒久平和、だと？ それはつまり、この世から争いを無くす、という意味かね？」

「そうだ」

「馬鹿な。確かに争いと言えば聞こえは悪いが、別の視点で見ればそれは『切磋琢磨』というお互いを高め合う為の物だ。相手よりも高みへという向上心と敵対心は人類繁栄の資本そのもの。それを否定するというのならそれは人類の発展の否定も同議だ。衛宮切嗣、貴様の願いは人類の破滅に他ならない」

「ああそうだ遠坂時臣。貴様の言う通りそれが人類の本質の一つだろう。だからこそ人間はいい加減に気付くべきなんだ。他者を蹴落とし、傷つけてしか進化できない愚かさや罪深さを。戦いに勝利など無く。双方に残されるのは奪われ失ったという絶望だけなのだ」

そして切嗣は一度口を閉じて全員へと視線を向けてから言い放った。

「世界の改変、ヒトの魂の変革を、聖杯の奇跡を以って成し遂げる。僕がこの冬木で流す血を、人類最後の流血にしてみせる」

「無理だ」

決意の籠ったその切嗣の宣誓に対して、自分は無意識にそう返答していた。

「なんだと?」

「無理だよ衛宮切嗣。あんたじゃ……その願いは届かない。いや、そもそもその願いは『誰にも』叶えられない類のものだ」

そう。その手の願いは『叶わない』のではなく『叶えられない』のだ。

「人は悪意だけではなく善意でも争う矛盾した生物だ。だがそれは人間が長い年月を掛けて感情という心を発達させ、進化させて来たからに他ならない。故に人間がいう次元の存在のままでは争いの根絶は不可能だ……そんなこと、多くの戦場を見て来たあなたが一番よく分かっているはずだ」

戦場での彼の有り方を知った時から、自分の中で衛宮切嗣という男はかつて共に戦った正義の味方、アーチャーである無銘と同じ理想や信念を抱いている人物だと思つて来た。

そう。思っていた、だ。

アーチャーは最後まで『人の可能性を信じて』いた。だが、先程の切嗣の願いを聞いて理解してしまった。

彼は……信じることを止めてしまったのだと。だから奇跡に頼り無理矢理人間の在り方を変える事にしたのだと。

「だからこそその聖杯だ。聖杯の奇跡ならきつと——」
「いいや、無理だろうな」

顔を顰めながら尚をも食い下がる切嗣の言葉を切り捨てたのは酒の入った杯を揺らすギルガメツシユだった。

「我が知る限り聖杯とは所詮『願いを叶えるシステム』を宿した道具でしかない。確かに単純にして明快な願いならば、聖杯はその願いを狂いなく叶えるだろう。しかしその願いが複雑で曖昧な物であれば、聖杯は不透明な部分を使用者の『価値観』を基にして補完して願いを行使する。雑種、貴様は先程白野の言葉を肯定している。つまり、貴様が争いの根絶を望めばこの世から善意と悪意の両方が消えるという事だ」

「つまり……善意と悪意の大本、感情が消されるって事？」

「まあ植物並みには残るだろう。貴様等に解り易く言うのなら、この雑種の世界は人間がただ生きて死ぬ為に存在する安定した世界と言うことだ。生きる者は世界のルールに従って生き、助からぬ者は捨てて行く。なんともつまらぬ世界よ」

心底つまらなそうな顔でギルガメツシユが酒を煽る。そしてギルガメツシユの気持ちはまんま自分の気持ちでもあった。

『終わりに向かう世界を生きた友人達』から色々学んだ身としては、そんな『可能性』も『進化』も無くなった停滞した世界は認められない。

「……なるほど。確かに、失う事を許容している僕には完全な形では不可能なのかもしれない。だが、それでもこの世界から争いを無くし、平和が成し遂げられるのなら、どんな形でも構わない」

ギルガメッシュの説明を聞いた切嗣は顔を顰めながらも、己の願いを諦めないと断言する。衛宮切嗣の意志は固い。説得は不可能だろう。

と言うか、一つ気になったことがある。

「なあ衛宮切嗣。あんたのその願い、あのアインツベルンの女性、アイリスフィールと言う名前だったか。彼女も口にしていたが、アインツベルンはあんたの願いを了承しているのか？」

だってアインツベルンも聖杯を求めているはずだ。そう考えると彼の願いを優先させるのはおかしい。

「今のアインツベルンが求めているのは第三魔法をもう一度起こす事だけだ」

第三魔法：……ああ確か魂の物質化だっけ。月の聖杯戦争の時はサーヴァントがその魔法で構成されてたはず。というかムーンセルに在る物全てがその方法での物質化だからなあ。

というか、そもそも自分がその第三魔法で作られたんだけど……それに自分の情報の物質化もそれに該当するような……あ、これバレたらヤバイやつだ。黙つとこう。

こつちの世界だと魔法ってだけで色々とヤバイのだ。せつかく色々頑張つて協会から追われなくなったのにまた、しかも自分から逃亡生活に戻るのとは勘弁である。

「なるほど。アインツベルンは既に当初の目的を失つて見えてる。嘆かわしい事だ。本来はその第三魔法の儀式と聖杯を用いて根源へと到る為だと言うのに」

「……なあギルガメツシュ、今あの人語るに落ちたんじゃないか？」

今時臣が言った言葉は『儀式と聖杯を用いるからサーヴァントの願いなんて叶えないよプギャー』という事である。つまりサーヴァントは儀式で必要なだけで終われば不要。となると令呪の意味も何となく理解できた。たぶん最後に自害させる為だ。

自分のツツコミに対して優雅な仕草でお酒を呷っていた時臣はまるで一時停止したかのようにピタリと動きを止める。

そして手に持った杯をテーブルに戻すと、ゆっくりと目蓋を閉じて顔を軽く上げそして……眉を顰めたままピクリとも動かなくなった。

「……凄いな時臣。我もその辺りをこの問答ではつきりさせたいと思つていたのだが、まさか自分から暴露するとは。どうやら我はお前の人間性を見くびつていたようだ。すまなかつたな。とりあずもうお前に用は無いから黙つていろ。うっかりが移る」

おう辛辣。そしてギルガメツシュ、その同情の眼差しには見覚えがあるんだが。それは自分をハサンと呼んで哀れんでいた時の顔じゃないか？　と言うか遠坂という名の

者には『うつかり属性』が標準装備なのか……まあいい、今は切嗣の方を優先しよう。ギルガメツシユの辛辣な言葉に苦悶の表情を深くさせる時臣を無視して切嗣の会話の内容を考える事にする。

切嗣の説明を考えると、アイリスフィールは自発的に切嗣の願いを叶えようとしていて事か。だとしたらこの二人の関係性は？

セイバーの正規のマスターが切嗣なのは接触した事で看破できた。つまり彼女は既にさせた訳だが、なんでそれをアンツベルンは了承した？ ホムンクルスだから死んでもいい、ということか？ それとも殺されない理由が……あ。

「まさかあの女性、彼女が聖杯の器か!？」

「――」

切嗣は答ええないし表情も変えない。だが彼から放たれる雰囲気が変わった事で、自分の言った事が正しいのだと確信する。

そんな、こんなの馬鹿げている！

アイリスフィールの事を自分は知らない。だが彼女のあのランサーとのやり取りを見る限り、彼女には間違いなく人間と同じ心が存在している。それなのに、何故受け入れられる？

自分が聖杯の器の事実には困惑していると、ランサーから念話が送られてくる。

『マスター、こちらは終わりました。結果は——』

『ランサー、その前に一つ訊きたい。そこにアイリスフィールはいるか?』

『ええ。その事で報告があります。アイリスフィール、彼女が今回の聖杯でありそして、切嗣の妻で娘も居るそうです』

そこまで聞いた自分は気付けば念話を閉じて感情に任せて切嗣の胸倉を掴んでいた。

「お前は自分の奥さんを犠牲にするつもりか！」

「……ランサーからの念話で何か知ったか」

「ああ、アイリスフィールがお前の奥さんで、子供までいる事もな。ふざけるなよ衛宮切嗣！ お前がやろうとしているのは自分の妻を犠牲にし、さらには自らの子供に笑顔の無い未来を与えようとしているんだぞ！」

声を荒げずには居られない。怒らずには居られない。

アイリスフィールの犠牲、それだけなら認められはしないが納得はしただろう。それほどまでに二人の覚悟は固いのだと、時臣の時と同じように思っただろう。

だが、子供が居て、そしてその子供の未来すら奪うというのなら、もはや納得なんて出来るはずがない。

お互いに無言でしばし睨み合うも、彼に変化は無い。

「……願いを替える気はないのか」

「……ない。僕はもう、その苦悩は通り過ぎた。僕は僕の大切なモノを全て捧げてでも……この道を進む」

「なら……あなたは自分の敵だ」

掴んでいた服から手を放し、体勢がズレた桜ちゃんを抱え直して立ち上がる。

「……今晩で終わらせる。ギルガメッシュ、決戦の場所を決めよう」

「ふむ。ならば柳洞寺でいいだろう。綺礼曰く、あそこがもつとも聖杯降臨に適している。周囲の人間の撤去は時臣にでもさせる」

「お、王!」

ギルガメッシュの言葉にようやく我を取り戻した時臣だが、もうこっちは覚悟を決めている。悪いがあんたにはここで『落ちて』貰う。

「諦める遠坂時臣。ギルガメッシュに認められなかった時点であなたの戦いはもう終わっている」

「なん、だと」

自分の言葉を聞いた時臣は僅かに驚きの表情を浮かべ、意図してかそれとも無意識か、視線が僅かに下がり、その手の令呪を一瞥した。

「令呪でどうにかするか? 無駄だよ。言峰綺礼の令呪の件を思い出せ。アレはギルガメッシュが新たに与えたものだ。つまり、ギルガメッシュの財には令呪がある。ならば

『令呪を無効化』する財だつて持つているかもと、何故考え付かない」

自分の言葉に時臣が絶句する……本当に、哀れな魔術師だ。本気でこの英雄王を令呪ごとく縛り従えられるなんて思い上がったのか。

「仮に無効化する財はなくても解除する方法ならいくらでもあるだろうし、そもそもギルガメツシユレベルの英雄を自害させるなら令呪二画は必要だから使い切る前に殺されるだろう。そうだろうギルガメツシユ？」

「くくく、ああそうとも。流石は我を良く理解している。ああ時臣、安心していいぞ。お前が我の魔力タンクを最後まで勤めるといふのなら、その勤めに免じて我を謀った不敬を許してやろう。もつとも、聖杯は渡せないがな。まあ命が助かったのだ。また次の戦争まで精々励むがいい。ハハハハハ！」

時臣の絶望に染まった表情が相当お気に召したのか、ギルガメツシユが愉悦に歪んだなんともイイ笑顔を浮かべて大声で嗤う。

そして時臣の方は腹部の辺りを押さえながら燃え尽きたように力無く項垂れる。もうこれでギルガメツシユに逆らう気力も無くなったろう。

「衛宮切嗣、お前はセイバーとアイリスフィールを連れて来ることだ」

ランサーの念話からかなり経つが彼の令呪は消えていない。という事はライダーとセイバーの戦いはセイバーが勝つたと言うことだ。

「……僕が行く理由を聞いておこうか」

「分かっている筈だ。ここで提案を受けなければギルガメツシユと自分の陣営、つまりアーチャー、ランサー、アサシンの三体のサーヴァントを相手にする事になる。そして何よりお前の相手は自分じゃなく……アサシン」

「ハハハ」

アサシンに声を掛けると彼女は自分の隣に姿を現す。そんな彼女に尋ねる。

「彼女がお前達マスターの相手だ。アサシン、仮にこの二人のマスターを同時に相手し、令呪を使わず、更に生かしたまま五体満足で無力化するのにどれくらいかかる」

『できるか?』とは聞かない。彼女の強さと能力を考えれば魔術師二人程度造作も無く無力化できるはずだからだ。むしろ単純に殺すだけなら一秒も掛からない気がする。

「一秒もいません」

こちらの問いに自信に満ちた声色で即答していくアサシン。本当に頼もしい。というかあの条件での無力化に一秒かからないのか、凄いな。

そんな頼もしいアサシンの姿に、相對している二人は目に見えて焦り緊張してる。とりあえず威圧には成功したかな。

主導権は渡さない。考えも纏まらせない。ギルガメツシユと意見が一致し、味方となつている内を推し進める。

その一致している意見が、最後の戦いで自分がギルガメツシュの相手をするというものののだとしても！

「悪いがもうあんた達を氣遣う氣持ちは一切無い。こつちも全力で聖杯を取りに行かせて貰う。何でも有りならギルガメツシュとこつちの陣營の方が有利だ。衛宮切嗣、この決戦での正面衝突こそが、あんたにとつても最後にして最大の勝機のはずだ」

もつとも、ギルガメツシュが同意してくれているからこそ、こちらが用意した与えられた勝機な訳だが。

それは切嗣も理解しているのだろう。こちらの思惑通りに進んでいる事が氣に入らないのか、齒を噛み締めて悔しそうにこちらを睨みつけてくる。

そんな彼の視線を無視して振り返り、襖を開けて廊下に出る。

「……自分の目的はこんな馬鹿げた戦争を二度と起きなくさせる事だった」

「だった、か。では白野、貴様にも何か願いが出来たと？」

背後からギルガメツシュが興味深げな声色で尋てくる。

「さつき出来た。自分は聖杯を使ってこの二人の大切な者を生かし、二人には普通の人間としての人生を送って貰う。つまり魔術を使えなくさせる。回路の停止は無理だが破壊なら出来るからな。まあ人体にも影響は出るが、安心していい、治してやるさ」

「なに!？」

「力を失った以上、お前達が出来るのは普通の人間として一度は捨てた『父親』として『家族の為』に生きる事だけだ。そして父親として家族の笑顔に囲まれ、家族との幸福と愛情を感じながら——」

そこで言葉を切つて襖に手を掛けながら振り返り、改めて打倒すべき二人の敵を睨みつけながら宣告する。

「一生拭えぬ罪悪感と共に老衰しろ」

【聖杯問答サーヴァント編 前編】

白野が宣戦布告をした時刻から時は少し遡り、ギルガメッシュ主催によるマスター達による問答が行われていた頃、別の場所でもまた問答が行われていた。

白野達と別れたライダーとランサーはそのままアインツベルン城へと向かいそして……征服王が盛大に城門を戦車で薙ぎ払って突入した。

「——まあらしいと言えばらしい、ですね」

その様子を驚きつつもあの征服王ならこのくらいはやらかすなと納得しつつ、ランサーはゆつくりと開いた穴からラムレイと共に突入する。

「無茶苦茶だな貴様は」

「はーははどうせやるなら派手に行かんとな！」

「——つライダーにランサーだど!？」

門の破壊音を聞きつけて武装して現れたセイバーは階段の上から現れた二体のサーヴァントに驚きと焦りを覚える。

（まさかランサーとライダーが同時にやってくるなんて。いや、あの様子から察するに同盟を結んだのか？）

敵意も無く横に並ぶ二体を見たセイバーが一息に階段を飛び降りて改めて剣を構える。

「おっと！ 待て待てセイバー！ 余はまだ戦う気はない！」

「その言葉を信じるとでも。それに……」

セイバーがランサーに視線を向ける。

「……ふう。どうやらこの征服王は決闘の前に貴様と語らいたいらしい。私はその見届け人としてやってきたまで。今のところ貴様と戦う気はない」

セイバーの視線に答えるようにランサーが簡潔に事情を説明すると、幸いとばかりにライダーも口を開いた。

「その通りだセイバー。マスターの敗戦はサーヴァントである余が雪ぐが道理。だがただ戦うというのはあまりにも勿体無い。そこで戦の前に共に語ろうと言う訳だ。ほれ、この通り酒も持って来た故、存分に語ろうではないか！」

豪快に笑って宣言する征服王に、セイバーはどうしたものかと悩む。

（確かに戦の前にそういった事をする場合もあるが……それよりも何故もう一人の私はそれを受けたのかだ）

「……ランサー、貴様はその征服王の提案を受け入れたのか？」

「ああ。正直征服王はどうでもいいが、貴様の話には興味がある。故にマスターの許可

を得て単独でここに来たというわけです」

「……いいだろう。ただし、話し合いはここですて貰う。ここから一步でも出て行くな
らその時は、剣を抜く」

ランサーの答えにセイバーもまたランサーの話を聞いてみたいという思いが芽生え、
構えていた剣を降ろす。

「ううむ。もつと良い場所で語らいたかったが、まあ仕方ない」

ライダーが酒樽を抱えながら戦車から降りて戦車を消し、ホールの真ん中まで進んで
腰を下ろす。

「……アイリスフィール。私の傍に」

セイバーが二階に声を掛けると、様子を伺っていたアイリスフィールが慄きながらも
現れ、セイバーの傍に駆け寄る。

「セイバー……」

「大丈夫です。貴女は何があっても私が護ります」

セイバーとアイリスフィールはライダーの対面に座り、ランサーもラムレイから降り
て進み、中立を意味する為か二人の中間の座る。

三人が三角形の様に座り終えるのを見届けたライダーが酒樽の蓋を破壊して柄杓で
直接掬って一気に飲み干す。

「ん〜日本酒という酒は初めて飲んだが中々美味しい。さあ、お主等も」

ライダーが柄杓を向け、セイバーがまず応えてそれを受け取り酒を飲み、次にセイバーがランサーへ向け、ランサーは兜を消してから受け取って飲み干す。

「よし。これで余達は同じ酒を酌み交わした仲である。ただ一度の機会だ存分に語るとしようー」

「そうですか。ではライダー、ずっとあなたに尋ねようと思っていた事を尋ねましょう」
「おう。なんでも訊くがよい」

柄杓を受け取ったライダーは一人でどんどん酒を呷って行く。

「あなたの聖杯に望む願いとはなんですか？」

「余の願いか？ うむ、余の願いは……先の戦いで傷付いた我がマスターの傷の治癒と……その、受肉だ」

「受肉。ということはライダー、貴様は肉体を得てもう一度この世を生きる。と言うのか？」

「おう。余の本当の願いは世界征服。しかし聖杯なんぞにそんな事を叶えられてもこれっぽっちも価値が無い！ 故に、余は新た得た肉体で、命で、今度こそ天地の全てを制覇し尽くして見せるのだ！」

高らかに宣言するライダーに、アイリスフィールの心が少しだけザワついた。

（聖杯によつて世界を変える事に価値は無い……いいえそんな事は無いわ。だつて切嗣はその為に、それしか無いからこそ、聖杯を求めているのだから。それにしても、これがカリスマという力なのかしら。恐ろしいわね）

あまりにも自信に満ちたライダーの宣言に自分達の願いが正しいのかと思つてしまったアイリスフィールはすぐにゆらいだ心を引き締め直すと同時に、目の前の王のカリスマ性に畏怖を感じざるを得なかつた。

「さて、余が応えたのだ。ランサー、お主はどうなのだ？」

「私とマスターに叶えたい願いなど無い」

「なんと。お主のマスターもか？ では何故聖杯戦争に参加している？」

「聖杯戦争を終わらせ、今後一切行わせない為だ」

無表情で簡潔に告げながらランサーが鋭い視線をアイリスフィールに向ける。

彼女の視線を受けたアイリスフィールはその視線に恐怖して身体を震わせる。

しかしランサーはとくに何も言わずそのまま視線を前に戻す。

「我がマスターはその為だけに今日まで令呪を持ち続け、そしてこの戦場に赴いたのだ」

「それが……岸波白野の望みであり、令呪を持ち続けた理由……」

以前キリツグが言っていた疑問の答えがランサーから告げられ、アイリスフィールがその答えに動揺する。彼女は岸波白野がどんな目にあつたのかを知っている。知って

いるからこそ、どうしてその結論に到ったのかが気になったが、それを口にする前にランサーが話題を進めてしまう。

「さて、私の話はこれで終わりだ。次は貴様だセイバー、私に言ったようにライダーに教えてやるがいい。貴様の望みを」

ランサーが含みの有る言い方でセイバーへと話を振る。それを受けたセイバーは眉を僅かに顰めながらもはつきりと答えた。

「貴女になんと言われようと私の願いは変わらない。私の願い、それは祖国を救済することだ。そして我が故国であるブリテンの滅びの運命を変えてみせる」

セイバーの変わらぬ願いにライダーはなんと言ったものかと頭を掻く。

「……あくセイバーよ。運命を変えるというのはつまり、過去の歴史を覆す。という意味か？」

「そうだ。聖杯が真に奇跡すら起こす願望機であるのなら、私の願いは叶えられるはずだ」

セイバーのライダーへの返答を聞いたランサーが溜息を吐き、ライダーは先程まで楽しげだった表情を引き締め真剣な表情でセイバーへと向き直る。

「セイバーよ。一応確認するが、そのブリテンとか言う国が滅んだのは貴様の時代の話であろう。貴様の治世であったのだろうか？」

「そうだ。だからこそ私は王としてあの結末を許せず悔やむのだ。あの結末を変えたいと願うのだ」

「……理解しているのかセイバー、いや騎士王。貴様が言った今の言葉は、己に付き従った全ての者を侮辱するものだと言う事を」

「なっ——」

「当然であろう。貴様は王として先頭に立ち、民を先導し、国の指針となった。そんな貴様に付き従った者達がいた。であるならば、貴様は自らが招いた結果を受け入れなければならぬ。違うか、騎士王よ？」

「馬鹿な。王が滅びを受け入れていいはずが無い！ 否、むしろ私を信じて付いて来てくれた者達がいるからこそ、王である私が滅びを容認していいはずが無い」

「いいや受け入れ容認するのが王だ」

「っ!？」

セイバーは立ち上がり叫ぶようにライダーの言葉を否定するが、すぐさまそのライダーに即座に否定されて息を呑む。

「王は結果を受け入れねばならぬ。それが例え己が思い描いた物でなくてもだ。それが全ての王に課せられた最初にして最後の責務だ。その責務を果たせぬ者を暗君と呼ぶ。そして余はそんな者を王とは認めぬ」

ライダーの言葉にセイバーはなんとか言い返そうと頭を働かせる。だが、浮かぶ言葉の全てが論破される未来しか思い描けず口が閉じる。

「それでも、それでも私はっ！」

歯を食いしばり何かに耐えるセイバーのその姿に、ランサーは無言のまま目を閉じ、ライダーはやれやれと言い感じに首を振る。

「……やれやれこれだけ言つても認めぬか。であれば仕方なし。ここからは力を持つて証明するしかあるまい」

ライダーは残りの酒を一気に煽ると空の酒樽を投げ捨て城門の入口へと戻る。

それを見届けたセイバーはすぐに立ち上がってアイリスフィールを抱えて階段まで跳び、剣を構える。

そしてランサーは……ラムレイに跨り宙へと上がる。

それを見届けたライダーは一度領き、腰に携えた剣を抜き、高らかに宣言した。

「では行くぞセイバー！ 我が宝具を持つてして貴様に王の在り方を示そうではないか！」

それを見届けたライダーは一度領き、腰に携えた剣を抜き、高らかに宣言した。

そして——世界が塗り替えられた。

地面はどこまでも続く砂漠となり天井には晴れ渡った青空となり空気はまさに熱砂

独特の熱を帯びる。

「これは固有結界!? そんなライダークラスがこんな魔術を!」

固有結界。

術者の心象風景によつて世界を一時的に塗りつぶす結界を展開する魔術。

現代では魔法に最も近い魔術の一つであり、協会では魔術の到達点の一つに定められながら禁呪の一つとされている。現代の魔術師に使用者が居れば間違いなく封印指定に属する魔術である。

そして固有結界の能力は使用者によつて違う。

世界が変わると同時にライダーの背後に次々と『戦士』達がその姿を現して行く。その数はもはや目視で数えるのも馬鹿らしくなるほどであり、既にライダーの背後の砂漠はその大勢の兵隊のせいで覗くことすら出来ない。

そして全ての兵が出揃ったのを認識したライダーは傍に現れた愛馬のブケファラスに跨ると、両手を高らかに挙げて声を張り上げる。

「これこそが我が王道の答え! 肉体は滅び、その魂は英霊として「世界」に召し上げられ、それでもなお余に忠義する伝説の勇者たち。時空を超えて我が召喚に応じる永遠の朋友たち。彼らとの絆こそ我が至宝! イスカンダルたる余が誇る最強宝具

『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』なり!!」

固有結界『王の軍勢』。

その能力を簡潔に言えばイスカンダルの嘗ての臣下達をサーヴァントとして現界させるというもの。中にはイスカンダル以上の能力を持つ英霊もいるが、イスカンダルの限界として彼等の宝具までは再現できず能力も落ちていくクラス等も保有していない。あくまでも今の彼等は『王に仕える戦士』なのだ。

そしてライダーのこの固有結界は彼一人で維持している訳ではなく、この場に居る兵全員で維持している。それはつまり、ここにいる全ての者が『同じ心象風景を抱いている』という証明に他ならない。

この固有結界は王と戦士が互いに強い絆で結ばれなければ到れない極地。

後に暴君と恐れ罵られた一人の王は、しかし戦場に赴く戦士達にとってはまさに、太陽のように眩しく、熱く、死した後でも決して色褪せる事無く、焦がれ魅入られる存在であった。

「さあセイバーよ！ 余は己の王道を示した！ 己が王道が正しいと思うのならば貴様も示すがいい！ 行くぞ勇者達よ！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

蹂躪の波が走る。

標的たる騎士王は……今だその『理想聖劍』を示せずにいた。

「——馬鹿者が」

その騎士王の姿に、堪らずもう一人の暴君が愛馬を走らせた。

【聖杯問答サーヴァント編 後編】

「いったい貴様は何をしている」

迫る軍勢を前に聖剣を抜かぬセイバーの傍にランサーが降り立つ。

セイバーは一度ランサーへと視線を向け、次に己が握る今だ不可視のままの聖剣を見詰める。その視線には明確な戸惑いと迷いがあった。

「……ちつ。いいですかもう一人の私、一度しか言いませんからよく聞きなさい」

無言を貫くセイバーに舌打ちしたランサーは忌々し気に顔を顰めながらも、敵ではない者に向ける口調で己の胸の内を語る。

「私は貴女の願いが許せないだけで貴女の王道は間違っていないと思っっています」

「ランサー？」

ランサーの言葉の意味が分からず戸惑うセイバーを無視してランサーは続ける。

「むしろよくもまあ耐えられたと賞賛します。そして間違えないでください。あの王の誇りは『戦士と共にあること』でしょうが、貴女の誇りは——」

ランサーはそこで言葉を切ってその手に持った槍をアイリスフィールに向けた。

「——弱き者を外敵から守ること。だったはずですよ」

「セイバー……」

「アイリスフィール……すみませんでした」

セイバーが聖剣を両手で掴み、纏わせていた結界を解く。

次の瞬間風の衝撃が砂塵を巻き上げ黄金に輝く剣が、世界で最も有名な聖剣がその姿を現す。

「私が負ければ貴女の思いも無駄になる。それは認める訳にはいかない。いまだ迷いはある。だが元より私が聖剣を振るうのは『誰かのため』ならば何を躊躇う必要があつたのか……ランサー」

「なんです?」

「感謝する」

「気にすることはありません。貴女は私の手で殺したい。それだけの事です」

そんな短いやり取りの中、セイバーの聖剣を見てライダーが笑い声を上げながら命令を下す。

「ははは! ようやくやる気になったが流石にその一撃はやばそうだ。故に止めさせて

貰う! 投擲せよ!」

ライダーの命令に従い戦士達が持っていた槍を投擲する。

「アイリスフィール、辛いのは承知ですが『鞘』を返してもらえますか」

「ええ。いいわ」

アイリスフィールの身体から聖劍の鞘、アヴァロンが抜け落ち彼女がその場に崩れるように伏し、セイバーはその姿を沈痛な表情で一瞥した後、その鞘に聖劍を納めた。

次の瞬間、セイバーを中心に周囲を黄金の障壁が展開してその周囲の槍だけが全て弾かれる。

「なんと!?!」

これにはさすがのライダーも驚き眼を見開く。

セイバーの聖劍を最強の矛とするなら、『聖劍の鞘』は最強の盾そのもの。

宝具の名は『^{ヴァ}全て遠^{ヴァ}き理^ロ想^ン郷』。

真名を開放すればあらゆる物理干渉、魔法、六次元までの次元干渉、それら全てを防ぐまさに『この世最強の守り』と言っても過言ではない性能を誇る。

『^エ全て遠^クき理^ス想^ス郷』で迫る槍を弾き飛ばし、セイバーは聖劍を高らかに掲げ、その魔力を開放して行く。

その神々しく気高い姿はまさに古の騎士王のそれであり、傍に駆けつけたランサーに抱きかかえられたアイリスフィールは純粋に『綺麗』だと思いい見惚れる。

『^エ約束^スされた——』

セイバーは聖劍を掲げ、身体を大きく捻り、そして振りかぶる。狙いは直進する軍勢

の先頭であるライダー！

「——勝利の剣カリパー！」

放たれるは巨大な極光の奔流。それが一直線にライダーに迫る。

迫る聖剣の範囲が広い事に気付いたライダーがブケファアラスを横に向け空へと上がるが完全に効果範囲から抜ける事が出来ないと悟り顔を強張らせる。

そのとき、ブケファアラスがライダーへと一啼きする。

「——つ大義であつた我が友ブケファアラスよ！」

ライダーは即座に愛馬の意図を察し、ブケファアラスを踏み台に全力で横に跳躍しながら剣を振り下ろす。

「『神威ゴルディアス・ホイールの車輪』！」

ライダーの真下に戦車が現れ、ライダーはそのまま台に飛び乗り手綱を掴むと同意に宝具を開放する。

「『遙かなる蹂躞ツイア・エクスブクナテイオ制覇』！」

蹂躞走行の加速によって、ライダーがギリギリ極光の光を避けると同時にブケファアラスと王の軍勢が飲み込まれる。

セイバーの『約束エクスされた勝利カの剣リパー』。

真名を開放すれば己の魔力を光に変換し、それを集束して高速で放つ斬撃。というか

その性質と威力、速度から完全にチームである。全力で魔力を溜めて振るえば、その威力は絶大であり、殆どのサーヴァントでは太刀打ちできない。

「むう。これは……」

なんとか逃げ切れたライダーであったが、空から己の軍を見て唖る。そこにはまるでモーゼが海を割ったかのような『まっすぐな道』が出来ていた。

何故ライダーがそんな顔をしたのか、その理由はすぐに判明する。突然イスカンドルの固有結界に輝が入り、そして……砕け散った。

「……………これは？」

「……………余の『王の軍勢』は余だけではなく盟友達で維持する世界。あれだけの被害が出てしまつては維持する事もままならん」

周りの景色が元のアインツベルン城に戻ると、ライダーは真剣な表情で固有結界が解けた理由を説明し、セイバーの前に降り立つ。

「まだ続けますか」

「応とも。余は征服王であるからして、死ぬ最後のその瞬間まで進む事を止めぬ。何より、余の凱旋を待っている者達も居る。故に、最後まで付き合つて貰うぞセイバーよ！」
「……………分かりました。アイリスフィール」

セイバーは鞘をランサーに抱えられたままのアイリスフィールの身体に戻すと、聖剣

を開放したままライダーの前に対峙する。

「……アインツベルン、ここから少し離れます」

「……分かったわ」

聖剣の鞘を体内に納めたアイリスフィールを抱えたまま、ランサーはラムレイに跨る。

セイバーもライダーも互いの剣と騎馬の宝具を知り得ている。セイバーが考えるのは一瞬のチャージであの戦車を打倒できるかどうか。ライダーが考えるのはあの溜めの長い宝具を発動する前に倒せるかどうか。

(そのチャンスを掴んだ方が勝つ)

そして二人が空に上がると同時に、騎士と騎兵の最後の戦いが始まった。

「……ちようどいい、アインツベルン。貴女に訪ねたいことがあった」

ランサーが眼下の戦闘を見守りながらアイリスフィールに話しかける。

「何かしら？」

「……貴女が今回の聖杯ですか？」

それはどこか確信を持ったような言葉だった。

ランサーには直感の上位スキルである『最果ての加護』がある。

直感を戦闘時のみとするなら最果ての加護は日常にまでその効果は及び『予感』を感

じ取る。

その予感が、そして先程の不調が、ランサーをその答えに導いた。

「……ええそうよ。今回の聖杯は私。と言うよりも私の心臓ね」

アイリスフィールはどの道この戦いの決着が付けば自分自身は動くことすら出来なくなるかと悟り、先程のセイバーの一件もあつてランサーに素直に答えた。

「私は、今回の戦いで死ぬ定め。だからこそ、私は愛する夫と娘の為にこの命を使うと決めたの」

「娘？ 貴女には娘が居るのですか？」

アイリスフィールはしまったと内心思ったが、言ってしまったものはしょうがないと言葉を続ける。

「ええ。私と切嗣の娘。そして私達が失敗した後の聖杯の器……私は娘を聖杯になんてさせない。そして切嗣の願いが叶った世界で、せめてあの二人だけでも幸せになって欲しい。それが私が抱く本来の願いよ」

「無理ですよそんなの」

アイリスフィールの言葉にランサーは珍しく悲し気にその目を細め、ゆつくりと頭を振った。

「貴女の境遇には同情しましょう。子を守りたいという親の愛も理解しましょう。です

が断言します。衛宮切嗣が勝利した時点で、貴女の娘は唯一『平和な世界で笑わない』存在となるのです」

「な、なんでそんな事が分かるの」

「……私がおもひ聖杯の奇跡を知っている身で生き残って帰ってきた父に出会ったらこう言います。『どうしてお母様を選んでくれなかったの』と」

ランサーの言葉に、アイリスフィールは目を見開き、その脳裏に自らの死を嘆く娘の姿が過ぎる。

「貴女の娘が、世界の平和を願いましたか？ 違うはずです。貴女の娘はただ、あなた達が傍にいて欲しいと願っていただけではないのですか？」

『二人とも早く帰ってきてね』

見送りの際に寂しそうに、見送る愛娘。彼女は言葉通り『二人』で帰ってくることを望んでいた。

それは叶わないと知っている。知っているからこそアイリスフィールはその言葉に曖昧な笑顔を浮かべることしか出来なかった。

「だって、仕方ないわよ。どうしたって私は死ぬ。だからこそ私と切嗣は……」

「聖杯が真に願望機なら、貴女一人の蘇生くらい可能でしょう。もう一度悲観せずに己が『生還した』ならばどういった未来が欲しいのかを考えてみては？」

「私……私……私……」

ランサーの言葉にアイリスフィールは俯いてしまう。

その様子に、ランサーは己の甘さに溜息を吐く。

（まったく。マスターの甘さが移りましたかね……そして、どうやら決着がつくみたいですね）

『遙かなる蹂躞制覇』！』

先に技を発動したのはライダー。距離とすれば数十メートル。しかしライダーの宝具ならば一瞬でセイバーをひき殺せる距離……だが、惜しむらくはその数十メートルが命取りだった。

『約束された勝利の剣』！』

時間にすれば数秒にも満たない距離。しかし既に戦いながらエクスカリバーに魔力を送っていたセイバーは、全力ではなくともその数秒で剣を振り下ろす事に成功する。

眼下で放たれた光と雷の激突。凄まじい閃光と魔力の余波による衝撃からランサーは聖槍を振るってそれを防ぐ。

そして土埃の舞う中——立っていたのは身体に幾つもの傷を負い、魔力消費によって疲れたのか剣を支えに立つ騎士王と、その背後で戦車の左側と自らの左肩から左足の腿までを抉るように切り裂かれたライダーであった。

地面にはセイバーの近くから二本だった轍が一本になっていた。

「うむ、ままならんものよ。だがまあ、先刻よりはましな目をしたお主に討たれのるならば、まあ良しとしよう」

「征服王……貴方の考えを、私は認められません。ですが、貴方と貴方の家臣との関係は……とても羨ましく、そして素晴らしく思います。貴方と言う王を知れて良かった」

「がはは。そこまで言うのなら、願いを変える気にはなつたのか？」

「……分かりません。ですが、きつとアレとの戦いで……何かを得られる気がします」

空に浮かぶランサーに視線を向けるセイバー。そんなセイバーを苦笑を浮かべて一瞥したライダーは己の体が消滅しかけている事に気付いてランサーへと声をかける。

「すまんがランサー！ お主のマスターに願いが無いなら余のマスターの身体を治してやってくれ。ああ、生活に不自由しない程度で良からう。あ奴は調子に乗りやすそうだったからな。不自由なくらいが丁度良い」

「マスターには伝えておきます。見事な決闘でした征服王イスカンダル。良き旅を」
「うむ。此度の遠征も心躍る物であった。では新たな戦場にいざや征かん
『彼方ト、ファイこそ栄えロ、テイあり』！」

傷付き消滅しかけたその身体でも、征服王は最後まで豪快に笑い、消えていった。

（決着、ですね。ライダーとはもう少し語らいたかったです、致し方なし。マスターに

報告するとしましょう)

『マスター、こちらは終わりました。結果は——』

『ランサー、その前に一つ訊きたい。そこにアイリスフィールはいるか?』

切羽詰ったような、どこか苛立ちを含んだような白野の念話に、ランサーは訝しく感じながらも問われたことに答える。

『ええ。その事で報告があります。アイリスフィール、彼女が今回の聖杯でありそして、切嗣の妻で娘も居るそうです』

『お前は自分の奥さんを犠牲にするつもりか!』

怒号のような叫びと供に念話が途切れる。

ランサーはその一言で現在自分のマスターが衛宮切嗣と接触していることを悟る。

「……どうやら私のマスターは現在、衛宮切嗣と共に居るようですね」

「何で……うっ」

ランサーが地面に降り立つと同時にアイリスフィールが呻き苦しみます。

「アイリスフィール!？」

傍に降り立ったランサーの元に駆け寄るセイバーにアイリスフィールを預けたランサーが尋ねる。

「いったいどういうことです。そもそも何故彼女は苦しんでいる。聖杯の器である事と

関係があるのですか？」

「……聖杯の魔力は元々はサーヴァントの魂を還元したもののよ」

苦しげに説明するアイリスフィールに合点が言ったと頷くランサー。

「なるほど。あの征服王レベルの魂の格ともなればかなりの魔力でしょう……もはやその様子では聖剣の加護があっても自ら動く事もできないでしょう」

「……アイリスフィール」

「いいのよセイバー、元々分かっていたことなのだから。それよりランサー、さっきの言葉の意味は……」

『ランサー』

アイリスフィールが何かを尋ねようとしたその時、ランサーに白野からの念話が届き、ランサーが手でアイリスフィールを止める。

『どうしましたマスター』

そしてランサーは白野に起きた出来事を知り、その決意と覚悟、そして新たに抱いた願いを知り苦笑する。

（結局あなたは奇跡すらも誰かの為に使うのですね）

『了解しました。こちらの事情は後ほど』

『ああ後で合流しよう。そこからだと寺の場所は……』

念話を終えたランサーはラムレイに跨るとアイリスフィールとセイバーを見下ろしながら先程の白野の件を簡潔に伝えた。

「喜ぶといいアイリスフィール。どうやら我がマスターは貴女達家族を救うつもりらしい」

「なんですつて?」

「どういう意味だランサー?」

「詳しくは戻って来たそちらのマスターにでも訊いて下さい。ただ確定しているのは、アーチャーを含めたマスター同士の話し合いの結果、今夜、聖杯戦争最後の決戦が行われると言うこと、そして……」

ランサーは振り返り破壊された城の出口へと向かいながら伝えた。

「私のマスターが勝てば貴女は人間として生きられるということですよアイリスフィール」

告げる事は終わったランサーは霊体化してその場を去り、残されたセイバーは彼女との戦いを思い、アイリスフィールは生き残れるかもしれないという考えでも居なかつた可能性に、何とも言えぬ感情を抱きながら意識を失った。

【希望と言う名の壁】

「もつきゅもつきゅ」

「もぐもぐ」

目の前で横並びに座ってハンバーグとお子様ランチを咀嚼する二人を眺める。

片方は先度までと違った薄紅色のフリルの着いた桃色の上着に紺色のスカートに黒い靴を履いた桜ちゃん。

そしてその隣には黒を基調としたゴスロリファッションのランサー……いや、元々が美人で色白だからガチで西洋人形みたいで似合っただけ……その体格だと凄いい目立っていますよアルトリアさん!?

そして自分の横には黒のスーツを纏って眼鏡をかけたなんというか『どこかの企業の秘書の方ですか?』と言ってしまいたい程の出来る女オーラを放つアサシン。組んだ足がセクシー過ぎませんかねえ?

そして自分は服装はそのままに……現在『私』の姿に女体化しております。あ、女体化といってもただの変化ですのであしからず。

だって合流してファミレスに行くって言ったらランサーが自分も絶対に行くって聞

かなかったんだよ。だから女体化してアサシンと一緒に服を買いに行く事になったけど、流石に桜ちゃんとは違って大人の女性の下着やら服やらを売っている店に男の姿で入る勇氣は無かった。

因みにランサーのスリーサイズはアサシンが測った。『あ、私は見るだけで相手の身長とスリーサイズはある程度把握できます。触れれば確実に』と、ちよつと得意気に言っていたのは可愛かった。

ついでに桜ちゃんとアサシンの服も新調する事にした。桜ちゃんの服と下着はデパートで幾つか買ったんだけどせつかくだからね。

まあ今夜はどうせ『二人』で戦うから、今の内にも慣れて貰う良い機会だったと思う。

「マスター、今度はこのジャンボエビフライステーキセットです」

「残念ですが我が王。先程の注文で我が蔵の財が底をつきましてございます」

そう言つて自分は空の財布を見せる。因みにデザートは全員注文済みであり、お金は伝票と一緒にアサシンに渡してある。とうるかランサーよ、貴女他の人が一皿注文したのに対して三皿注文しておきながらおかわりですか。

「馬鹿な……」

絶望と言つた表情をさせるランサー。そんなにか……仕方ないなあ。

「もう、自分の残ったステークあげるから我慢して」

「……ランサーお姉ちゃん、桜のハンバーグもあげる」

「マスター、桜……では桜の一口だけ頂きます」

そう言つて桜ちゃんのハンバーグを一口食べたランサーは桜の頭を撫でつつ、空いている方の手で自分のステークとライスを皿ごとかつさらつて行つた。そのうえで既に食べ終えているアサシンをチラチラと見ている。

「……残つた珈琲でも奪うおつもりで？」

「む。確かに珈琲はいりませんね」

苦いの嫌いだものねランサー、そしてアサシンが妙に早食いだつたのはこれを見越してのことか。なんと言うか流石です。

色々と要領の良いアサシンに感心しながら二皿目の山盛りのポテトと水で腹を満たす。まあ桜ちゃんもいつもより嬉しそうな感じだし、二人も現界して現世を満喫しているようだから別にいいか……まあ監視はされてるけどね。

ここに来るまでに使い魔二体からの監視を受けている。まあ、双子館に着く前にアサシン達に対処して貰うつもりだ。

とりあえず話し合いは食事が終わつたらかな。

「——と言うのが、向こうで起きた出来事の詳細ですマスター」

「そう。こっちはさつき教えた通り」

食事も終わった所で改めてお互いに起きた出来事の説明と確認を行う。にしても、やはりアーサー王は強いな。それに聖剣の鞘か……。

「聖剣の鞘は厄介ね」

「ええ。真名開放によるあの結界はまさに無敵です。私の槍ですら突破するのは不可能でしょう」

「しかし同一人物であるランサーになれば使用できるのでは？」

アサシンの言葉にランサーが顎に手を当て少し考えてから答えた。

「聖剣の鞘自体の効果、治癒と再生ならば可能でしょう。あれは『アルトリアの魔力』に反応しますから。しかし真名開放は、私の感ですが無理だと思います」

「治癒に再生……聖杯の器である心臓……ふむ……」

聖剣の鞘があれば聖杯が無くてもなんとかなるか……。

正直な話、聖杯でも肉体と魂が無くなった存在の完全蘇生が可能かと問われると怪しいと思っている。

アイリスフィールの話が本当なら彼女は最終的に聖杯その物になってしまいうだろう。

そうなると肉体は無くなってしまふ。まあ魂と精神が無事ならば魔力で肉体を作ればいいのだが、魂と精神が消えてしまうと『この世界のアイリスフィール』の蘇生は厳しい。

……全てはセイバー陣営とギルガメッシュ次第か。運が良ければアイリスフィールを戦闘前に助けられるかもしれない。

ただその場合、こつちが戦いに負けた時の新しい聖杯の器は……。

「……まあ今はギルガメッシュについてが先決ね」

とりあえずアイリスフィールについては現場についてからという事にして次の話題に移る。

「その事ですぐマスター、本当にあの英雄王と戦うお積もりで？」

「ええ。というかそういう暗黙の誓いがあるからこそ、英雄王はこちらの発言に乗ってくれた訳だしね。それにセイバーの相手はランサーにして貰うしかない。そしてギルガメッシュの宝具とアサシンは致命的に相性が悪い。となると彼の力や能力、性格を理解している自分が相手をするのが一番勝算が高いのよ。人間だからサーヴァント相手よりも慢心してくれると思うし」

神様どうか！　どうかエアだけは抜きませんように！

心の中で数少ない信仰している神々に最終決戦でギルガメッシュがエアを抜かない

事を祈り願う。

ただでさえ突破すべき死線が多いのに更に増えたら堪ったもんじゃない。

まあ個人的には雑種相手にギルガメッシュがエアを抜く可能性は低いと見ている。よしんば抜いても防ぐだけでぶっぱまではしないとと思う。

「アサシンは当初の予定通り他のマスターの相手をお願い。令呪は出来れば使わせないで、アレは一種のブースト装置だからね」

「了解ですマスター」

「よし。それじゃあ話し合いはこんなもんかな。双子館に帰って準備をしましょう」

「ところでマスター」

「ん？」

立ち上がった瞬間にランサーから声がかかり首を傾げる。

「その姿だと口調が若干変わるのは何故です？」

「どうも女性の姿だと性格が『女性より』に引つ張られちゃうんだよなあ。まあ分裂した時よりはマシだよ。分裂時は今と口調や一人称が全然違うから」

「分裂？」

首を傾げる三人に肩を竦めて見せながらデザートが来てから張っておいた人払いの結界を解いて会計を済ませてファミレスを後にする。

そして商店街を歩いている訳だがすぐ目立つ。まあ仕方ないだろう。服までは靈体化できないしなあ。

「……お兄ちゃん、あつ、今はお姉ちゃん？」

「アハハ、まあそうね今はお姉ちゃんね。それで何かな桜ちゃん？」

手を繋いでいる桜ちゃんから声が掛かって振り返ると、桜ちゃんは口元に笑みを作つてこちらを見上げていた。

「ありがとう」

「どうぞ致しまして」

お礼を述べる彼女にそう答えると、桜ちゃんは後ろを振り返りながら呟いた。

「……また、みんなでごはんを食べに行けるかな……」

『みんな』と言うのが誰を指しているのか、そんなのは考えるまでも無いだろう。

「ちよつと時間は掛かるかもしれないけど、桜ちゃんが諦めなければきっと叶うわよ。自分が保障するわ」

「……うん」

寂しそうにする彼女の頭を空いている手で軽く撫でてから改め歩き出す。とりあえず隙あらば遠坂時臣の魔術師としてのプライドは徹底的に折ってしまおう。そうすれば少しはこつちよりの考えになって良いパパにでもなるさ。

改めて今夜の決戦に対して強い決意を誓いながら、みんなでアジトへと帰宅した。



白野が桜達と食事をしていたその時、アインツベルン城の一室では重苦しい空気で満たされていた。

「アイリ」

「お帰りなさい切嗣」

ベッドに横たわりながら帰ってきた切嗣に笑顔を浮かべるアイリスフィール。

切嗣の姿を見てセイバーはアイリスフィールの傍を離れて切嗣と入れ替わるように扉の傍の壁に立つ。

切嗣は部屋にあった椅子を引き寄せてアイリスフィールの傍に座り彼女の手を握る。

「身体の調子はどうだい？」

「セイバーが直接私に触れて聖剣の鞘に魔力を送ってくればまだ動けるけど、それ以外ではもう自分一人では歩けそうもないわ」

「そうか……」

「……ねえ切嗣、私達は……間違っていないわよね？」

「……どうしてそんな事を聞くんさい？」

「ランサーに言われたの。私が死んだら、イリヤは幸せになれないって」

「……僕もね。似たような事を岸波白野に言われたよ」

二人はお互いに困った表情で見詰め合う。切嗣はあの場では弱みを見せないためにああ言ったが内心ではかなり揺れていた。

当然と言えば当然だろう。それほどまでに切嗣の中で妻と娘の存在は大きかった。否、大きくなり過ぎていた。かつて供に戦場を駆けていたパートナーの舞弥が内心で『優しくなってしまうた』と心配するほどに。

「私は貴方の夢を応援すると、その為に死ぬと誓った。それは嘘偽りない気持ち。でも、イリヤが産まれた。あんなに嬉しい事は今まで無かった。イリヤと貴方と過ごした数年は私にとつての宝物だった。その宝物だけで良かった。未来の無い私にはそれだけで……なのに、なんで、どうして……今更『未来』なんて希望が現れるの……」

「アイリ……」

アイリスファイルが切嗣へ両手を伸ばし、切嗣がそれを受けて彼女の身体を起こして抱きしめる。お互いに抱き合いながら、アイリスファイルは泣く。

「怖い。恐いの。我慢していた。宝箱を閉じて見ない様にしたの。これしかないんだ。しょうがないんだって。なのに、希望が無理矢理宝箱を開けて私に晒すの。イリヤの過

去の笑顔を。そしてイリヤの未来の涙を。ねえ切嗣、私はどうすればいいの？ 分からない。知らない。こんな気持ち」

アイリスフィールの言葉を切嗣は強く抱きしめながらただ黙って聞きながら『パンドラの箱』を思い出していた。

『決して開けてはいけない物』。アイリスフィールにとってそれは遙か昔に捨てた『三人で生きて行きたい』という願望。

しかし彼女は誰よりも切嗣と言う男を理解していた。

彼が平穩を、幸せを感じれば感じるほど『死にたくなる程の苦悩を感じる』という事を見抜いていた。

誰よりも傷付いてきた彼にこれ以上そんな思いをして欲しくない。それもまた彼女の偽り無き願いであった。

己の中の二つの願望と封じていた生存意欲がぶつかり合い、アイリスフィールの心を掻き乱していた。

だがそれは切嗣も同じであった。

切嗣として自分の願いを叶えるには『また』家族を犠牲にするしかない、ずっと自らに言い続けてきた。そうしなければ……彼は立つ事ができなかった。

しかし目の前に『自分達を救う』と宣言する存在が現れた。

切嗣自身の行いを怒り、彼の家族の為に聖杯を使うと言った一人の青年。確かにそんな存在は彼にとつても『希望』であつた。

しかし『希望』という存在が必ずしも歓迎されるとは限らない。

彼等にとつては正にその『希望』こそが自分たちの前に立ち塞がる『壁』に他ならなかつた。

(アーチャーはああ言つたが、冬木の聖杯が必ずしも奴の言つていた聖杯の機能と同じとは限らない。だが、アイリの居ない世界で……イリヤは笑つてくれるのか?)

笑うだろう。と切嗣は考える。何故なら彼の考える世界が実現するなら不幸な人間などいないのだから。そう『創り変える』のだから。

だがそれは同時にイリヤスフィールという存在からアイリスフィールという存在を、その思い出を奪うと言う事でもある。

(何故、どうして……どうして今更僕達の前に現れたんだ!)

降つて湧いた希望という理不尽な見えざる存在に、切嗣は怒りを覚えずには居られなかつた。もつと早ければ掴んだのに。もつと遅ければ振り払えたのに。

そんな二人の痛ましい姿を見詰めていたセイバーは二人と同じように苦悩した表情で天上へと視線を移す。

(私は……間違っているのか?)

ランサーとライダーという自身とは違う王道を体現する王との邂逅と対話を経たせイバーは疑問を抱いていた。

もう一人の自分自身であるランサーは言った『間違いでなかった』という言葉、他の誰でもない自分自身に言われた言葉だからこそ、セイバーの心に響き渡った。

(では受け入れられるのか？ あれ誰も報われない結末を……)

セイバーは目蓋を閉じ苦悩を現すかのように眉を顰めながら思考し……溜息を一度吐き、大きく一度深呼吸する。

目蓋を開けたセイバーの眼には未だ迷いはあるが同時に力強いものに変化し、真剣は表情で二人の傍に近寄った。

「アイリスフィール、切嗣、話があります」

セイバーの言葉に二人が顔を上げる。

「正直に言います。私は、自らの望みが正しいのか分からなくなってしまいました」
「セイバー？」

セイバーの言葉に、アイリスフィールが涙を浮かべたまま困惑の表情を浮かべる。

「こんな気持ちではきつとランサー、もう一人の私には勝てない。故に次の決戦、私はライダーと戦った時同様に、私は私の望みの為ではなく私の理想に殉じて振るおうと思いません」

「理想……」

セイバーの言葉に初めて切嗣は素で反応を見せる。

「私は二人がどんな答えに到ろうとも、この剣を二人の為に全力で振るう事を誓います。だから私や他の事は気にせず、残りの時間を二人で過ごし、考え、答えを導き出してください」

セイバーはそれだけを伝えたと『外で待っています』と言つて部屋を退室しよう背を向けてドアノブに手をかける。

そんなセイバーの後姿に、切嗣が声をかけた。

「セイバー……すまない」

それは切嗣からセイバーへの初めての感謝の言葉であった。セイバーは驚きを感じながらも、険しかった表情を穏やかなものに変えながら『いえ』と短く答えてから部屋を出て行った。

そして残された二人はそれまで別行動によって空いた時間を埋めるように過去を、未来を、想いを語り合つた。

【二人の白野】

間桐桜にとってこの二日はとても幸せなものであった。

かつては世界の全てに絶望し色褪せた世界で生きて行くのだと諦めていた。

そんな彼女を救ったのは雁夜と白野だった。

桜は最後に見た雁夜の姿になんとなくもう会えない様な予感を感じた。だからこそ、あのとき自らができる精一杯の感謝を述べた。

そして桜は雁夜の言った通りの『優しい魔法使い』の下で日に日に自らの世界に色が、熱が戻って行くのを実感していた。

「ん？」

夕食を食べ終えて眠っていた桜が目を覚ます。

「……お兄ちゃん？ それにお姉ちゃん？」

「おろ？ 起こしちゃったかな？」

「ごめんなさい。うるさかったですか？」

詰襟の茶色の蘭服。左手腕には円形で独特な青紫と金を基調とした装飾の鏡がついた銀色の籠手。腰のベルトの右側には西洋の小剣と紅葉の形の扇。左側に東洋の剣。

その上から白黒のリバーシブルの襟裾の長い外套を黒を外側に羽織ったキシナミ。

その隣ではキシナミと同じ詰襟の茶色の蘭服。腰のベルトの右に筒状の機械と数本の短剣短刀。右手首には爪がついた紐状のブレスレット。キシナミと同じく白黒の外套を黒を上にして羽織り、襷掛けに納められた白と赤と金を基調とした独特の形状の大剣を背負うはくのみ。

そんな二人の白野が申し訳なさそうな顔をさせて桜を見詰める。

元々岸波白野はムーンセルが並行世界の『俺』と『私』という二人の岸波白野の記憶と経験と能力を合わせて改めて創りだした存在である。その合わせられた精神情報を二つに分割して物質化しているのが現在の二人と言う訳だ。

コードキャストの名は《Exc^Bode：もう一人の自分》。

分かり易く言ってしまうえば実体を持った分身の術の様なものである。

もつとも分身の術と違うのはどちらもが本体であり魔力は現在の総量を互いに半分にした状態。更に受けたダメージは分裂している時にはお互いに干渉しないが、一人に戻った時に二人分のダメージが反映される。しかし手数は倍になるのでメリットも勿論大きい。

元々白野はこのコードキャストでギルガメッシュの相手をするつもりだった。そのため双子館についてすぐに桜達にも説明した上で二人に分かれて準備をしていたとい

う訳だ。

そしてそんな二人の姿を見て、桜は唐突に雁夜の事を思い出し、気付けば二人の手を握っていた。

困惑する二人。そんな二人を見上げながら、桜は一言訊ねた。

「……戻ってくる？」

「……………」

桜のその言葉に二人はしばらくお互いを見詰め、頷き合うとその場に屈んでキシナミは桜の頭を優しく撫で、はくのんは彼女の両手を優しく包み込んだ。

「大丈夫。必ず帰ってくるよ」

「……………ランサーお姉ちゃんとアサシンお姉ちゃんも？」

「ええ、私達みんなで」

「ええその通りですよ桜」

桜の言葉に霊体化を解いてランサーとアサシンが姿を現し頷いて答える。

「……………約束」

「うん、約束だ」

桜が小指を差し出し、そこに代表してキシナミが同じく小指を差し出し互いに指切りをする。

「そうですね。ではこれをあげましょう」

はくのんが空間から自分達が着ている物と同じの白黒の外套を取り出してそれを桜に手渡す。

「じゃじゃーん伸縮自在で破れ難く汚れ難くそれでいて通気性保湿性抜群で熱にも寒さにも強いリバーシブル白黒外套です。まあ私達が着ている物と同じものです。物理、魔術に対しての防御力もそこそこありますよ」

なんせこれ一着にかなりのコードキャストを付加させましたからね。と無い胸を張るはくのん。

「まあそこそこだから過信しないでね」

はくのんに苦笑しながらキシナミがそう忠告する。

はくのんはさっそくそれを桜に黒いのを下にして着るように促し、言われたとおりに桜がそれを纏う。

「さすがに子供にはミスマッチじゃないか？」

「大きくなったら似合いますよきつと。それに今回は護衛を残せませんからね。万が一の場合も考えておきませんと」

「それもそうか」

「あら、それってつまり私達の事を信用していないのかしら？」

扉の方から聞こえた声に全員が振り返る。

そこには車椅子に座ったケイネスと車椅子を押すソラウの姿があった。

「身体の方は大丈夫ですか？」

「ああ。君の魔術のお陰だね。上半身は動けるようになった。感謝するよ」

「気にしないでくれ。ライダーの頼みでもある」

「そうか……それと我が王の最後の雄姿を伝えてくれたランサーにも改めて感謝する」

「気にする必要はない」

部屋に入りランサーと白野に礼を述べるケイネスにランサーとキシナミは短く答える。

二人はライダー敗北を知った瞬間にしばらく涙を流して征服王の死を悼み、アジトを離れようと考えていたその時に、ライダーから予め彼等のアジトの場所を聞いていたランサーが現れ、ライダーの最後が伝えられ、ランサーの提案でケイネスの身体を治す為にこの双子館に招かれたという訳だ。

もちろんランサーは白野の許可を得てから二人を招き決戦に差し障りがない範囲でケイネスを治療した。その際にソラウの魔力をかなり分けて貰った。

結果として肉体はある程度回復したが、やはり破壊されつくした魔術回路を直す事はできなかった。

「それじゃあ桜ちゃん、一応これを渡しておくね」

そう言つてキシナミは懐から一通の手紙を取り出して桜に渡す。

「昼の内に友人、エーデルフェルトに連絡しました。早ければ明日にはこちらに着くでしょう。私達が万が一戻らなかつたらそれをエーデルフェルトに渡して下さい。それと私達が居ない間の警護、よろしくお願いしますねソラウさん」

「ええまかせて。貴族として受けた恩はきつちり返すわ」

ソラウが力強く頷くのを見てはくのんも頷き、キシナミと二人で桜の頭を最後に一撫でしてから立ち上がる。

「それじゃあ桜ちゃん、行つてきます」

「……行つてらっしゃい」

軽く手を振り部屋から出て行く二人を桜は同じく手を振りそして、扉が閉められる。

「……行くか」

「ええ、行きましょう」

先程までの笑みを消し、その眼を鋭くさせた白野達が双子館の屋敷を出る。

「アサシン」

「はい」

はくのんの呼びかけに答えたアサシンは瞬時にその場から姿を消す。

次の瞬間傍の林で何か倒れる音がし、続いて一人の女性、舞弥を脇に抱きかかえたアサシンが現れた。流石は筋力Bである成人女性の一人くらい片手でわけなく運んでいる。

「ちゃんと生きてるよね？ 武器の類は？」

「もちろん気絶させただけです。護身用の銃火器、白兵武装以外は特に」

「そう。まあそれでも万が一があつたら困りますから一緒に運びましょう。跳びますよ」

白野二人が同時に転移と唱えて五人はその場から柳洞寺の階段の前に現れ、白野達は気絶した舞弥を傍の林の木に寄りかからせてから階段を上つて行つた。

そんな白野達を境内では黄金の鎧を着たアーチャーが腕を組んで待つていた。

その背後には寺の住職達を魅了の魔術で避難させ人払いの結界を張り終えたあと、言われるがままに従い控えている遠坂時臣の姿があつた。

もちろん彼もずっと動きながらこの状況の打破を考えていた。考え続けた。しかし結局何も浮かばなかつた。それどころかあの後にアーチャー自身に――。

『そもそも貴様が今生きて居られる事こそあの桜とかいう童女のお陰よ。アレが居ら

ねば白野は貴様の命に頓着しなかつただろう。そうなるに我が詰まらぬ。故に綺礼をマスターとしたらう。綺礼も貴様を殺す事を迷つてはいたが背中の一つでも押せば自分の目的の為に貴様を亡き者にしたであらうな』

——というダメ押しという言葉突きつけられては最早この結末を見守る立場に甘んじるしかないといふ心は殆ど折れしまつていた。

そんな二人の前に先に現れたのはセイバーと、彼女と手を握つて現れたアイリスフィール、そして切嗣だつた。

「来たかセイバー。なるほど、そいつが聖杯の器となる人形か」

アーチャーの品定めをする視線に、ただでさえ精神的に敏感になつていたアイリスフィールは畏怖を感じて、身体を震わせる。

「不快な視線を向けるなアーチャー。切嗣」

「ああ……あの位置に陣取らう」

そんな彼女をセイバーが庇うように立ち、すぐに切嗣が境内でも林の中に身を隠せやすすような位置へと二人を連れて移動する。

「ふ。この我に対してのその物言い、普段なら許さぬが今宵の我は機嫌が良い。特別に許そう」

セイバーの言葉に気にした様子も無く鳥居門の先の階段を見詰めるアーチャー。

（舞弥との通信が途絶えた……奴の性格、目的を考えれば僕とアイリの関係者で最低限の武装をしただけの彼女を殺す事は無いだろう）

切嗣は舞弥との通信が途切れた事で白野達が動いた事を悟る。

「来たか」

そして切嗣が白野が動いた事に気付くとほぼ同時のタイミングでアーチャーが一言そう呟く。

全員が鳥居門に注目する。

しばらくして現れたのは全員が見慣れた男の岸波白野。

「え？」

そしてそれに並ぶように『岸波白野と似た雰囲気』を纏った同じ外套を羽織った女性の存在に、数名が困惑の呟きを漏らす。しかもその手には令呪が三つしつかりと刻まれている。

「あれは、誰だ、何故令呪を持っている？ まさか新規のマスター!？」

一番に驚きの声を上げたのは時臣であった。そんな時臣を無視してアーチャーが口を開く。

「遅かったな白野よ。なるほど二つに分かれることで手数を増やすか」

「ええ。貴方相手に出し惜しみなんてしませんよ英雄王ギルガメッシュ」

「ああ。全力で相手させて貰う」

二人の白野が真剣な表情でアーチャーを見据え、アーチャーもまたその顔に笑みを浮かべて白野の鋭い視線を受け止める。

アーチャーの言葉の意味が分からず困惑する時臣であったが、二人の間に流れる緊迫した空気にそれ以上口を挟む事が出来ずに出かけた言葉を飲み込む。

そしてセイバーもまた己が戦うべき相手であるランサーから視線を逸らさず、ランサーもまたセイバーだけを見据えていた。

「……さて、戦う前に衛宮切嗣側に一つ提案がある」

はくのはそのままギルガメッシュを警戒し、キシナミが切嗣の方へと視線を向ける。

「なんだ……」

「聖剣の鞘を貸して欲しい」

【人形は救われ人は英雄に挑む】

「聖剣の鞘を貸せ、だと」

キシナミの提案を聞いて訝しがる切嗣。当然だろう。これから戦うというのに自分の側の武器の一つをよこせと言われて納得できる者は少ない。

「ああ。試したい事がある。成功すれば……アイリスフィールを聖杯化させずに済むはずだ」

「なんだと……」

キシナミの言葉にセイバー陣営の全員が困惑したような表情をさせる。

「そうだな。最初から説明しよう」

キシナミはそう言っただけでまずアイリスフィールが聖杯で救える可能性の低さを説明した。

「肉体が消滅しても魂と精神が残ればその魂を保存する事で存在を維持する事は可能だ。あとは肉体を魔力でなんとかすればいい。聖杯程の魔力なら容易いだろう。だが、聖杯化した時に彼女の魂が肉体と同じく消し飛んでしまえば意味が無い。そこで俺達はずっと『彼女を聖杯化させずに救う方法』を探していた。その時にランサーから伝え

られたのが聖剣の鞘だった」

聖剣の鞘。アーサー王を不老不死至らしめていたまさに破格の宝具。

仮にその鞘を現代の者が手にしても十全には扱えないだろう。精々怪我や病気の治療速度の上昇、呪詛への耐性がつく程度だろうと白野は説明する。

「しかし、その鞘の本来の所有者であるアーサー王本人なら、その鞘の効果を十全に扱えるのではないか、そう思い至った。その為に知りたい。聖剣の鞘で治療、再生できる範囲を。もしも『摘出された箇所を元通りに再生できる』レベルのことが可能なら……」

「……アイリスフィールの聖杯の核である心臓を摘出しても、また新しい心臓が再生される可能性が高い、と言うことですか……どうしますか？」

白野の説明の結論を口にしたセイバーが背後の二人を伺う。

不安そうにするアイリスフィールが切嗣へ視線を向ける。

切嗣はしばらく考えてから口を開いた。

「幾つか質問する。まず、摘出が成功して、その聖杯の核は誰が所持する？」

「全ての宝物を管理するギルガメッシュこそが相応しいだろう。というか、彼以外には聖杯の核を維持できないと思う。心臓の停止⇋聖杯の核の停止では、聖杯を求めているそちらも同意できないだろうし、何よりその場合行き場を失った魔力が再生したアイリスフィールの心臓に移ってしまう可能性もある。だが全ての宝物を『最良の状態』で管

理でできるギルガメツシユなら、心臓の機能は停止しないはずだ」

「ほほう。つまりこの我に聖杯の決定権を委ねる。ということの良いのか白野？」

「そう、なるのかな？ 普通にギルガメツシユは聖杯については中立の位置だし、俺達が負ければセイバーがそのあとギルガメツシユに挑む。つまり立場的にもギルガメツシユが勝者への褒美を持つのが一番相応しいんだよ」

「褒美、か。確かにこの我を倒した偉業に、褒美の一つくらいはくれてやってもいいか。良かろう一時だが我が宝物庫に貴様の心臓を捧げる榮譽をくれてやろう。さあ喜んでいいぞ人形よ！」

「え、ええつと、あ、ありがとうアーチャー？」

「うむ。この我も心臓その物を宝物に仕舞った事は無い。末代までこの英雄王の懐の深さと己の成した偉業を語り継ぐがいい。はーはははー！」

困った表情をさせながらも素直な性格のアイリスフィールがきちんとお礼を述べる。アーチャーはそれに満足そうに頷いて見せて大声で笑う。

『実はお母さんね。昔英雄王の宝物庫に心臓を仕舞って貰った事があるのよ。どう凄いでしょ』

「~~~~つ」

はくのんが生還したアイルスフィールが娘にそんな感じにドヤ顔で誇らし気に語る

未来の姿を想像して堪らず視線を逸らして口元を隠しながら笑いを堪える。確かにシニールな絵である。

「いや、笑っちゃダメだろ」

はくのんにツツコミを入れるキシナミは脱線した話を戻す為に改めて切嗣に『他に質問は?』と問いかける。

「聖杯の核の維持は理解した。では器はどうする? アイリと同等かそれ以上の器が無ければ聖杯は降臨できない」

切嗣の言葉にキシナミはごもつとも、と返答してから答えた。

「確かに聖杯の器となると適性が必要だろう。そして運が良い事に冬木の聖杯なら……俺達岸波白野なら、適性がある可能性が高い」

「どういう意味だ?」

切嗣の疑問に笑いを堪えていたはくのんが息を整えてから口を開く。

「……ふう、ごほん。私達は『第三魔法』で造られた存在ですからね。冬木の聖杯に第三魔法が関わっているなら、適性がある可能性は高いんですよ。あ、なぜ第三魔法で造られたのか? とかの質問に答える気も説明する気もありません。知りたければもつと私達と親しくなつてくださいね」

『自分は第三魔法で出来ている』

その発言に既に見抜いているギルガメッシュと魔法と言う物が現代でどれだけ凄いかをあまり理解していないセイバーを除いた全員が驚き目を見開く。

特に魔術師の時臣やアンツベルンであるアイリスフィールはすぐに理由を尋ねようとしたが、はくのんに拒絶されてしまう。

「まあ実際貴方達には関係ない個人情報だ。こつちが勝てば聖杯の核を壊すなりなんなりで終わりだし、そつちが勝てば俺達は聖杯になつちやうしね。さて、これで聖杯の器の問題も解決だ。他に質問は？」

「……最後だ。心臓の摘出、それが可能かどうかをどうやって調べるつもりだ？ 先程試したいと言っていた以上、まさかいきなり本番というわけではないだろう？」

「もちろん。まずは聖剣の鞘がどこまでの治癒と再生が可能か調べなければ意味が無い。そして今までの提案はその聖剣の鞘の性能次第と言うことになる……ダメだった場合は聖杯の蘇生に賭けるしかない」

切嗣の最後の懸念にキシナミは真剣な表情で答える。

お互いにしばらく睨み合う様に視線を交わし合い……切嗣が先に視線を逸らしアイリスフィールへと向ける。

「アイリ、少しの間辛いが我慢して貰えるかい？」

「ええ、私なら大丈夫よ」

アイリスフィールが胸に手を当てるとそこから光り輝く鞆がゆっくりと彼女の身体から抜けて行く。その光景に白野達はランサーから聞いてはいたが多少の驚きを感じても居た。

白野やギルガメッシュノの空間への収納とは違い、聖剣の鞆は体内に埋め込み一体となる。言ってしまうえば埋め込んだ相手を聖剣の鞆化するような物だ。

長期間その状態を維持すれば彼等の知る正義の味方同様にその起源は間違いなく変質してしまう。基本、神秘という物は生物にとっては毒なのである。

「うっ」

「アイリ……セイバー」

「はい」

その場に崩れ落ちるアイリスフィールを切嗣が支え、セイバーが鞆を受け取ってキシナミの元に向かう。

「どうぞ。それで、私はどうすれば？」

「ありがとうセイバー。ただその前に、この鞆の効果をランサーが使えるか試してもいいかな？ 鞆に魔力を送る以上、サーヴァントの魔力だつて消費するだろう？ できれば、自分の陣営で補える事は自分達で補いたい。もしダメならその時はセイバーに頼むよ」

「分かりました」

キシナミの提案を受けられたセイバーはその場から少し離れる。

鞘を受け取ったキシナミはそのまま鞘を身体に仕舞ってからランサー達の元に戻る。

「それじゃ始めようか。まずは刺し傷あたりで試すか？」

「そうですね。えい」

戻って来て提案をしたキシナミに向かって頷いたはくのが持っていた短刀でキシナミの脇腹を流れる動作で刺して引き抜く。

蹲るキシナミ、啞然とする周囲、そして刺したはくのが短刀の血を拭ってから納め、いつもの鉄面皮で呟く。

「きゃー自分殺しー」

「棒読みにも程があろう。というか、アレはアレはで自傷行為になるのか？」

はくのんの発言を聞いたアーチャーがなんとも言えぬ表情でツツコミを入れる。

「こ、このやろう………というかランサー、早く、早く鞘に魔力を、普通に痛い」

「え、ええ。そうですね」

自分自身の行いに憤りを感じながらもランサーに早く治してと頼むキシナミに、ランサーも慌てて彼の身体に触れながら魔力を鞘に送る。

するとキシナミの刺し傷は一瞬で塞がり、魔力を流し続けているとしばらくして痛み

も退いて行つた。

立ち上がったキシナミははくのんへと視線を向ける。

「……何か言う事は？」

「すみません一度やってみたかったです。それは同じ存在である貴方も知っていますよ？」

「だからって本気でやる!? しかもなんのリアクションも相談も無しに！」

怒るキシナミに謝るはくのん。しかしその表情はあまり反省していない感じである。というか反省してないのは本人なのでキシナミも分かっている。

ここぞという所でボケようとするのは岸波白野の数少ない悪い個性の一つである。尚、時と場合によつては可愛い後輩や、赤や白の同僚、パートナーのサーヴァント達に手痛い反撃を貰うこともある。

「……まあいい。ランサーでも韜の治癒や再生が可能なのは分かったし、次は欠損した場合の再生だ……もしもの場合は頼むぞ」

「了解です。アサシン、やってください。ランサーは魔力を送っておいて下さい」

「分かりました」

「……了解しました」

ランサーはキシナミの手を握り魔力を送る。そしてキシナミの正面に立ったアサシ

ンは次の瞬間——気付けば白野達の背後に立っていた。

そしてその手には心臓が握られていた。

「は？」

ブチュ、という切断面から血が噴出す。それを見て目で終えなかったマスター達から唾然とし言葉にならない眩きが漏れると同時に、キシナミがその場に腰が抜けたかのようになり座り込む。

「——いつてええええええええええ!!」

大声で叫ぶキシナミ、慌ててはくのんが治癒魔術を掛ける。

「大丈夫？」

「ぐっ。なるほどさつきもそうだったが……心臓は問題なく再生したけど、痛みまではすぐには消せないみたいだな。でも痛みなら俺達の魔術や鞘に魔力を送り続ければ緩和できるのも解った」

痛みがある程度退いたキシナミが振り返り、心臓を握ったアサシンの姿を捉えてなんとも言えない表情をさせながら、キシナミは自分の胸に手を当てる。

「……うん、うん。心臓は問題なく動いている。というか、本気で心臓無くなった事に気付かなかった。流石はアサシン」

「あの、褒めてくれるのはいいのですが、これをいい加減どうにかしませんか？ 頼まれ

たとは言え自分のマスターの心臓を抉るとか、流石に罪悪感を感じているのですが……」

「そうですね。さつさと燃やしましょう。アサシン、それを地面に、では《Code : 火》」

アサシンが心臓を地面に置くとはくのんが躊躇いも無く燃やした。

「……なんか複雑なんだが」

もう一人の自分が自分の心臓を燃やすという光景に、キシナミが顔を顰めるが当然の処置ではあるためそれだけ呟くと気を取り直すべく頬を叩いて身体から聖剣の鞘を取り出してセイバーに返却する。

「とりあえず、これで心臓を抜いても問題無い事が実証された。アサシンの腕も確かだ……あとはそっちの覚悟次第だ」

「……ランサーのマスター、何故貴方はこのような無茶を？ 死んでいたらどうするつもりだったのです？」

聖剣の鞘を返されたセイバーはそれを受け取りながらキシナミに訊ねる。

彼女の疑問ももつともだろう。今回の聖剣の鞘の実験には不確定要素の方が多かった。そして試すのならば他の人間でも良かった筈だ。例えば時臣とか。

しかし白野はそれをしなかった。あくまでも自分自身を実験台として、仮説を立証し

て見せた。その躊躇いの無さに、セイバー以外にも疑問に感じていた。

ただ一人、ギルガメッシュだけは気にした様子は無かった。

「……正直この状態なら俺か私、どちらか片方が生きていれば一人に戻った時に分割した分の寿命が減ると死ぬほど痛い思いするだけだからというのもあるけど、まあ一番の理由は自分で試せることは自分で試す性分だから、かな」

「ですね。自分に出来る事は自分でやる。自分で出来ない事は他人に任せる。それでもダメなら未来に託す。それが私達です。今回は私達が傷付けば済む事でしたから私達だけで行っただけの事です」

「……主に痛い思いをしたのは俺だけだな」

「頑張れ男の子」

「男の俺より漢らしい人に励まされても……」

胸元で両手を握った姿で励ますはくのんに、げんなりと肩を落としながらツツコミを入れるキシナミ。その二人の姿を見て、セイバー苦笑を浮かべる。この人間はこういうタイプなのだど悟って。

「そうですか……お二人の気遣い、感謝します」

セイバーは鞘を持ち帰りそれをアイリスフィールの身体に戻し、その手を握る。

「アイリスフィール……どうしますか？」

「……切嗣、私は……あなた達と生きたい」

「……ああ。それが君の望みなら。僕は止めないよ」

切嗣がアリスフィールを支えるように立たせ、反対側にセイバーが立つて彼女の身体にある鞆に魔力を送る。

「……いいわ」

覚悟を決めたアリスフィールが力強く頷いてアシンへと視線を向ける。

アシンが一度伺いを立てるように傍にいるはくのんに視線を向け、はくのんが頷くのを合図に、その姿を消す。

気付けばアシンはアリスフィールの背後に立ち、心臓をアーチャーに向けて放り投げる。

受け取ったアーチャーは心臓を一瞥する。

未だ鼓動する結晶と一体となった肉塊を見てそこに膨大な魔力がある事を確認して頷き、そのまま宝物庫に仕舞う。

「あぐうううう!!?」

「アイリ!?!」

「アリスフィール!?!」

キシナミと同じように痛みでその場に蹲るアリスフィール。セイバーは魔力を送

り続けなんとか痛みを退かせようとする。

「い、痛いわ。痛いの。でも……感じる。鼓動を、新しい心臓の音を……」

痛みで汗を流しながら、それでもアイリスフィールは切嗣とセイバーに笑顔を見せる。

「……条件はクリアしましたね」

「ああ。こちらの最低限の勝利条件は満たした」

そもそも白野側と他の陣営では求める結果の勝利条件が違う。

彼等の子供を悲しませないという結果を求める白野達からすれば、アイリスフィールが死んだ時点で『負け』なのだ。つまり今回のアイリスフィールの一件は彼等の求める結果に置いては『最低限クリアしなければならぬ条件』でもあった。

故にセイバー陣営を見詰める白野達の表情は以前険しいままであり、そんな二人に成り行きを見守っていたアーチャーが声をかける。

「茶番は終わりか？」

アーチャーは既に見抜いている。先程までの二人の漫才の様なやり取りが、不安に押し潰されそうな彼女へのせめてもの気遣だったのを。そしてそれが終わりを告げたのだと。

「ああ終わりだ。そしてここからは」

「私達の戦いです」

真剣な表情をさせた二人の白野とアーチャーの視線がぶつかる。

瞬間—アーチャーの周りの空間が歪み宝具が発射される。

キシナミが前に出て盾を構える。鏡が光り前面に紫色の円形の魔方陣のシールドが展開され、シールドに宝具がぶつかると同時に弾ける。

「遠距離、いや、投擲の類を防ぐスキルが付加されているのか」

考察しならもアーチャーの攻撃は続き、それをキシナミが防ぎ続ける。

「物質化制御：技能体現—舞い詩う黄金劇場の道化者」
マテリアライズ スキルコード アエストゥスドムスアウレア

その間にキシナミの後ろで守られているはくのんが詠唱を開始し、次の瞬間、世界が塗り換わってアーチャーと白野の二人を光が包む。

「ほう」

『王の財宝』による発射を止めてアーチャーは一変した世界を見渡す。

展開されたのはまさに贅を尽くした豪華絢爛な薔薇の舞う黄金の劇場。

「固有結界、と似て非なる世界のようなだ。それに我の性能が少し下がっている。ふむ、これはこの結界の効果か？」

アーチャーは自分の手を見た後に二人に視線を巡らせる。

「その通りです。私達に固有結界を造る才は無い。故にネロの黄金劇場の舞台を『演者』

として借り受ける」

はくのんが擲掛けたベルトから剣を抜き、ベルトを投げ捨て剣に魔力を送りながら構える。大剣はそれに答えるようにその刀身を燃える様に発光させる。

「本来の持ち主なら幾らでも劇場の姿を変えて効果も変えられるんだけど、俺達にそれはできない。俺達が黄金劇場で使える効果は『敵役の性能を下げ、主役側の性能を上げる』という彼女が最も戦闘で好んだ基本効果だけだ」

キシナミが説明を行うと同時に盾に魔力を送る。

鏡に八重桜紋が浮かび上がり、盾の外周に刻まれた文字列が輝きを放つ。

左右に並び立つ二人の白野が、気迫に満ちた強い瞳を人類最古の英雄に向ける。その瞳には一切の曇りは無く阻む者を打倒する強い意志と燃えるような気迫が宿っていた。

アーチャーはほんの僅かに懸念していた『知り合いへの躊躇い』という甘さがその瞳に無い事を確認して合格だというように満足そうに頷き、そしてその赤い瞳を怪しく輝かせ、口に笑みを浮かべる。

「それでいい。死力を尽くして挑み、この我を愉しませろよ白野」

「ああもちろん。それが——」

「——私達と貴方との『関係』^絆ですから」

二人の白野が黄金の舞台を駆ける。

人が挑み英雄が受ける。神代の時代から続く勇ましくもありふれた舞踏が今ここに開演する。

【白野VS英雄王】

「『Code：現界突破』！」
コードスタート

二人の身体と感覚が『肉体の現界を越えて強化される』。

駆ける度に繊維は切れ、切れた端から『強化された自然治癒力よって再生』されて行く。

ショートしそうな脳は熱された端から冷却されまた沸騰するを繰り返し意識が強制的に維持され続ける。

肉体の内から外から痛みが走り続ける。

（痛みは——）

（——意志で耐える!!）

しかし二人は初めから肉体の無事など考慮してはいない。

そもそもサーヴァントに人間が勝とうと思ったのなら、まず身体機能、特に速度に対応できなければ意味が無い。

身体能力の壁。それが第一の死線。

『王の財宝』
ゲート・オブ・バビロン

アーチャーの言葉と供に彼の背後から無数の金剛杵が放たれる。

キシナミが前に出て扇、かつて天狗が使用したと言われる大風を生み出す『天狗扇』を大きく振るう。

扇から槍のような暴風の竜巻が放たれて迫る宝具を弾き飛ばす。

その間も二人の足は止まらない。

「ほう、では次だ。先程の風程度では防げぬぞ」

先程は前方だけだったゲートが全周囲に展開され、更に現れた武具は重厚な物ばかり。

アーチャーは口に笑みが浮かべながら手を軽く振るうと同時に全ての武器が発射される。

はくのんが前に出て、キシナミがはくのんの背中に自らの背中を向けてる形でバック走に移る。

『《物質化制御：技術体現―劍術》。灯りなさい原初の火！』
「咲け玉藻鎮石！」

キシナミが盾に魔力に加えて精神力を、前に出たはくのんは両手に握った劍に生命力を一緒に注ぎ込む。

鏡の八重桜が一層輝き、劍の刀身が更に白く燃え上がる。

「おおおおお!!」

はくのんが光の剣線を描きながら飛来する宝具を弾き飛ばしつつ前進し、その背後でキシナミが飛来する宝具を展開したシールドを維持して防ぎ耐える。

同一人物故に二人はお互いの姿を見ずとも同調して動く。はくのんが左に動けばキシナミも左にと、けっしてその動きは乱れない。

そしてついに宝具降り注ぐ鳥籠を、まずは身体のうちこちに切り傷を作ったはくのんが突破し、シールドは健在なれど疲弊したように汗を流すキシナミがその手に持った天狗扇を風ぐことで自らの体を後方に押し出して囲いを突破し、はくのんとの距離を埋めて二人は再度横並びとなる。

「で、これはどう避ける?」

直後、二人がいる『領域の全て』にゲートが開く。

前方、周囲、ついに上下が加わった全域による掃射。『王の財宝』によるある意味で究極の形。これをどうにかしない限り、英雄王には届かない。

『王の財宝による全域の掃射』それが第二の死線。

しかしその死の包囲網に対して、白野は既に準備し、それが届く『距離』に到っている。

「《物質化制御：礼装具現―地の鎖》!」

「『Code：空間遮断結界』！」

キシナミが地の鎖を作ると同時にはくのんが新たな魔術を発動する。

はくのんの魔術発動と同時に、あれだけ開いていた『王の財宝』のゲートが閉じる。

アーチャーがその目蓋を僅かに広げ、瞬時に『天の鎖の一本を装備品として』左手に装着しながらゲートを開くのを試みるが、やはり発動できない。

（自身を介して『装備品』として呼び出す事は出来ても、宝物から直接の発射が出来ぬか。すぐに使用しなかった事を考えると一定距離の空間干渉の遮断だな。だがそれは奴等も転移が出来ぬという事に他ならない）

だが、ともアーチャーは思う。

（白野が使っていたあの風の扇にこの能力……ククク随分と対策しているではないか。余程我と戦った場合の戦術、戦略を練っていたと見える）

アーチャーは楽しそうに口に笑みを浮かべる。

そして彼の考えは正しい。

白野は聖杯戦争に参加すると決まったその時から『自分が良く知るサーヴァント』との戦いも想定に入れていた。特にアーチャー、ギルガメツシユへの対策は入念に行っていた。

まず前提としてアーチャーを倒すためには彼に近付かなければならない。

『王の財宝』等と言う反則的な手数に対抗するには一人で攻防二つの役をこなすには白野は平凡過ぎた。彼には無銘のように投影品から『その担い手の技術も投影する』等という特異な能力は無いのだから。故に二人に分かれて戦う。

次に徹底しているのはコードキャストや物質化制御の正式名を呼ばないこと。もし魔術名を言つてしまえば、アーチャーはその名前だけでどんな魔術か予測しうる事を彼等は身を持つて体験しているからだ。

そして白野達からすればまだ越えた死線は『二つだけ』なのだ。

まだ越えなければならぬ死線は在る。故に止まってはならない。足を止めればアーチャーの猛攻が開始されるのだから。

そして白野達は第三の死線『天の鎖』と第四の死線『黄金の鎧』に挑む。アーチャーが好んで使用する二つの防具。

天の鎖は所有者の意志に反応して自動で動き、さらに神性の高い者には元々強い拘束能力を更に高める性質がある。

黄金の鎧もまた脅威である。対物理優れ生半可な武装では傷すら付けられず、対魔術にも優れ魔術ならAランク相当の物も弾き返せる。

それだけの防具に身を包んだアーチャーが、キシナミの持つ地の鎖を視認し、その表情が少しだけイラだった物に変わる。

「白野、その鎖の模倣は流石に許容できんぞ」

「それでもあんたのその鎖に対抗できるのは、これしかないんだよ！」

アーチャーの左手が振るわれ鎖が蛇のように動き迫る。それに対抗してキシナミも地の鎖を操作させる。

鎖同士がぶつかり火花が散る。先端の短剣が互いに牽制するようにぶつかり合い、鎖は互いに絡まりぶつかりを繰り返す。

その度にキシナミの地の鎖に輝が入る。当然だ。彼のはあくまで模倣であって宝具の域には達していない。強度差は歴然である。

だがそれを、キシナミは魔力を送ることで常に補強し続けて維持する。罅割れた端から鎖は元に戻りまたぶつかり、せめぎ合う。

そんな二頭の鉄の蛇の攻防の中を、防御に関してはキシナミに全てを任せたくのんが、隙間を抜けてアーチャーに迫る。

（私はもうコードキャストを使えない。『空間遮断結界』を維持しなければたちまち『王の財宝』によって射殺されるから。あとはアーチャーがどんな武器を出すかですね。黄金の剣か斧か、それともランスがついたドリル砲か）

アーチャーがかつて好んで使っていた武器を想像しながらアーチャーを見詰めそして……その手に呼び出した武器を見て……二人は奥歯を噛み締める。

「はいで——」

「——それを抜きますか」

『『王の財宝』』、そして『『天の鎖』』も一応無効化していると言っている。くくく興が乗ったぞ。光栄に思えよ白野、この我自らの意志でコレを抜いてやったことにな！」

アーチャーの右手に現れたのは彼等が最も懸念していた最後の死線。

アーチャーが保有する唯一無二の彼だけの宝具。

黄金の穂先に赤い光を放つ文様の黒い三つの円柱、それらが互い違いに螺旋のように回転する剣というよりランスの形状に近い武器、その名は乖離剣エア。

「安心しろ。真名は開放せん。ただエアの魔力を開放するだけよ！」

アーチャーがエアを引いて構える。円柱が回転し魔力が込められていく。

（まずい！）

ただの魔力開放による一撃でもエアのそれは攻撃範囲にある全ての物を容易く細切れに切り刻むだろう。故に何とかしなくてはならない。

「はくのん、後は頼むぞ」

「ええ」

キシナミが盾を構え、はくのんが背後に回り剣を上段に構えていつでも振り下ろせるように構える。

「コード・フルオープン
「真名開放——」」

「行くぞ白野！」

アーチャーがエアを突き出し、そこから全てを引き割き、掻き巻く巨大な赤い螺旋の暴風が放たれる。その嵐を前に、先にキシナミが動く。

岸波白野の『暖かい物を守りたい』という他者を想う心象概念。

そして岸波白野を護りたいと願う『二人のサーヴァントの想念礼装』。

それらが合わさって造られた岸波白野が持つオリジナルの『概念武装』、その力の全てを解放するコードを発する。

「我、砕けてでも護る者なり」

鏡の八重桜が消える変わりに白野達を光る巨大な八重桜の大樹が包み込み、エアの掻き巻りが大樹の幹と激突する。

「がっ——ああああああああ!!」

桜の花弁が凄まじい速さで散って行く。まるで咲き誇った矢先に台風に遭って一晩で散ってしまうかのように。

そしてその度に盾には輝が入り、岸波白野の『精神を砕いていく』。

アイギス・ブロッサム。

『全ての効果を無効化して防ぐ』という『無敵の盾』を顕現する。

通常時であれば魔力の消耗と精神疲労で済むがリミッターを解除した場合は精神力の全てを盾として顕現する。

故に、盾にダメージが通れば通るほど、精神の根幹にも影響が出る。

花卉が、幹が、枝が砕け散る度にキシナミの心は砕かれ記憶が磨耗されて行く。

喪失による恐怖がキシナミを襲う。

それでも……キシナミは術を解かない。

当然と言えば当然である。

この概念武装その物が、『自らより他者を優先する』という諦めの悪い岸波白野の象徴なのだから。

「あ——ああ——ああ——」

もはや叫びすら上げられず、花は殆ど枯れて枝も折れ、仕舞いには大樹はその姿を消し、ついには輝が幾多にも入った盾の正面に展開する一輪の桜の花だけでエアの一撃を防ぐ。

そう、防いでいる。キシナミの両足は折れず、目の焦点は合っていないがその瞳の光はけっして消えず耐える。

その光景を目の当たりにしながら、はくのんも自身の出番は近いと、己が持つ『概念武装』の力を解き放つ。

原初の火の刀身が白から真紅に反転し、まるで命の炎その物のように艶やかな真紅の『光熱』が発する。

岸波白野の『死にたくない』という自身を想う心象概念。

そして岸波白野と供に在りたいと願う『二人のサーヴァントの想念礼装』から造られたアイギス・ブロッサムと同じ『概念武装』。

そしてはくのんの準備が終わると同時に、その時が訪れる。

「——!!」

キシナミが渾身の力で盾を振るう事でエアの衝撃を逸らす。

同時に、限界を迎えた玉藻鎮石が砕け散る。

役割は終えた。

そう言うかのようにキシナミがその場に崩れ落ちる。

それに合わせる様に、二人が動く。

ずっと力を溜めていたはくのと再度エアを放とうとするギルガメツシュ。

そして先に振り下ろしたのは、すでに構えを終え、力も溜め終えていたはくのみだった。

『我、燃え尽きても刈る者なり』

真紅の極光が振り下ろされ、ギルガメツシュに迫る。

と、同時に原初の火は砕け散り『全ての生命力』を注ぎ込んだはくのんの眼から生気が失われその場に倒れ伏す。

ローズレット・クラス・ソラス。

『全ての力を無効化して貫く』という『無双の矛』を顕現する。

通常時ならばアイギス同様に魔力と体力を失うだけで済む。

だが全力で振るう場合リミッターは解除され、使用者の生命エネルギーその物を吸い取つて矛とする。

故に、一度全力で振るえば振るつた者は生命の枯渇で瀕死となる。

(間に合わん)

ギルガメッシュは盾の展開は間に合わないと判断し、鎧に魔力を送つて強度を上げつつ、攻撃がぶつかる瞬間に、エアの魔力開放をすることで威力の相殺を図る。

黄金の劇場に轟音と強烈か光が放たれ、全てを飲み込む。

……黄金劇場を振る寄せた一撃、その光が晴れる。

影は三つ。

一つは命あれど意識を失つて気絶する瀕死のキシナミ。

一つは意識あれど命を失つて動けぬ瀕死のはくのん。

「……………」までか」

そして唯一劇場に立つ影。

黄金の鎧が破壊され、エアを遠くに吹き飛ばされ、黄金の鎧を砕かれて上半身裸となつた英雄王が、静かにそう呟き、倒れる二人を見詰めていた。

【約束されていた横槍】

二つに分かれていた物が一つに戻り、思考が統一される。

ああ、ここまでやって届かないのか。

そりやそうか。相手はサーヴァントだ。人間がここまで出来ただけでも凄い事じゃないか。

ああそうだな。ここまでやった。

身を削った。

心も砕いた。

命も燃やした。

そしてようやく辿り着いた。

『死線の内側』に。

さあ……あとはただ、耐えるだけだ。

意識が、肉体が、覚醒する。

同時に『二人が払った代償』が、全身を駆け巡る。

喪失感と激痛が身体を駆け巡って意識が混濁する。

それでも……やるべき事は覚えている。

『転移』

『覚えている座標』にとにかく跳ぶ。

同時に右手に封の解けた剣を、左手に銀の筒を掴み、同じく左手に身に付けた牙が付いた御守りの力を起動させて光る刀身が出現するのを確認して下から上に振るう。

陽炎のように歪んだ視界の中、振り抜かれた光る刀身が『何かを斬りとばす』。

振り上げた動作に身体が悲鳴を上げて崩れ落ちそうになる。

我慢しろ……それだけが……自分の武器なんだから。

体勢が崩れる前に重心を前に、残された最後の力で妙にはつきりと視認できる目の前の『黄金に輝く塊』目掛けて右手の剣を突き出した状態で一步を踏み込む。

自分の持ち物の名前さえ思い出せない。

だが、この右手の武器、これが『決め手』だった事だけは覚えている。

届くかどうかなんて分からずに突き出したその一撃。

避けようと思えば避けられるだろうその一撃は——あっさりとその塊を貫いた。

「——まったく最後まで魅せてくれるものよ。認めよう。白野、我が道化師^{ジェスター}よ。貴様は確かに、我を愉しませた。故に、此度の戦いは貴様の勝ちだ」

どこかで聞いたような声が、とても嬉しい事を言ってくれた気がする。だから頭が痛

いけど、頑張ってる思い出さないと。そして感謝を伝えないと。

「……………ありがとう……………ギル……………ガ……………」

今度こそ力だ抜けて倒れる。

だけど硬い地面にぶつかるとはならず、身体が何かに吸い込まれる。視界に捕らえたのは黒い何か。

ああヤバイ。これはヤバイ。

身体が拒否している。

魂が拒絶している。

急げ急げと感覚が急ぎ立てる。

何を急いでいるのかを考える前に、それを口にする。

『命ずる。受肉せよ』

手に感じていた何かが沢山消えた。

ああだがこれでいい。これで『繋がり』は消えた。

思い出せない大切な仲間は、きつとこれで大丈夫だろう。

そして……………自分は黒い何かに飲まれ、肉体と魂は消滅した。



アーチャーの目の前で二人の白野が光となって消えた。

人間がここまでやれた。それだけでも賞賛すべきだろうとアーチャーは考える。しかし同時に、残念だと思ふ気持ちも拭えないでいた。

(もう少し意外な物を見せてくれると思つたのだがな)

罅割れた黄金の劇場を見渡し、しかしそこでアーチャーはある事に気付く。

(なぜまだ結界が維持されている？ いや、そもそも何故人間の白野の身体が消え——
——)

アーチャーは疑問の答えに辿り着く前に襲い掛かった予感に従つて咄嗟に体を捻る。

先程までアーチャーが立っていた場所を光の一閃が通り過ぎ、彼の天の鎖を持つ左腕が切断される。

「転移!？」

振り返つたアーチャーの前に今にも倒れそうな程疲弊した青い顔の白野がいつの間にか立っていた。

(切断面からの出血が無い。電力を利用したレーザーブレードという奴か!)

白野の左腕の牙の御守り、『雷獣の爪』による放電現象と手に持った武器の形状から瞬時にそれがどういふ武器なのかを悟る。

白野が左手に持つ武器、彼等が生きる現代より遙か未来の世界で生まれる『科学によつて造られた光の剣』。

その名は『フォトンブレード』。

魔力で無い以上、肉体の耐魔力は意味を成さない。更には物理ではなく『高熱』による熱断であるため、生物にとってはその射程の短さを除けば脅威の切断能力を誇る。

もちろんサーヴァントの武具ならば魔力で強度を上げれば防ぐ事も可能だが、アーチャーはその防具である鎧を失つていた。故に、その一撃を防ぐ事が出来なかつた。

アーチャーはフォトンブレードの性能の推測を終えると、すぐに白野が持つ右手の武器へと視線を移し、その目蓋を大きく開く。

（あれはダメだ。あれは『神殺し』の呪いが込められた宝剣！　あれは我の様な神性を持つ物への特効を有する！）

今迄で封をされていて気付かなかつたかつて神代の時代の日ノ本に存在した宝剣。

神々が鍛えた武器を『欠け』さる程の強度を持ち、更に神獣の体内で血肉によつて精製されたが故の強い対神性を持つ。

もちろん本来の宝剣は神造武装、故に流石のムーンセルでも再現には到れない。到れないが、その特性は完璧に再現されている。

その宝剣は現代ではこう呼ばれている——『天叢雲剣』と。

「！！」

白野が声にならない叫びを上げて飛び掛るような一步を踏む出し、右手の剣を突き出す。

それはただ崩れそうになるのを相手にぶつかって耐えようとするかのような無様な飛びつき。

アーチャーは冷静に見抜く。この一撃を回避してしまえば白野はそのまま地面に倒れて起き上がる事は無いと。

故にアーチャーの本能が、一步下がろうとする。

そう下がろうとした。

それを、アーチャーは自らの意思で持つて捻じ伏せ、その場に留まる。

「……はっ。確かにここで退けば『私の負け』か」

たかが一步。

しかしその一步を下げた瞬間に、王者として、裁定する者として、強者としてアーチャーは敗北する。むしろそのような逃げの一手で勝とうものなら彼の矜持は地に落ちる。

（それをこの相手に行う？ 今もまだ我に全力で挑む相手に？）

「論外だ。それだけは出来ぬ」

もしもアーチャー自身に明確な目的があつたなら、その合理的な思考の元、彼は後退しただろう。

だが幸運にもこの時の彼には優先すべき目的は無かつた。

結果、アーチャーはその場を動かず、その剣の一撃を甘んじて受ける。

「っ!？」

アーチャーの霊核、その急所を的確に貫いた致命傷の一撃。

もはやその傷を治す事はできないだろう。

しかしアーチャーにはまだ単独行動のスキルによつて、残つた魔力で白野を殺す事も可能だつた。

だがアーチャーは白野を殺さず、笑みを浮かべて彼を称えた。

「——まったく最後まで魅せてくれるものよ。認めよう。白野、我が道化師ジェスタよ。貴様は確かに、我を愉しました。此度の勝負、貴様の勝ちだ」

アーチャーの賞賛の言葉を受けた白野は、その疲れか顔をほんの少しだけ嬉しそうに綻ばせる。

「……ありがとう……ギル……ガ……」

感謝を述べる途中で、白野はついに力を使い果たしたのか、そのまま地面に崩れ落ちる。

それを慌ててアーチャーが支えようとした瞬間——それは現れた。

白野の真下に黒い渦のような空間の歪みが発生して彼を飲み込む。

「馬鹿な、これは聖杯、それにこの気配は——っ白野よ手を伸ばせ！」

慌ててアーチャーが手を伸ばすも、白野にその力は残っていないのか、白野が小さく何かを呟くと同時に彼の手にあつた令呪の全てが消え、それを最後に白野は黒い渦に飲まれて完全に消えてしまう。

「おのれ、おのれおのれおのれおのれえええ!! たかが『悪意』の分際で! この我の戦いの余韻を邪魔し、更にこの我の物に手を出した事、決して許さぬぞ!」

残された敗者アーチャーの怒号が響き渡ると同時に、勝者白野を失った黄金の劇場は崩壊し、敗者だけが元の世界へと戻された。

【理想V S 信念】

岸波白野とギルガメツシユが消えた瞬間、境内には静寂が訪れた。

事前に打ち合わせしていたランサーとアサシンは驚かず、周囲の人間だけが白野が行った固有結界の類似の魔術に驚いていた。

「馬鹿な。魔術使い程度が固有結界の展開だど!?!」

「固有結界、ライダーが使っていたものよね? でも、あれにはかなりの魔力を持っているから、決着はすぐに付くだろう」

「……それで、我々はどうするランサー」

「セイバーはこちらに……他の者は全員階段の方へ下がらなさい」

セイバーがランサーの方へと視線を向けると、ランサーは全員へそう伝えるとラムレイを本殿の方へと向かわせる。

セイバーもまたそれに続き、他の全員が彼女達から距離を取る。

お互いに向かい合うと先にランサーが口を開く。

「宝具によるぶつかり合い。元より我々の戦いにそれ以外に決着をつける方法はありません」

せん」

「確かに」

お互いのスキルと戦法を熟知している以上、必殺の一撃の比合いでしか決着はないと判断したランサーの言葉にセイバーも頷き、ラムレイに跨ったままランサーがその槍を構え、セイバーもまた結界を解いて聖剣を構える。

「戦う前にセイバー、今一度尋ねましょう。願いを変えるつもりはありませんか？」
ランサーの問いに、セイバーは目蓋を閉じしぼし黙考した後目蓋を開いた。

「いえ。願いは破棄します。私はただ、聖杯をマスターである彼等に渡すのみです」
その答えにランサーは、ほう。と呟き続きを促す。

「理由を訊いても？」

「……私には理想しかなかった。例えなんと言われ、恐れられようとも、この理想が民と国の為になるのならと。しかし結果は滅びでした。そして貴女という存在です」

セイバーがランサーを見詰める。

「冷静になつて気付いたのです。貴女は信念を貫いた私です。もつと幼い、理想と信念の両方を持つて旅をしていた頃ならともかく、王となつて現実を知った私にできる生き方は、そもそもその二つしかなかった。私と貴女は対極、その二人が失敗した時点でアーサー王に滅びを回避する可能性など無かつたのです」

そこまで言い切るとセイバーは視線を剣へと向ける。

「ならば選定その物をやり直す。というのも考えました。ですが、もし蛮族が攻め入るまでに担い手が現れなければ当時の私はきつと剣を抜くでしょう。例え現在の私が過去に戻ったとしても抜くはずです。ええそうです。私がこの剣を手にしないという世界がそもそもありえないのです」

寂しそうに、しかしどこからすつきりとしたような表情で小さく微笑みながら、セイバーは空を見上げ、ランサーもまた空を見上げる。

「だって私は——」

「そうだ私は——」

「苦しんでいる人達を救いたくて、剣を抜いたのだから」

二人はお互いに視線を交わらせる。そして、口元に笑みを浮かべる。

「……認めようアーサー王、もう一人の私。今の貴女になれば、私も死力を尽くす価値がある」

「こちらは初めからそのつもりです」

改めて二人はお互いの武器を構える。

「枷を『半分』外す！ 全力で踏ん張り、耐えよラムレイ！」

「ヒヒーン!!」

「聖剣よ。今こそその輝きを示す時です！」

ランサーのロンゴミニアドが今までに無いほどの魔力を収束させながら回転し、まるで嵐のような放電と風を巻き起こす。

対するセイバーのエクスカリバーも同じくライダー戦の時以上の魔力を収束し続け、その黄金の刀身から巨大な光が空へと昇る。

二人は互いに目を閉じ、魔力の収束に集中し続ける。

その規模の危険性にいち早く気付いたアサシンが冷や汗を流す。

「……まずいですね。この距離でもへたしたら吹き飛ばされます。全員死にたくなければ階段を全力で下りなさい。せつかく助かった命を無駄にしたくは無いですよ」

マスターである白野が彼等を救おうとしている為、一応助言してからアサシンはまっさきに階段を下りる。

「アイリ！」

「きゃー!」

経験と直感からアサシンの言葉通りだと察した切嗣もアイリスフィールを抱きかかえて一気に階段を下りて行き、彼等の反応について行けなかった時臣が少し遅れて駆け下りる。

そして誰も見届け人が居なくなつた境内、力を収束し続けていた二人が同時に目蓋を

開く。

『最果てにて——』

『約束された——』

二人が武器を振りかぶる。

光と闇、対となる輝きを宿した武器が、その真名の開放と供に更にその輝きを増し、そして——。

『——輝ける槍』!!』

『——勝利の剣』!!』

ついにその力は担い手の手より放たれた。

疾走する光と闇の閃光。

お互いに回避を度外視した全力の一撃。

二つの閃光の余波が辺りの建造物を吹き飛ばし、大地を砕きながら進み続ける。

そして、境内の中央で二つは激突し、爆発した。

円蔵山を激しい光と振動、そして衝撃波が襲う。

なんとか下山に間に合った四人はその場に座り込み、揺れから身を護る。

アサシンが見上げれば行き場を失った光と闇のエネルギーの奔流が空に昇って行くのが見えた。

爆発の揺れはしばらく続き、そして対に光と揺れが収まる。

「……決着ですね。それにしてもなんて出鱈目な威力。遠坂氏、これはどう考えても呼び出せるサーヴァントのクラス設定を間違っているとしか思えません。これではこの地はすぐに更地ですよ」

アサシンのもつともな指摘に、時臣は何も言えずただただ事後処理の事で胃を痛めていた。

「では私は先に行かせて頂きます。ああそれと、その林にあなた達のお仲間を休ませているのですが……大丈夫だといいですね」

アサシンは舞弥を置いて行った場所を教えるから階段を駆け上り、それを聞いたアイリスフィールと切嗣が舞弥の無事を確認しに行こうとしたとき、林からその舞弥が頭を抑えて出てくる。

「うう………今のは？」

「舞弥さん！」

彼女の無事を喜び抱きつくアイリスフィールに困惑する舞弥、それを見届けた切嗣はさっさと上ってしまった時臣を追いかけるように自分も境内へと戻る。

「………酷いな」

境内は辿り着いた切嗣が見た物は全壊した建物と地面にできた巨大なクレーター

だった。

そのクレーターの両端に、二人の王は立っていた。

体中傷だらけになりながら、それでもセイバーは己の剣を支えに立ち、ランサーも槍を支えに立っていた。

「……相打ち、か？」

「いいえ」

時臣の言葉に、アサシンが否定した。

「ランサーの勝ちです」

セイバーはそのまま動かず、しかしランサーは息を整えると支えていた槍を抜き、自らの両足で立ち上がり、そしてゆっくりではあるがセイバーへと歩みを進め始めた。

それを見て切嗣が顔を険しくさせる。

「何故ランサーだけ」

「……ラムレイ、彼女が居たかどうかの差、だったのかもしれませんが」

アサシンはこの場にラムレイの気配が無い事を察して、彼女が最後に主を庇ったか、自ら彼女の魔力源となる事で彼女の魔力を回復したかのどちらかであろうと推察する。

そしてその推察は正しく、爆発が二人を飲み込む瞬間、ラムレイは自らを盾にランサー庇った。結果、ランサーの方がほんの少しだけを受ける被害を減らす事が出来た。

「『私達』の勝ちです」

「ええ。私の敗北です。さあ、決着を」

目の前までやって来たランサーの言葉に、セイバーはそう満足そうに答え、剣を放り、崩れそうになる足を無理矢理立たせ、鎧が無くなったその身体を曝け出す。

ランサーもまたセイバーの気持ちを酌み、一撃で終わらせる為に今にも倒れそうな身体を動かし、その槍を大きく引き、いざ突き刺そうとした瞬間——その身体を赤い光が包んだ。

「マスター!?!」

赤い光はランサーだけではなくアサシンからも発せられ、二人はその光と共に自らの身体が『受肉する』の感じると共に白野との繋がりである魔力が途切れた事も感知する。

「ああ、そん、な……く、おおおおおお!!」

アサシンがやり場の無い怒りの雄叫びを上げる。

その尋常じゃない事態に時臣と切嗣は困惑し、ちようど階段を上がってきたばかりのアイリスフィール達はアサシンの様子に一体何があったのかと戸惑う。

「……どうやら、負けたのは私達のです。令呪を使って魔力を回復して貰いなさい。そうすれば、英雄王ともまだ戦えるでしょう」

ランサーは槍を持ったままセイバーに背を向け、天を仰いだ。

ランサーとアサシンだけは理解する。

セイバーとランサーの勝負はランサーが勝った。

しかし白野が負けた。

マスターである白野が負けた時点で、彼の為に戦うと決めた二人には戦う理由が無く
なつてしまった。

何故白野が自分達を受肉させたのか、という疑問はあったが、それは些細な事だと二人はそれ以上考えるのを放棄して自嘲気味に笑った。

「やはり……人間ではサーヴァントには勝てませんか。分かっていた。分かっていたはずなのに」

どうして彼を送り出したのか。

そんな後悔を感じながら、二人はお互いに視線を向け合い、そしてその瞳に同じ決意を見て取り、同時に頷いた。

『ギルガメッシュを倒す』

それは彼のサーヴァントとしての自分達の最後の仕事だと、二人は決意し、結界からの英雄王の帰還を待った。

そして空間が歪み、結界からアーチャーが帰還する。

それに合わせて二人が飛び出そうとした瞬間――。

「時臣いいいいいいいいいい!!」

アーチャーの怒号が響き、二人の身体が硬直する。

見ればアーチャーの姿はひどい物で左腕を失い、体の中央付近に深い刺し傷があり今もまだそこから血を流していた。

目は爛々と赤く輝きその表情を怒りに歪め、自身のマスターである時臣を睨みながらずかずかと歩み寄る。

時臣は動けなかった。

英雄王の本気の敵意の視線と殺意のオーラを受け、彼は意識を失いかける。だがそれをアーチャーが首を掴み上げた事で彼の生存意欲が本能的に湧きあがり、意識が戻る。

「がっ!! お、王、何故このよう――」

「黙れ! 貴様、今すぐこの地の聖杯についての情報を全て吐け。さもなければこのまま首を折る!」

(っ本気だ! 王は本気で私を殺す気だ!)

時臣は一族の隠匿していた秘中の秘、大聖杯について語るか一瞬だけ迷う。

その迷いをアーチャーは瞬時に察する。

「アインツベルン。白野に助けられた貴様なら快く口を開くか?」

射殺すような視線を受け、アイリスフィールが顔を蒼くさせて震える。

そして震えながら、答えた。

「え、ええいいわ。何があつたのか知らないけど、彼は私の恩人。聖杯の情報が必要なら、教えてあげる」

「では時臣、貴様はいらないな」

「ま、お待ち下さい王！ 全て、全て答えますよ！」

同じ御三家のアインツベルンに秘中の秘を晒すと宣言された時臣は、このままではただ殺されるだけだと、慌ててアーチャーにそう返事を返す。

「ふん。初めからそう答えよ」

アーチャーは時臣の首から手を離し、時臣はその場で咳き込みながら蹲り、同時に生きていく喜びを実感する。

「アーチャー、一体何があつた。私のマスターはどうした」

ランサーがアーチャーを警戒したまま訊ねる。

「後で話す。全ては時臣の話を聞いてからだ。あだが一つだけ伝えておく」

アーチャーは怒りを抑えつつ、ランサーとアサシンを一瞥してから宣言した。

「我と白野の勝負は白野の勝ちだ。故に我が此度の戦で貴様等と戦う事はもはや無い」

「馬鹿な……」

「嘘……」

サーヴァントの強さを知るセイバー陣営の四人は驚き目を見開き、時臣もありえないと驚愕する。

ランサーは無言だがその口元を嬉しそうに歪め、アサシンも喜びを現すかのように「さすがマスター」と眩く。

だが、だからこそ二人は勝った白野がこの場にはいないの事が理解できなかつた。

だがその理由に聖杯が関わっている事だけはアーチャーの発言から理解できた二人は、その情報を知る人物の傍に向かう。

「もう呼吸も落ち着いただろう時臣、さっさと答えよ」

「答えなさい魔術師」

「なんなら拷問致しましょうか?」

元々喋るつもりだったが、三体のサーヴァントの圧に焦りを感じた時臣はすぐに口を開いた。

そして彼の口から大聖杯についての全ての情報が伝えられた。

【意外なメッセンジャー】

「……つまり、この大空洞の奥にこの聖杯戦争の大本である『大聖杯』がある。ということですね？」

「ああその通りだ」

アサシンの言葉に疲れ果てたような顔で全てを話し終えた時臣が頷く。

アーチャーはまず時臣に『大聖杯の場所』を吐かせ、全員でそこに移動しながら色々な事を更に吐かせていた。

「待て、それではあの悪意【この世全ての悪】の存在を貴様等は知らないということか？」
「はい。我が王が『聖杯は汚染されている』と言っておられましたが、少なくとも遠坂にそのような情報は伝えられておりません。そもそも聖杯戦争は根源に到達するための物。ですのにその性質を『悪』に汚染されるなんて愚考、我々御三家が犯すはずがありません」

アーチャーの言葉に恭しく答える時臣。

アーチャーは白野を連れ去った悪を見た時に、その正体を見抜き『それに聖杯が汚染されている』事に気付いた。その情報はもちろん全員に伝えておりアーチャーの言葉に

全員が困惑していた。

因みに話し合う為にセイバーとランサーはお互いに聖剣の鞘で傷を治癒していた。

それでも失った魔力までは戻らないので二人とも戦闘行為は出来ない状態であった。

「……因みに英雄王、聖杯が汚染されているとして、それで願いを叶えるとうなる？」

「決まっておろう。悪を持って願いを成就するのだ。それはつまり破壊によつて叶えると言う事だ。そうさな、その男の世界から争いを無くすという願いなら人間は全て死に絶えるだろうし、そんな騎士王の故国救済ならば己の国以外の全ての国の人々が死ぬだろう。どちらも『他者』や『他国』が無ければ滅ぶ事も無いのだからな」

アーチャーの言葉に絶句する切嗣とセイバー。当然だろう。誰よりも誰かを救いたいと思つている二人からすれば正に本末転倒な願いの叶え方なのだから。

「……とりあえず。もうすぐその大聖杯です。そこで全てが分かるでしょう」

アサシンが話を纏め、洞窟を進み続ける一行。

そしてついに大聖杯が納められた祭壇である開けた場所に到達する。

その場の光景に……一部の者を除いた全ての者が絶句する。

巨大なクレーターの穴、そこから黒い魔力の柱が迸り、その魔力を見て浴びた瞬間に

『生きています』彼等は察する。

『あれは在つてはならない物だ』

恐怖による寒気を感じながら時臣はその場に膝を付いてありえないとばかりに呟く。

「馬鹿な……何故こんなことに」

冬木の土地の神秘を管理するものとして、御三家の一家である遠坂としてあつてはならない事態の直面に、時臣の魔術師としての誇りは完全に折れてしまった。

切嗣とアイリ、そしてセイバーもまた『あんな物で願いを叶えようとしていた』という事実には恐怖を、それと同時にそれが叶わなかった事に安堵という二つの感情が入り乱れて気持ちが悪く落ち着かなかった。

そんな中で、聖杯に興味が無い三人の英霊がそれを見つける。

「あれは……」

「……アイリスフィール？」

「え？」

名前を呼ばれて我を取り戻したアイリスフィールが、正面に向き直る。

聖杯の祭壇のような巨大な崖の手前の地面に置かれた岩の一つに、女性が腰掛けていた。

『全裸で』

「切嗣は見ちゃダメ!!」

アイリスフィールが咄嗟に切嗣に目潰しを行い、驚き戸惑っていたせいで避け損ねた

切嗣はそのまま両目を押さえて悶絶する。

全裸の女性は来訪者に気付くと岩から降りて一行へと駆け寄ってくる。

近付いてみると、まさに容姿はアイリスフィールと同じであったが瞳は彼女よりも朱に染まり、その表情はとても豊かであった。

そしてそのまま近付くと、女性はアイリスフィールに向けて抱きついた。

「きゃく。もうもう可愛いわく私の娘。さすが私の娘美人！ こんな可愛い娘と孫を殺そうとしたなんて。その死んだ魚のような義理の息子は数年はこの事を弄り続けているわ」

アイリスフィールに頬擦りしていた女性は次に頬を膨らませて未だに地面に伏している切嗣を睨む。

「……あ、貴女はいつたいというか服を！ 服を着て頂戴！」

「えっと、これをどうぞ」

「これもついでに。あそこで茫然自失している男の上着です。せめて腰に巻いて前だけでも隠しなさい」

「あら、ありがとう舞弥さん。アサシン」

「何故私の名を……」

二人から上着を受け取った女性はそれを羽織り、時臣の赤いスーツを腰に巻いて前を

隠す。

「さて、まずは自己紹介ね。私は大聖杯の核であったユステイーツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルンの肉体と魂に大聖杯の汚染の原因でもあった『この世^{アン}全^リて悪^{マユ}』という名のサーヴァントだった英霊の精神が宿った存在。それが私よ。もつとも、今はただの人間だし、サーヴァントの私に明確な自我や姿形なんて無かったから、ユステイーツァって呼んでくれると嬉しいわ」

「ど、どういうことなの!?! だって、じゃあ今あの大聖杯の核になっているのは!?!」
「……マスターですね」

ランサーの言葉にユステイーツァはにっこりと満面の笑みを浮かべ。

「大正解!」

と両手で頭の上で大きなマルを作る。

その瞬間にランサーはその目を細め、アサシンは瞬時に抜刀してユステイーツァの背後に現れ短刀を彼女の首に突きつけた。

「つまり、貴様が我等のマスターを攫い、そしてあの聖杯に捧げたと」

「それは正しくもあり間違ってもいる。そうね、その英雄王ならもう察しているのではないかしら?」

そう言つてユステイーツァがアーチャーへと視線を送る。

アーチャーは改めて目の前のユステイーツアを見て、そし大聖杯を見て、何らかの結論に至り、先程までの不機嫌な表情から一変して口に笑みを浮かべる。

「クク、ハハハ、ハーハハハハハ!! まさかまさかそう言う事か! 貴様は本当に我を愉しませる事が上手い」

堪らずといった感じに大声で笑うアーチャー。その様子をみんなが訝しげに見詰めるが、気にした様子も無く一頻り笑い終えたアーチャーはアサシンへと声を掛けた。

「その雑種を放してやれ暗殺者。安心しろ、そやつはただの人間だ。そして雑種よ。さつさと己の役目を果たせ。この場にいる者にあそこで起きた事の委細を伝える。それが貴様が白野から与えられた『役割』であろう?」

「さすがは英雄王。彼が尊敬と畏怖を抱く大英雄。そして正解よ。私は彼、あなた達のマスターである白野から、あなた達に全てを伝えて欲しいと頼まれてここにいる。だからその物騒な物は下ろしてくれないかしら?」

ユステイーツアとアーチャーの言葉に、アサシンはいまだ完全に納得はしてはいないものの、ここでユステイーツアを殺しても意味は薄いと判断して短刀を納める。

それを見てユステイーツアはさて何から話そうかしらと呟きながらしばらく黙考してから口を開いた。

「まずアサシンとランサーが気にしている彼だけど、彼はまだあそこで戦っているわ。

聖杯の全てを掌握しようとなね」

そう言つてユステイーツアは黒い光を放つ『穴』を指差す。

「聖杯の全てを掌握？」

「ええそうよ。彼は今……大聖杯の術式、魔力、呪い、その全てを自分の物とする為に己を作り変えている。岸波白野と言う『自我を保った』ままね。当然ね。自我を失えばあそこから出てくるのはただのアンリマユに乗つ取られた存在。だから自我を失う訳にはいかない……それがどれだけの苦痛と苦悩を伴うものは、私には分からない」

ユステイーツアの言葉に誰もが息を呑む。しかしそれを語る当のユステイーツアに心配した様子は無かつた。

「けれど私は心配してはいないわ。だつて悪意しかない聖杯の泥の底の底に、ただ在るだけだつた私の意識まで、彼は自我を保つたままやつて来たのだから」

そしてユステイーツアは大切な思い出を語るように、ゆつくりと白野が聖杯に飲まれるからの事を語り始めた。

【聖杯の底での出会い】

『死ね』

『死ね死ね』

『死ね死ね死ね』

『死ね死ね死ね死ね……』

『……ネシネシネシネシネシネシネ……』

……ついに『死ね』がゲシユタルト崩壊して『ネシ』と聞こえるようになってしまったな。

気付けばよく分からない黒と赤の絵の具を水に溶かしたようなドロドロした空間に立たされていた。

更にはさつきからずっと全方位の黒と赤の歪みが顔の形になって『死ね』と連呼してくる。

だがまあ問題ない。物凄く耳障りだし、全身を呪詛が纏わりついて息苦しいが、『それだけ』だ。コイツらはただそれしか出来ないみたいだから無視して歩みを進める。

上に向かってるのか下に向かってるのか、それとも右か左か、景色のせいで方向感覚

を狂わされながら、とりあえず進み続ける。

『……死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ……』

思考に直接訴えかけてくるせいであまり頭が働かないが、とりあえず色々と思いつく。う。

確か自分はギルガメッシュと戦っていた筈だ。結果は思い出せない。

自分の左手を見る。令呪が無い。いや、そもそも今の自分に肉体はあるのだろうか？ 『死のう死のう死のう……』

聞こえてくる言葉が変化した。命令ではなくこちらの共感を誘うような囁きになった。

イメージはあれだ、赤信号皆で渡れば恐くないみたいだ。

なんで一人相手に群集心理的なアプローチをしてきたのだろうかこの変な怨念達？

にしてもどのくらい歩いたんだろう……なんか気付いたら手足が真っ黒だし。しかもその部分が顔の形なってるからもう『死のう』なんて囁いてくる。何コレ怖い。

……まあ自分の意思で身体を動かせるから問題ないな。

声を無視してそのまま更に歩みを進め続ける。

外のみんなは大丈夫だろうか？

桜ちゃんはちゃんと眠れたかな……。

色々と考えていると気付けば身体の半分以上が真っ黒になって、また聞こえてくる言葉が変わった。

『死んで死んで死んで死んで死んで死んで』

なんか今度は物凄く弱々しく乞うような嘆きになっていた。まるでこちらが悪いと訴えかけるような悲哀に満ちている。

しかも今度は黒く変色した部分から『死んで』という言葉が振動するように響き渡ってくる。

……何かを思い出そうとしたけどコイツらのせいで思考が定まらない。

それに色々思い出せなくなってきた気がする。これもこの黒い奴の影響かな？

あまりよくない現状だが、他に出来る事も無いので足を進める。

声を無視し続けて歩いていく内についてに全身が真っ黒になった。

『死ね!!』

おおう!?

とつぜん視界一杯に浮かんだ『死ね!!』という文字と、それが身体に触れた瞬間に感じた魂を直接揺さぶるような衝撃で足を止める。

なんだ今の？

いや、それより……音が聞こえない？

気付けば音が聴こえなくなっていた。

いや、意識しなかっただけで見える景色も変化していた。

真つ黒な世界に赤い色で『死ぬ』や『死んで』、『死のう』という文字。

他にもなんか色々不吉な文字や文章、こちらを否定するような物が辺りを渦巻いている。『自決せよ』とか『呪いあれ』とか誰の怨念だ？

なんというか見ていて気持ちのいい物ではない。

更に最悪なのはそれらは近くを通るとこちらの身体に向かって来て衝撃を与えてくる。

……うん。とりあえず進もう。

ノイズ的な物には慣れてるし、数回衝撃を受けてなんとか耐えられそうだと判断して、止めていた歩みを再開させる。

そう言えば身体の感覚も無い気がするが、まあ何故が進もうと思うと歩けるから問題ないだろう。

それに立ち止まっては行られない。もう思い出せないが、『誰か』と何かを『約束』したのだから。

………。

……。

ナンカ、ススンデイル、ウチニ、シコウガ、ニブツタ、キガスル。

アイカワラス、『死』ガ、オソツテクルガ、マエヨリ、シヨウゲキヲカンジナイ。
トリアエズ、マダ、イケソウダカラ、ススモウカ。

……………ハテ。

……………ジブンハ。

……………ナンデココニ。

……………イルンダツタカ？

『死ね』

……………ソレハデキナイ。

『死のう』

……………ソレハデキナイ。

『死んで』

……………ソレハデキナイ。

『どうして？』

ドウシテ？

ハテ、ドウシテダロウ？

……………オモイダセナイ。

デモ、ソレダケハ、ダメダツイウノハ、オボエテル。

.....

.....

.....ナニモ、ミエナクナツタ。

マツクロナダケノセカイ。アカイモジガ、ナクナツタ。

.....トリアエズ、ススモウ。

.....

.....

.....

「あなた、本当に人間？ まさか聖杯の底、『私の領域』にまでやってくるとは思わなかったわ」

唐突だった。

今迄の鈍った思考が一気に戻り、身体すら元通りだった。

辺りを見回せばそこは見た事の無い丘の頂上だった。

空には黒太陽、いや穴が開いている。

目の前には礫台があり、眼下には何故かかなり昔の日本家屋の村が並んでいる。

そして目の前には.....なんか際どい黒い衣装を纏ったアイリスフィール。

いや、外見が似ているだけで違う存在か？

雰囲気の違いからそう判断し、目の前のアイリスフィールそっくりな彼女を警戒しつつ最初に問われた質問に答える。

「……さっきの返答だが自分は人間だ。で、あなたは？」

「私の名前は、そうね……ここではアンリマユの方を名乗っておきましょうか。この名だけで人類史や神話、伝記に詳しいあなたなら解るでしょう？」

そう、目の前の女性は愉快そうに笑いながら自身を『絶対悪』だと名乗った。

【岸波白野の決断】

アンリマユ。

ゾロアスター教に出てくる悪を司る側の最高神。

この世にある全ての悪と害毒を創造したとされるまさに『絶対悪そのもの』といった存在。それが悪神アンリマユ。

「アンリマユは神霊だ。聖杯ごときでどうにかできる訳ない……タマモと同じ分け御霊か？」

生前共に戦ったタマモは天照神が『人として生きてみたい』という思いから、自らの分け御霊を現世に降ろした事で誕生した存在であり、タマモはその霊核を英霊レベルマでスケールダウンさせる事でサーヴァントとして現界していた。他の神が似たような事をした可能性はある。

「いいえ私は英霊よ。あくまでもある一人の人間が『この世全ての悪であれ』と望まれた結果、悪神アンリマユと同種の力を得ただけの人間。だから本物のアンリマユの足元にも及ばない。むしろサーヴァントでは何も出来ない最弱なサーヴァントだと自負しているわ。なんせ元はただの一般人ですから。ああでも人間を殺すのだけは得意よ♪」

愉快そうに笑って答える目の前のアンリマユ。だが……もし彼女の言葉が本当なら、そんな笑って済ませていい事だろうか？

この世の全ての悪であれ。それは言ってしまうえば『他者を善とするために悪を押し付けられた存在』ということだ。それもアンリマユなんて悪神レベルのだ。それはいい、どんな壮絶な前世だったのだろう。

笑ってはいいるが、目の前の相手は理不尽に多くの物を剥奪されて来たはずだ。

「あら、同情してくれるの？ でも私のこの姿と性格は外にいるアイリスフィールのオリジナルであるユステイツアという『大聖杯の核』であるホムンクルスのもの。元々の私には性格や容姿と呼ばれる物は無いのだから」

「……同情なんて出来ない。自分には想像できないから。でも……ただ悲しくて許せないだけだ」

どうして誰もこの人を助けなかったのだろう。

どうして誰もこの人を想わなかったのだろう。

くそ。英霊の話はいつだって……分かつてる。彼等にとつては今話している事はもう過ぎていった出来事だ。

だから……彼等は笑って語るのだろう。そんな事もあったな、と。

ならせめて例え要らぬお節介だとしても、今こうして相手を想える自分が代わりに悲

しもう。怒ろう。否定しよう。肯定しよう。

だってそうじゃないと……寂しいし、悔しいじゃないか。

「……あなたは本当に変な人ね。まったく調子が狂っちゃうわ」

そう呆れたような表情で溜息を吐いた彼女に自分は改めて状況の説明を求めた。

「そもそも……は何処なんだ？」

「ああ、まずはその辺りから説明しないとね。いいわ、私は全てを知っている。だから色々教えてあげる」

そう告げてから、アンリマユは多くの事を教えてくれた。

まず冬木には二種類の聖杯が存在すること。

聖杯戦争の全ての術式を管理し、魔力を貯蔵する大聖杯。

その大聖杯の器であり核となっているのがアンリマユが自我と容姿として纏っている存在、ユステイーツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルンというホームクルス。

もともと、アンリマユの話では外の彼女は既に精神は崩壊していて術式を起動し続けるだけの存在となっているらしい。

そしてもう一つがアイリスフィールが器となっていた小聖杯。最終的に大聖杯と繋がり、その魔力を持つて願望機としての使命を果たす聖杯。

因みにだが大聖杯の機能によれば、サーヴァント七騎が一つの勢力に集まってしまう

た場合に備えてあと七騎呼ぶ事もできるらしい……：……：どんだけの魔力量だ。

次に聖杯が汚染された理由。

元々聖杯は無色であった。しかし第三次聖杯戦争においてアインツベルンのサーヴァントとして呼ばれたアンリマユが負けて聖杯にくべられた時に全てが狂った。

この世の全ての悪であれ。という願いによつて生まれたアンリマユを取り込んでしまった願望機である聖杯は、そのアンリマユに宿っている願いを『叶えてしまった』。

そう既に叶えてしまったと言う訳だ。

結果、大聖杯に宿る聖杯の意志は『この世の全ての悪』として顕現しようとしている。という訳だ。

「つまり、目の前のあなたが、英霊アンリマユが顕現するって事か?」

「あくいえ、そこちよつと解釈が難しくくてね。今の英霊アンリマユは『聖杯の意志』と『元の英霊である私』の二つの意志が存在してる。聖杯の意志はもちろん悪として現世に顕現しようとしているけど、私は別に世界や人間なんてどうでもいいと思ってるわ。だつてどつちも勝手に滅ぶんだから」

本気で興味ないって感じだ。

まあ当然か。アンリマユは存在が悪なだけで自身が悪とか善とかはどうでもいいタイプなのだろう。というか、たぶんその辺の主観も剥奪されているから、その辺の価値

観も殻の人格次第なのかもしれない。

で最後に自分がこんな所に呼ばれた理由だが、まあ予想通り聖杯によって連れ去られたらしい。

なんでも自分がこの世界に生まれた時から聖杯は『新しい器』として目を付けていたらしく、早々に令呪を与えたんだとか。勝者として取り込むか、器として取り込むかは些細な事だったらしい。

今回はアイリスフィールが開放された為に、器として自分を早々に取り込もうとしたんだそうだ。

「もつとも、失敗したわけだけだね。肉体と魂はかなり侵食されたけど、あなたの精神と意志までは汚染できなかった。だから聖杯はあなたと完全には繋がる事が出来なかった。結果、私の領域までやって来た」

アンリマユ曰く、大聖杯はあくまで炉心であるため、『この世全ての悪』として覚醒するにはどうしても器が必要らしい。

話を頭の中で纏める。

「……つまり、現状では自分が聖杯の器にならなければ、『この世全ての悪』は顕現しないという事か？」

「そう単純じゃないわ。見なさい」

そう言つてアンリマユが空を指差す。

……あれ？

「穴が……広がつてる？」

見れば先程よりも穴が大きくなっている気がした。

「ええそうよ。さつきも言つたけど聖杯はあなたを逃がさない。私の領域に逃げたとは言え、ここは聖杯の腹の中であり私と聖杯の領域バランスなんてせいぜい九対一。聖杯がその気になればすぐに塗りつぶせるわ」

「ここが塗りつぶされるとどうなる？」

「どうもこうも、私はあくまで『英霊アンリマユの意志』でしかない。領域が塗りつぶされれば私も聖杯の意志に飲み込まれるだけよ」

なるほど。

つまりここが飲まれればまた何も考える事ができず、無為に動き回るだけの存在になつてしまう訳か。なんとか考える知性がある内にこの状況を打開しないと。

魔術が使えないか試すがダメだった。なんとというか、何かに拘束されて魔力その物が感じられないという感じだ。

魔術での脱出は不可能。物理、いや不可能だ。

「……外に出たいかしら？」

「え？」

考え込んでいるとアンリマユが笑みを浮かべてこちらを見詰めていた。

「私なら、あなたを外に出して上げられるわよ」

「本当か！ でもどうやって？」

「簡単よ。私があなただの『外に出たい』という願いを叶えるだけ」

アンリマユの言葉に驚くと同時に、彼女の言葉の意味に気付く。

「……そうか、聖杯は君を取り込んで悪性を得た。対して君は聖杯と繋がって『願いを叶える』という権利を得たのか」

「正解。基本的に私と言う意思が在る事が前提な上に、興味を抱かないと叶えないんだけどね。今は久しぶりに誰かと話せて気分がいいから、願いを叶えてもいいわ。まあ無事に出れるかどうかは分からないけどね」

だが他に方法は無い。

そう覚悟を決めようとして、ふとある事に気付く。

「どうしてアンリマユは自分の願いを叶えて外に出ないんだ？ あれだけ外に興味を持つているのに」

アンリマユの話の聞いていると、彼女はだいたいぶ外の世界に興味津々の様子だった。

だからこそ、その願いを叶える力で自分の望みを叶えればいいはずなのに彼女はすっ

と、この聖杯の底にいます。

「……聖杯も私も、所詮は『願いを受け取る側』だもの。例え叶えたい願いがあつても、私達にはその権利が無い。だから聖杯も私も『他人』が必要なのよ」

……そうか。そういうことか。

ようやく理解した。

アンリマユは別に好きでここに居るわけではない。

この英霊は、不幸にも死して尚、他者の願いに縛られてしまったのだ。

こんな何も無い場所で、ただ悪として生まれるその時まで、ただただ……『英霊になった人物が残したこの領域』で。

——ふざけるな。

なんだこの理不尽は。こんな事が許されていいのか。

だつてこの英霊は生前にすでにどんな存在よりも理不尽な扱いを受けたではないか。

それなのに英霊となつてまでこんな理不尽を強いる。そんなのない。あつていいはずがない！

「……随分憤っているけど、あまり意味無いわよ？ 世の中にはどうにもならない事もあるわ。それはあなたも理解しているでしょ？」

ああもちろん。だだそれは『やれる事』を全てやってから『ああ仕方ない』と納得す

る為のものだ。

考えろ。どうすれば『自分とアンリマユの両方』を助けられる。

考えろ。考えろ。思考を全力で回せ。最適が無いなら最良を、最良がダメなら最善を、お前はいつだってそうやって考える事だけは続けてきたはずだ。

気付けば穴はさらに広がり空を覆う。大地が侵食を始める。

「時間が無いわ。急がないと『私』も完全に同化して覚醒する」

同化……同化？

不意に、脳裏に浮かんだ一人の少女と一人の魔人。

自然と、口元に笑みが浮かんだ。

「……あつた」

「え？」

「あつたぞ。自分も生還し、アンリマユを『外に出す』方法が」

時間が無い。アンリマユへと振り返り、彼女の手を取る。

「アンリマユ、願いが決まった。叶えてくれ」

「え、ええいいけど。何を願うつもり？」

驚き戸惑う彼女に、自分ははつきりと告げた。

「大聖杯及び小聖杯、つまり聖杯の術式、魔力その全てをよこせだ」

「——正気？」

アンリマユが頬を引きつらせる。

「ああ、ここには大聖杯も小聖杯もある。それら全部自分が器として同化して貰い受ける。身体も魂も、それを納められるように改造する。人間は、やめる事になるが死ぬよりました」

「いやいや待つて冗談よね？ だつて存在を創りかえるのよ？ それがどれだけの苦痛を伴うか、殺生院キアラとBBを知るあなたなら解るはずよ」

ああそういえばアンリマユは聖杯を通してこっちの記憶の全てを把握しているんだつたか。

だつたら話は早い。そうだ、二人がやったアレをやる。

具体的にはキアラの方が……一秒毎に殺されて蘇生されてを繰り返すんだつたか……まあ、なんとかするさ。

「自分が聖杯を掌握すれば、アンリマユを外に出せる。というより聖杯の悪性を完全に浄化するなら、その原因であるアンリマユは外に出さないといけないし、大聖杯の核のユステイーツアも核では無くす必要がある……アンリマユと言う精神とユステイーツアの肉体と魂、これだけあれば人間として受肉させる事も可能なはずだ。その上自分が聖杯を掌握してしまえば、もう聖杯戦争も起きない。まさに一石二鳥な作戦だ。それ

に——」

「それに？」

思い出す。ここまで自分に攻撃してきた悪意を。

あれは確かに強力だ。まさに世界や人類が定めた絶対悪だろう。

でも、あれは『外側から与えられる』ものばかりだ。

「聖杯に、負ける気がしないんだ」

視線を大地に向ける。

迫る黒い泥。それらを一度受けた身だが……全然恐ろしくない。

「あれにはヒトが持つもつとも強力な悪を知らない」

「ヒトが持つ悪？ 何かしら」

「決まってる。愛だよ」

そう。愛だ。

それは感情を持つ者だけが許された矛盾の武器だ。

愛を奪われたヒトはその絶望を矛に善を穿つ。

愛を得たヒトはその奇跡を盾に悪を挫く。

その『内側から湧き出る』感情の強さを、岸波白野は誰よりも知っている。

だから、負けない。

あんな与えられただけ、定められただけの悪になんて屈しないし染まらない。そんな簡単にどうにか出来るほど……ヒトの感情は容易くなんてないのだから。

「……………言つてて恥ずかしくない?」

「ない。で、どう? できる?」

自分の言葉に、アンリマユはふう。と大きく溜息を吐くと苦笑を浮かべた。

「ええもちろん。それじゃあ……行くわよ」

アンリマユの繋いだ手からこちららに向かつて何かが流れ込む。

同時に、精神は黒い奔流に飲まれた。

【岸波白野という名のパンドラボックス】

「ガアアアアアアア!!」

黒い沼の様な何かに飲まれると同時に激痛に襲われる。

苦痛によってチカチカと思考にノイズが走る。だが気絶する事は許されない。

「アアアアアアアアアガガガ!!」

汚染された魂が、別の物に作り直されている。

キアラと同じように身体が破壊されては作り直してを繰り返す。

「ガハッア、ア、ア、!!」

考えは纏まらない。だが、意識が途切れる事は無いのがせめてもの救いだ。

お陰で『自己』を認識し続けられる。

それはこの負ける訳には行かない戦いで、一番重要な要素だ。

「ツ——!!」

痛む意識の中で、絶叫を上げる中で、自分が『成りたい器』を想像する。

キアラや桜がそうしたように、『完成図』を思い描け。

そうしなければ逆に聖杯の意志によって器を作られてしまう。それでは負けだ。聖

杯は間違いなく絶対悪を成せる器にするのだから。

それを阻止する上でも、器の形を思い描かねば成らない。

「ガッハ——ハハッ！」

全身が真つ黒の状態で、気付けば口元が歪み、そこから『ああ、相変わらず自分は馬鹿だなあ』という自虐的な笑いが漏れた。

『成りたい器』自分

そんなの、もうずっと前から決まっていたじゃないか。

暖かいものを守りたい。

暖かなものと共に在りたい。

世界でもなく。人類でもなく。ただ目の前の『ヒト』や自分の大切な人達を助けたい。

そんな存在になりたかった。けれど『その存在』を具体的に言葉に出来なかつた。

だがこの世界で、奇しくも彼女のオリジナルが、その答えをくれたじゃないか。

「アア——ソウダ、オレハ、ワタシハ、ジブンハ——ナルンダ」

あの子が言ったような『優しい魔法使い』に！

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

全身の痛みが増す。

その全てを飲み込む。

その全てを捻じ伏せる。

意識が自然と耐える戦いから勝ち取る戦いへと切り替わる。

同時に痛みが肉体の中心へと収束を始める。

痛みが引いた箇所から真つ黒だった身体が肉体を形成して行く。

ゆつくりと、しかし確実に聖杯を掌握して行く。

痛みはどんどん弱まり、ついに身体の中心の黒い点以外からは痛みを感じる事は無くなつた。

その点に手を添える。

「願いは叶えられた。これで聖杯の役目は終わる」

だから――。

「ありがとう。おやすみ、聖杯」

最後に残った聖杯の意思を、完全に吸収しきる。

これで聖杯を完全に掌握しきつた。

次に自分の身体を確認する。

肌の色は変わらないが、視界に入る前髪が白い。格好は取り込まれたときのままのようで全裸でなくて安堵する。

もつとも、まだ安心は出来ない。

今のこの姿は『魂』の形が定まったただけだ。

これから本格的に魔力を得て現実で生きる為の『肉体』を造くらないといけない。

「でも、この魔力はなあ」

周囲に渦巻く膨大な魔力は未だ悪性のままだ。これでは取り込んでも何も出来ない。とりあえず最初にやる事は決まった。

まずはアンリマユの受肉を行う為の魔力の確保。その為には一度この身を濾過装置にしないとイケない。

「アンリマユ、いるか？」

「はいはい。ちゃんといるわよ」

声を掛けるとすぐ傍にユステイーツアの姿のアンリマユが姿を現す。

聖杯を取り込んだ時にアンリマユの意志は吸収せずにちゃんと別に確保しておいた。

そして自分がやろうとしていることを伝える。

「なるほどね。それはまあ構わないけど……平気？」

「？　まあ大丈夫だろ。ここまで平気だったし。それじゃあ、やるか」

何故かこちらに意味有り気な笑みを浮かべるユステイーツアに首を傾げつつ悪性の浄化を始める。

イメージは取り込んだ後、内側に魔力を溜めて、外側に悪性を圧縮するといったかん

じだ。

しかし浄化を始めた次の瞬間、急に意識が魂の内側、心象世界に引つ張られ、そして——アンリマユの笑顔の理由を知った。

「ウワアアアアアン何故急にこんな骸骨にい！ 奏者アアアアア！ 奏者アアアアア！！」

「ヤバイヤバイヤバイです！ 出ちやう！ 生まれちやう！ タマモナイン、タマモナインが！ ご主人様生まれちゃったら責任とって認知して！！」

「精神そのまま大人の姿ってどんな羞恥プレイ!? なんとかしないさよ子ブタアアアア！！」

「俺ももつとハードにロックに決めるとするか」

「いや、そもそも貴様は本当に先程まで私の隣に居た贗作者か？ どう見てもデトロイド在住のボブにしか見えぬのだが……これは流石に笑えぬ」

わーわーキヤーキヤーと騒ぐ面々——何この地獄絵図!?

「そりゃ一時的にとは言え、悪性取り込めばあなたの魂に住み着いてる者達が暴れるわよ」

アンリマユの言葉に、ハツとなって気付く。

「アンリマユ、まさか知っていたな!?!」

「え、知らないわよ、気付いただけで、知ってはいないわよ♪」

本当に、本当に楽しそうに笑うアンリマユ。こいつ、この状況を楽しんでやがる!?

「ほらほら、みんなどうにかして欲しくてこっちに来たわよ」

アンリマユの言葉通り、みんな争いながらもまだ理性があるのか、騒ぎながらこちらに向かつてくる。

「……どうすればいい」

「そうね。まああなたの自我が滅べばアレらが外に出ちやうから、とりあえず汚染の浄化が済むまで逃げるか魔力が溜まったら一体ずつ正気に戻すか。あ、因みにあなたが想定したとおり、私が居る限り魔力汚染は止まらないからまずは私を受肉するのが先ね」

「なんだ？　つまりあれか？　あの大惨事大怪獣戦争を生き延びつつ浄化作業を行えと？」

「あ、あ、上手い例えね。それじゃあ頑張つて♪」

それだけ言うとアンリマユは脱兎の如くその場から逃げ出した。

それを見届け『フツ』と小さく笑つてから……後を追うように全力疾走した。

「なんで！　毎回！　自分は！　初戦が！　ラスボス戦なんだよおおおお!!」

泣きながら、叫びながら、改めて自分の不運を恨みながら、現実に戻ったら一発アンリマユに拳骨をかます事を固く誓つた。

【聖杯戦争終結】

「……と言うわけよ」

「つまり貴女が外にいるという事は……」

「ええ。白野は聖杯を掌握したあとに私、英霊アンリマユをユステイーツアと融合させて人間にした。だからまあ今の私はアンリマユかと言われると微妙だからユステイーツアって呼んでくれると嬉しいわ」

そんなユステイーツアの話に、ついに我慢の現界を迎えた英雄がいた。

「待てい。なんだそのハチャメチャとワクワクが同時に襲ってきたような面白そうな話は！ 白野の中の我！ 今すぐ我とポジションをチェンジせよ！ 貴様だけ特等席で視聴とかずるいではないか！」

アーチャーが堪らず聖杯に向かって叫ぶ。その表情は観たい映画が自分の地域では観れないと知って駄々をこねる子供の様な表情であった。

アーチャーの様子に一部の物が呆れたりしている中でランサーが声を掛ける。

「それで、どれくらい待てばマスターは？」

「それは分からないわ。ただ個人的にはそう掛からないと——!?!」

ユステイーツアが途中で言葉を切って穴の方へと振り返る。全員がそれに釣られて視線を穴の方へと向ける。

突如穴から巨大な神聖な力を帯びた光が迸る。

光はそのまま洞窟の天上を貫き空へを昇って行く。

まるで火山でも噴火したかのような勢いで放射された魔力によって大空洞が激しく揺れる。

しばらくして落ち着きを取り戻すと穴から放たれていた黒い光と嫌な気配は完全に消えさっていた。

「……これも貴様の想定どおりか雑種？」

「いや、想定外だけど、何がしたかったのかは、なんとなく分かるわ」

アーチャーの言葉にそうユステイーツアが答える。

誰もがその場を動かさずに穴の方へと視線を向けて成り行きを見守る。

しばらくしてザ、ザ、という何かが穴を昇る音が聞こえ、その音は徐々に大きくなる。しかし途中でその音の違和感にサーヴァント達が気付く。

「音が……多い？」

響く足音は一つではなかった。

不測の事態。その場の全員が緊張した面持ちで穴から現れる者を待つ。

そして……黒い影が突如穴から飛び出し、彼等の前に着地した。

「俺の名は岸波白野！ あだ名はキシナミ！」

「私の名は岸波白野！ あだ名ははくのん！」

「自分の名は岸波白野！ あだ名はザビ！」

長さの違いはあれど、白い髪に赤い目となり、取り込まれた時の服を着た白野と名乗った三人が、それぞれ三角形を形作るポーズを取りながら自己紹介をする。

「三人合わせて不屈戦隊フランシスコ・ザアぐふおお!?!」

三人は最後まで名乗りを言い切る事はできなかった。

気付けば三人は見事に同じ形で地面に膝を付いて蹲っていた。

そんな三人の前にはいつの間にも移動したのか拳を握ったランサー、アサシン、アーチャーの三名が立っていた。

セイバーは一部始終を見ていた。そして呟いた。

「おそろしく速い腹パン。私でなければ見逃していた」

洞窟になんとも言えない静寂が流れた。

「で？ 何故あのようなおふざけを？」

「く、空気が緊迫していたので、良かれと思って」

正座し、こちらを見下ろすランサーに説明するのはザビと名乗ったランサー達がよく知る顔の白野。

そんな彼の左右にはセイバー達が見た事の無い十代後半あたりの顔立ちの男女、生前の姿の白野達と同じく正座していた。

「それで……これはどういうことですか？」

「せ、説明するから立つてもいい？」

ザビが許可を求め、ランサーとアーチャーが頷くのを見てから三人は安堵の溜息を吐いて立ち上がる。

「さて、どこから説明するか……とりあず、今の自分の状態か。端的に言えばここに居る二人は自分を基にした岸波白野のコピーだ」

「オリジナルであるザビには受肉した二人や桜ちゃんの面倒等、色々忙しいので、ならいつそ自分を増やそうという事になったんですよ。それで物質化制御で自分自身を複製した訳です。魔力だけは膨大にありましたからね。ただ姿が一緒だとややこしくなる為、生前の姿になった訳です。まあ人型だと魔力は全然保有できませんでしたけど」

「でもお陰で圧縮した分の悪性の魔力を完全に浄化し切ったんだから良しとしよう」

「ああ、やっぱりさっきの光はそういう事なのね。因みにどれくらい魔力を消費したの

？」

ユステイーツアが興味有りげに訊ねるとザビが答える。

「悪性の魔力は二割まで圧縮、その浄化、まあ魔力が濃過ぎてただの浄化の炎が物理的なビームになったけど、それに自分達が保有した魔力以外の全てを消費した感じかな。あ、概念空間の面積が広がったから、知っている礼装とか宝具とか物質化制御で完全再現しちゃったり魔結晶とかエリクサーとか消費系魔道具の補充とかで大体数十万くらい無駄遣いしちゃったかな」

ザビが困った笑顔で笑う中でアイリスフィールが質問する。

「保有できた魔力量ってどれくらいなのかしら？」

「百万です。それが人型の肉体と魂の現界でした。それ以上は肉体と魂を物理的に大きくしないといけないので巨人化します。因みに聖杯には兆に届く魔力量がありましたね」

はくのんの言葉にアーチャーとランサー以外の全員が絶句する。

しかしその絶句はそれぞれ意味が違う。

アイリスフィールとアサシン、舞弥は純粹に百万と兆という数字の桁に驚き、そして切嗣と時臣とセイバーはそれほどの魔力を平然と捨てた事に。

「ば、馬鹿な。例え自身に保有できずとも魔力炉心として別に保管すればいいはずだ。

悪性を滅ぼすのに必要な最適量、仮に聖杯の八割を消費しても一割残ればそれだけで一千億の魔力が残る。それだけあればどれだけの事ができるか、魔術を扱う貴様がわからないはずがない。それではお前は何の為に聖杯を取り込んだというのかね！」

時臣が白野の魔術を嗜む者としてありえない行動に、うろたえながら早口に訊ねる。そして時臣の問いはそのまま切嗣とセイバーの疑問でもあった。

そんな時臣の問いに三人は顔を見合わせ、同時に首を傾げながら振り返って同じ言葉を唱えた。

「いや、だっていらなかったし」

「いら……なかった？」

「いやだって、今の身体だって十分サーヴァントとやりあえるくらいの身体能力と強度があるし寿命も下手したらかなりあるし……」

「聖杯の術式を取り込んでいますから大抵の魔術なら工程ぶっ飛ばして行使できますし、必要ならサーヴァントも呼べますし……」

「礼装とか消費魔道具とかも作れるだけ作ったからこのあとイリヤちゃん助けたり身体治したりも問題ないし……」

「そもそも聖杯を掌握したのだって聖杯戦争を止める為だし。なら残った魔力で確実に悪性を消した方がいいでしょ？」

時臣は『ありえない。』と小さく呟いてその場に膝を付く。

その傍でアーチャーが愉快気にクククと笑う。

「こういう人間もいる。よく覚えておくことだな時臣。それと貴様の娘は優秀だ。貴様はせいぜい術式の講師をするだけで生き方には口出しせず、好きに成長させるのが一族としても吉だ。貴様が呼ばなければこんな愉快な見世物も見れなかつた故、この我からの最後の褒美だ。ありがたく受け取るがいい」

それだけ言うアーチャーの身体が徐々に光の粒子となっていく。

「ギルガメッシュ……」

「我が道化よ。此度もよくぞ我を愉しませた。本来なら貴様の中の我に席を譲れと言いたい、まあ仕方が無い。せいぜい我に見放されぬよう、努、その在り方を損なうなよ」
アーチャーの真剣な表情放たれた言葉に、三人の白野は力強く頷いて答える。

それを満足そうに見届けたアーチャーはいつもの不適な笑みを浮かべ……消えていった。

ザビがセイバーの方へと振り返りながら訊ねる。

「まだ戦う？」

その問いに、セイバーのマスターである切嗣が答えた。

「いや。僕達はもう戦わない」

切嗣の言葉にセイバーも頷く。

それを見届けたザビは開いた天上から覗く星空を見上げながら、感慨深げに呟いた。
「じゃあ、聖杯戦争はこれで終わりだ」

その日、冬木の土地で長年続き大勢の命を奪い続けた一つの戦争が、終結した。

【御三家崩壊】

「……嘘」

魔術による雪と氷の結界に覆われたドイツにあるアインツベルン城。

かつてセイバーが召喚された礼拝堂に、一人の白いローブに白い髭の翁、アインツベルンの当主であるユーブスタクハイト・フォン・アインツベルンが祭壇の前で数名のホムンクルスを供にし、扉側には幼い幼女、アイリスフィールと切嗣の娘であるイリヤスフィール・フォン・アインツベルンが、信じられない言うような顔で呟いた。

「事実だ。第四次聖杯戦争で衛宮切嗣は敗北し、貴様と母を見捨てて逃げ出した」
半分は嘘である。

ユーブスタクハイトも聖杯戦争の詳細はまだ知らない。

しかし戦争終結の報が知らされてから約一週間が過ぎても切嗣からの連絡はない。

もつとも連絡があっても聖杯を手に入れられなかった時点でユーブスタクハイトは彼を裏切り者として処罰するつもりでいた。

そして現在、彼は目の前の少女を第五次聖杯戦争の聖杯の器とする為にその心を、希望を絶望で砕こうとしていた。

「嘘よ！ だって、だって二人とも帰ってくるって言ったもん！」

イリヤスフィールが涙を流しながら首を振って否定する。

「お前がそう思うのならそう思うといい。しかし事實は変わらぬし、今後はお前にもアインツベルンの魔術師としての教育も始める。お前は間違ひなく歴代で最高の聖杯の器となるだろう」

「ひっ!?!」

聖杯の器という単語に、イリヤは嘗て見た悪夢を思い出して短い悲鳴を上げる。

幼い自分の体に入り込んでくる七つの塊。それが自分を内側から食い破る悪夢。

「いや、いやだ。助けてお母様、助けてキリツグ」

その場座り込んで泣きじゃくるイリヤスフィールに、身内とは思えぬほど冷めた表情のユーブスタクハイトが見下ろし、そして周りのホムンクルスに告げた。

「部屋に連れて行け」

無機質な表情で淡々と命令をこなすホムンクルス達。

「ううう、ああああ！」

伸ばされた手が、少女には悪魔の手に見え、大声で泣いた。

「子供相手に随分と酷いことをする」

ヒュン。という風切り音と供に……一本の白い湾曲した短刀がイリヤスフィールの

前に刺さり、伸ばされていたホムンクルスの腕がズルリと落下する。

「……………え？」

緑色の外套を脱ぎ捨てた赤い外套を羽織った男が、イリヤスフィールを護るようにその場に現れる。

「使え」

「え？」

白髪に褐色の肌をした男性が一つのクリスタルをイリヤスフィールに手渡す。

《《転移》》^{teleport}と唱えろ。そうすれば、君が今一番会いたい人の元に行ける」

会いたい人、その言葉だけでイリヤスフィールは躊躇い無く動いた。

《《転移》》^{teleport}

イリヤスフィールの身体が光り輝いてその場から消える。

「馬鹿な。転移の魔術礼装だと？ いや、それより貴様、よくも聖杯の器を！ アレは我等の最高傑作となるはずだったのに」

「器、アレ、か。なるほど。実際に自分で見るとの他人から聞かされるのでは、随分と違うものだ。だがお陰で遠慮無く剣を振るえる」

赤い外套の青年が一言呟くとその手に新たな双剣が現れる。

「さて御老体。マスターの命令でもあるが、個人的な八つ当たりも含め、貴様を葬り去る

が……別にアインツベルンその物を滅ぼしてしまっても構わんだろう？」

不適に笑った男の顔が気に入らなかったのか、珍しくユーブスタクハイトは顔を顰め、短く呟いた。

「殺せ」

飛び掛るホムンクルス達、そして逃げて援軍のホムンクル達を呼びに向かおうとするユーブスタクハイト。

しかし、彼は知る由もなかった。

目の前の男が英霊である事。

そして何より……その英霊の宝具が、結界の類だと言う事に。

「――^{I am the bone of my sword}体は剣で出来ている」

礼拝堂で赤い外套の英霊、アーチャーが戦っている頃、城ではホムンクルスを薙ぎ倒しながら城を破壊する二人のマスターと彼等に従う四人のサーヴァントの姿があった。

「ヒヤッハー略奪だ!!」

「テンション高いな奏者達よ」

「まあね。というか実際問題今後の衛宮家の事情を考えるとお金とか取引に使える魔術

書とか貰える物は貰つとかないとね」

「そうね。活動にはお金がかかる物だもの！ それに今回は人間はいないから子ブタから遠慮無くやっていいって許可も出てるし、それにこいつらの血、とつても魔力の純度が高いの！ ああ、最高だわ!!」

「にしてもギルガメツシユさん、こういう火事場泥棒なマネ、貴方はお嫌いでは？ アーチャーさんも珍しく自ら先陣を切っていますし」

「贗作者は知らん。何、あの感情の芽生えた人形に思う所がある故、一度くらいなら手助けしてやらん事も無い、と思つたまでだ」

攻め込んでくる武装したホムンクルス達相手にその一団は決して劣る事無く蹂躪していく。

もつとも戦いは長くは続かず、当主が死んだ事で他のホムンクルス達はしばらくして活動を停止させた。

「きゃっ!?!」

イリヤは突然感じた風にあおられてその場に倒れる。

そんな彼女はすぐに誰かに抱き起こされた。

「大丈夫かいイリヤ……」

「……キリツグ？」

「ああ、そうだよ」

目の前には会いたいと思っていたうちの一人、いじわるだけど大好きな父親が、自分を抱き上げて困ったような笑顔を浮かべていた。

「つゝゝキリツグ！」

溜まらずイリヤスフィールは彼に抱きつき、しかしユーブスタクハイトの言葉を思い出して訊ねた。

「お母様は!? お爺様がキリツグは裏切り者だって。嘘だよ。お母様もいるだよね!?」

イリヤスフィールの言葉に、切嗣は表情を変えずに後ろへと振り返り、彼に抱かれて開いたイリヤスフィールも後ろを向く。

そこには城を出て行ったときと同じ服装の母であるアイリスフィールと黒いスーツを着たセイバーの姿があつた。

「お母様！」

切嗣がイリヤスフィールを地面に下ろすと彼女は急いで大好きな母の下に向かって駆け出し、彼女の胸に飛び込む。

「お母様、お母様、お母様！」

「ああ、イリヤ、イリヤ！」

お互いに涙を流しながら抱き合う親子を見詰めながら、セイバーは周りを警戒する。しばらくしてアインツベルン城の結界が砕かれ、城から煙がある。

「どうやら成功したみたいですね」

「……これで御三家にしてホムンクルス製造の権威でもあるアインツベルンもお仕舞いか」

セイバーの言葉に答えながら切嗣が胸元からタバコを出そうとして……それを仕舞った。

「それでセイバー、君は良かったのかい。受肉して？」

「ええ。ランサー、もう一人の私も受肉しましたし、彼女とはもう少し話をしたい。それに……少しだけこの世界を生きてみようと思います」

セイバーはあのあと白野達に受肉を頼んだ。

王ではなく、平和な世の中を一人の民として生きてみよう。そう思ったのだ。

「……流石にあの感動の再会に飛び込むのは空気が読めてないかしら？ でも私も早く孫を抱っこしたい！」

「マダム、どうかご自重下さい」

彼等の傍の大型ワゴンの中で、アイリスフィールの色違いの黒い服装のユスティーツアの言葉に、舞弥がいつもの冷淡な声で注意した。

彼等の襲撃から数時間後、魔術協会が訪れると城の内部は殆ど燃え尽き荒らされて金品や魔術関連の品が一切無くなっていた。

しかしそれを行った魔術師の捜索は『大量のホムンクルスの研究資料等』が魔術協会に『無料で』寄付された事で早々に打ち切られた。

良くも悪くも魔術の世界は合理主義なのであった。

もつとも資料の量が多過ぎて第三魔法や聖杯に関する情報は一切なくなっている事に協会が気付いたのはもつと後の事であった。

【エピローグ】

冬木市の深山町にある商店街、マウント深山。

そこには一軒の小さくも街でそこそこ有名な喫茶店がある。

【喫茶月海原】と書かれた看板が目印の落ち着いた雰囲気のカフェ。

なぜそこが有名なのか。

それは働いている従業員が美人な上に異国の女性が多いからだ。

一人は喫茶店のオーナー代理を名乗る岸波桜。

彼女の傍で優しい雰囲気になれるおじ様も多く、若い子達は学生の身でありながらエプロンを盛り上げる豊満な彼女の胸に釘付けであった。

一人はアサ子と呼ばれる中東系の美女。

桜と一緒に厨房担当であり表に出ないがそのエキゾチックな雰囲気と仕事の出来る女オーラに、同性からの人気が高い。

二人はある意味喫茶店の裏方担当であり、給仕や会計、所謂ホールをメインに担当する女性が他に二人居る。

一人は長身で胸も大きく肌と髪の色素が薄めの女性。

目元を細めで少し不機嫌そうに見える彼女はラン子と呼ばれ迷惑な客に対しては問答無用でキツクをかます。その姿に一部の男性から人気を得ている。店内には一日に一回は必ず『ありがとうございます!』という叫び声上がる。

もう一人は小柄で金髪の女性。

店ではセイ子と呼ばれる彼女は器用ではないせいも失敗も多いが礼儀正しく、しかしどこか子供っぽい性格のためか子供に人気であった。

ホールを担当する二人は姉妹のように仲が良く、同時に喧嘩も多く、更には摘み食いの常習犯のせいも、よく桜やアサ子に怒られてるのを店の人達は微笑ましく眺めていた。

そんな喫茶月海原のオーナーは男性であり、来店する多くの男性客に嫉妬の視線を受けていた。

名前は岸波白野。食材の買い付けから厨房、店の雑務と色々やっている。

そんな喫茶月海原だが、その日はまるで図ったかのように知人達が集まっていた。

「やっほう桜、元気?」

最初に店にやってきたのは髪を左右で結ったツインテールの黒髪の少女。

快活を絵にしたような力強い目元を緩ませるのは現遠坂家当主である遠坂凜。

「いんにちは桜」

「やあ桜」

その後ろから現れたのは桜と雰囲気の似た優し気に微笑む女性と、以前の様な覇気がほぼ消え失せ、どこか少し痩せたが以前よりも穏やかな雰囲気を纏った男性。

元遠坂家当主の遠坂時臣と妻の遠坂葵であった。

「あ、いらっしやい」

やって来たお客が自分の家族だと知って桜の顔が自然と笑顔になる。

桜が凜と再会したのは彼女がエーデルフェルト家で魔術の基礎課程を学び終え、姉弟子であり桜を妹分として可愛がっている現エーデルフェルト家の当主、ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトと供にロンドンに訪れた時であった。

その時凜とルヴィアゼリツタの間でひと悶着あったが桜が物理的に解決した。

桜が白野と供に日本に戻って冬木に店を構えてからはちよくちよくこうして家族揃ってお店に来店する光景が増えた。

「桜、もう休憩に入っいいいよ」

「あ、ありがとうございます兄さん」

そしてそういう時は気を利かせた白野が彼女を休憩させて一家は一緒に食事を取る。数年前、絶望に居た少女が願ったもう一度家族と食事をしたい。

その願いは一人の魔術使いによって、確かに叶えられていた。

「こんにちはー！」

桜が休憩に入つてすぐに新たな団体がやって来た。

元氣良く現れたのは以前からでは想像できない程に身長が伸び、体重が年相応に増えたイリヤスフィール。

元々活発だったが身体が弱い為に長時間の活動を控えていた彼女は、今では深山町一番の元氣娘として今日も街の人を笑顔にしていた。

「もうイリヤつたらいつまでも子供みたいに」

「ははは。元氣があつて良いじゃないか」

イリヤスフィールの後に続くのは彼女の母と父。

以前よりも母親としての面影が強くなり幼さが無くなり長い髪を三つ編みにしたアリスフィール。

その横に時臣と同じく以前とは別人のように覇氣が無くなり穏やかな微笑を浮かべる切嗣。

「そうよイリヤもまだ十代なんだから。にしてもセイバー、相変わらず可愛いわね♪」

あまり以前と変わらない容姿のユステイーツアが最後に来店してセイバーのメイド服を眺めながらそう呟く。

「うっ。またからかいに来たのですかユステイーツア」

「いいじゃないの。というか、貴女はもう少し私や白野に感謝しなさいよ。タダ飯ぐらいの無職から社会人にクラスチェンジさせてあげたんだから」

そもそもセイバーがこうして喫茶月海原で働く事になったのはユステイーツアが白野にお願いしたからだ。

『ウチのタダ飯ぐらいを働かせて欲しい。いやホントマジで。イリヤ孫の教育によろしくない。他の二人はあの戦争でのセイバーへの態度で気が引けてるし』

と、珍しく本気で怒った彼女の雰囲気に呑まれた白野は引き攣った笑顔で了承。次の日セイバーは物凄く反発及び反論したが。

『もう一人の貴女は働いているのに貴女は働かないの？』

『そう王様だから。ふくんへく。ところでイリヤがバイト代で買ったおやつは美味しい？』

『ねえねえ王様。周りが気遣って何も言わない中で縁側で一人お茶を飲む気持ちってどんな気持ち？ねえねえどんな気持ち？』

と、散々に煽られた結果……セイバーはアホ毛が萎れる程に落ち込みながら『働きます』と宣言した。

それからはユステイーツアが監視と言う名の休憩にやってきてはこうしてセイバーをからかう光景が日常となっていた。

ちなみにアイリスフィールは専業主婦であり、切嗣は時臣のコネで穂群原学園の守衛兼設備管理をし、ユステイーツアはパート等でお金を貯めては旅行し、それを旅行記として纏めている。

「おやおや、どうやら珍しい時に来店したようだよソラウ」

「ええ本当ね」

「いらつしやいませ。相変わらず仲睦まじくて何よりだ」

衛宮一家の次に訪れたのはケイネス夫妻。

以前よりもおでこの面積が増えた代わりに幸せそうな表情をしたケイネスが杖を付きながら歩き、以前よりも険が取れて女性らしさが上がったソラウが、彼を支えるように歩く。

いつもの二人の姿に、ライダーの最後を告げた縁で話す仲になったランサーは小さな笑みを浮かべて対応する。

ケイネスは一度ソラウと共に帰国、諸々の面倒ごとを片付けてソラウと共に日本に戻って来た。

今は遠坂時臣のコネで穂群原学園で英語の教師をしている。

見知った人間が集まった事で遠坂一家以外は旦那同士、奥様同士でカウンターの席についてそれぞれ楽しそうにお喋りしたり愚痴を言い合ったりしている。

すると、また来店を知らせるベルがなって白野が振り返ると……微妙な笑顔になる。

「おや？　せっかく友人が訪ねたというのにつれない表情だ」

「いらつしやいませ。そっちは随分と機嫌がいいけど、何かあったのか綺礼」

やって来たのは神父服の言峰綺礼。

カウンター席の端っこに座った彼は白野の言うとおり随分と機嫌がよかった。

「いやなに。関わっていた仕事が片付いたのでね。もし気になるならテレビでも見てみたらどうかね」

綺礼に促された白野が喫茶店に備え付けのテレビのスイッチを入れてニュースを見る。

『次のニュースです。×党の×議員が政治資金を横領していたとして——議員は連

捕の際『あの男が！　あの男が私を敬めたんだ！』とまるで発狂したように喚く姿が—

—』

「くくく」

「相変わらず『博打』をやっているみたいで」

「いやいや私は何もしてないさ。ただ博打が好きなの達に場を整えてあげているだけだとも」

聖杯戦争以降、言峰綺礼は『善人のまま悪事を行う』という目的の為、裏で一つの仕

事をしている。

簡単に言えば復讐代行のようなものだ。

もつとも、復讐するのは依頼した本人で彼自身が行う訳ではない。

そしてこの男がただでそんな事をする訳が無かった。

綺礼は仕事をする際に『復讐される側にも勝てる可能性』をわざと残している。

その為綺礼に依頼した依頼人が逆に破滅したり殺されてしまう場合も有るが綺礼にとつてはどうでもいい事だった。

彼はただ場を用意してダイスと言う名のプレイヤー達を転がすだけ。

出目の結果は関係ない。

何故ならダイスの片方は確実に不幸になるのだから。その表情、感情こそが、彼への報酬であった。

そして綺礼は何食わぬ顔で表の神父や父親としての役割を果たす。

その事実を知っているのは綺礼本人から聞かされた白野だけであり、白野は以前『何故自分にそんな事を教えた?』と訊ねた事があった。

綺礼は愉快気に口を歪めながら『いやなに。今の私があるのは君のお陰だ。そのお礼だと思ってくれたまえ』と答えた。

答えを聞かされた白野は物凄く嫌そうな表情を返し、それを見て綺礼は満足そうに頷

いた。確信犯だった。

それでもなんだかんで年が近い事もあり話を交わす二人の耳に、付けっぱなしのテレビから気になるニュースが流れた。

『はいはい次は世界のオカルトを紹介するコアなコーナーです！ 今日はこちら！なんと撮られたのはつい一週間前の物です！』

そう言つてテレビに映つたのは高層ビルからビルに飛び移ろうとしている影の集団。

影になつて全身真っ黒で正体は分からないが、その内の一人、自己主張の強い角と尻尾を生やした女の子が、どうみてもカメラ目線な感じでポーズを取っていた。

(……元氣そうで何より)

白野はあえてコメントはせずにはくのとキシナミが元氣に活動している事に安堵する。

ザビと名乗っていたこの世界の白野は聖杯戦争後に協会や教会からの監視を受けていた。桜やランサー達の責任等をとる事もあり、目立つ行動を控えていた。

代わりにはくのとキシナミは彼等と生前共にいたサーヴァント達を引き連れて活動していた。

姿形が違うと言う事で白野への監視の眼は日に日に弱くなっているが、逆に二人への監視は強まり、二人がこの街に戻ってくる事はなかった。

しかしそれは三人の白野が話し合って決めた役割でもあった。ザビが『大切な人達を守り』。

はくのとキシナミが『目の前の誰かを助ける』。

外の世界で二人が大勢の人を救ってくれているからこそ、白野は目の前の大切な人達の幸せを護る事を優先できたし、白野が彼等を守ってくれているから、二人も気にせず活動できた。

白野は目の前で広がるこの幸福で満ちた雰囲気笑顔に浮かべながら、今日もただの喫茶店のマスターとして、この街の人間の一人として、一緒になってその幸せを噛み締めるのであった。